

吉竹遺跡

吉竹北部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2001. 5

石川県小松市教育委員会

例　　言

1. 本書は、吉竹北部土地区画整理事業に伴って、平成7年度から平成11年度にかけて実施した吉竹遺跡（よしたけいせき）発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、遺跡の破壊を伴う道路築造部分（6, 428m²）を建設省（現国土交通省）補助金により、遺跡が破壊される街区部分の約20%の箇所（1, 594m²）を文化庁補助金により、遺跡が破壊される街区部分の約80%の箇所（7, 160m²）を吉竹北部土地区画整理組合の経費負担により小松市教育委員会が実施した。

出土品整理は、道路築造部分から出土した遺物の洗浄・注記については建設省補助金により、街区部分から出土した遺物の洗浄・注記および全ての調査区域から出土した遺物の接合・復元等は吉竹北部土地区画整理組合の経費負担により小松市教育委員会が実施した。

報告書の作成・刊行については、吉竹北部土地区画整理組合の経費負担により、小松市教育委員会が実施した。

3. 発掘調査の調査地、調査面積、調査期間、調査担当者は次のとおりである。

【調査地】石川県小松市吉竹町ソの部、れの部、いの部の各一部

【調査面積】全体調査面積：15, 182m²（この他、3, 002m²を対象に工事立会いを行ない、そのうちの約135m²を調査した。）

平成7年度：3,061m² 平成8年度：7,678m² 平成9年度：3,893m²

平成10年度：207m²（ほか工事立会い3,002m²） 平成11年度：343m²

【調査期間】平成7年度：平成7年7月6日～12月21日、平成8年3月3日～3月28日

平成8年度：平成8年4月2日～12月25日、平成9年2月17日～3月29日

平成9年度：平成9年4月2日～12月14日

平成10年度：平成10年6月4日～6月9日、平成11年2月17日～3月30日

平成11年度：平成11年4月4日～4月27日

【調査担当者】平成7年度：津田隆志、坂下雅子 平成8年度：津田隆志、川畠謙二

平成9年度：津田隆志、川畠謙二、岩本信一 平成10・11年度：津田隆志

4. 出土品整理は、洗浄・注記・接合・復元までを、平成9年度から平成12年度にかけて以下の7名を雇用して、津田が担当した。

平成9年度：南友子、松原きみ子

平成10年度：南友子、松原きみ子、松本喜美子、大西文子、上田玉枝、島崎光子、中林桂子

平成11・12年度：島崎光子、中林桂子

5. 本書の執筆・編集は津田が担当した。

6. 写真撮影は、遺構を津田、坂下、川畠、岩本、遺物を津田が行ない、空中写真については、セントラル航業株式会社およびアジア航測株式会社が行なった。

7. 本書で示す方位は、基本的には真北を示すが、一部については磁北を示すものがある。また水平基準については海拔高（m）で示してある。

8. 本書中の土層註にある、土色および色相・明度・彩度を示した記号（例えば10YR 5/2）は、「新版標準土色帖」に基づいたものである。

9. 本調査で出土した遺物をはじめ、遺構・遺物の実測図、写真等の資料は、小松市教育委員会が保管している。

目 次

第1章 遺跡の位置と環境	1
第1節 遺跡の立地と自然環境	1
第2節 遺跡周辺の歴史的環境	2
第2章 調査の経緯と発掘調査の経過	5
第1節 調査に至るまでの経緯	5
第2節 発掘調査の経過	5
第3章 遺跡の概要と発掘調査の概要	10
第1節 遺跡の概要	10
第2節 発掘調査の概要	11
第4章 台地上部分の遺構と遺物	19
第1節 台地上部分の概要	19
第2節 竪穴住居跡	19
第3節 掘立柱建物跡	49
第4節 土坑	67
第5節 溝	114
第6節 台地上部分出土の特殊遺物	121
第5章 低湿地部分の出土遺物	123
第1節 低湿地部分の概要	123
第2節 出土遺物	125
第6章 19地区の調査	129
第1節 19地区の概要	129
第2節 遺構と遺物	129
第7章 まとめ	134
報告書抄録	
写真図版	

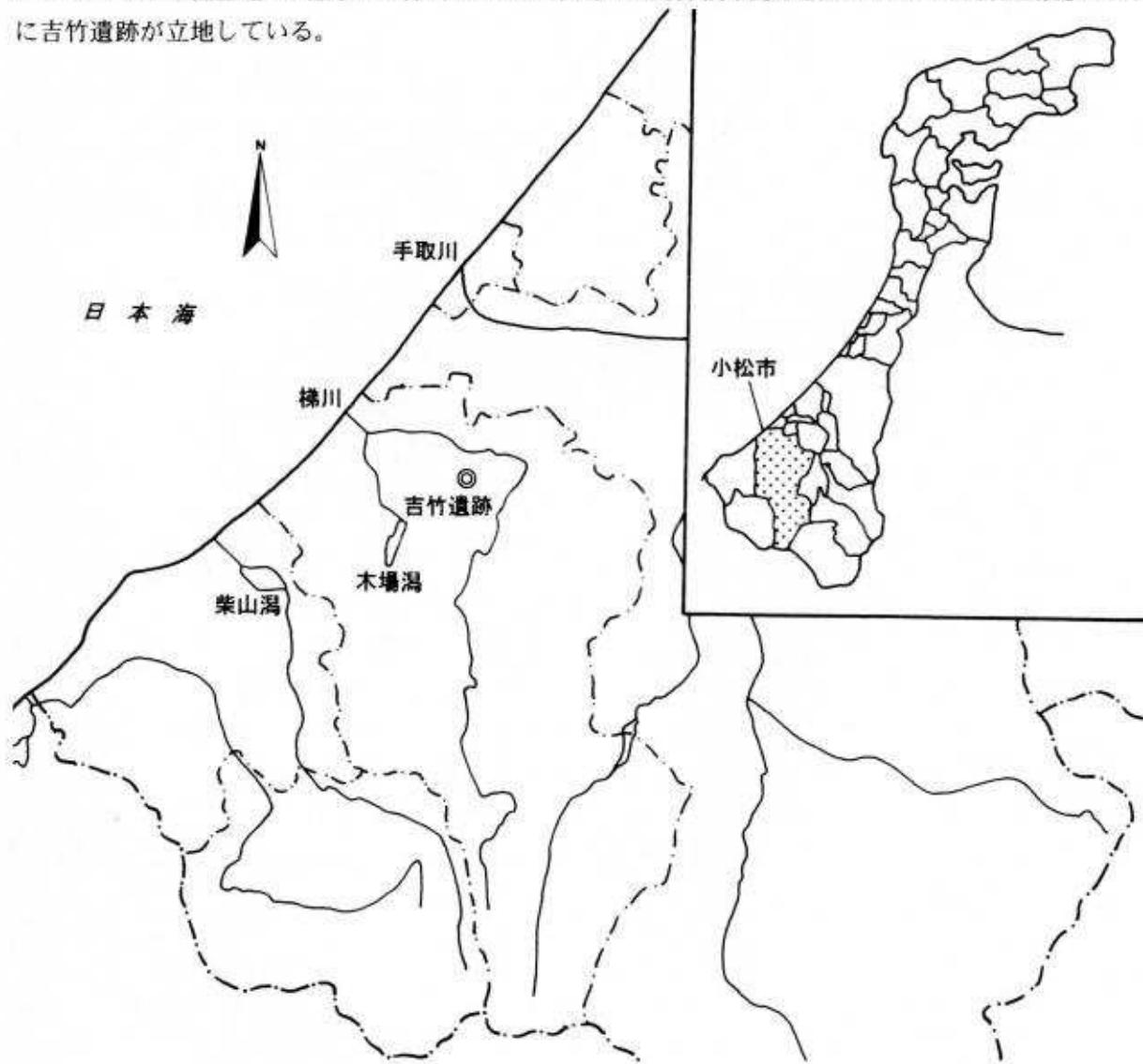
第1章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の立地と自然環境

吉竹遺跡は、石川県南加賀地方に所在する小松市にあり、小松市の市街地から東へ約2.5km隔てた小松市吉竹町地内に所在する。

小松市は、北西側で日本海に面し、南東部では白山連峰に連なる能美山地と能美・江沼丘陵地に囲まれて、この山地・丘陵地が市内のほぼ3分の2を占める。一方、市内の北西部には、加賀平野の一部をなす小松・江沼平野があり、この小松・江沼平野は、南加賀地方最大級の一級河川である梯川によって形成された沖積平野と、加賀三湖（木場潟・今江潟・柴山潟）の周辺部から埋積してできた低湿地に概ね分けられる。そして、日本海に面したところには小松砂丘がある。

吉竹遺跡は、こうした小松市の自然環境のうち、能美・江沼丘陵地の縁辺部に立地しており、とくに遺跡の中心部が立地している箇所を狭い視野で見てみると、周囲の低地に対して台地が突き出している箇所、すなわち舌状台地上の先端部に立地している。そして、南西方向には木場潟の周辺部からの埋積によってできた低湿地が、北方には梯川によって形成された沖積平野が広がるといった自然環境の中に吉竹遺跡が立地している。



第1図 吉竹遺跡の位置

第2節 遺跡周辺の歴史的環境

当遺跡周辺の縄文時代の遺跡には、千木野遺跡、一針遺跡、横地遺跡、三谷遺跡がある。千木野遺跡は平成5年度に小松市教育委員会により発掘調査が行われ、落とし穴が4基確認されている。一針遺跡からは磨製石斧、横地遺跡からは後期の縄文土器が出土したことであるが、詳細は不明である。

弥生時代前・中期においては、当遺跡周辺での遺跡の立地は希薄であるが、中期の遺跡として、現在のJR小松駅の東側に所在する八日市地方遺跡が挙げられる。この遺跡は、以前から弥生時代中期の「小松式土器」の標識遺跡として知られていたが、平成5年度から平成12年度にかけて小松市教育委員会が発掘調査を実施し、井戸跡、住居跡、方形周溝墓、環濠跡、河川跡等が確認され、さらに多量かつ多種多様な遺物が出土し、当時の北陸における中核的な集落跡として知られるようになった。

弥生時代後期には、平面梯川遺跡、白江梯川遺跡、漆町遺跡など、梯川中流域の沖積平野を中心に多数の集落遺跡が出現。当遺跡や当遺跡の東方に位置する八幡遺跡のように丘陵地に立地する集落遺跡も出現する。これらは古墳時代前期にかけて発展を遂げるが、中期以降、衰退傾向となる。

第1表 吉竹遺跡周辺の遺跡地名表

	遺跡名／種別／時代		遺跡名／種別／時代
1	八日市地方遺跡／集落跡／弥生中～後期	23	白江念佛堂遺跡／集落跡／弥生～中世
2	梯川鉄橋遺跡／散布地／弥生中期	24	打越遺跡／集落跡／弥生～中世
3	上小松遺跡／散布地／平安	25	若杉古窯跡／窯跡／江戸
4	平面梯川遺跡／集落跡／弥生後期	26	八幡遺跡／集落跡・古墳・窯跡／弥生後期～古墳・江戸
5	白江梯川遺跡／集落跡／弥生・中世		
6	白江堡跡／館跡／室町	27	吉竹遺跡／集落跡・散布地／弥生後期～古墳後期・平安～中世
7	一針遺跡／散布地／縄文		
8	定地坊跡／寺院跡／室町	28	若杉オソボ山1号窯跡／窯跡／古墳後期
9	千代能美遺跡／散布地／奈良～中世世	29	浄水寺跡／寺院跡／平安・中世
10	千代才オキダ遺跡／集落跡／弥生後期～古墳前期・奈良～中世	30	幡生1号墳／古墳／古墳
		31	釜谷古墳／古墳／古墳
11	古府しのまち遺跡／集落跡／古墳前期～平安	32	千木野遺跡／縄文・古墳／集落跡・墓
12	小野町遺跡／散布地／古墳	33	本江窯跡／窯跡／江戸末期
13	千代城跡／城跡／室町	34	蓮代寺A遺跡／製鉄跡／不詳
14	古府遺跡／集落跡／平安中期	35	蓮代寺跡／寺院跡／中世
15	フンドン遺跡／散布地／平安	36	蓮代寺ガラショウタン製鉄跡／製鉄跡／不詳
16	横地遺跡／散布地／縄文	37	三谷遺跡／散布地／縄文
17	佐々木ノテウラ遺跡／集落跡／弥生～平安	38	蓮代寺ニコバ山遺跡／製鉄跡／古墳～平安
18	佐々木アサバタケ遺跡／集落跡／弥生～中世	39	蓮代寺チャワン山遺跡／製鉄跡・窯跡／奈良・平安・江戸
19	千代本村遺跡／散布地／古墳		
20	千代マエダ遺跡／散布地／古墳	40	蓮代寺B遺跡／信仰／中世
21	佐々木遺跡／集落跡／奈良・平安	41	三谷大谷横穴／横穴／不詳
22	漆町遺跡／集落跡／弥生～中世	42	三谷大谷遺跡／集落跡／平安～中世



第2図 吉竹遺跡と周辺の主な遺跡 (S = 1/25,000)

古墳時代を象徴する古墳について見ると、当遺跡の南東方向に幡生1号墳、釜谷古墳が位置し、東方には八幡古墳群（八幡遺跡）が存在する。八幡古墳群については、平成2年度から平成7年度にかけて、石川県埋蔵文化財保存協会により、後期古墳7基が発掘調査されている。また、古墳ではないが、当遺跡の南方に位置する千木野遺跡では、平成5年度の小松市教育委員会の発掘調査によって、4世紀初頭のものとみられる方形周溝墓が8基確認されている。

古墳時代中期以降、当遺跡周辺の集落遺跡は衰退傾向となるが、8世紀に至っても、あまり目立った動きは見られないようである。こうしたなか、8世紀後半、加賀地方では少数ながら初期荘園の開発が興る。当遺跡の周辺では、西方約2.5kmに位置する小松市本折町付近が荘域と推定されている西大寺領本堀荘が挙げられる。また、当遺跡の北東約1.5kmに佐々木遺跡が位置しているが、この遺跡では、平成9・10年度の小松市教育委員会の発掘調査によって、柵と溝で囲まれた区画のなかに整然と並ぶ8世紀中頃の掘立柱建物跡群が確認され、さらに、「野身郷」「財部寺」と記されてある墨書き土器が出土している。この遺跡については、公的な施設、または有力者の居館等、一般的な集落とは異なった性格を持つ施設ではないかと考えられている。

当遺跡の所在する吉竹町には幡生（はたさや）神社があるが、この神社は712年（養老2年）に泰澄により創建されたと伝えられている。「延喜式」神名帳に記される能美郡八座の一つ「幡生（ハタサカノ）神社」に比定されており、1189年（文治5年）に富樫泰家により再建され、近世に入り、加賀藩主前田利常が幡生の総社呉服明神を加賀絹の守護神として深く崇敬し、小松の機業家や職工などの参拝者が多かったといわれている。

さて9世紀に入ると、823年（弘仁14年）、それまで越前国に属していた江沼郡・加賀郡が分離して加賀国となった。江沼郡から能美郡を、加賀郡から石川郡を分出して加賀国は4郡となり、当遺跡が所在する地は能美郡に属した。加賀国府の所在地については諸説あるが、当遺跡の北東約3kmに位置する古府台地周辺が有力視されている。

9世紀後半～10世紀には、当遺跡の周辺でも梯川中流域の沖積平野において、活動が再び活発となり、古府しのまち遺跡、古府遺跡、佐々木ノテウ遺跡、漆町遺跡などが活発化していた遺跡として挙げられる。また、当遺跡の東方約1.5kmには、浄水寺跡があり、10世紀前半に創建され、15世紀後半まで営続していたとされている。この寺院跡からは、昭和59年度の石川県立埋蔵文化財センターの発掘調査によって、10世紀前半から11世紀前半の墨書き土器が多量に出土している。

中世に至っても梯川中流域の沖積平野における集落の活発さは見られ、佐々木アサバタケ遺跡、佐々木ノテウラ遺跡、漆町遺跡、白江梯川遺跡などが中世集落遺跡として挙げられる。また、当遺跡の南方約2.5kmのところでは、寺院跡の蓮代寺跡、信仰遺跡の蓮代寺B遺跡、集落跡の三谷大谷遺跡がある。

引用参考文献

- 浅香年木他編 1981 『角川日本地名大辞典17 石川県』 角川書店
石川県立埋蔵文化財センター 1989 『浄水寺墨書き資料集』
『日本歴史体系第17巻 石川県の地名』 1991 平凡社
石川県教育委員会 1992 『石川県遺跡地図』
『石川県大百科事典』 1993 北国新聞社
小松市教育委員会 1994・1998・1999 『小松市埋蔵文化財調査だより』 第4号・第8号・第9号
(社)石川県埋蔵文化財保存協会 1998 『八幡遺跡』

第2章 調査の経緯と発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

平成6年2月25日、吉竹北部土地区画整理事業計画区域内に周知の埋蔵文化財包蔵地（吉竹遺跡）が存在していることから吉竹北部土地区画整理組合（以下「組合」と略称）は小松市教育委員会埋蔵文化財調査室（以下「調査室」と略称）に詳細分布調査の依頼書を提出。これを受けた調査室は、計画区域全域を対象として、平成6年4月14・15日、10月11日～11月11日、平成7年2月27日～3月3日に詳細分布調査を実施し、事業計画区域内における埋蔵文化財確認範囲を組合に提示した。

その後、調査室が提示した埋蔵文化財確認範囲をもとに、組合と調査室は発掘調査区域および発掘調査にかかる経費等に関する協議を重ね、平成7年6月30日付けで「小松市吉竹北部土地区画整理事業区域内における埋蔵文化財に関する協定書」を締結した。その協定書では、埋蔵文化財確認範囲内にある道・水路の築造・拡幅部分、土地区画整理事業および事業後の宅地開発で遺跡の破壊が明白とされる台地上の街区となる部分を発掘調査することとして調査区域（15,182m²）を定め、平成10年3月31日までに現場における発掘調査を完了することとした。（現場における発掘調査の期間は、建物移転等の関係により、のちに平成11年5月31日までと変更された。）

この協定書をもとに、平成7年7月6日より現場における発掘調査を開始。道・水路の築造・拡幅部分（6,428m²）は平成7年度～11年度に建設省補助金により、台地上の街区となる部分の約80%（7,160m²）は、組合と調査室との間で委託契約を交わし、組合の経費負担によって平成8年度から11年度に調査を行った。そして、台地上の街区となる部分の約20%（1,594m²）については平成8・9年度に文化庁補助金によって調査を行った。

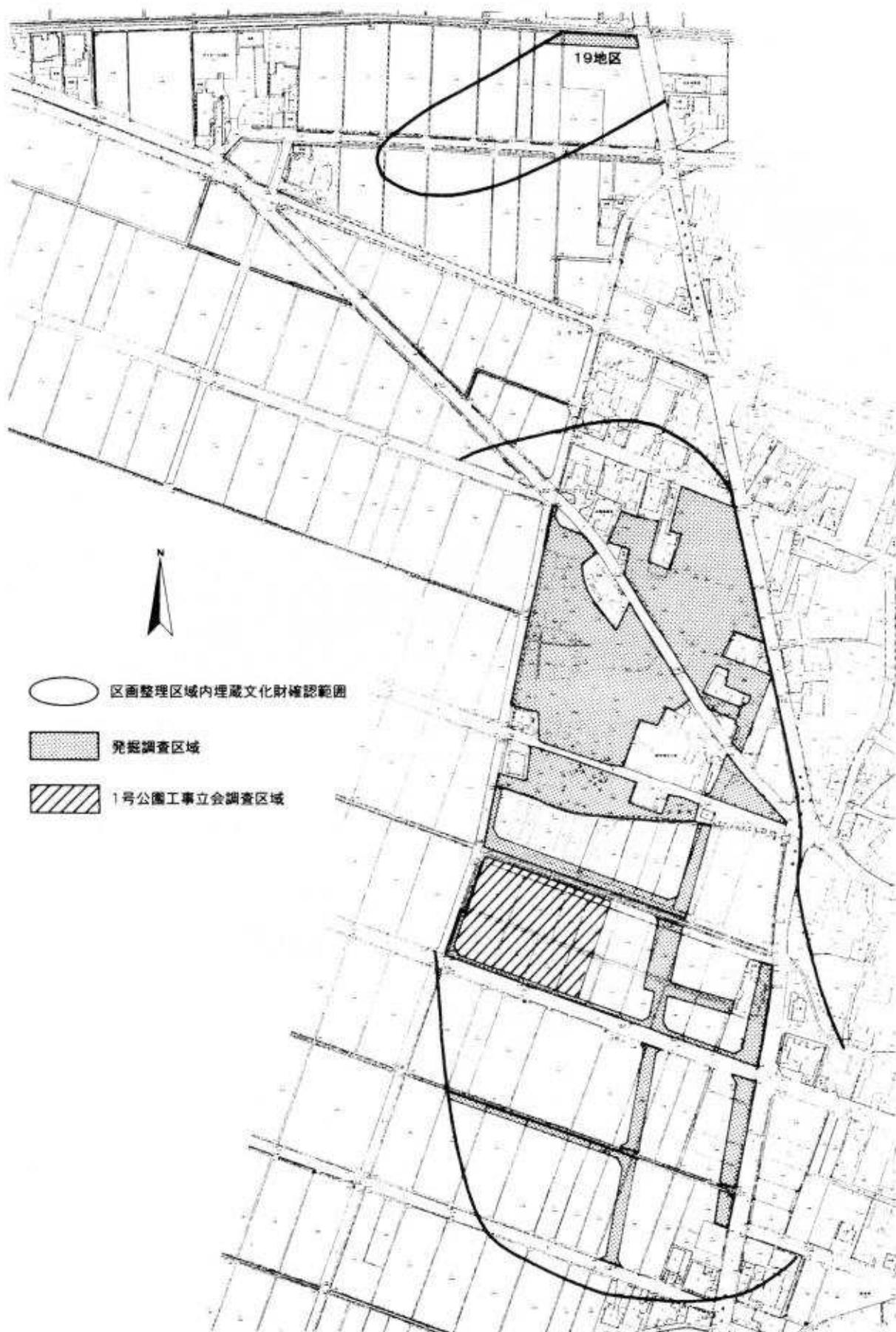
なお、前述の協定書において、土地区画整理事業区域内の1号公園計画区域（面積3,002m²）にある埋蔵文化財は現状保存ないしは盛土保存することとなっていたのであるが、平成10年秋、1号公園建設の際に現況面からの掘削を行なうことが調査室に知らされた。組合と調査室はその区域内における埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行なったのであるが、平成6年度に行った詳細分布調査のデータと1号公園建設に伴う掘削の深さとを比較すると、その掘削が埋蔵文化財に影響を与えるか否かは微妙なところであった。そこで、調査室職員が工事に立会い、工事中に埋蔵文化財が破壊される場合には、その破壊される箇所について、組合の経費負担により調査を実施することとした。その結果、台地上部分約65m²の調査と低湿地部分約70m²の遺物回収を行なった。

第2節 発掘調査の経過

今回の調査は、平成7年度から11年度の5年にわたり、15,182m²もの広範囲にわたって実施したものであり、全調査区域の地区割を行う必要があった。しかし、土地区画整理事業の工事計画や建物移転等の関係、さらに道路築造部分と街区となる部分とを分けて調査しなければならない点（補助金の関係による）などから整然とした形で地区割を行うことは困難であった。そこで、今回の調査では、発掘調査を着手した箇所から順に、第4図と第5図（19地区については第3図参照）のように1地区から25地区さらに1号公園工事立会い調査区域に分け、調査を行った。

各地区的調査着手および終了時期等については、第2表のとおりとなる。

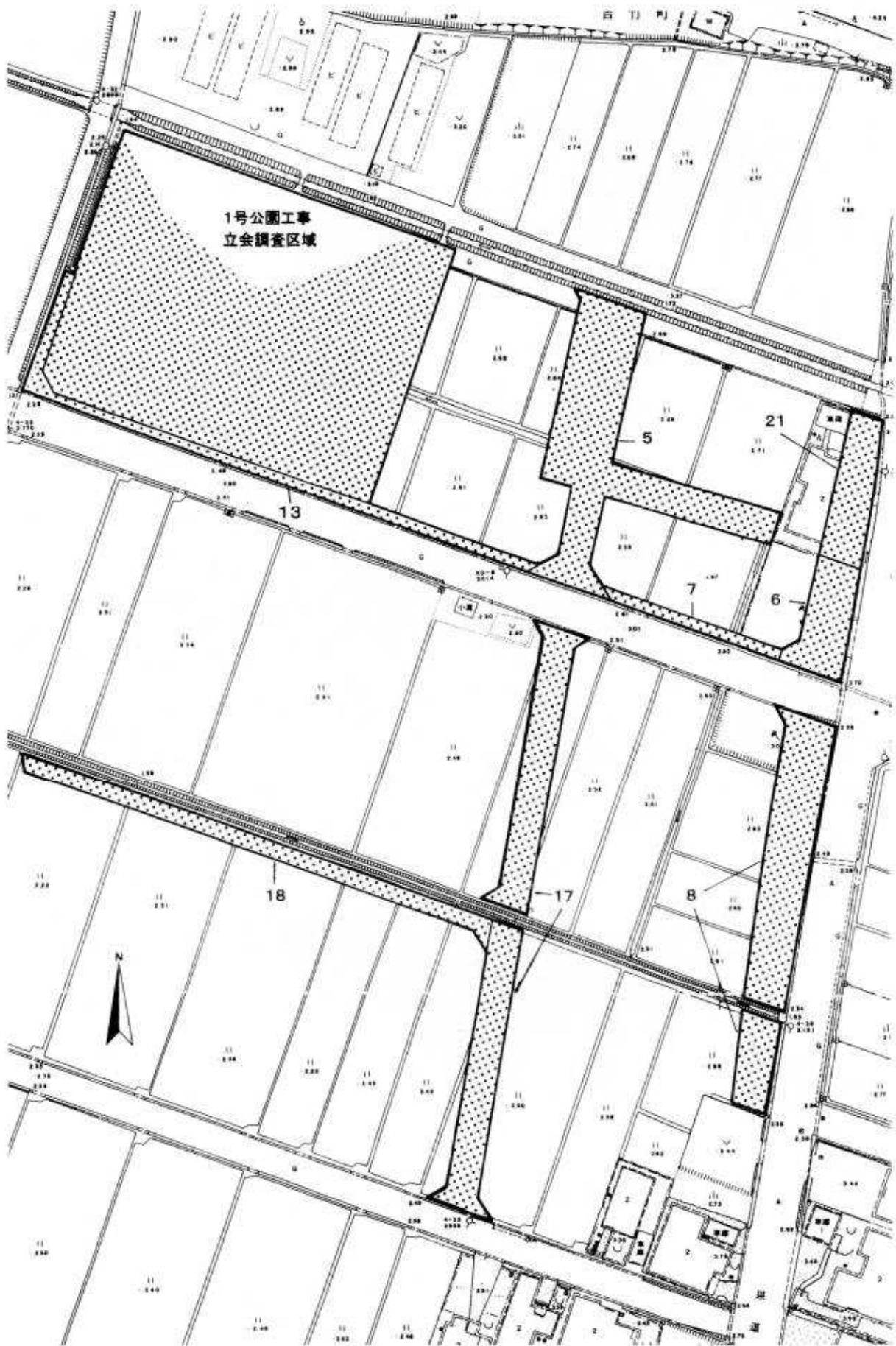
なお3地区、25A地区、25B地区の全域と11地区の一部（西側約3分の2の部分）は既に破壊され、埋蔵文化財は確認されなかった。



第3図 埋藏文化財確認範囲と調査区域 (S = 1/2,500)



第4図 調査地区割り図（その1）(S = 1/1,000)
(スクリントンは低湿地部分、その他は台地上部分を示す)



第5図 調査地区割り図（その2）(S = 1/1,000)
(スクリントンは低湿地部分、その他は台地上部分を示す。)

第2表 各地区の調査着手および終了時期

地区	着手時期	終了時期	備考
1	平成 7年 7月 6日	平成 7年 10月 20日	
2	平成 7年 7月 7日	平成 7年 10月 20日	
3	平成 7年 8月 22日	平成 7年 8月 23日	既に破壊・消滅していた。
4	平成 7年 9月 25日	平成 7年 11月 22日	
5	平成 7年 9月 25日	平成 7年 11月 22日	
6	平成 7年 9月 26日	平成 7年 11月 23日	
7	平成 7年 12月 14日	平成 7年 12月 21日	
8	平成 7年 11月 29日	平成 8年 3月 28日	
9	平成 8年 4月 4日	平成 8年 5月 14日	
10	平成 8年 4月 2日	平成 8年 6月 23日	
11	平成 8年 5月 20日	平成 8年 7月 4日	一部破壊・消滅していた
12	平成 8年 6月 3日	平成 8年 7月 13日	
13	平成 8年 6月 13日	平成 8年 7月 15日	
14	平成 8年 7月 8日	平成 8年 9月 28日	
15 A	平成 8年 7月 17日	平成 8年 10月 18日	
15 B	平成 8年 8月 21日	平成 8年 9月 11日	
15 C	平成 8年 9月 11日	平成 8年 12月 25日	
15 D	平成 9年 2月 18日	平成 9年 3月 29日	
16	平成 8年 8月 12日	平成 8年 12月 25日	
17	平成 8年 11月 5日	平成 8年 11月 29日	
18	平成 8年 11月 29日	平成 8年 12月 17日	
19	平成 9年 3月 4日	平成 9年 3月 29日	
20 A	平成 9年 4月 14日	平成 9年 8月 17日	
20 B	平成 9年 7月 30日	平成 9年 9月 29日	
21	平成 9年 6月 16日	平成 9年 6月 27日	
22	平成 9年 10月 3日	平成 9年 12月 14日	
23	平成 9年 11月 15日	平成 9年 11月 19日	
24	平成 10年 6月 4日	平成 10年 6月 9日	
25 A	平成 11年 3月 23日	平成 11年 3月 30日	既に破壊・消滅していた
25 B	平成 11年 4月 6日	平成 11年 4月 27日	既に破壊・消滅していた
25 C	平成 11年 4月 6日	平成 11年 4月 27日	
1号公園 立会調査	平成 11年 2月 17日	平成 11年 4月 5日	

第3章 遺跡の概要と発掘調査の概要

第1節 遺跡の概要

吉竹遺跡は、能美江沼丘陵地の縁辺部に立地しており、南西方向には木場潟の周辺部からの埋積によってできた低湿地が広がり、北方には梯川によって形成された沖積平野が広がっている。そして、この遺跡が立地する丘陵地縁辺部の台地は、まわりの低湿地、沖積平野に対して突き出した形、すなわち舌状台地を呈している。吉竹遺跡はこうした自然環境のところに立地しており、舌状台地の先端の台地上部分と木場潟の周辺部からの埋積によってできた低湿地の部分とからなる。

台地上部分には弥生時代後期後半から古墳時代後期にかけての集落跡が立地し、今回の調査では、約11,000m²の調査により、竪穴住居跡9軒（削平を受け、住居内土坑と壁溝の一部のみ確認のもの1軒、壁溝の一部と柱穴のみを確認のもの2軒を含む）、掘立柱建物跡29棟、土坑19基（住居内土坑の可能性のあるもの2基、木（草）の根または風倒木痕ではないかと思われるが、遺物が多く出土したもの1基を含む）、溝3本が確認され、その他、極めて多くのピットや、遺物がほとんど出土せず風倒木痕ではないかと思われる土坑がいくつか検出された。

一方、台地上部分の南側に広がる低湿地の部分については、現況面から約80cmから1mの深さに、弥生時代後期後半から中世の遺物が出土する褐色の粘土層が存在し、その下には、過去にその区域が木場潟であったのではないかと思わせる腐植土層が存在している。そして、この腐植土層から下は無遺物層となっており、遺構といえるものは確認されなかった。つまり、台地上部分の南側の低湿地部分には、遺物包含層のみが存在している。

以上をまとめると、吉竹遺跡の台地上部分には弥生時代後期後半から古墳時代後期にかけての集落跡が立地し、台地上南側の低湿地の部分には弥生時代後期後半から中世にかけての遺物が出土する遺物包含層のみが存在しているということであるが、台地上部分と低湿地部分との境に存在する遺物包含層では、遺物がきわめて多量に出土しているところがある。前章第2節で示した地区で言えば、11地区内の東側約3分の1の箇所と1号公園立会い調査区域の台地縁辺部において遺物が多量に出土した。そこでは、弥生時代後期後半から中世の遺物が出土したが、とくに古墳時代前期から中期のものが目立ち、1号公園立会い調査区域では、調査当時の現況（水田）面より深さ約30cmから60cmのところで、こうした遺物包含層が確認された。昭和59年に石川県立埋蔵文化財センターが、今回の台地上調査部分の西側、台地上部分と低湿地との境のところを調査しており、そこでも遺物が多量に出土し、その部分を溝状遺構と称している。そして、この溝状遺構について、「溝底面のレベル差はほとんどなく、砂質土系の堆積も認められないことから、恒常に水が流れるあるいは水をたたえるものとは考えられない。また集落を外郭する（人為的な掘削による）溝にしては、たちあがりはゆるやかである。したがってここでは、集落の外縁に帯状に連なる地形変換線上の鞍部に、遺物（土器等）の継起的な投（廃）棄など人々の働きかけ（部分的な繰りかえし、改修の可能性を含めて）が加わったものと考え、当該遺構を溝状遺構と称しておきたい」としている（栃木1987）。今回の調査で確認された台地縁辺部における多くの遺物の出土についても、こうした遺物の継起的な投棄によるものではないかと考えられる。

今回の調査では、台地上部分から北へ約300m離れたところでも調査を行った（調査面積約240m²）。前章第2節で示した19地区にあたるが、19地区内東端では北東から南西に流れていたと思われる溝が検出され、その溝で堰が確認された。堰は、古墳時代前期の土器が出土しており、その時期に属すると考えられる。この区域については、吉竹遺跡とは別の新発見の遺跡として扱うべきであったの

ではないかと調査後に思ったが、今回は吉竹遺跡に含めて扱うものとする。

なお、第6図～第8図に台地上部分の全体図を掲載したが、調査では全体図に掲載した遺構のほかに多数のピットや遺物がほとんど出土しない土坑（風倒木痕といえるものかもしれない）などがいくつか確認された。今回の報告では、それらを省略して報告するものとする。

第2節 発掘調査の概要

今回の発掘調査区域は、台地上部分と低湿地部分とに分かれており、両者の遺跡の様相が異なっていることから、おのずと調査方法は台地上部分と低湿地部分とでは異なった。

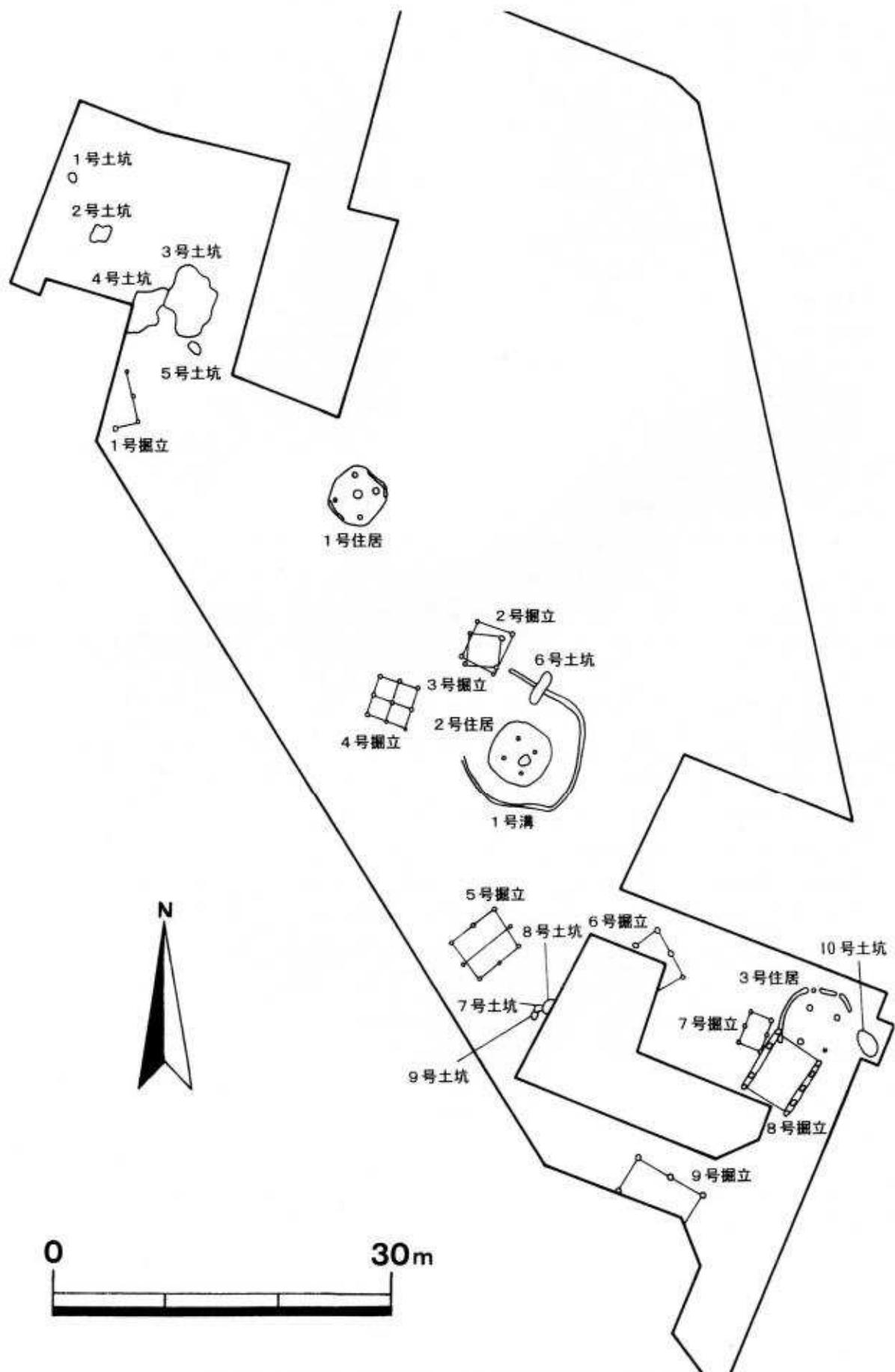
台地上部分では、現況面から地山面までの深さが約20cm～30cmと浅く、地山面より上の土は、畑の耕作等により攪拌を受けており、表土とみなしてよいと判断し、まず重機を使用して地山面直上まで掘り下げた（前章第2節で示した1地区・2地区・10地区・15B地区・15C地区は人力によって掘り下げた）。その後、各地区とも任意に5m四方のグリッドを設定し、人力によって遺構精査を行った。なお、遺構精査の際に取りあがった遺物はグリッドごとに取り上げた。遺構検出後、土層断面観察用のセクションベルトを任意に設定して遺構を掘り下げ、セクションベルト以外の箇所を掘り下げた後、土層断面の写真撮影および土層断面図の作成を行った。遺構から出土した遺物は比較的まとまりを持った遺物のみを残すようにして遺構を掘り下げ、遺物の出土状況の写真を撮影し、必要に応じて出土遺物のドットマップないしは出土状況図を作成した。また遺構完掘後、竪穴住居跡と掘立柱建物跡については、完掘状態の断面図を作成した。そして全ての遺構が完掘された後、前章第2節で示した1地区、2地区、15B地区、15C地区、15D地区、16地区、22地区については航空写真測量を実施し、その他の地区については、平板測量により全体図の作成を行った。

一方、台地上部分の南側の低湿地部分では、現況面下約80cmに存在する遺物包含層の直上まで重機によって掘り下げ、5m四方のグリッド（細長い調査地区は5m間隔のグリッド）を設定。その後、人力によって遺物包含層を掘り下げ、遺物包含層から出土した遺物はグリッドごとに取り上げた。そして、遺物包含層を掘り下げた後、任意に各調査地区の壁面の土層断面図を作成した。

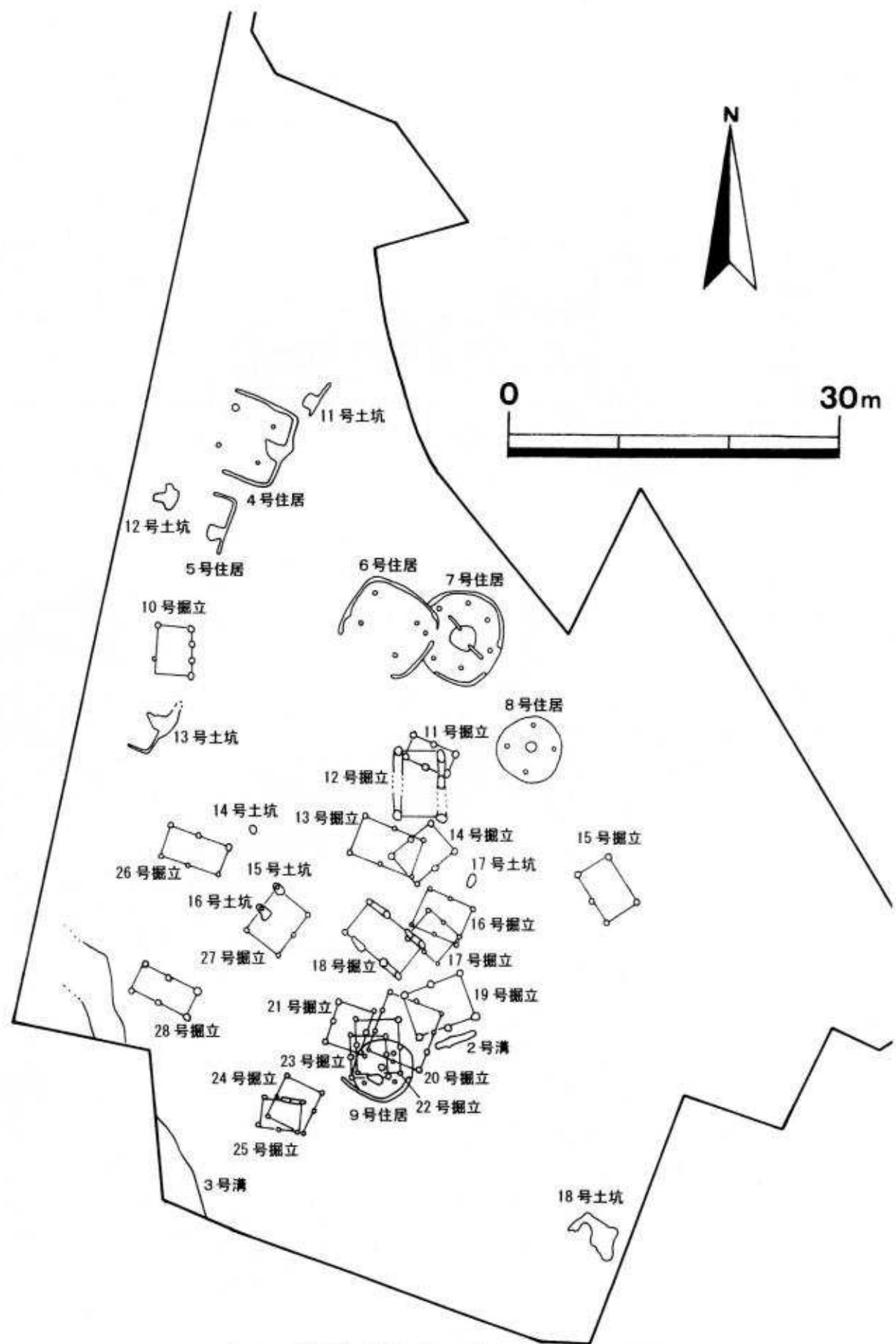
台地上部分から北側約300m離れた調査地区（19地区）については、平成6年度に行った詳細分布調査により現況面から約80cmのところに黒褐色ないしは褐灰色シルトの遺物包含層があるものと考えられ、まず重機によって、この遺物包含層と考えられた層の直上まで掘り下げた。その後、人力によって遺物包含層と考えられた層を掘り下げていき、その下から明るめの灰黄色シルト層ないしは黒色シルト層が検出された。これら2つの層から下は詳細分布調査で無遺物層であると判断したので、それらの層が検出されたところで掘り下げを止めるようにし、調査地区的西側から順に遺物包含層と考えられた層を掘り下げていった。なお、この調査地区的西側ではほとんど遺物の出土は見られなかった。このようにして遺物包含層と考えられた層を掘り下げていくと、調査地区的東端で北東から南東方向の溝が検出され、それを掘り下げると、堰が検出された。この溝の掘り下げの際には出土遺物を残すようにして掘り下げ、出土遺物の出土状況図の作成、出土状況写真の撮影を行ない、堰の立面図の作成も行った。そして、堰に関連する木製遺物を取り上げた後、溝の平面図を平板測量により作成し、この調査地区南側壁面の土層断面図の作成をも行った。

引用参考文献

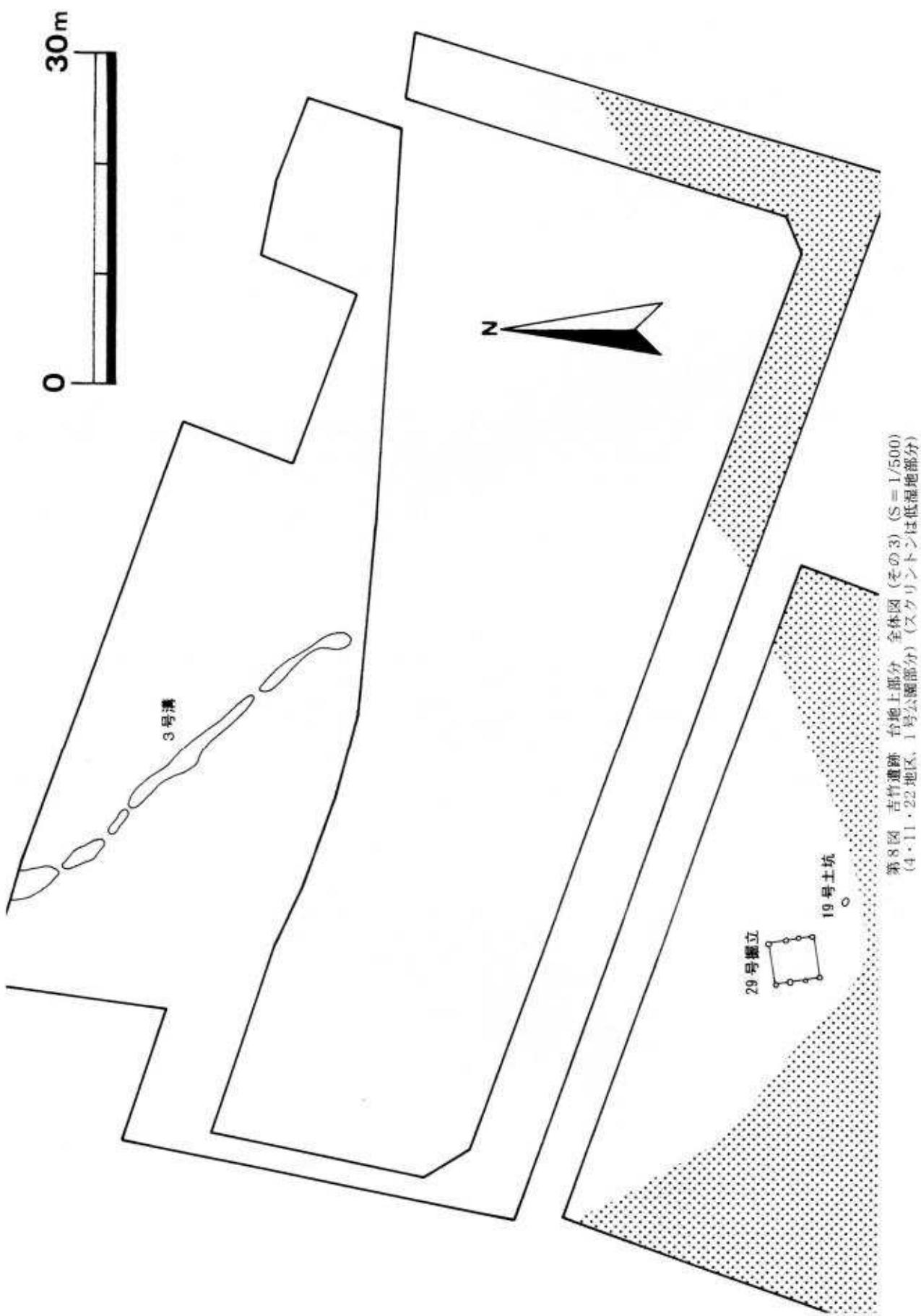
柄木英道 1987 「第4章 第2次発掘調査 第2節 遺構」『吉竹遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター



第6図 吉竹遺跡 台地上部分 全体図（その1）(S = 1/500)
(1・9・14・15・23・24・25地区部分)

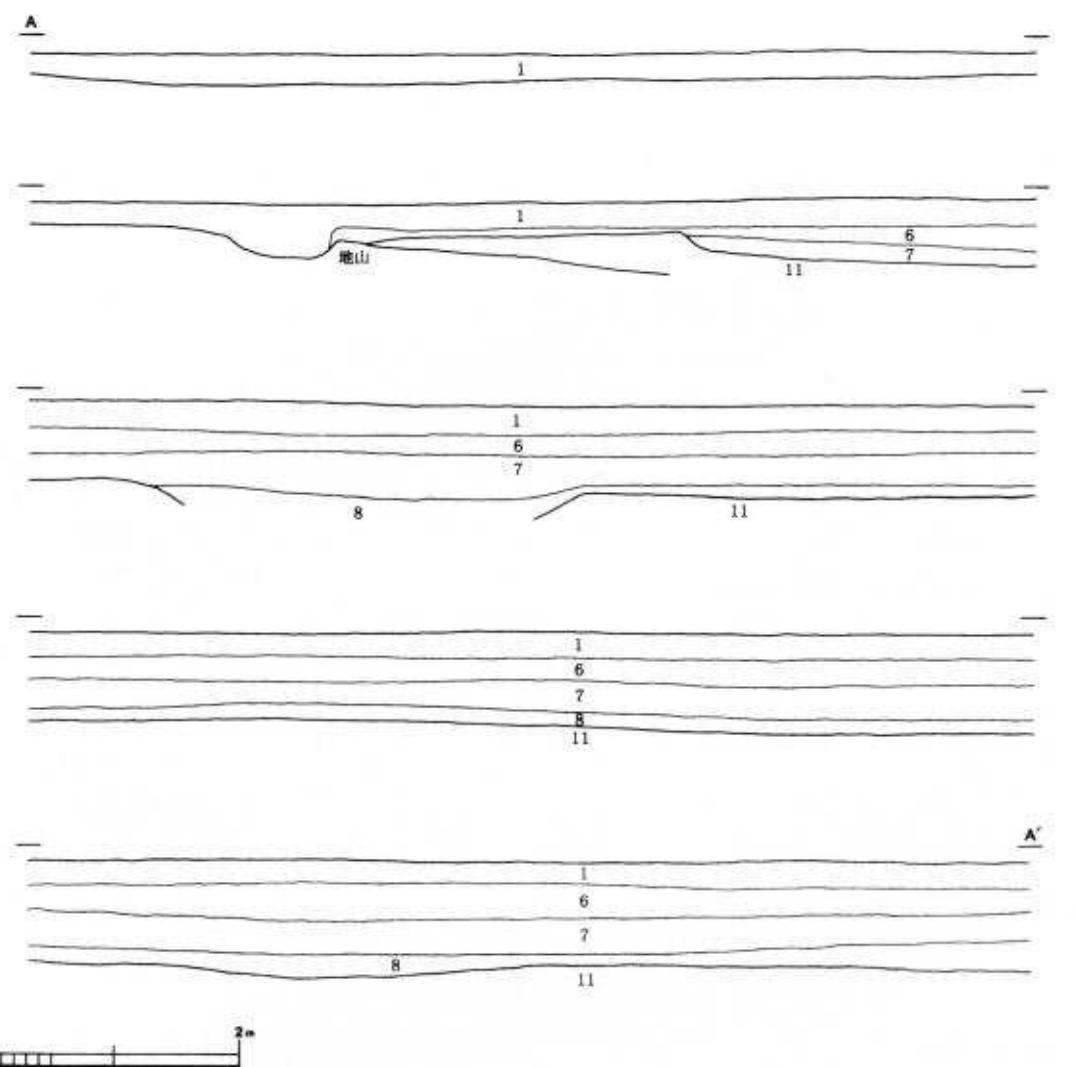


第7図 吉竹遺跡 台地上部分 全体図（その2）(S=1/500)
(2・3・10・12・16・20地区部分)



第8図 吉竹遺跡 台地上部分 全体図 (その3) ($S = 1/500$)
(4・11・22地区、1号公園部分) (スケリントンは低湿地部分)

4地区 A-A' 土層断面図（すべてH = 2.500m）



低湿地部分 調査区壁面 土層断面図 土層柱

- 1層：黄灰 (2.5Y4/1) 粘土。田耕作土。
 - 2層：灰褐 (10YR4/1) 粘土。酸化鉄分の吹き出し極めて多。
 - 3層：灰 (5Y4/1) 粘土。
 - 4層：黄灰 (2.5Y4/1) 砂。1cm 大の石をやや多く含む。
 - 5層：褐灰 (10YR4/1) 粘土。酸化鉄分の吹き出し極めて多。
 - 6層：灰黃褐 (10YR5/2) 粘土。酸化鉄分の吹き出し極めて多。
 - 7層：褐灰 (7.5YR5/1) 粘土。酸化鉄分の吹き出し多。
 - 8層：褐灰 (7.5YR4/1) 粘土。〈遺物包含層〉
 - 9層：褐灰 (7.5YR4/1) 砂質土。カーボン酸やや多。
 - 10層：黒褐 (7.5YR3/2) 腐植土。8層土少量混じる。
 - 11層：黒褐 (7.5YR3/2) 腐植土。
- 地山：明褐 (7.5YR5/6) 粘土。1～5cm 大の石が表面に多くあり。

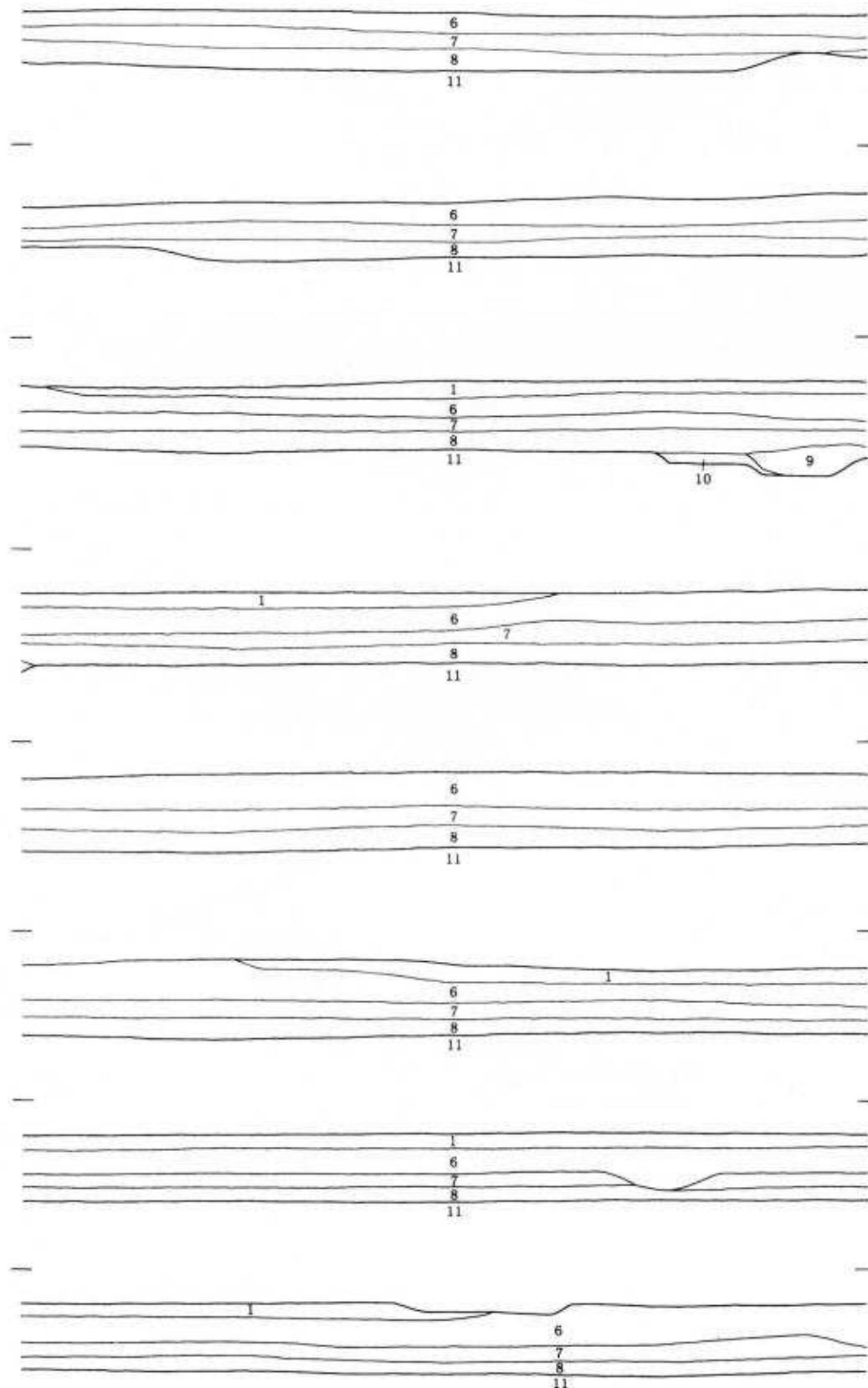


低湿地部分土層断面ポイント位置図

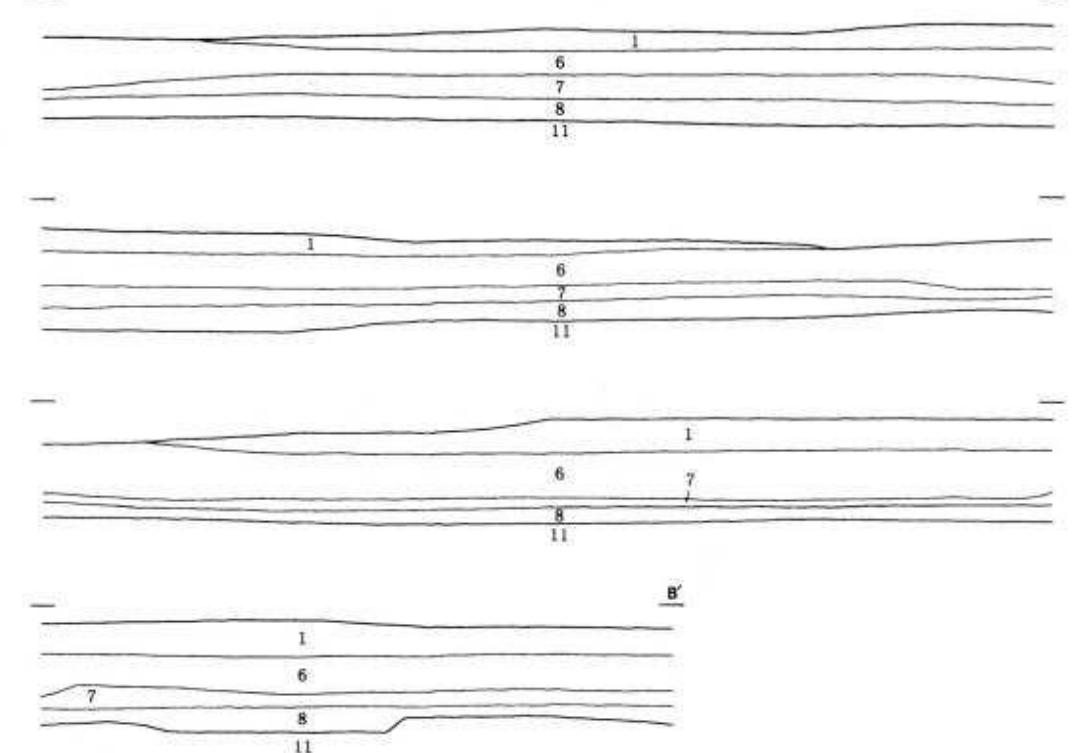
第9図 吉竹遺跡 低湿地部分 調査区壁面 土層断面図（その1）(S = 1/60)

13地区B-B' 土層断面図 (すべてH = 2.800m)

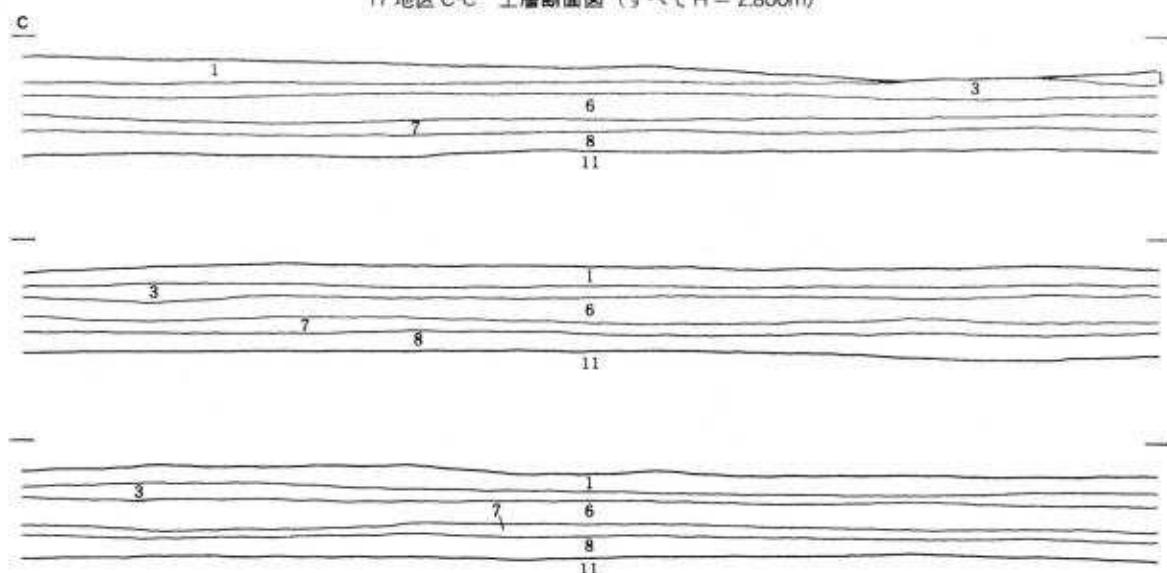
B



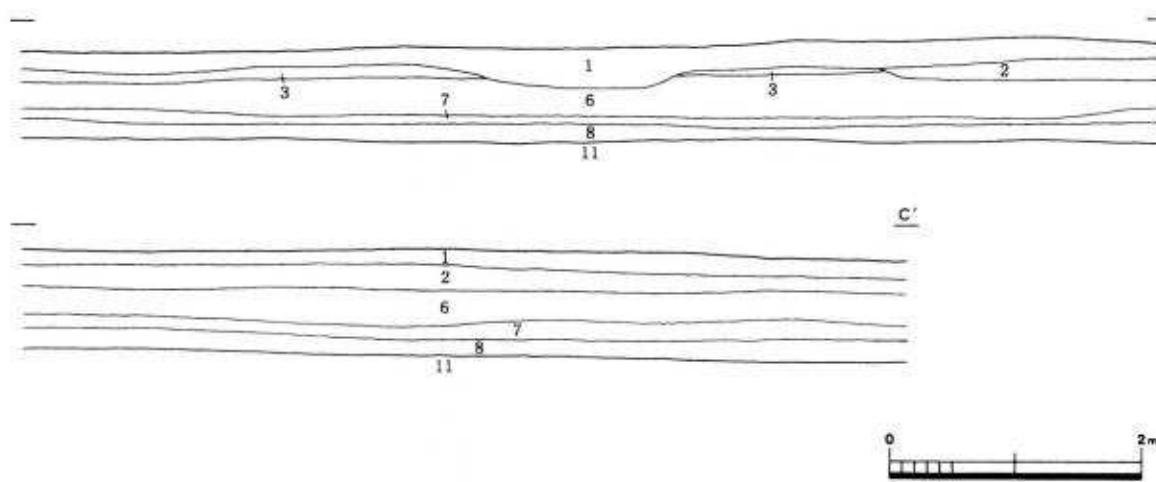
第10図 吉竹遺跡 低湿地部分 調査区壁面 土層断面図 (その2) (S = 1/60)



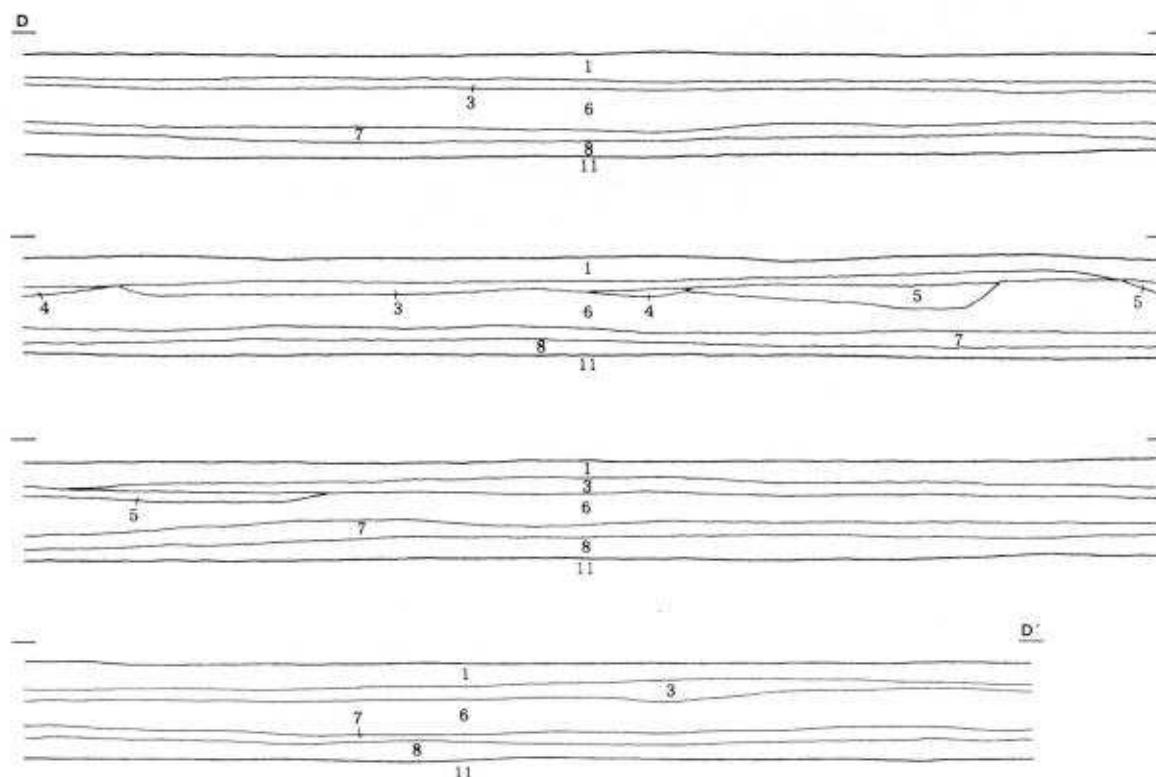
17地区 C-C' 土層断面図 (すべてH = 2.800m)



第11図 吉竹遺跡 低湿地部分 調査区壁面 土層断面図 (その3) (S = 1/60)



17 地区 D-D' 土層断面図 (すべて H = 2.600m)



低湿地部分 調査区壁面 土層断面図 土層註

- 1層：黄灰 (2.5YR4/1) 粘土。田耕作土。
- 2層：灰褐色 (10YR4/1) 粘土。酸化鉄分の吹き出し極めて多。
- 3層：灰 (5Y4/1) 粘土。
- 4層：黄灰 (2.5Y4/1) 砂。1cm 大の石をやや多く含む。
- 5層：褐灰 (10YR4/1) 粘土。酸化鉄分の吹き出し極めて多。
- 6層：灰黃褐色 (10YR5/2) 粘土。酸化鉄分の吹き出し極めて多。
- 7層：褐灰 (7.5YR5/1) 粘土。酸化鉄分の吹き出しが多。
- 8層：褐灰 (7.5YR4/1) 粘土。<遺物包含層>
- 9層：褐灰 (7.5YR4/1) 砂質土。カーボン酸やや多。
- 10層：黒褐色 (7.5YR3/2) 硫植物に 8 層土少量混じる。
- 11層：黒褐 (7.5YR3/2) 硫植物。

第 12 図 吉竹遺跡 低湿地部分 調査区壁面 土層断面図 (その 4) (S = 1/60)

第4章 台地上部分の遺構と遺物

第1節 台地上部分の概要

今回の台地上部分の調査では、約11,000m²の調査を行ない、弥生時代後期後半から古墳時代後期にかけての集落跡が確認され、第6図～第8図の全体図にあるとおり、竪穴住居跡9軒（削平を受け、住居内土坑と壁溝の一部のみ確認のもの1軒、壁溝の一部と柱穴のみ確認のもの2軒を含む）、掘立柱建物跡29棟、土坑19基（住居内土坑の可能性のあるもの2基、木（草）の根または風倒木痕ではないかと思われるが、遺物が多量に出土したもの1基を含む）、溝3本が検出された。その他、極めて多くのピットや、遺物がほとんど出土せず風倒木痕ではないかと考えられる土坑などもいくつか確認された。

調査時における台地上部分の傾斜を見ると、第6図にある3号土坑、1号住居、2号掘立、10号土坑を結んだラインをほぼ頂点として、南西および北方向に極めて緩やかに傾斜していた。そして、南西方向に傾斜している部分に、主要な遺構のすべてが分布している状況であった（台地上部分南側の22地区から1号公園工事立会調査区域に至る区域は、著しい削平ために遺構の空白区域となっており、この区域の遺構の分布状況は不明である。また12地区についても著しい削平を受けていた。）。

以下、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝と節を分け、遺構ごとに、遺構の状況や出土遺物について述べていくこととする。なお、各遺構の時期については、弥生時代後期後半～末は、栃木1987を参考に、法仏式期、月影I式期、月影II式期に分け（筆者の判断では、検出された遺構はほぼすべて法仏式期以降であった）、古墳時代については田嶋1986の漆町編年を用いる。また、古墳時代でも出土須恵器から時期を特定する場合は、田辺1981および中村1981の陶邑編年を用いることとする。その他、各遺構の大まかな遺物量を示す際に「パンケースにして」という表現を用いるが、その場合は、約6.5cm×約4.0cm×約1.5cmの規格のパンケースを差すこととする。この時期と遺物量の表記については、第4章以外に、第5章～第7章でも用いることとする。

第2節 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（第13図～第15図）

【位置と方位】1地区の西隅に位置。主軸は北から東へ約38°振る。

【規模と形態】平面形は約455cm×約450cmの隅丸方形を呈す。壁高は10cm程度で、上部のほとんどが削平を受けてしまったものと考えられる。床面は地山であるが、ほぼ全面が硬くなっている。

【柱穴】P1～P4の四本が主柱穴となる。P1～P3が二段掘り状となっており、P4に隣接する2段掘り状のピットが主柱穴の1つであるとも考えたが、P1～P3に比べて浅いことから、P4を主柱穴とした。

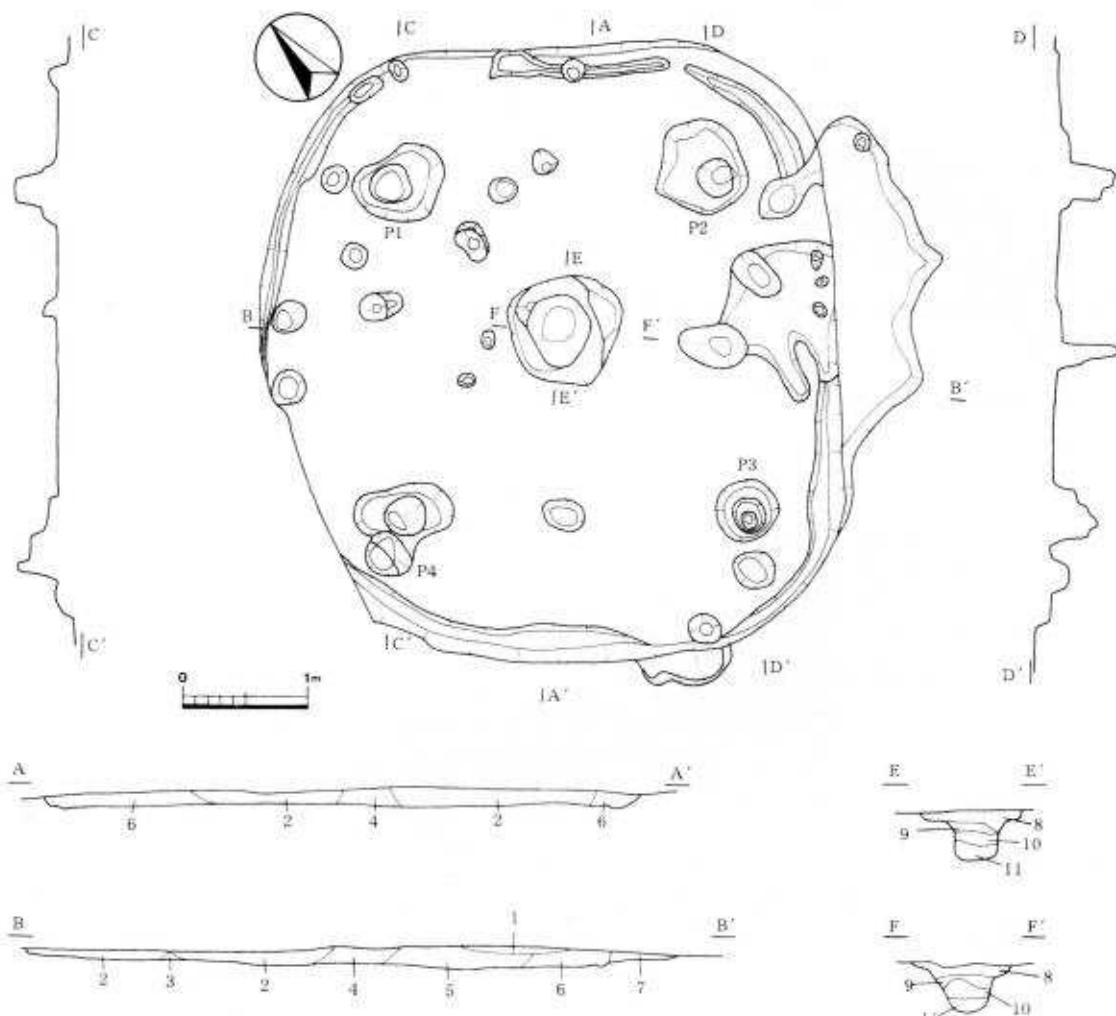
【住居内土坑】住居跡のほぼ中央に位置し、平面形がほぼ円形の土坑。直径約9.0cmを測る。覆土の上層で大きめのカーボン粒が見られるが、炭層や焼土塊などは見られず、炉穴とは断定しえない。

【遺物出土状況】出土遺物はほとんどが土器で、パンケースにして約2箱分ある。第13図に床面遺物出土状況図を載せてあるが、住居跡中央にある土坑の北側で、比較的集中して遺物が分布している。

【出土土器】（第14図・第15図）

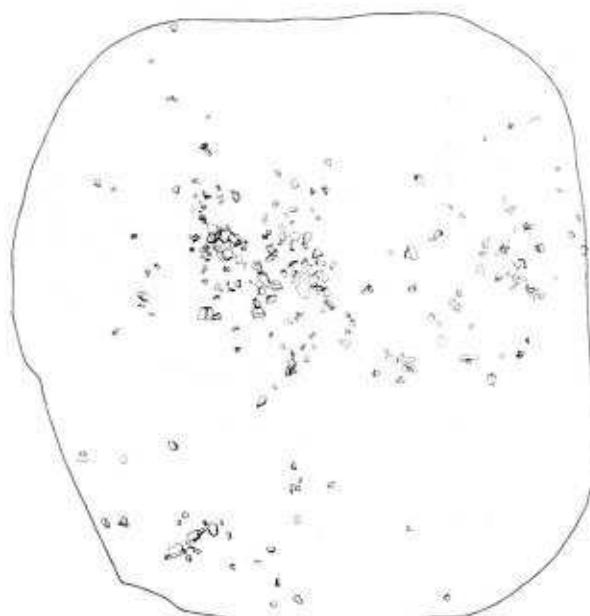
以下で述べる出土土器はすべて住居跡床面より出土した。

（甕：1～11）1～11は、有段口縁をもつ甕の口縁部である。1～6は口縁帯外面に擬凹線をもつもので、5・6は他のものに比べ、口径が小さい。7～9は、口縁帯外面に擬凹線をもつが、口縁帯の



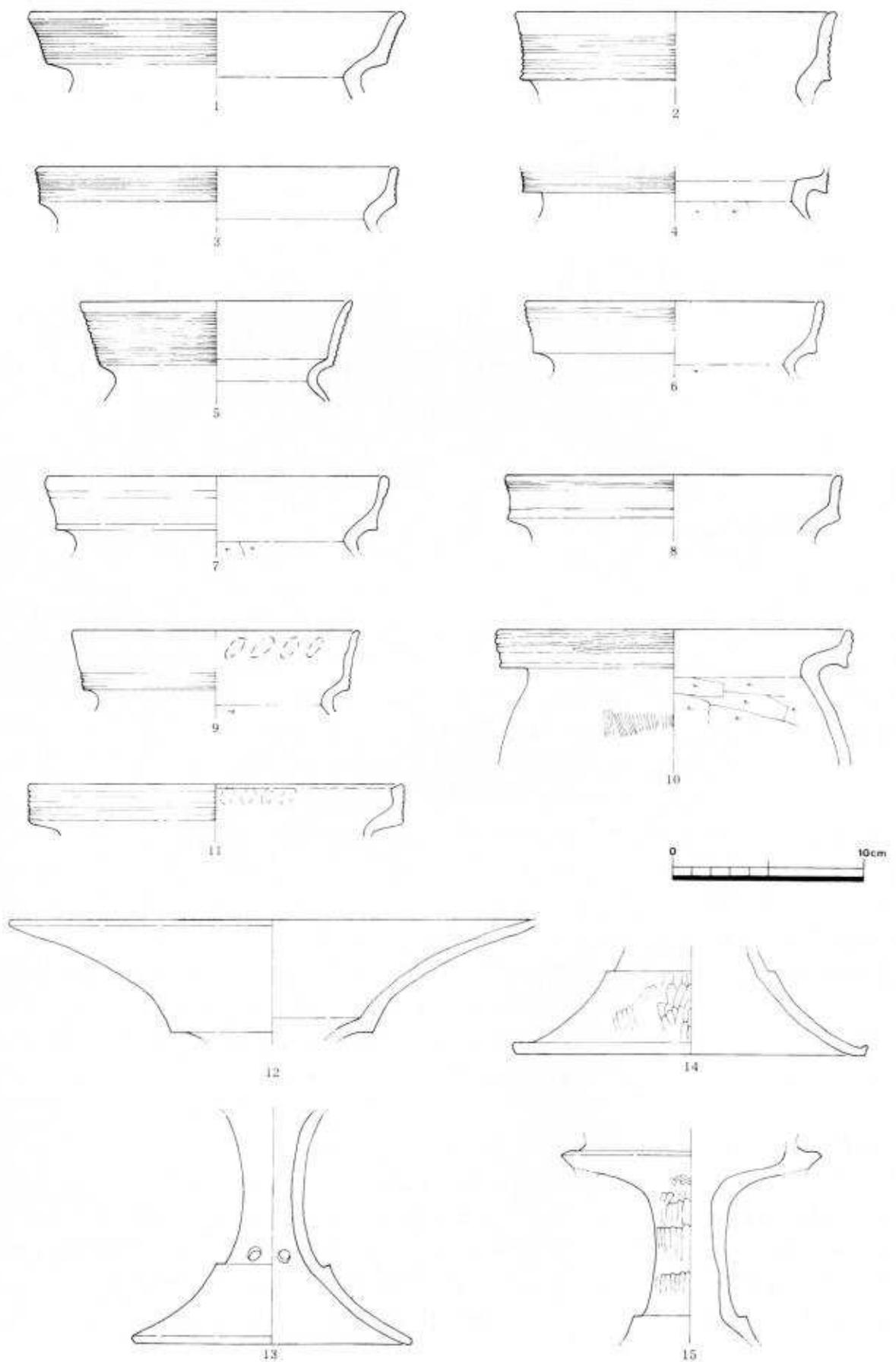
1号竖穴住居跡 土層註

- 1層：暗褐色 (7.5YR3/4) 土。2層土に耕作土混じる。
しまりなく、やわらかい。
- 2層：極暗褐色 (7.5YR2/3) 土。極小のカーボン粒、地
山鉱含む。
- 3層：2層土に地山鉱多混じる。
- 4層：暗褐色 (7.5YR3/4) 土。極小のカーボン粒含む。
- 5層：黒褐色 (10YR2/3) 土。しまりなく、やわらかい。
カーボン粒多。土器多く出土。
- 6層：暗褐色 (7.5YR3/3) 土。極小のカーボン粒含む。
- 7層：褐 (7.5YR4/4) 土。
- 8層：暗褐色 (7.5YR3/4) 土。大きめのカーボン粒含む。
- 9層：褐 (7.5YR4/4) 土。大きめのカーボン粒含む。
- 10層：暗褐色 (10YR3/4) 土。細かいカーボン粒含む。
- 11層：地山土に10層土が混じる。細かいカーボン粒含む。
地山：明褐色 (7.5YR5/6) 粘質土。

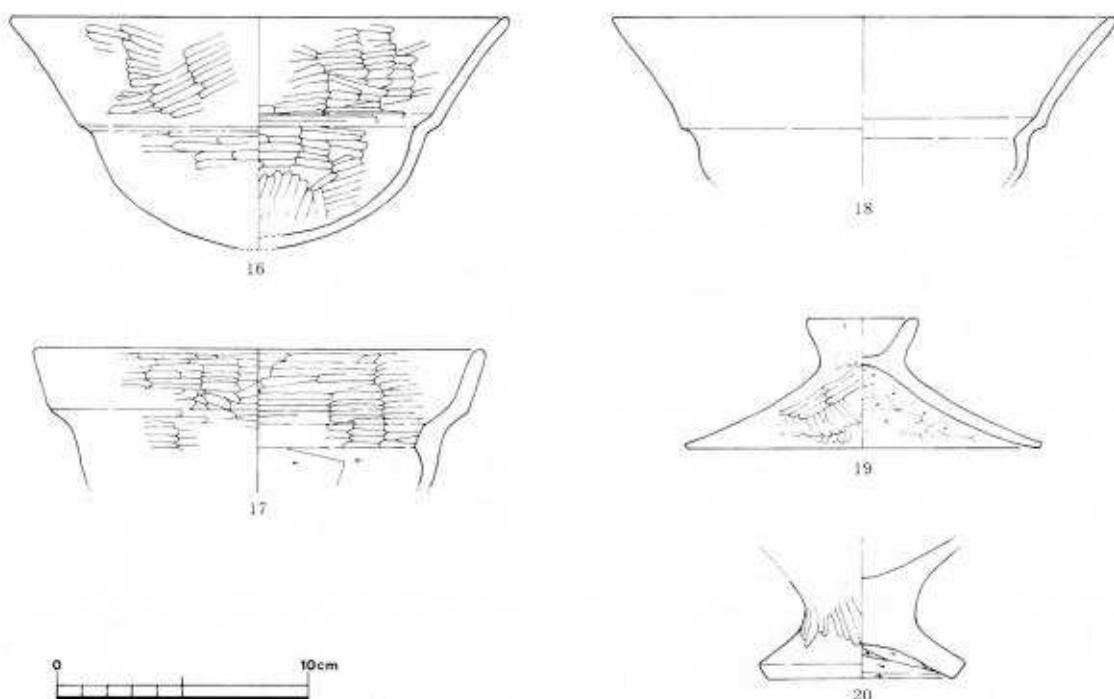


床面遺物出土状況図

第13図 1号竖穴住居跡 平面図・断面図 (S = 1/60) (すべてH = 4.500m)



第14図 1号竪穴住居跡 出土土器 (S = 1/3)



第15図 1号堅穴住居跡 出土土器 ($S = 1/3$)

一部にしか認められないものである。9は7・8に比べ口径が小さく、また口縁帶内面に指頭痕が認められる。10・11は口縁帶の幅が他のものに比べて狭いものである。10・11ともに口縁帶外面に擬凹線が認められるが、10の口縁帶下半は、先が平坦なヘラ状具でヨコナデしたようになっている。11の口縁帶内面には指頭痕が認められる。

(器台：12～15) 12は有段の受部で、口縁部が大きく外反して開く。13・14は有段の脚部。15は、弥生時代末(月影式期)に見られる結合器台の脚部。受部外底部から脚柱部外面にかけてヘラ磨きされており、その部分に赤彩された痕跡が認められる。

(鉢：16～18) 16～18は有段鉢である。16は半完形品に復元される。

(その他：19・20) 19は蓋形土器、20は台付壺の脚部と思われるものである。

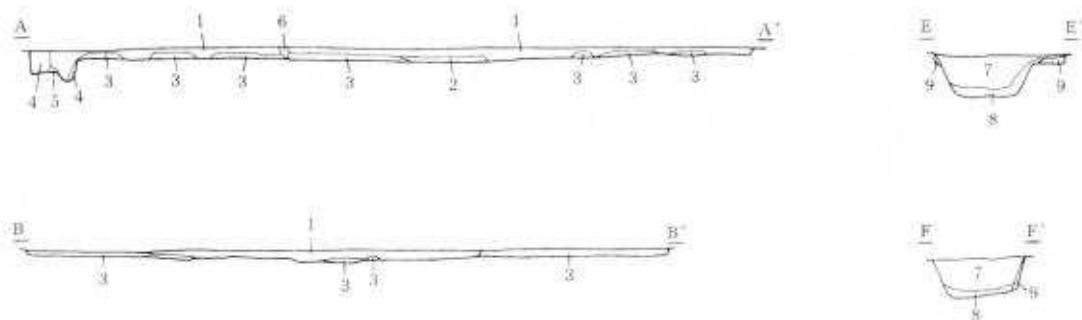
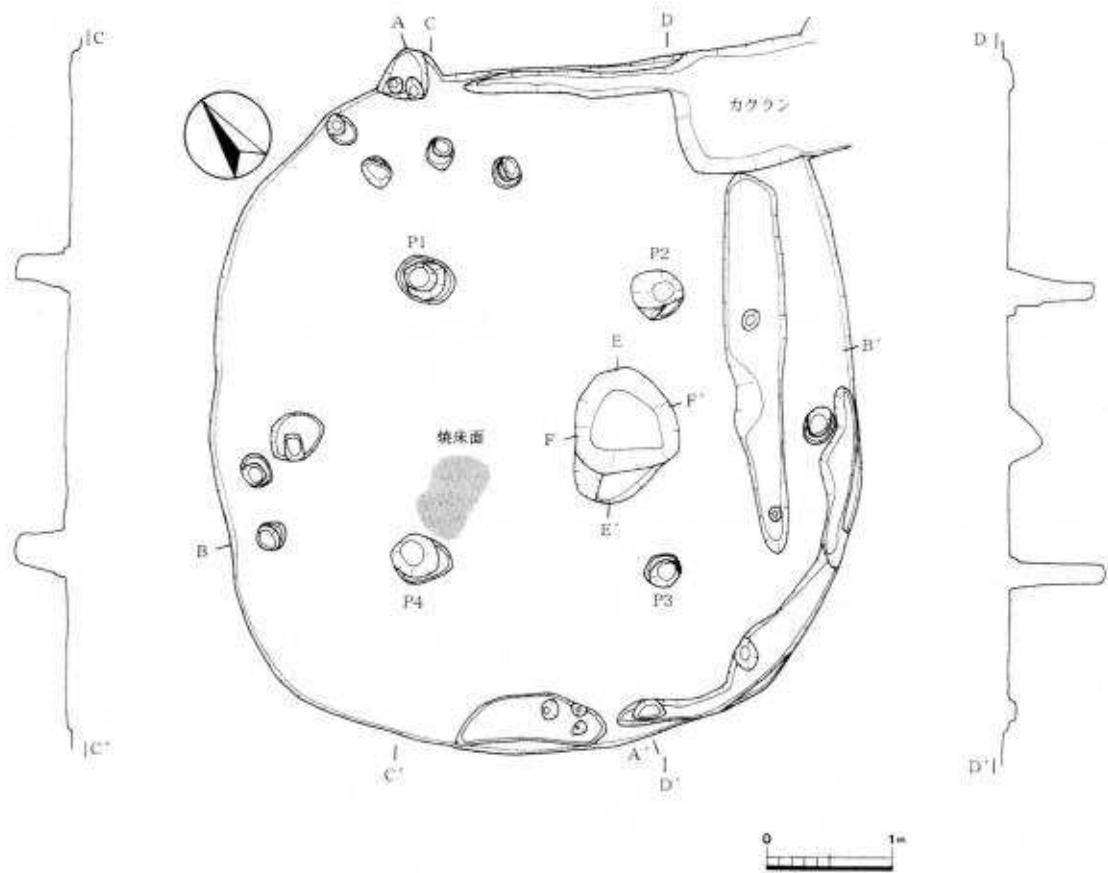
【遺構の時期】弥生時代末の月影式期に見られる結合器台が床面から出土しており、月影式期に位置付けられる。甕について見ると、口縁帶内面に指頭痕が認められるものがあるが、口縁帶の伸び・外反度はさほどない。また、床面出土で、破片が小さく、図化できなかった甕底部があるが、自立可能なものであった。以上の点から、月影I式期に位置付けられると考えられる。

2号堅穴住居跡 (第16図)

【位置と方位】15A地区の東隅中央に位置する。主軸は北から東へ約36°振る。

【規模と形態】平面形は約510cm×約540cmの隅丸方形を呈す。確認面から床面までの深さは5cm～10cm程度しかなく、上部のほとんどが削平を受けてしまったものといえよう。床面は地山であるが、主柱穴に囲まれた部分が、他の部分に比べ、固い印象を受ける。なお、この住居跡のまわりには溝(1号溝)がめぐっており、その溝は、この住居跡に付随するものではないかと考えられる。

【柱穴】P1～P4の4本主柱である。



2号竖穴住居跡 土層柱

- 1層：黒褐色 (7.5YR3/2) 土。
- 2層：1層土に地山土少量混じる。しまり強。
- 3層：地山土に1層土少量混じる。しまり強。
- 4層：1層土に地山土少量混じる。
- 5層：地山土に1層土少量混じる。
- 6層：黒褐色 (7.5YR2/2) 土。草の根多く混入（草の根痕である）。
- 7層：黒褐色 (7.5YR3/2) 土。5mm～1cm 大のカーボン粒少量含む。
- 8層：7層土に地山土がブロック状に少量混じる。
- 9層：地山土に1層土が少量混じる。

第16図 2号竖穴住居跡 平面図・断面図 (S = 1/60) (すべて H = 4.900m)

【住居内土坑】P 2とP 3のほぼ間に位置し、長径110cm、短径80cmの橢円形状を呈す。覆土内にはカーボン粒があるが、大きなカーボン粒や焼土塊、炭層などは見られず、炉穴とはいえない。

【焼床面】P 4の東側に隣接したところで、床面が焼けていた。この箇所が炉（地床炉）であったと考えられる。約3cm～5cmの厚みで、比較的固く焼けていた。

【遺物出土状況】住居跡床面や主柱穴、住居内土坑からの出土遺物は、土器細片がわずかにある程度である。また、住居跡の上部のほとんどが削平されていることもあって、この住居跡に伴う遺物はごく少量しかない。そして、それらはまばらに出土している状況であった。

【出土土器】出土土器は、図化しえない細片がわずかにある程度である。そのほとんどは器種不明の細片であるが、なかには、甕体部片で内面ヘラケズリのもの、有段口縁を持つ甕の口縁部細片（住居跡床面から1点出土）・頸部細片（P 2、P 4から各1点出土）、有段高坏（ないしは器台）の有段部細片（住居跡床面から1点出土）がある。有段口縁を持つ甕の口縁部は、口縁帶の幅が狭く、口縁帶外面に擬凹線（摩滅で本数は不明）が施され、口縁端部は丸く作られている。

【遺構の時期】出土土器が少なく、当住居跡の時期を決め難いが、住居跡床面出土の有段口縁を持つ甕の口縁部細片から、弥生時代後期後半の法仏式期に位置付けられると考えられる。また、この住居跡のまわりをめぐり、住居跡に付随すると考えられる溝（1号溝）から法仏式期に位置付けられると考えられる甕の口縁部が出土しており、その点から考えても、法仏式期に位置付けて妥当であると思われる。

3号竪穴住居跡（第17図）

【位置と方位】15D地区の東側に位置。主軸は北から東へ約21°振る。

【規模と形態】当住居跡は、削平されて、壁溝の一部と主柱穴のみが残っていたものであった。よって、全体の大きさなどを明確に知ることはできないが、残存部分から推定して、平面形が直径約7mほどの円形を呈する竪穴住居跡ではないかと考えられる。

【柱穴】P 1～P 4の4本主柱である。P 3は木の根によって上部のほとんどが破壊されて、下底面がわずかに残存している状況であった。

【遺物出土状況】残存していた壁溝、主柱穴からはほとんど遺物が出土しなかった。

【その他】残存していた壁溝の北側部分、西側部分の土層断面については、調査ミスにより、土層断面図の作成が行えなかったが、これらの部分には、土層断面図の作成が行えた北東部分と同じく、黒褐（7.5YR 3/2）土を基本とした土が堆積していた。

【遺構の時期】出土遺物がほとんどなく、遺構の時期は決められなかった。

4号竪穴住居跡（第18図～第20図）

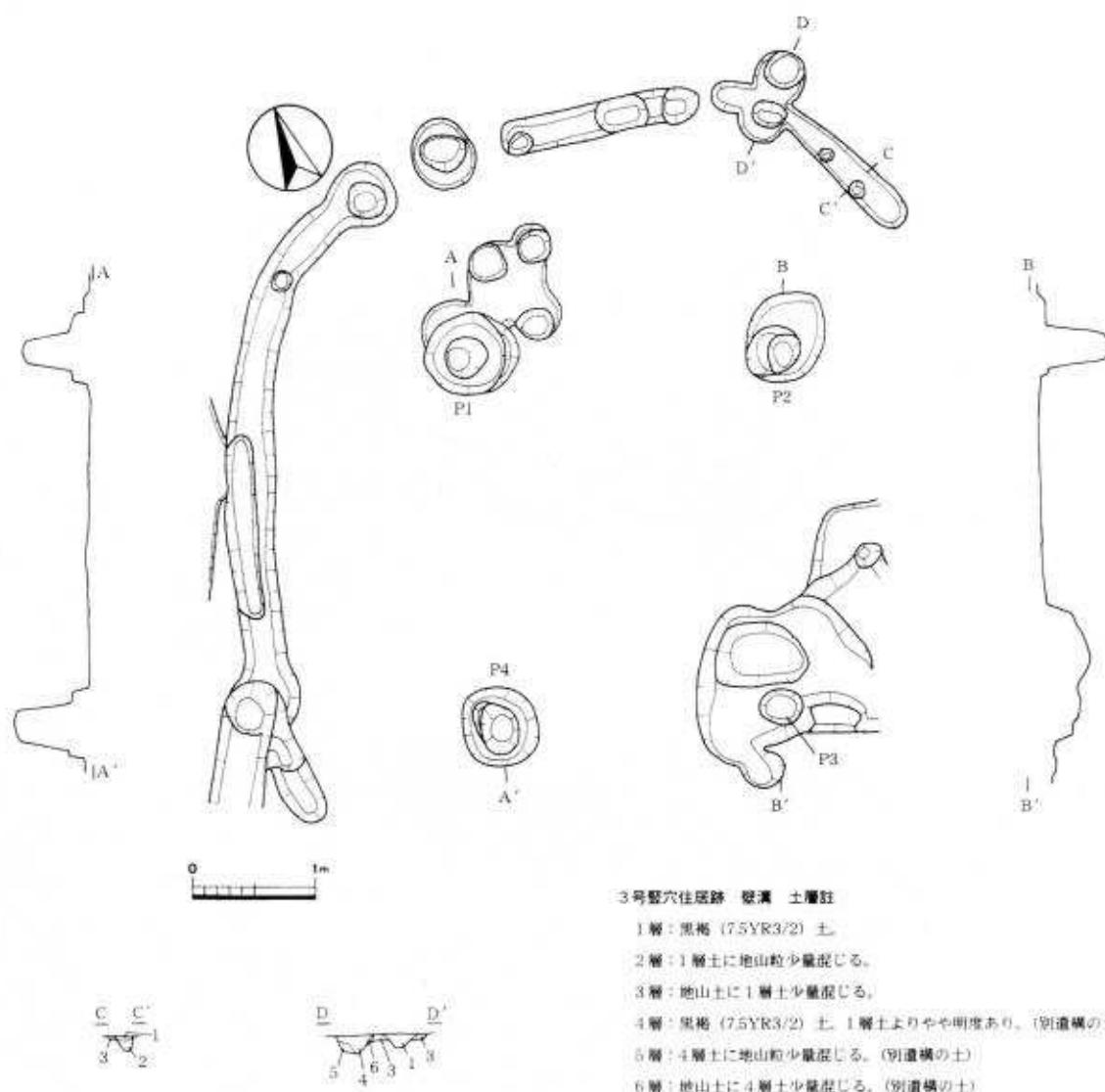
【位置と方位】16地区の西隅中央に位置。主軸は北から東へ約23°振る。

【規模と形態】削平を受け、壁溝（一部消滅）、主柱穴、住居内土坑のみが残存している状態であった。平面形は、南北方向が約750cm、東西方向が600cm以上の方形状を呈す。

【柱穴】P 1～P 4の4本主柱である。

【住居内土坑】住居跡東隅中央に位置。平面形は、長辺約170cm、短辺約130cmの長方形を呈する。土坑のほぼ中央に、平面形が橢円形を呈する落ち込みがあり、二段掘りの土坑となっている。特殊ピットと呼ばれているものであろう。

【焼床面】住居跡中央よりやや西側の位置で焼床面を確認した。住居跡の中央を東西に走る溝に、南側部分が切られていた。約3cmの厚みで、比較的固く焼けており、暗赤褐色を呈していた。この箇所が炉

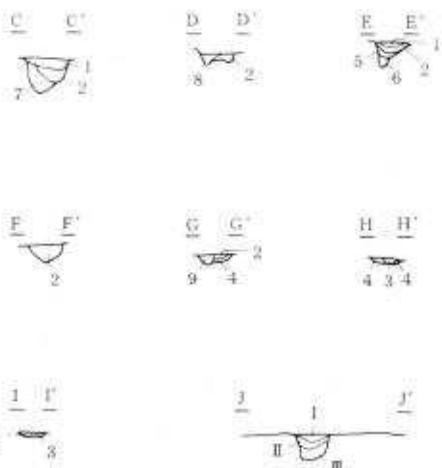
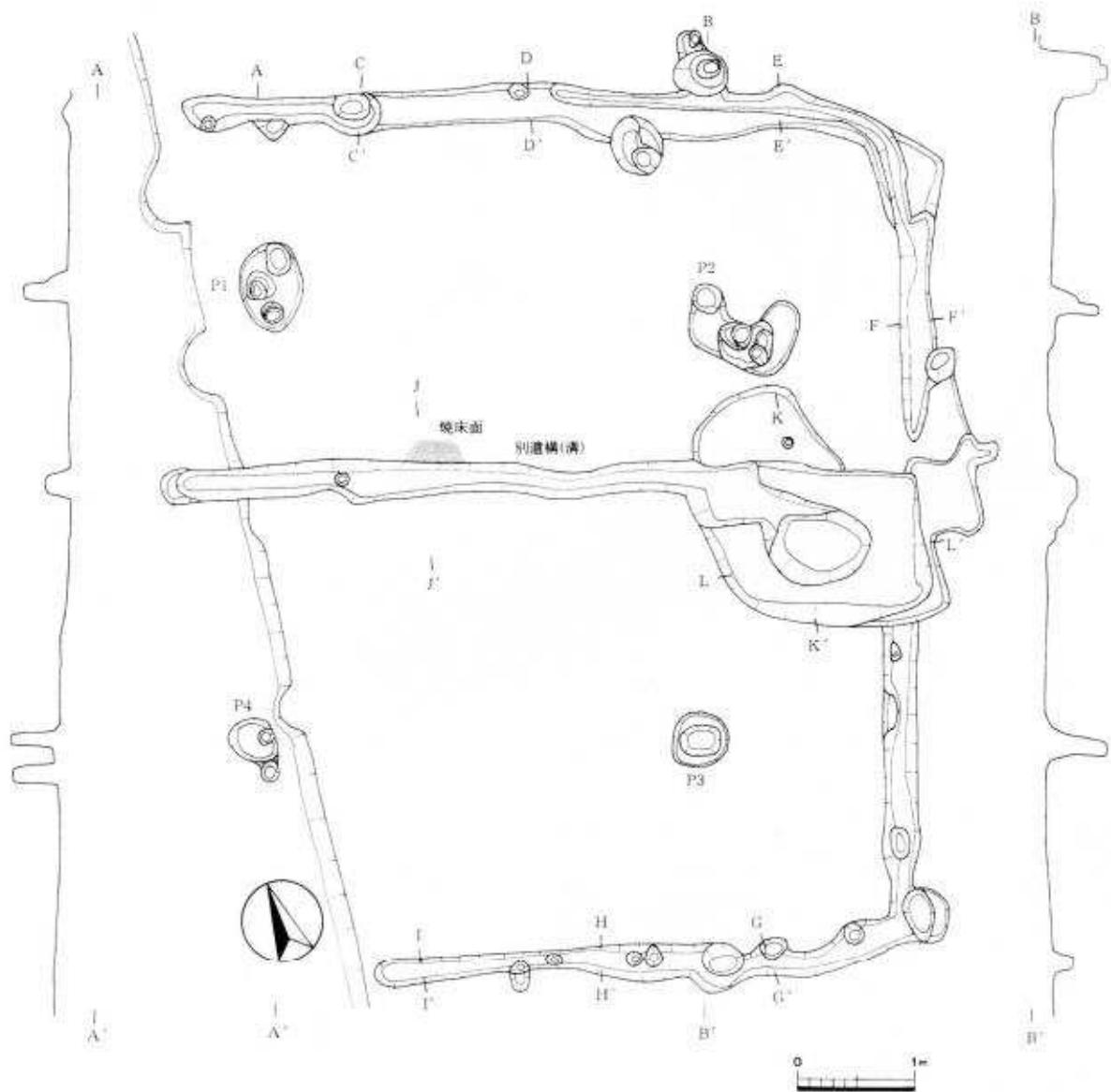


第17図 3号竖穴住居跡 平面図・断面図 ($S = 1/60$) (すべて $H = 4.800m$)

(地床炉) であったと考えられる。

【遺物出土状況】住居跡の東側部分で覆土と思われる土が薄く残存しており、その部分では、土器の細片が全体に散らばるようにして出土していた。残存していた壁溝の部分においても、一部分に固まって遺物が出土する状況は見られず、全体に散らばるようにして、定量出土している状況であった。住居内土坑においては、上層（第19図a・b層）、下層（第19図c・d・f・e層）とも概ね壁に近いところでまとまって遺物が出土している感じであり、比較的多量の遺物が出土した。なお、当住居跡全体としての遺物の量は、パンケースにして約3箱分である。

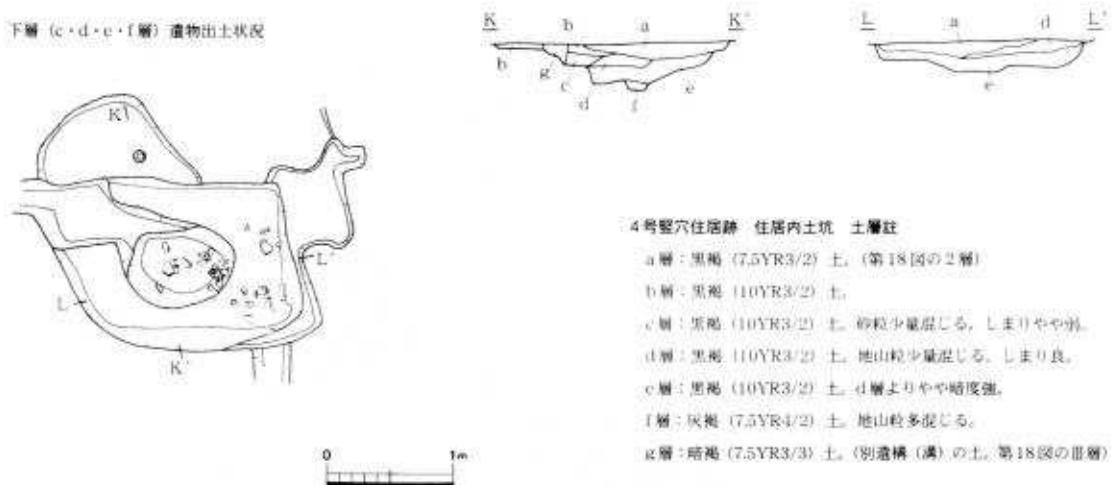
【その他】住居跡内の中央を東西に走る溝がある。これについては、住居の間仕切り用途的な意味合いをもつ溝状施設ではないかとも考えられたが、溝の覆土（第18図Ⅲ層）と住居内土坑を切っている土（第19図g層）とが同じであり、溝が住居内土坑を切っていること、住居の焼床面を溝が切っていることから、この溝は、住居に伴わない別の遺構であると判断した。



4号竖穴住居跡 土層註

- 1層：黒褐 (10YR3/2) 土。砂粒少量混じる。
- 2層：黒褐 (7.5YR3/2) 土。
- 3層：黒褐 (7.5YR3/2) 土。地山粒やや多混じる。
- 4層：黒褐 (7.5YR3/2) 土。地山粒多混じる。
- 5層：灰褐 (7.5YR4/2) 土。1cm 大の地山粒少混じる。
- 6層：黒褐 (7.5YR3/2) 土。
- 7層：黒褐 (10YR3/2) 土。砂粒やや多・カーボン粒少混じる。
- 8層：黒褐 (10YR3/2) 土。砂粒少量混じる。(別遺構 (ピット))
- 9層：灰黄褐 (10YR4/2) 土。砂粒少量混じる。(別遺構 (ピット))
- 1層：黒褐 (7.5YR3/2) 土。しまり強。(別遺構 (溝))
- 2層：10層上に地山粒やや多混じる。(別遺構 (溝))
- 3層：暗褐 (7.5YR3/3) 土。(別遺構 (溝))

第18図 4号竖穴住居跡 平面図・断面図 (S = 1/60) (すべてH = 4.100m)



第19図 4号竪穴住居跡 住居内土坑 遺物出土状況図・断面図 (S = 1/60) (すべてH = 4.100m)

【出土土器】(第20図)

(甕: 21) くの字口縁を持つ甕の口縁部から肩部で、住居内土坑から出土している。胴部最大径の箇所(実測図の下端部分)にススが多量に付着している。

(高壺: 22~25) 22・23は、平坦な壺底部から外上方に屈曲して口縁部に至る壺部で、畿内系高壺と呼ばれるものである。22の内面にはハケ調整痕が残されている。23の壺体部外面はヨコナデされ、壺底部外面は不整方向のナデが施されている。24・25も畿内系高壺と考えられるものであり、24は壺部と脚部との接合部、25は脚柱部である。24の外面はハケ調整されており、壺部内面は、摩滅が著しいのであるが、かすかにハケ調整の痕跡が見られる。25の脚柱部内面はナデツケされ、脚柱部内面にハケ調整の痕跡が見られる。なお、22~24が住居内土坑から、25が壁溝から出土している。

(小型壺: 26~33) 26~33は球形状の体部にくの字口縁がつく小型壺である。31は略完形品に復元され、32・33は、口縁部が欠け、体部のみが完形となって出土した。なお、26は住居床面から、27~30は住居内土坑から、31~33は壁溝から出土している。

(手づくね土器: 34~36) 34は、分厚い平底を持ち、体部が鉢形を呈すると思われるもの、35は平底のもの、36は丸底のものである。34・36の内面は、摩滅が著しく図化できなかったが、一部で指頭痕らしき痕跡が見られる。35は住居跡床面より、34・36は壁溝より出土している。

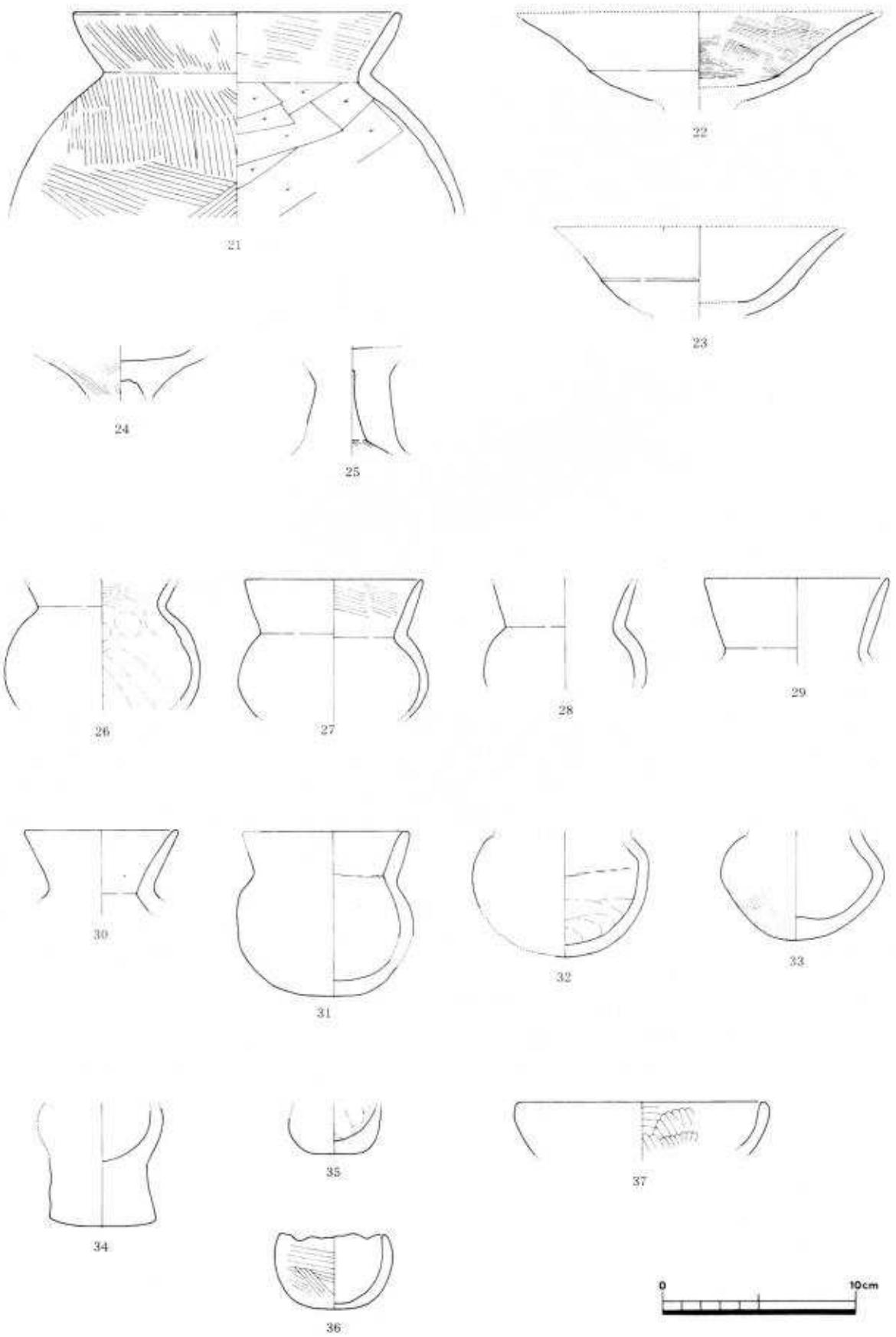
(碗: 37) 37は碗の口縁部である。住居跡床面より出土している。

【遺構の時期】漆町編年12群期に盛行するといわれる小型壺が多く見られる。また、当住居跡出土の畿内系高壺の壺部は浅く、ハケ調整が施されており、漆町編年12群期に位置付けて妥当といえる。くの字口縁をもつ甕についても漆町編年12群期に位置付けて妥当なものといえよう。よって、当住居跡は、漆町編年12群期(古墳時代5世紀前葉~中葉頃)に位置付けられる。

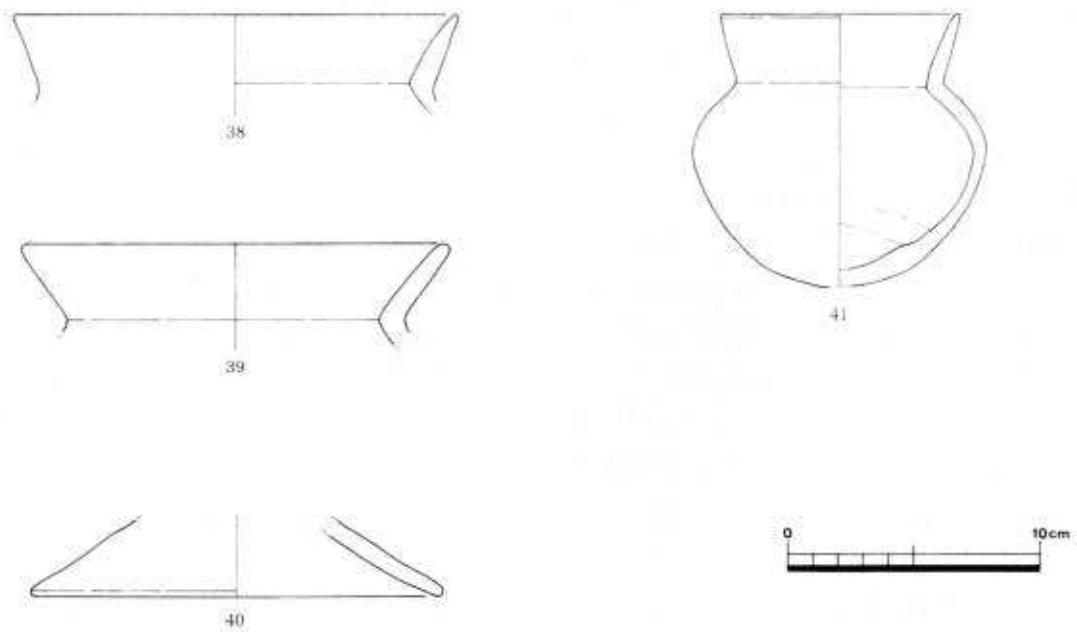
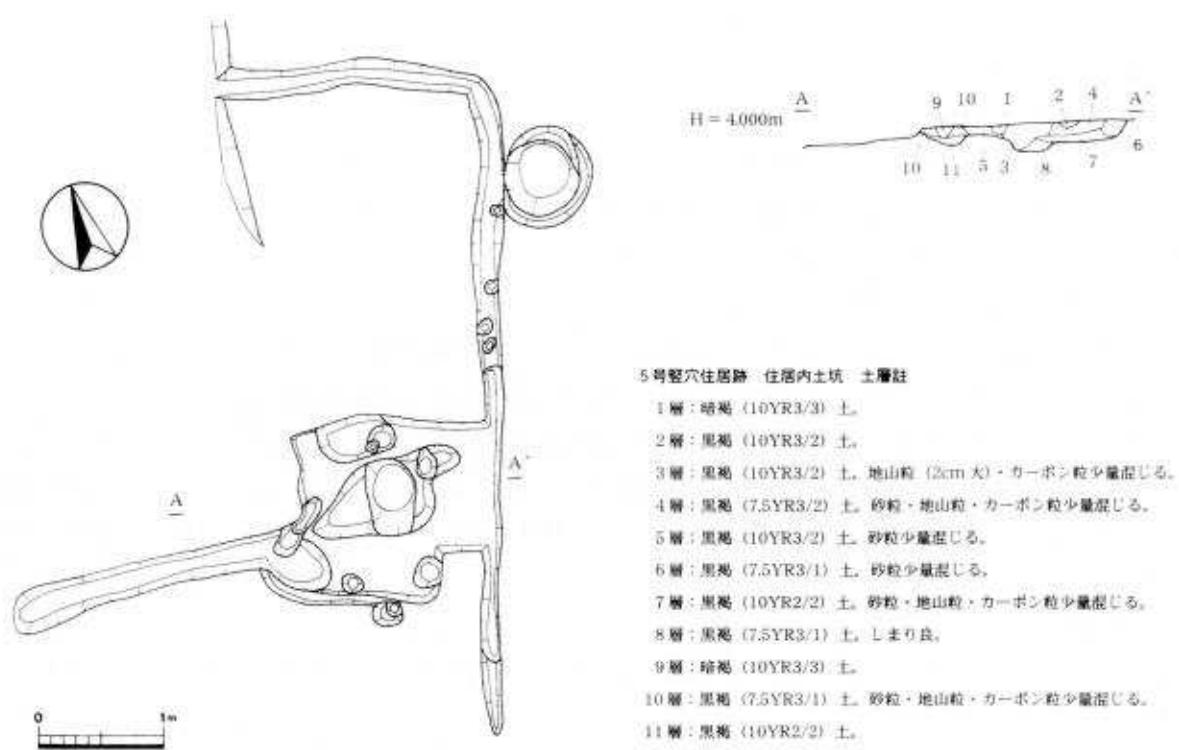
5号竪穴住居跡(第21図)

【位置と方位】16地区西隅の中央よりやや南に寄ったところに位置する。柱穴が確認されず方位は不明であるが、壁溝と同方向に主柱穴が配置されていたと仮定すれば、北から東へ約20°振る。

【規模と形態】当住居跡は、削平を受け、壁溝の一部と住居内土坑のみが確認されたものであり、明確



第20図 4号竪穴住居跡 出土土器 ($S = 1/3$)



第21図 5号整穴住居跡 平面図・断面図 ($S = 1/60$) および出土土器 ($S = 1/3$)

な規模や形態は不明である。恐らく、先述した4号竪穴住居跡と同様なものではないかと推測される。つまり、平面形が方形状の住居跡で、住居跡東隅中央に住居内土坑が存在したものと思われる。なお、住居跡東隅中央に住居内土坑が存在したと仮定すれば、住居跡の南北方向の長さは約640cmであり、4号竪穴住居跡より規模がやや小さくなる。

【柱穴】主柱穴は確認されなかった。

【住居内土坑】当住居跡の東隅に位置。平面形は、長辺約150cm、短辺約100cmの長方形状を呈する。土坑のほぼ中央に落ち込みがあって、二段掘りの土坑である。先述した4号竪穴住居跡の住居内土坑と同じく、特殊ピットと呼ばれているものであろう。なお、この土坑から西側へ溝が伸びているが、土層断面等を確認することなく掘削してしまったため、この溝の性格については不明である。恐らく、4号竪穴住居跡の中央を東西に走る溝と同様、住居跡に付随しない別の遺構ではないかと思われる。

【遺物出土状況】削平を受けているため、床面からの出土遺物はない。住居内土坑では、定量の土器が出土しており、住居内土坑の北側半分の部分に集中して土器が出土している。しかし、ほとんどが細片で、接合・図化が困難なものばかりであった。なお、壁溝からはごく少量の土器の細片が出土する程度であった。

【出土土器】

(甕：38・39) 38・39はくの字口縁をもつ甕の口縁部である。いずれも住居内土坑から出土した。

(脚部：40) 40は高壊ないしは器台の脚部。住居内土坑からの出土である。

(小型壺：41) 41は球形状の体部にくの字口縁の口縁部がつく小型壺である。半完形品に復元される。底部内面には指ナデによる指頭痕が見られる。やや重厚な印象を受ける。住居内土坑からの出土である。

【遺構の時期】住居内土坑から定量の土器が出土しているものの、そのほとんどが接合・図化が困難なものであり、また、住居跡全体での遺物量が少ないため、遺構の時期を明確に決めることはできないが、図化した甕の口縁部と小型壺から判断して、概ね漆町編年12群期（古墳時代5世紀前葉～中葉頃）に位置付けられるのではないかと考えられる。当住居跡の北側に隣接して漆町編年12群期の4号竪穴住居跡が立地しており、方位・形態・規模（5号竪穴住居跡がやや小さいかも知れないが）をほぼ同じくして、2棟の竪穴住居が並んで建っていたのではないかと思われる。

6号竪穴住居跡（第22図・第23図）

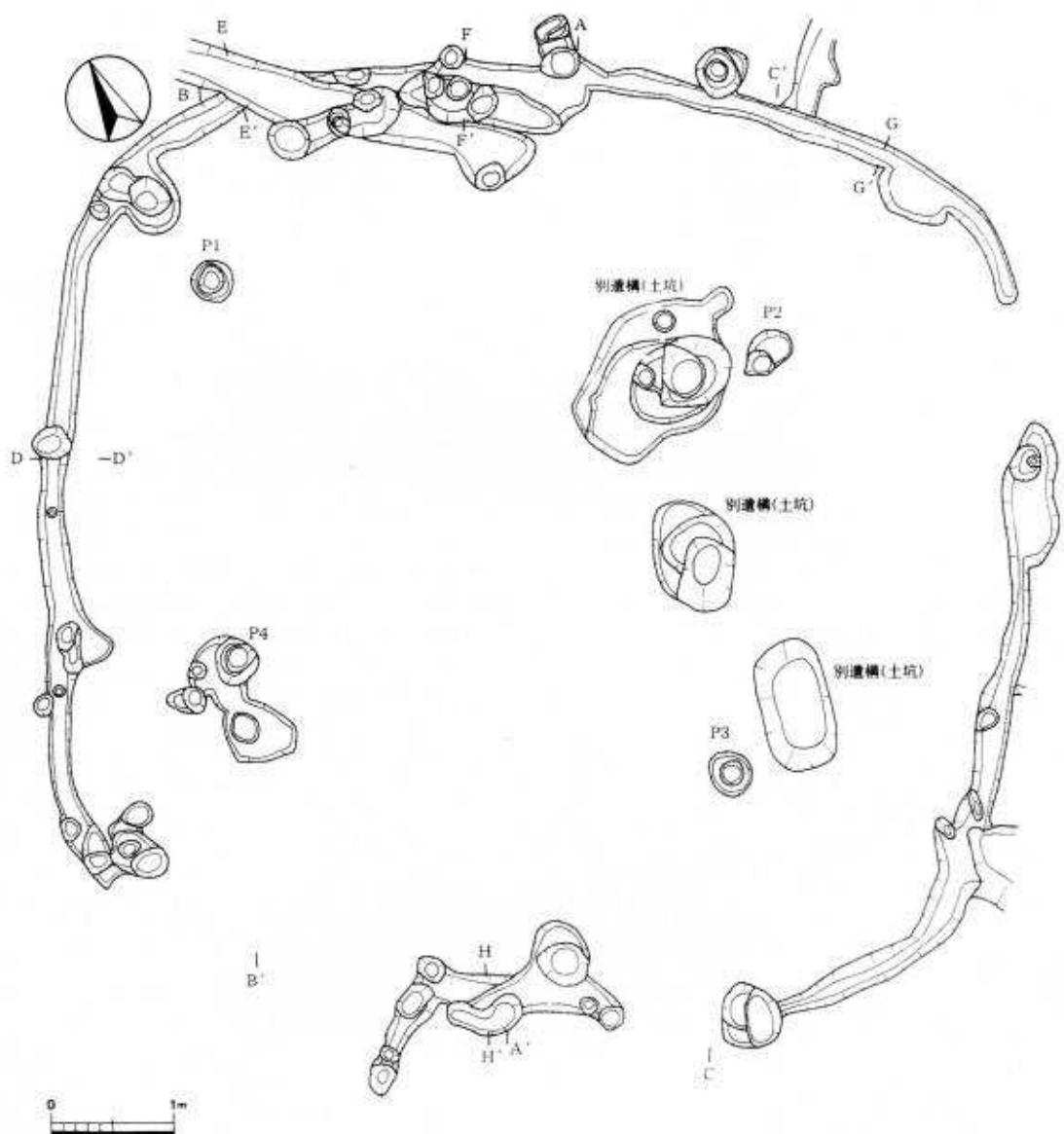
【位置と方位】16地区の中央よりやや西側に位置。主軸は北から東へ約33°振る。

【規模と形態】平面形は約800cm四方の隅丸方形状を呈す。今回の発掘調査で確認された竪穴住居跡のなかで最大の床面積をもつ。住居跡内の北側半分ぐらいの部分でごく薄く覆土が残っていたが、ほとんど削平されてしまっており、壁溝と柱穴のみが残っていた状況であった。

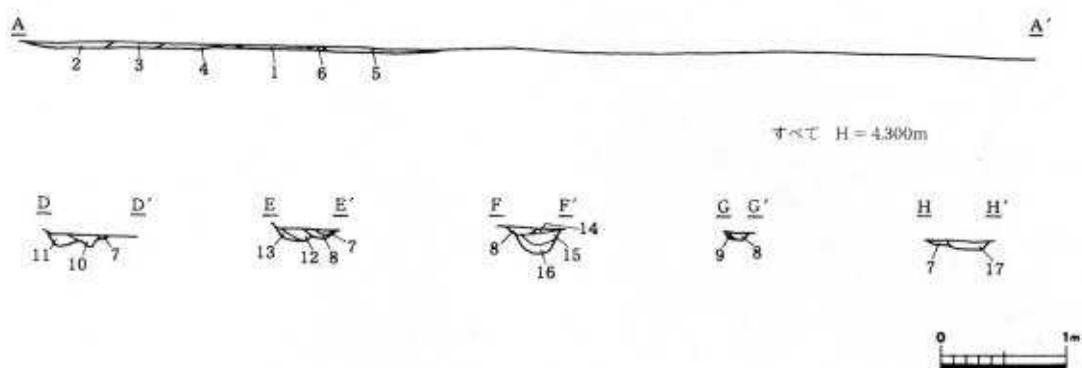
【柱穴】P1～P4の4本主柱である。主柱穴間を線で結ぶと、不整な四角形を描く。

【住居内土坑】第22図にあるとおり、住居跡内に3基の土坑が確認されたが、いずれの土坑も、出土遺物（少量の土器細片）の時期が、住居跡床面および壁溝からの出土遺物の時期と異なるため、この住居跡に伴わない土坑と判断した。よって、当住居跡には住居内土坑は存在しないものと考えられる。なお、これらの住居跡に伴わない土坑の時期は、出土した少量の土器細片から判断して、北側から、法仏式期（弥生時代後期後半）、古墳時代前期、月影II式期（弥生時代末）と考えられる。

【遺物出土状況】住居跡床面からの出土遺物については、住居跡内の北側半分ぐらいの部分にごく薄く

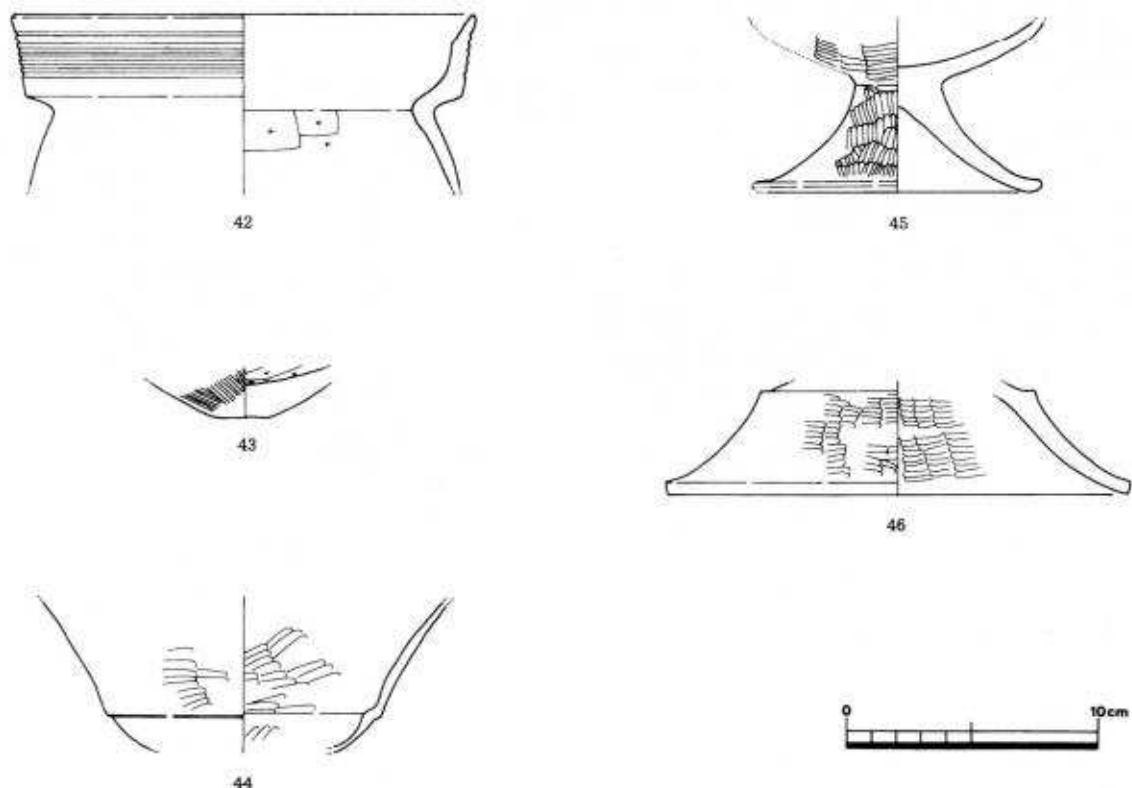


第22図 6号竖穴住居跡 平面図・断面図 ($S = 1/60$) (すべて $H = 4.300\text{m}$)



6号竪穴住居跡 土層註

- | | |
|---|--|
| 1層：黒褐色 (7.5YR3/1) 土。地山粒・カーボン粒少量混じる。 | 11層：黒褐色 (10YR3/2) 土。(別遺構) |
| 2層：黒褐色 (7.5YR3/2) 土。 | 12層：暗褐色 (10YR3/3) 土。(別遺構) |
| 3層：黒褐色 (10YR3/2) 土。 | 13層：黒褐色 (7.5YR3/2) 土。砂粒・カーボン粒少量混じる。(別遺構) |
| 4層：黒褐色 (7.5YR3/2) 土。砂粒・カーボン粒少量混じる。地山粒や多混じる。 | 14層：黒褐色 (7.5YR3/2) 土。カーボン粒多混じる。(別遺構) |
| 5層：黒褐色 (7.5YR3/2) 土。カーボン粒少量混じる。 | 15層：暗褐色 (10YR3/3) 土。砂粒少量混じる。(別遺構) |
| 6層：黒褐色 (7.5YR3/2) 土。地山粒多混じる。 | 16層：黒褐色 (7.5YR3/2) 土。砂粒・カーボン粒少量混じる。(別遺構) |
| 7層：黒褐色 (7.5YR3/2) 土。砂粒少量混じる。 | 17層：黒褐色 (10YR3/2) 土。(別遺構) |
| 8層：黒褐色 (7.5YR3/2) 土。砂粒少量混じる。 | |
| 9層：8層土に地山粒多混じる。 | |
| 10層：黒褐色 (10YR3/1) 土。砂粒少量混じる。(別遺構) | |



第23図 6号竪穴住居跡 土層断面図 (S = 1/60) および出土土器 (S = 1/3)

覆土が残っており、その部分から出土した。その覆土が残っている部分に概ね全体に広がるように遺物が出土しており、ある箇所にまとまって出土するようなことは見られなかった。壁溝においても、同様で、ある箇所でまとまるような出土状況は見られなかった。なお、遺物はほとんどすべてが土器で、削平を受けているため、規模のわりには量が少なく、パンケースにして約1箱分である。

【出土土器】(第23図)

(甕:42・43) 42は有段口縁を持つ甕の口縁部から肩部。口縁端部は先細りし、若干外反しており、口縁帶内面に非常に弱い稜が見られる。43は甕の底部。非常に小さい平底であるが、自立可能なものである。なお、42は住居跡床面出土であるが、壁溝から、接合はできなかつたが、同一個体ではないかと思われる破片が出土している。43は住居跡床面からの出土である。

(高杯:44~46) 44は、杯底部が浅い碗形を呈し、口縁部が大きく外反して開く有段高杯の杯部。45はハの字状に開く脚部に碗状の杯底部がつく高杯の杯底部から脚部。46は有段の脚裾部である。44~46はすべて住居跡床面からの出土である。

【遺構の時期】当住居跡はほとんど削平を受けており、住居跡床面と壁溝から比較的少量の土器しか出土しなかつたが、それらの遺物から判断して、当住居跡は月影I式期(弥生時代末)に位置付けられると考えられる。42の甕の口縁端部が外反しているものの、甕の口縁端部の外反度は小さく、また肩部の張りも小さい。43の甕の底部についても、小さな平底であるが自立可能なものである。よつて、月影式期でも古い時期の月影I式期に位置付けて妥当であると考えられる。

7号竪穴住居跡(第24図~第29図)

【位置】16地区内の東側で、先述した6号竪穴住居跡の東側に位置。

【規模と形態】当住居跡の西側の一部が6号竪穴住居跡に切られているが、平面形は直径約820cmの略円形を呈す。今回の発掘調査で確認された竪穴住居跡のなかでは、先述した6号竪穴住居跡に次ぐ床面積をもつ。当住居跡の確認面から床面までの深さは、最も深いところでも10cm程度しかなく、上部は削平されてしまったものと考えられる。床面は、ほぼ全面が貼り床されているようであり、黒褐(7.5YR3/2)土に地山粒が多く混じった土が、床面から5~10cmの厚さでつき固められたように存在していた。

【柱穴】P1~P7の7本の主柱穴をもつ。第24図に掲げてある7本の柱穴のほかに、当住居跡内には数多くのピットが確認されたが、深さ等から考えて(P2はやや浅いのであるか)、P1からP7の7本を主柱穴として妥当であると考え、7本主柱と判断した。

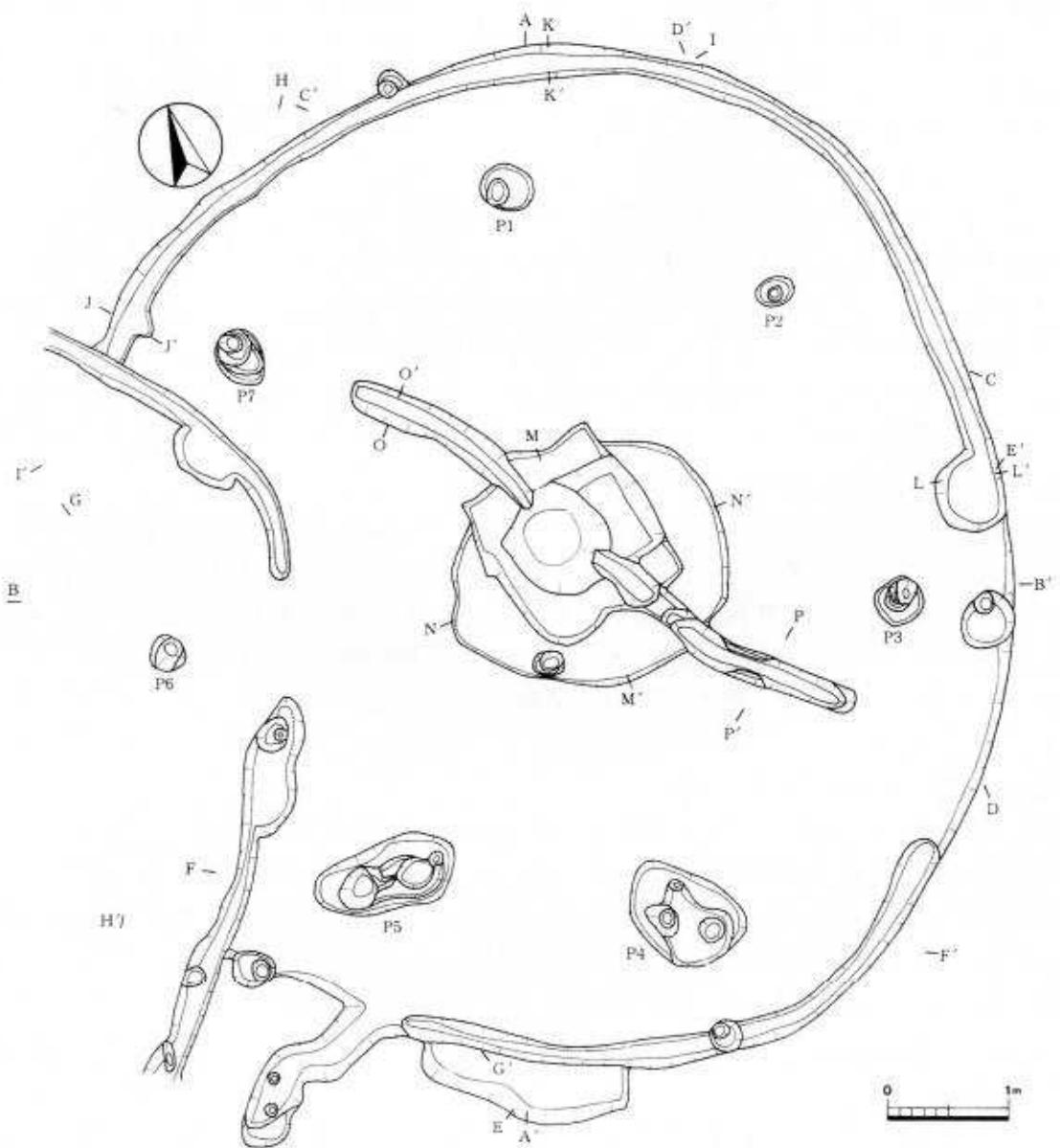
【住居内土坑】住居跡内のほぼ中央に位置。長径約240cm、短径約200cmの楕円形の平面をした浅い落ち込みの北側部分に、約150cm四方の方形状の平面を呈した土坑が位置する。この土坑のほぼ中央に落ち込みがあつて、二段掘りとなり、特殊ピットと呼ばれているものと思われる。

【溝状施設】北から西へ約38°振った方向で、住居内土坑から2本の溝が伸びている。深さは約30cm、幅は25cmほどある。住居の間仕切り用途的な意味合いをもつ溝状施設ではないかと考えられる。

【遺物出土状況】遺物はほとんどが土器である。第26図の床面出土状況図にあるとおり、住居跡床面では、住居内土坑の南西側、P5の北側で、比較的まとまって遺物が出土している。住居内土坑や溝状施設では、上面から定量の遺物が出土したが、覆土中からはごく少量の土器細片が出土する程度であった。なお、当住居跡全体としての遺物量は多く、パンケースにして約4箱分ある。

【出土土器】(第27図~第29図)

(甕:47~62) 47・48は有段口縁を持つ甕の口縁部から体部で、口縁帶に擬凹線が施されてい



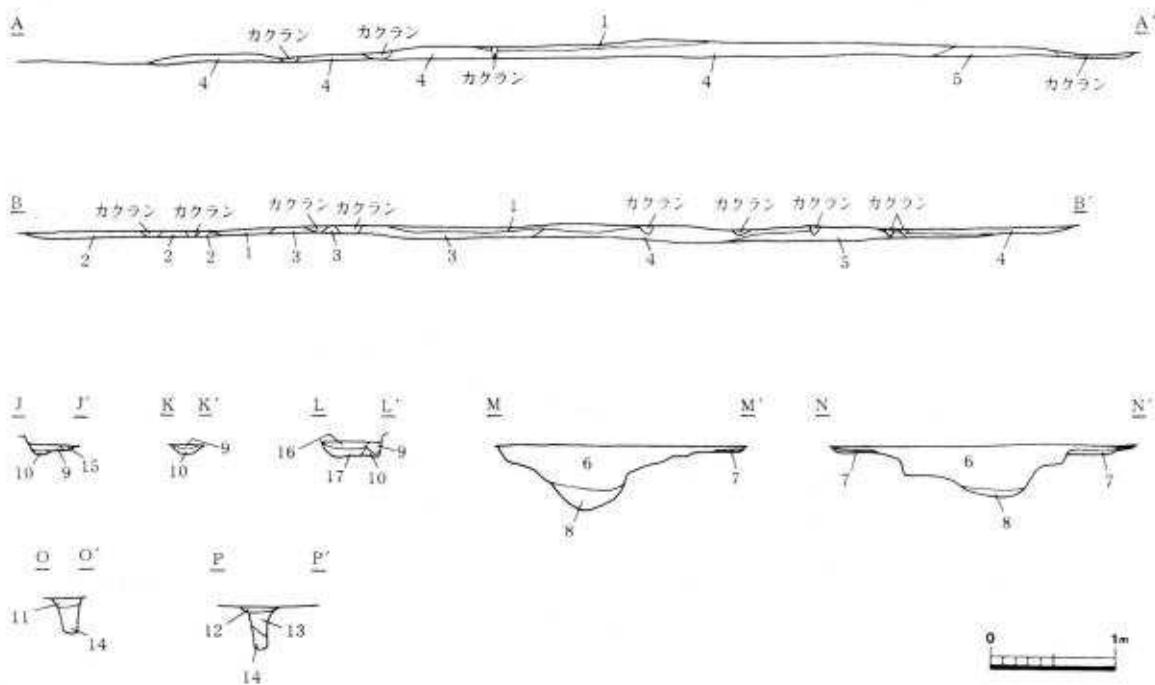
第24図 7号竪穴住居跡 平面図 ($S = 1/60$)

るものである。いずれも肩部にクシ状施文具によるものと思われる斜行刺突文が施されている。4.7は住居跡床面から、4.8は住居内土坑上面から出土した。

4.9～5.1は有段口縁を持つ甕の口縁部で、口縁帯に擬凹線が施されているものである。いずれも口縁端部は丸く作られ、外反はしない。いずれも住居跡床面から出土している。

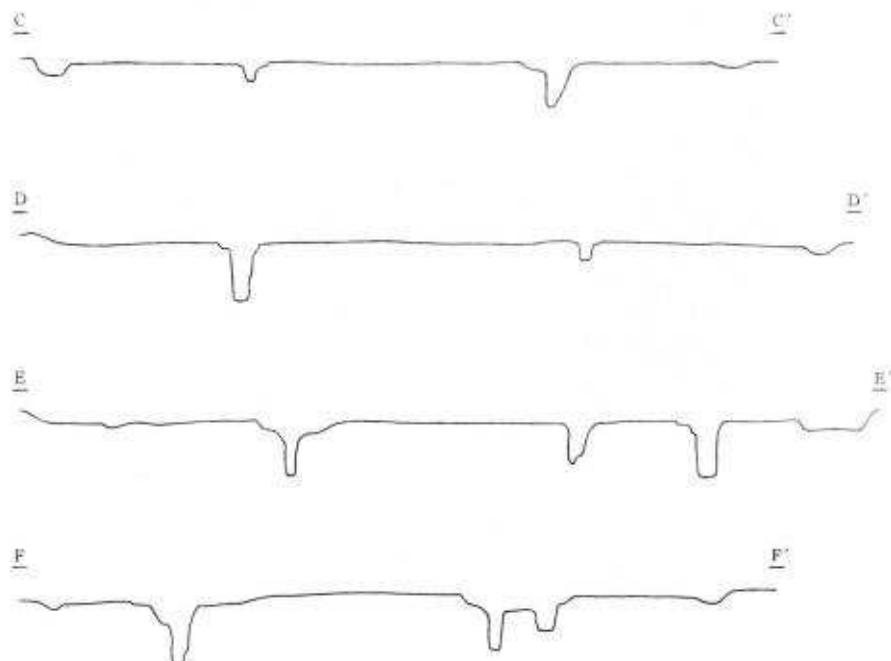
5.2は有段口縁を持つ甕の口縁部で口縁帯に擬凹線が施されているが、口縁帯の下半部のみに擬凹線が施されているものである。口縁端部は丸く作られている。住居跡床面からの出土である。

5.3・5.4は、有段口縁を持つ甕の口縁部であるが、口縁帯に擬凹線が施されていないものである。いずれも口縁端部は丸く作られ、5.4の口縁部の断面については三角形状に近いものとなっている。いずれも住居跡床面からの出土である。

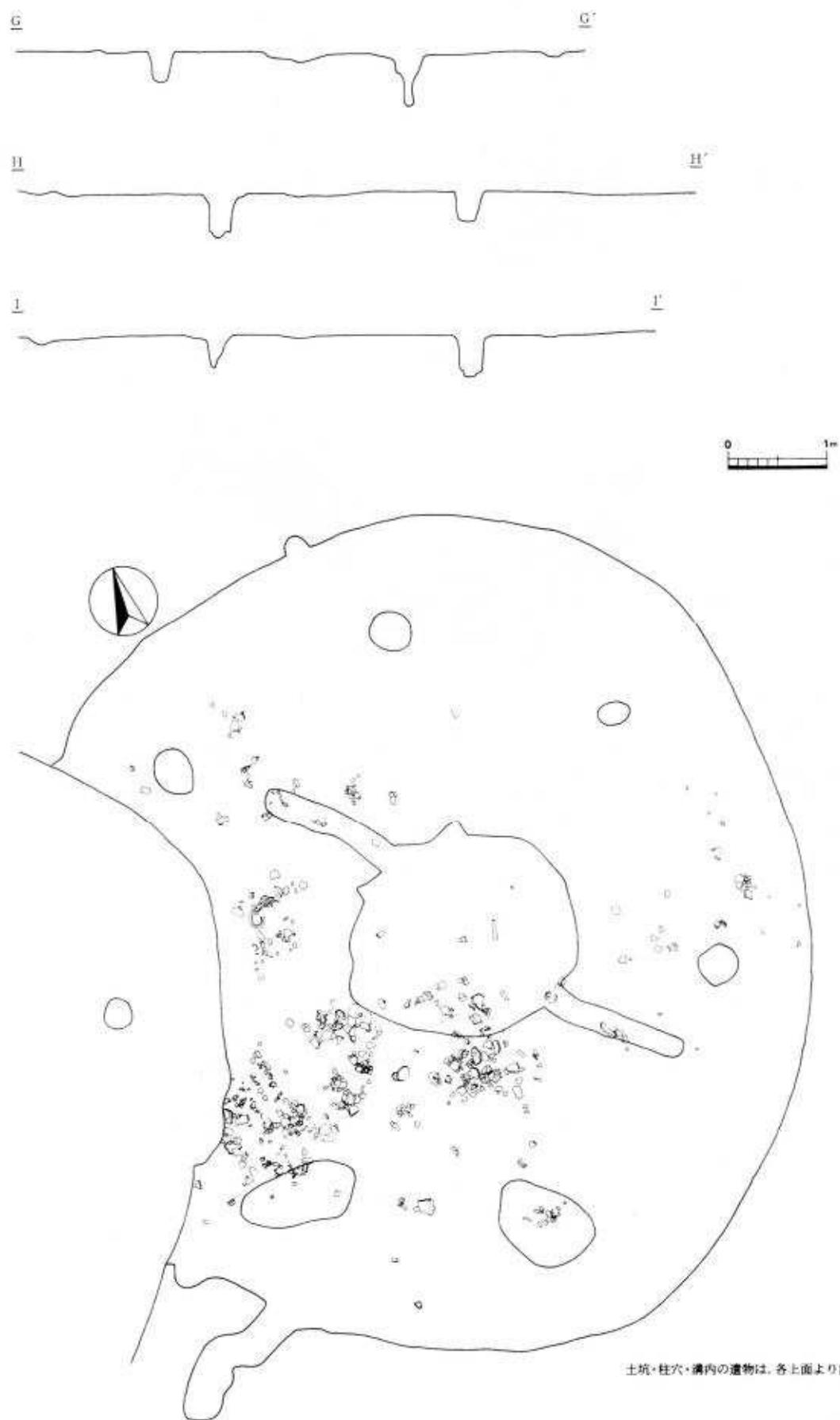


7号竖穴住居跡 土層註

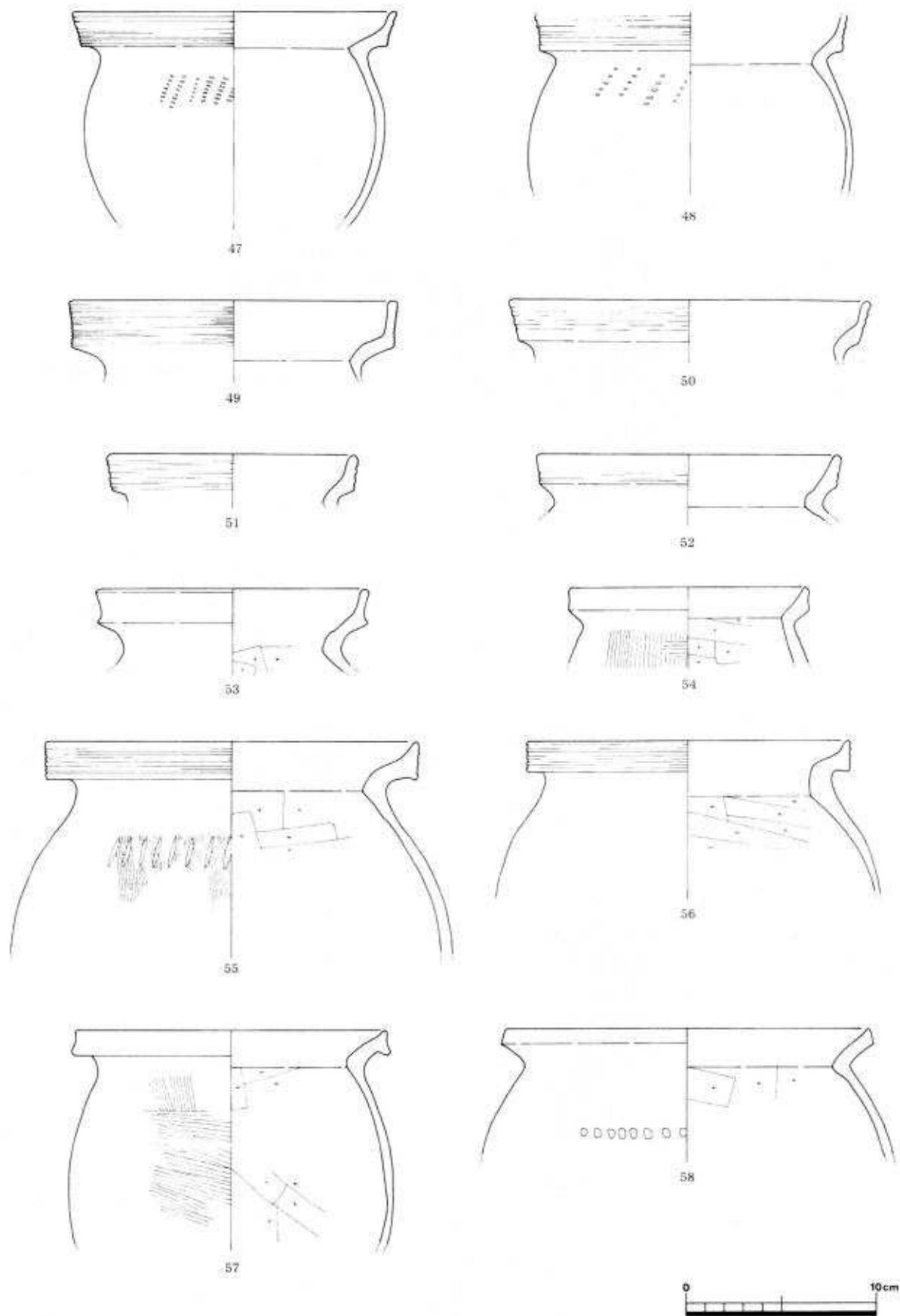
- | | |
|---------------------------------------|---|
| 1層：黒褐 (10YR3/2) 土。砂粒・カーボン粒少量混じる。しまり弱。 | 10層：9層土に地山粒多混じる。 |
| 2層：黒褐 (10YR3/2) 土。砂粒・地山粒少量混じる。 | 11層：黒褐 (7.5YR3/1) 土。砂粒・カーボン粒少量混じる。 |
| 3層：暗褐 (10YR3/3) 土。砂粒・地山粒少量混じる。 | 12層：灰褐 (7.5YR4/2) 土。焼土粒多混じる。 |
| 4層：黒褐 (7.5YR3/2) 土。地山粒・カーボン粒少量混じる。 | 13層：黒褐 (7.5YR3/2) 土。地山粒・カーボン粒・焼土粒少量混じる。 |
| 5層：暗褐 (10YR3/3) 土。砂粒・地山粒・カーボン粒少量混じる。 | 14層：黒褐 (7.5YR3/2) 土。砂粒少量混じる。 |
| 6層：暗褐 (10YR3/3) 土。地山粒少量混じる。 | 15層：暗褐 (10YR3/3) 土。(別遺構(ピット)) |
| 7層：黒褐 (10YR3/2) 土。地山粒や多混じる。 | 16層：黒褐 (10YR3/2) 土。地山粒少量混じる。(別遺構(ピット)) |
| 8層：黒褐 (10YR3/2) 土。地山粒少量混じる。 | 17層：灰褐 (7.5YR4/2) 土。地山粒少量混じる。(別遺構(ピット)) |
| 9層：黒褐 (7.5YR3/2) 土。砂粒・地山粒少量混じる。 | |



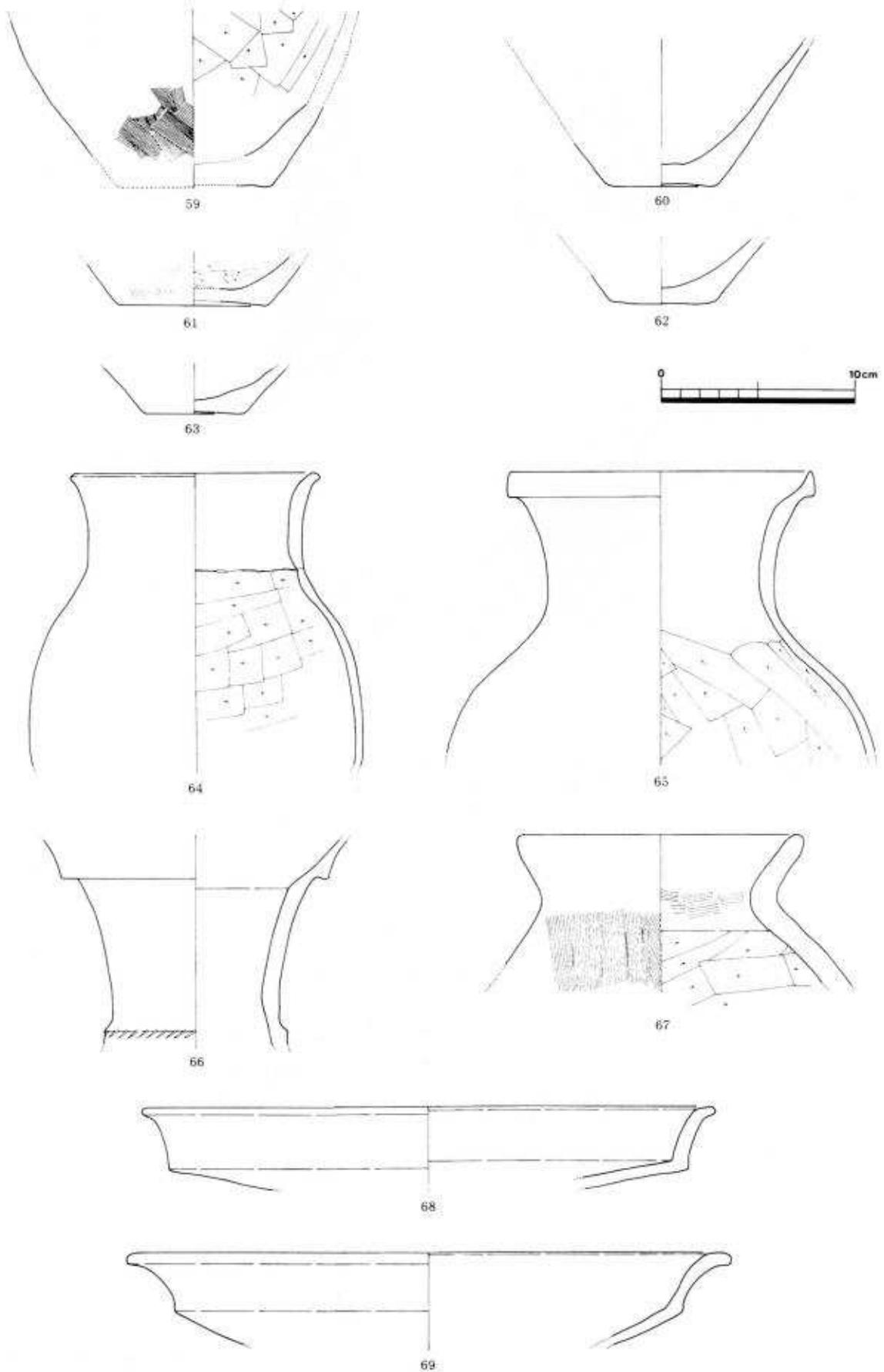
第25図 7号竖穴住居跡 断面図 (S = 1/60) (すべてH = 4.400m)



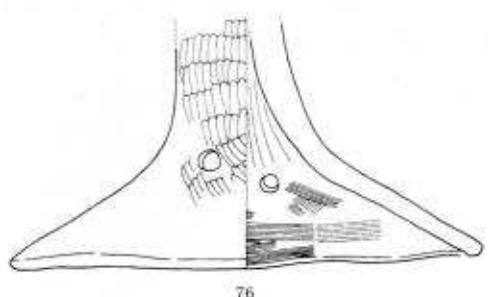
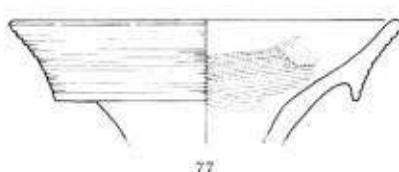
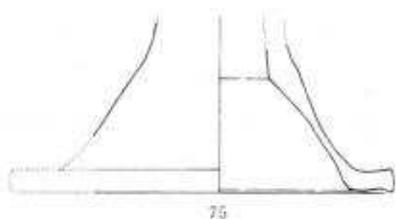
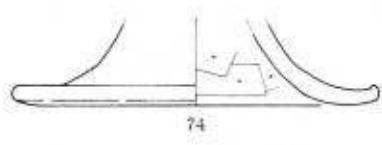
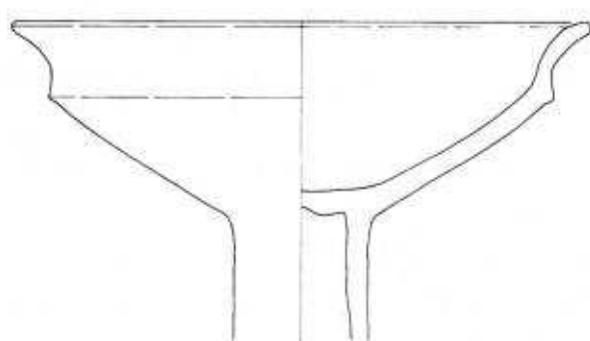
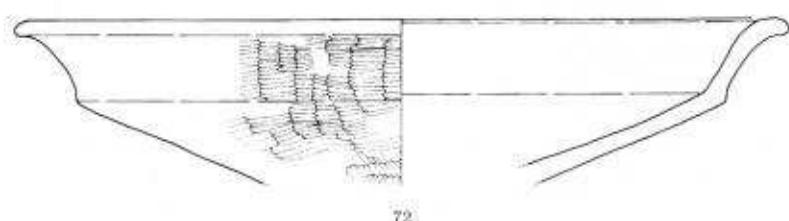
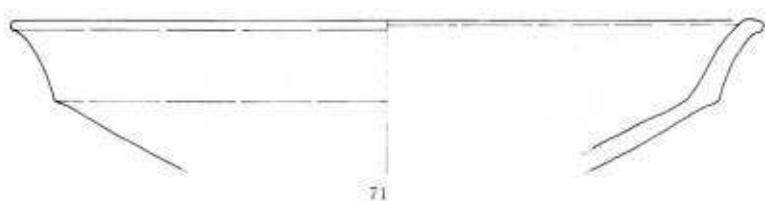
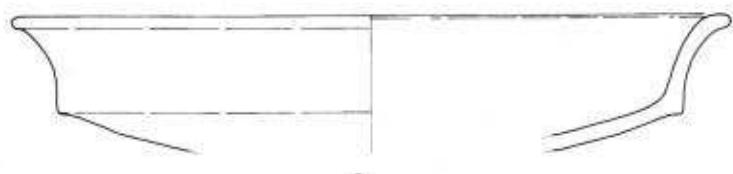
第26図 7号竖穴住居跡 断面図および床面遺物出土状況図 ($S = 1/60$) (すべて $H = 4.400\text{m}$)



第27図 7号竪穴住居跡 出土土器 ($S = 1/3$)



第28図 7号竪穴住居跡 出土土器 ($S = 1/3$)



第29図 7号竪穴住居跡 出土土器 (S = 1/3)

55～57は、有段口縁を持つ甕の口縁部から体部であるが、口縁端部が伸びていなく、口縁部の断面が三角形状を呈しているものである。55・56は口縁帯に擬凹線が施されているが、57は擬凹線が施されていない、口縁帯外面はヨコナデされている。55の肩部外面にはハケ状具による連続斜行文が施されている。また、55・56の口縁部から頸部の外面にはススが多量に付着している。55は住居内土坑上面より、56は住居跡床面より、57はP4上面より出土している。

58は、くの字口縁を持つ甕で、口縁端部がヨコナデされて面をもち、口縁端部内面が若干肥厚しているものである。肩部外面に棒状具で浅く刺突されたと思われる連続刺突文が施されている。また、肩部外面には多量のススが付着している。住居跡床面からの出土である。

59～63は甕の底部である。いずれもしっかりとした平底をもつ。すべて住居跡床面から出土した。
(壺：64～67) 64～66は短頸長胴壺で、64は有段口縁を持たないもの、65は有段口縁をもち、口縁端部が伸びず、口縁部の断面が三角形状を呈すもの、66は有段口縁を持ち、口縁端部が伸びているものである。66は、口頸部の下部外面に段をもち、その段のところに連続斜行刻みが入れられている。いずれも住居跡床面からの出土である。

67は、くの字口縁をもつ壺の口縁部。器壁の厚さが約1cmと厚く、非常に重厚感がある。甕として分類すべきではないかとも考えたが、器壁が非常に厚く、煮炊き用という甕の機能を果たさないのではないかという考え方から、壺として分類した。住居跡床面からの出土である。

(高坏：68～76) 68～72は、脚柱部から斜上方に坏底部が伸び、その坏底部から屈曲して口縁部がやや外傾・外反しながら立ち上がる有段の高坏坏部で、73は、その坏部に棒状の脚柱部が付いたものである。いずれも口縁端部内面は、わずかながら肥厚しており、その肥厚する部分に薄い稜線が見られる。すべて住居跡床面から出土した。

74～76は高坏の脚部である。74はハの字状に開く脚裾部に、跳ね上がったような形の脚端部が付くもの、75はハの字状に開く脚裾部に、帶状の脚端部が付いたもの、76は棒状の脚柱部からなだらかにハの字状に開く脚裾部が付いたものである。76については、脚端部が丸く作られているが、端部内面が若干肥厚しており、脚柱部から脚裾部に至る部分には円形の穿孔が4箇所ある。また、脚柱部内面にはシボリの痕跡と思われるものが見られる。いずれも住居跡床面出土である。

(器台：77～79) 77～79は有段口縁をもつ器台の口縁部。いずれも口縁帯に擬凹線が施されている。78の内外面には赤彩された痕跡が見られる。いずれも住居跡床面からの出土である。

【遺構の時期】当住居跡の時期については、住居跡床面からの出土土器から判断して、法仏式期（弥生時代後期後半）に位置付けられると思われるが、くの字口縁で口縁端部に面をもつ甕58が存在していることや、高坏の口縁端部がほとんど肥厚していないことといった、法仏式期の土器よりも古い様相が一部で見られる。よって、当住居跡は、法仏式期のなかでも古い時期に位置付けられるのではないかと考えられる。なお、当住居跡の床面から第86図441の土製品が出土している。

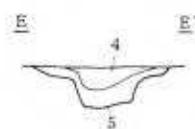
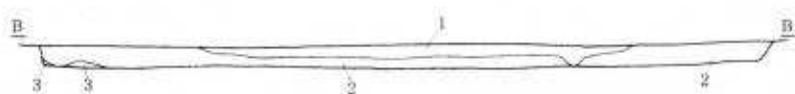
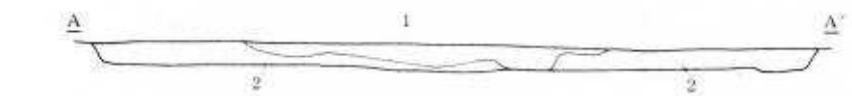
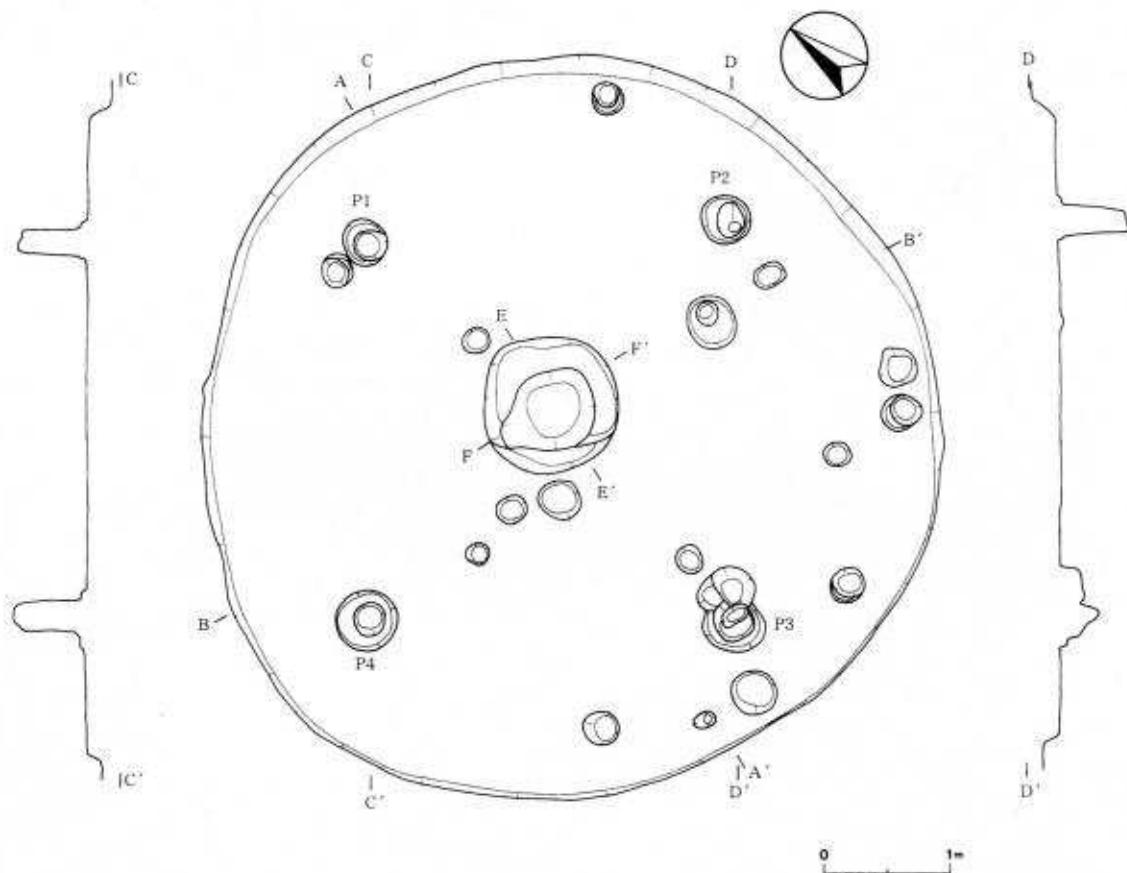
8号竪穴住居跡（第30図～第33図）

【位置と方位】2地区の中央に位置。主軸は北から西へ約38°振る。

【規模と形態】平面形は直径約540cmの略円形を呈する。確認面から床面までの深さが18cmほどあり、今回の発掘調査で確認された竪穴住居跡のなかでは最も残りの良いものであった。床面は全面地山であり、全面が比較的堅い印象を受けた。

【柱穴】P1～P4の四本主柱である。

【住居内土坑】住居跡のほぼ中央に位置。平面形は直径約110cmの略円形を呈し、二段掘り状となつ



8号竪穴住居跡 土層柱

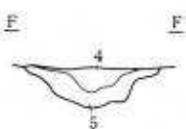
1層：黒褐色 (7.5YR3/2) 土。しまり弱。カーボン粒やや多混じる。

2層：黒褐色 (7.5YR3/2) 土。1層土よりやや明度あり。

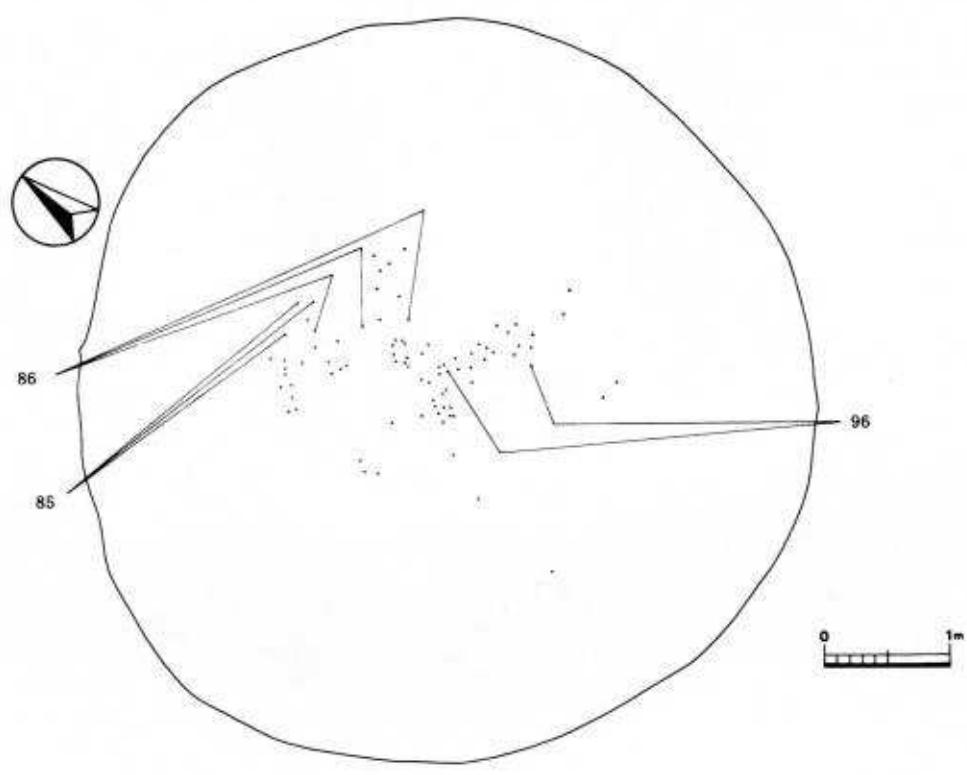
3層：地山土に2層土少量混じる。

4層：黒褐色 (7.5YR3/2) 土。2層土と同色。カーボン粒多混じる。

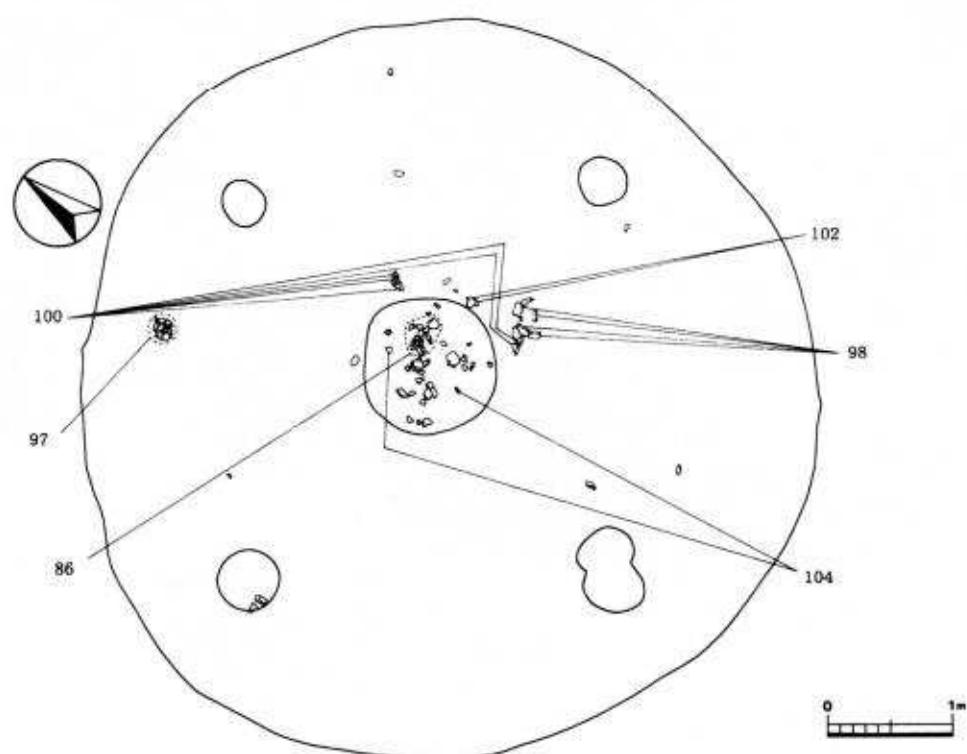
5層：暗褐色 (7.5YR3/3) 土。カーボン粒やや多混じる。



第30図 8号竪穴住居跡 平面図・断面図 (S = 1/60) (すべてH = 4.300m)



上層部(床面以外) 遺物出土ドットマップ



床面遺物出土状況図(土坑・ピット内の遺物は各上面より出土)

第31図 8号竖穴住居跡 上層部遺物出土ドットマップ・床面遺物出土状況図 (S = 1/60)

ている。土坑の上層部の土にカーボン粒が多く含まれていたが、炭層や焼土塊などは確認されず、炉穴とは断定できない。

【遺物出土状況】第31図に掲げてあるとおり、上層部（床面以外）出土の遺物についても、床面（住居内土坑・柱穴の上面を含む）出土の遺物についても、住居跡の中央部に集中していた。住居内土坑においては、土器破片と石が少量出土している程度であった。なお、住居跡全体としての遺物量についてはパンケースにして約2箱分である。

【上層部（床面以外）出土土器】（第32図）

（甕：80～88）80～82は、有段口縁を持ち、口縁帶外面に擬凹線が施されている甕の口縁部である。80・81は口縁部が82に比較して伸びているもの、82は口縁部が伸びず、口縁部の断面が三角形状を呈するものである。80の頸部外面の下に小さな稜が見られるが、これは頸部外面の強いヨコナデによってできたものと思われる。81の口縁帶下端にはススが少量付着している。

83～86は、有段口縁を持ち、口縁帶外面に擬凹線が施されていない甕の口縁部である。83は口縁帶が大きく外傾しているもの、84は口縁帶がやや外傾しているもの、85は口縁帶がほぼ直立しているもの、86は口縁部内面にほとんど段を持たず、口縁帶下端外面が大きく肥厚して有段口縁となっているものである。

87・88は、甕の底部。いずれもしっかりとした平底を持っている。

（壺：89・90）89は短頸壺の口頸部。口縁端部外面に凹線が1条入っている。90も短頸壺の口頸部。口縁端部が断面三角形状となって面をもち、その面に擬凹線が施されている。

（高坏：91～95）91は、脚柱部から斜上方に坏底部が伸び、その坏底部から外傾・外反しながら口縁部が伸びる有段高坏の坏部である。

92は、坏部と脚柱部との接合部で、円盤充填法を用いたものである。

93は高坏の脚柱部。脚柱部内面には、シボリの痕跡が見られる。脚柱部から脚裾部に至る箇所に4つの円形の穿孔が等間隔にあるが、一方の向かい合う2つの穴は貫通しているが、もう一方の向かい合う2つの穴は、貫通せずに器壁の半分くらいまでの凹みとなっている。

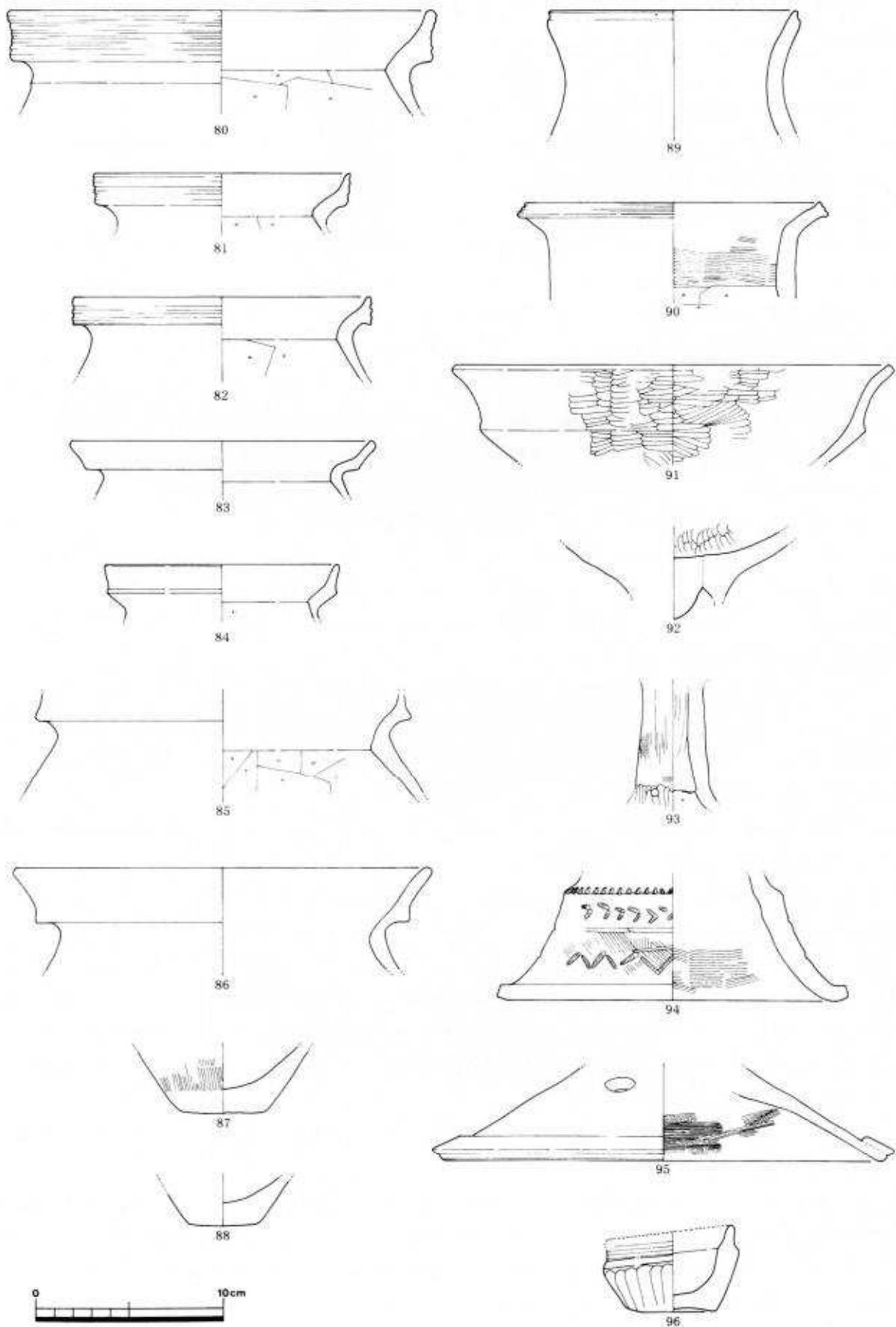
94は有段の高坏脚部。外面について見ると、段の部分に棒状具によると思われる連続した刻みが入れられ、その段より上はヨコナデされている。段より下の部分については、その中位よりやや上の箇所に横方向の凹線が1条あり、凹線より上の部分がヨコナデされ、そのヨコナデされたところにVの字を横にしたような文様が4条のハケ状具によって連続して施されている。凹線より下は、ハケ調整され、そのハケ調整されたところへVの字の文様が8条のハケ状具によって連続して施されている。なお、凹線より下のハケ調整で使ったハケ状具と、Vの字の施文で用いたハケ状具は同じものようである。脚端部は面を持ち、ヨコナデされている。内面は、段より下の部分の中位より下がハケ調整され、そのハケ調整の箇所より上の部分と脚端部がヨコナデされており、ハケ調整が行われた後、ヨコナデを施したこと認められる。

95はハの字状に大きく開く脚裾部で、脚端部外面に帯状の粘土紐が付けられている。また、数は不明であるが、円形の穿孔がある。

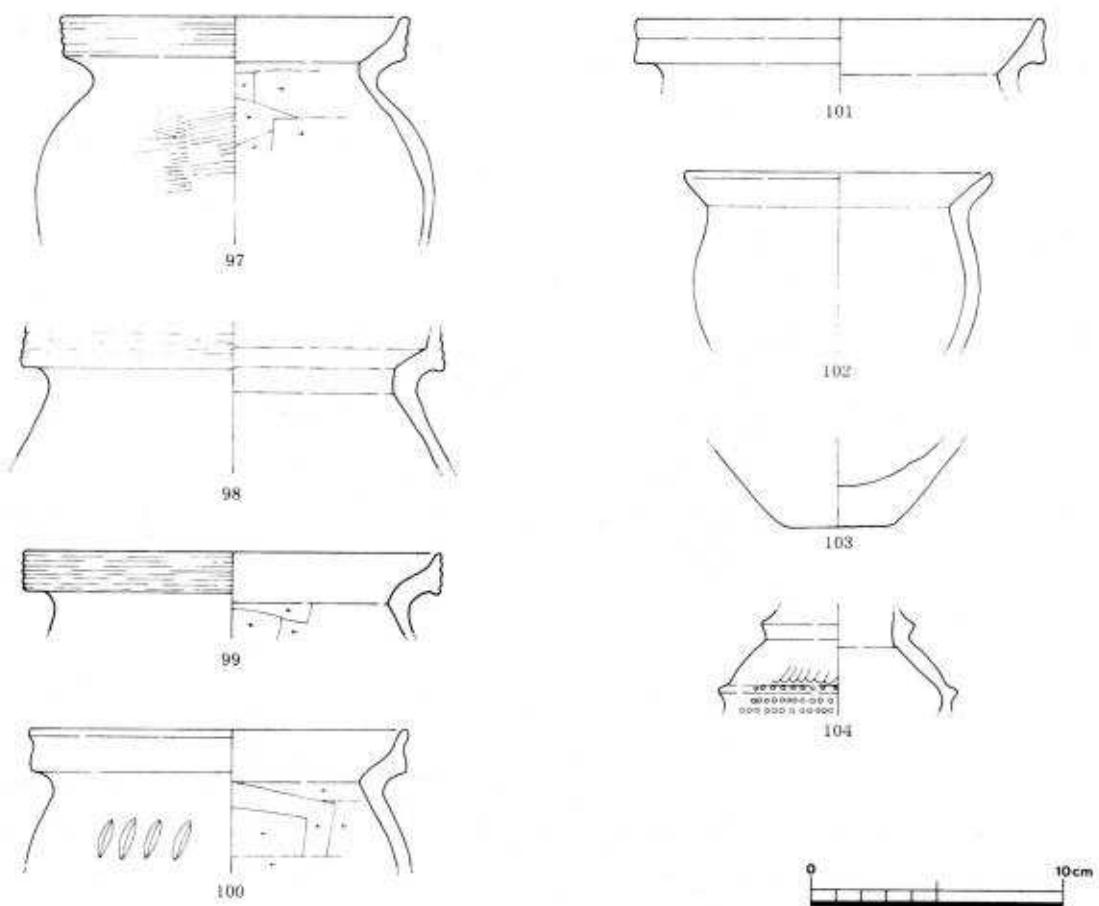
（小型土器：96）96は平底を持ち、いわば鉢形の形をした小型土器である。口縁部は、内外面が窪んで先細りするようになっており、外面には擬凹線が施されている。体部外面は摩滅が著しいが、縦方向の強いヘラミガキの痕跡が見られる。また、外底面は不整方向のヘラナデが施されている。

【床面および住居内土坑上面出土土器】（第33図）

（甕：97～103）97～99は、有段口縁を持ち、口縁帶外面に擬凹線が施されている甕の口縁部



第32図 8号竪穴住居跡 上層部(床面以外)出土土器 (S = 1/3)



第33図 8号整穴住居跡 床面出土土器（住居内土坑上面含む）(S=1/3)

である。97・98は通常の有段口縁であるが、99は、口縁端部が伸びず、口縁部の断面が三角形状を呈する。97は口縁帯外面と肩部外面に、98は口縁帯基部外面と肩部外面にススが多く付着している。いずれも住居跡床面からの出土である。

100・101は、有段口縁を持ち、口縁帯外面に擬凹線が施されていない甕の口縁部。いずれも口縁端部はあまり伸びず、101は口縁部の断面が三角形状を呈す。100については、肩部外面にハケ状具によって施文されたと思われる連続斜行文が施され、口縁帯外面にはススが多量に付着している。また、101の口縁部内外面には赤彩された痕跡が見られる。100は住居跡床面から、101は住居内土坑上面からの出土である。

102は、くの字口縁を持つ甕の口縁部から肩部で、口縁端部外面がヨコナデされて面を持ち、口縁端部内面が若干肥厚している。住居跡床面からの出土で、住居内土坑の覆土内から出土した破片と接合関係を持つ。

103は甕の底部。住居内土坑上面からの出土である。

(小型土器：104) 104は、いわば壺形を呈した小型土器である。外面について見ると、図化部分の下のところには、細い管状の棒の先によって刺突された円形の文様が連続して施されており、その円形刺突文が施されている部分の段と、図化部分の上のところにある段との間は、ヘラミガキされている。図化部分の上のところにある段より上は、摩滅により調整不明である。内面はすべてヨコナデされてい

る。住居内土坑上面より出土した。

【遺構の時期】当住居跡の時期を決定付ける出土土器は、住居跡床面出土の97～100と102の甕である。97～100の有段口縁甕の口縁端部はあまり伸びず、丸く作られており、法仏式期（弥生時代後期後半）に位置付けられるものと思われる。しかし、くの字口縁の甕で口縁端部にヨコナデによる面を持ち、法仏式期より古い様相の甕102がある。よって、当住居跡は、法仏式期のなかでも古い時期に位置付けられるのではないかと思われる。

9号竪穴住居跡（第34図～第36図）

【位置と方位】20A地区の中央よりやや西側に位置。主軸はほぼ北を向く。

【規模と形態】住居跡西側の壁が破壊されているが、平面形は、直径約500～560cmの略円形を呈す。確認面から床面までの深さは5cm程度しかなく、上部はほとんど削平されて、床面がかろうじて残存していたような状況であった。床面は、第33図の平面図に掲載してあるように、破線で囲まれた部分が貼り床されており、地山土（明褐（7.5YR 5/6 粘質土）に黒褐（7.5YR 3/2）土がやや多く混じった土が、しまり良く、5cmほどの厚さで存在していた。

【柱穴】P1～P4の4本主柱である。

【住居内土坑】住居跡内で2基の土坑を確認した。1つは、住居跡内の中央に位置し、平面形は直径約80cmの円形を呈す。もう1つは、住居跡内のやや南側に位置する。平面形は、長径約150cm、短径約100cmの橢円形状を呈し、土坑内の東側で落ち込むものであった。後述するが、住居跡内中央の土坑については、この住居跡に伴わない可能性が考えられる。

【焼床面】住居跡内中央の土坑の東側で焼床面を確認した。確認面から約3cmの厚さで赤褐色に焼けていた。この箇所が炉（地床炉）であったと考えられる。

【溝状施設】住居跡南側壁で、住居跡の外に伸びていく溝を確認した。この住居跡が立地しているところは、非常に緩やかではあるが、北から南に向かって傾斜しているところであり、この住居跡の外に伸びていく南側壁の溝は、排水用の溝ではないかと思われる。

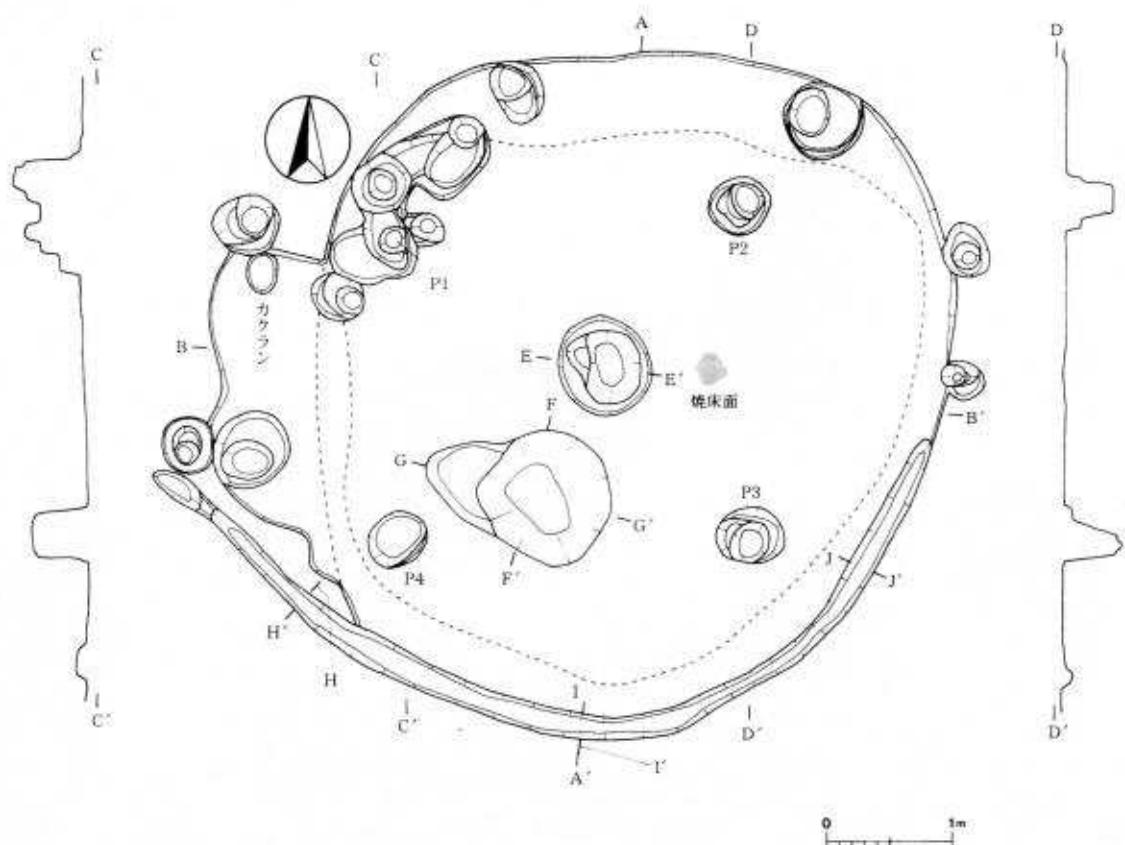
【遺物出土状況】第35図に当住居跡の遺物出土状況に関する図を掲載してあるが、住居跡床面からの遺物は少なく、まばらに散布しているような状況であった。溝状施設においても、出土遺物は少なく、ほとんどが土器の細片であった。住居内土坑について見ると、中央の土坑では、やや大きめではあるが、土器の破片が3点出土した程度であった。南側の土坑では、土坑内東側の落ち込みで定量の遺物が出土した。ほとんどが土器であるが、土器とともに比較的大きな自然石が4点（長さ15～18cm、幅8～10cm、厚さ2～4cmのもの。うち1点は半分に割られ、その半分が出土）出土し、そのうちの1点については、一部分で使用痕跡が見られる。

【出土土器】（第36図）

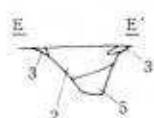
（甕：105～108）105は、有段口縁を持ち、口縁帶に擬凹線が施された甕の口縁部。口縁帶は比較的長く伸びて外傾し、口縁端部は丸く作られているが、若干外反している。口縁部から頸部上半の外面にススが多量に付着している。住居跡床面より出土した。

106は、有段口縁を持ち、口縁帶に擬凹線が施されていない甕の口縁部。口縁帶はあまり伸びず直立し、口縁部の断面が三角形に近い形になっている。住居跡内中央の土坑より出土した。

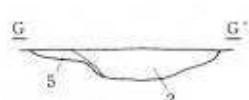
107・108は甕の底部。107は比較的小さい平底であるが、自立可能な大きさである。107は住居跡床面、108は溝状施設上面より出土した。なお、107は住居跡内の南西側で破片となって出土したのであるが、それらの破片とともに、105の甕の口縁部片が出土した（第35図の住居跡床



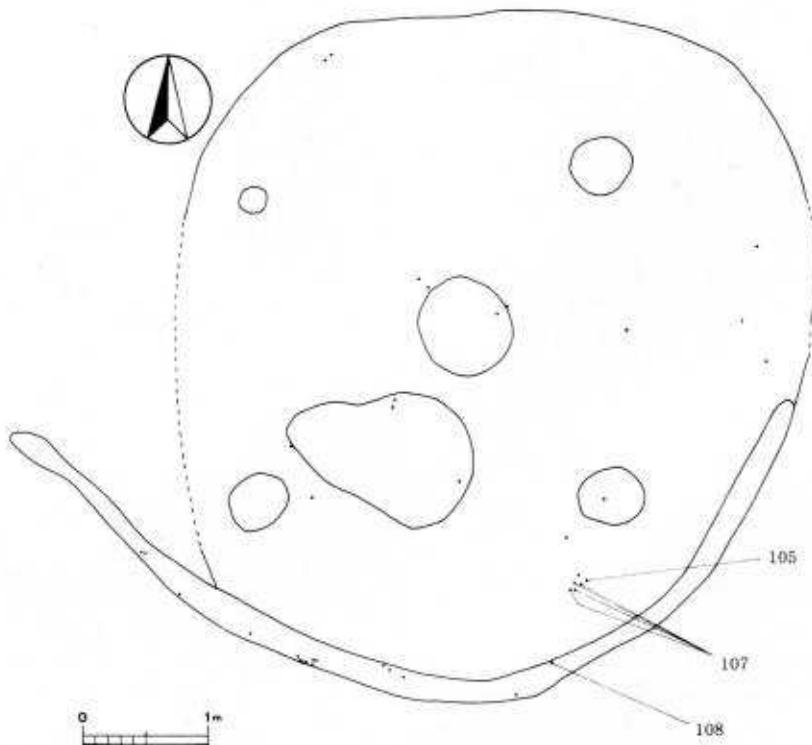
住居跡内の破線に囲まれた部分は貼り床部分



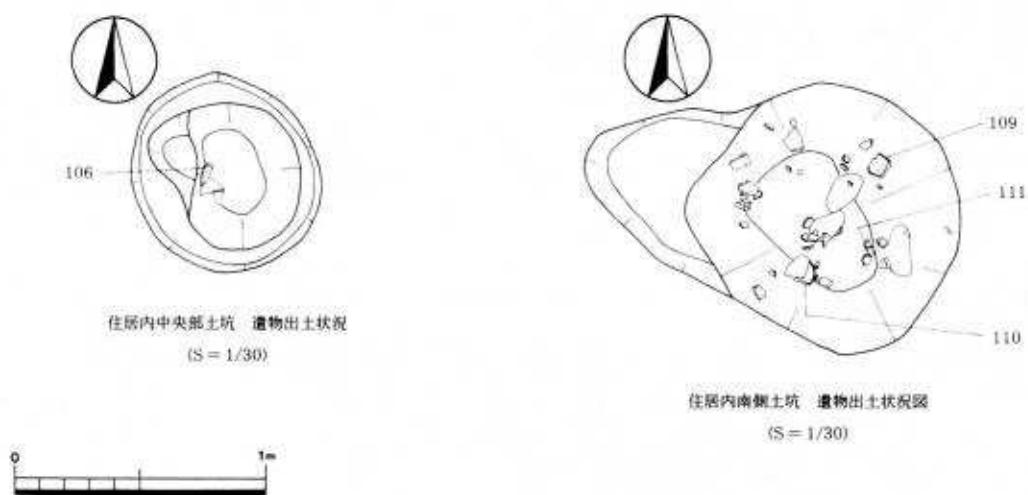
9号竪穴住居跡 土層説
1層：黒褐色 (7.5YR3/2) 土。2層土よりやや明度あり。
2層：黒褐色 (7.5YR3/2) 土。カーボン粒やや多混じる。
3層：2層土に地山粒やや多混じる。カーボン粒やや多混じる。
4層：地山土に2層土やや混じる。カーボン粒少混じる。
5層：地山土に2層土少混じる。カーボン粒少混じる。



第34図 9号竪穴住居跡 平面図・断面図 (S = 1/60) (すべてH = 3.900m)



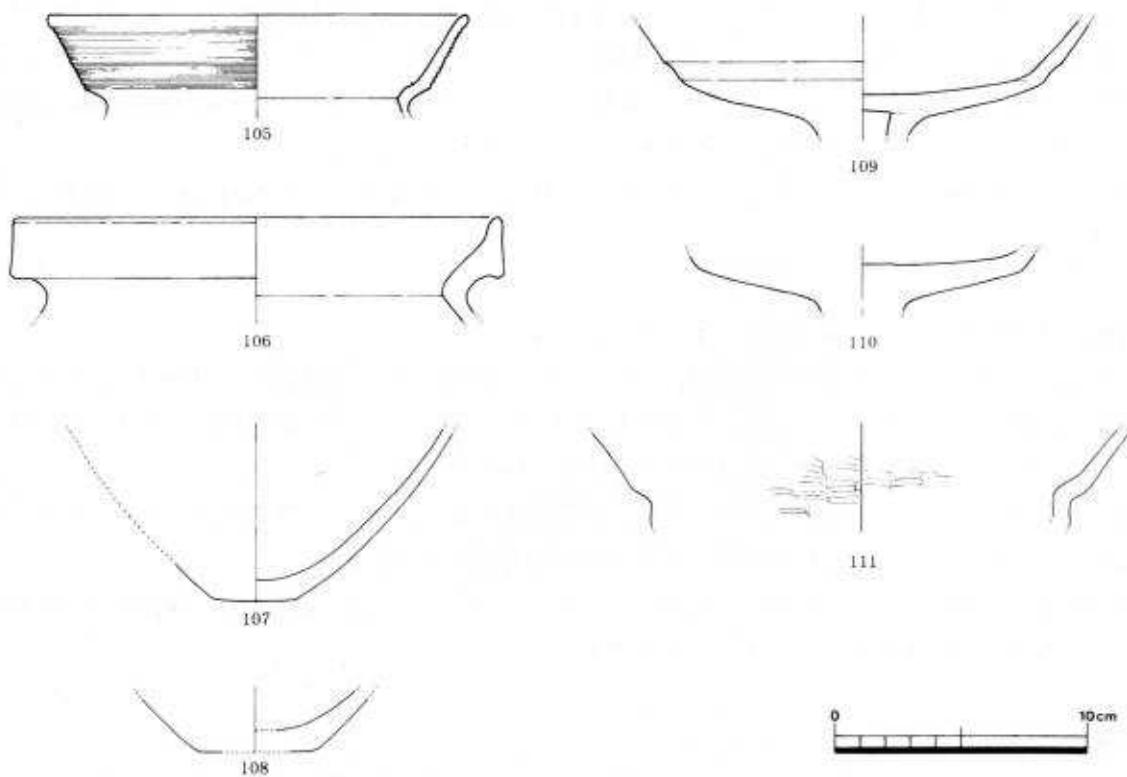
住居床面・溝状施設 遺物出土ドットマップ (S = 1/60)
(住居内土坑・ピット内の遺物は各上面より出土)



第35図 9号竪穴住居跡 床面・溝状施設遺物出土ドットマップおよび住居内土坑遺物出土状況図

面遺物出土ドットマップ参照)。こうした出土状況から105の甕口縁部と107の甕底部は同一個体である可能性が考えられる。

(高坏: 109・110) 109・110は高坏の坏部と脚部との接合部。109は平らな坏底部から外傾しながら立ち上がり、立ち上がり部分に段を持つ。109・110とも住居跡内南側の土坑より出土した。



第36図 9号竖穴住居跡 出土土器 (S = 1/3)

(鉢：111) 有段鉢の段の部分。住居跡内南側の土坑から出土。

【遺構の時期】全体的に見て出土遺物が少なく、時期決定し難いが、当住居跡の時期を決定付ける土器としては、住居跡床面より出土した105の甕口縁部と107の甕底部が挙げられる。105の甕口縁部は、比較的口縁帯が伸びており、口縁端部は丸く作られているが、外反ぎみとなっている。107の甕底部は、自立可能であるが、比較的小さい平底となっている。こうした点から見て、月影I式期（弥生時代末）に位置付けられるのではないかと思われる。住居跡内南側の土坑から出土した土器についても、月影I式期に位置付けて良いものといえる。しかし、住居跡内中央の土坑より出土した106の甕口縁部（口縁部残存1/4の比較的大きな破片である）は月影I式期より古い様相を持つものと思われる。混入遺物としての考え方もあるが、出土土器の時期差から住居跡内中央の土坑は当住居跡に伴わないものであるという可能性も考えられる。

第3節 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（第37図上段左・第43図112・113）

15B地区の西隅に位置。当建物跡の西側は調査区域外となっており（その調査区域外の部分は既に削平されている）、南北方向で2間、東西方向で1間の部分を確認した。P1・P2・P3のラインを平行とすると、主軸は北から西へ約14°振る。柱間距離は、P1・P2・P3間で約220cm、P3・P4間で約210cmを測る。

出土遺物は、P2から甕肩部片（第43図112）1点、P3から甕体部片を中心として比較的多くの土器片が出土した。P4からは土器細片が少量出土する程度で、P1からは出土遺物がなかった。第

43図112のP2出土の甕肩部は、くの字口縁を持つ甕のものと思われる。内面には、接合痕があり、その接合痕の部分に指頭痕が見られ、内面の調整は粗いものとなっている。113はP3出土の丸底の甕底部である。このほか、図化できなかった遺物で、古墳時代前・中期の畿内系高坏脚底部片1点がP4から出土した。その高坏脚底部片の内外面には、ハケ調整痕が見られる。

当建物跡の時期については、以上の出土土器から考えて、漆町編年12群期あたり（古墳時代5世紀前半頃）と考えられる。

2号掘立柱建物跡（第37図上段右・第43図114）

15A地区の中央より北東寄りに位置。1間×1間の建物跡で、主軸は北から東へ約24°振る。柱間距離は、P1・P4間で340cm、P2・P3間で370cm、P1・P2間およびP3・P4間で約320cmを測り、柱穴間を線で結んだ形はやや不整な四角形を描く。

出土遺物は各柱穴より少量の土器細片が出土する程度であったが、その中に第43図114の高坏口縁部片がP4から出土した。口縁端部の上面に赤彩の痕跡が見られる。

当建物跡の時期については、出土土器が少なく、決定しがたいが、114の高坏口縁部のみの判断で、法式期（弥生時代後期後半）であると思われる。

3号掘立柱建物跡（第37図中段左）

15A地区の中央より北東寄りに位置。前述の2号掘立柱建物跡と重なる。1間×1間の建物跡で、主軸は北から西へ約9°振る。柱間距離は260～290cmほどあり、柱穴間を線で結んだ形はやや不整な四角形を描く。

出土遺物については、各柱穴から少量の土器細片が出土する程度であったが、P3から有段口縁を持つ甕の口縁帶基部細片が2点出土した（細片のため図化できないものである）。いずれも口縁帶外面に擬凹線が施されている。

当建物跡の時期については、時期決定できる土器がほとんどないため、断定しがたいが、有段口縁を持つ甕の口縁帶基部が出土していることから、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の間にに入るものと思われる。

4号掘立柱建物跡（第37図中段右）

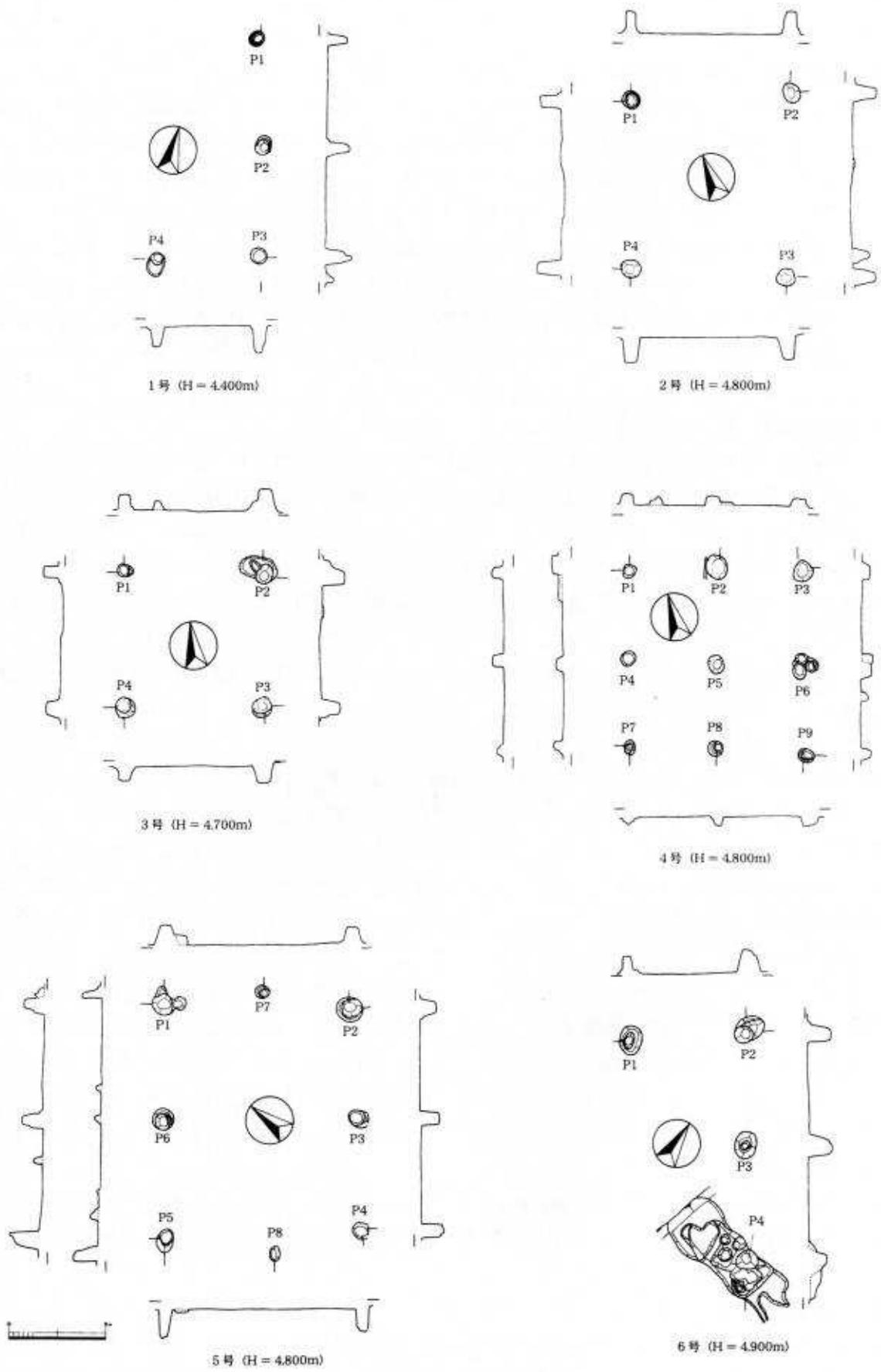
15A地区のほぼ中央に位置。2間×2間の総柱建物跡で、主軸は北から東へ約15°振る。桁行・梁行の長さは約360～370cmあり、柱間距離は170～180cmほどを測る。なお、当建物跡が立地していたところは、近年の畑耕作による著しい削平を受けており、柱穴の底の部分のみが残存していたような状況であった。

出土遺物はP1・P2・P4・P6・P8・P9の6本の柱穴から器種不明の土器細片がごく少量出土するのみで、当建物跡の時期は不明である。

5号掘立柱建物跡（第37図下段左）

15D地区内の南西部に位置。2間×1間の建物跡で、棟持柱2本（P7・P8）を持つ。主軸は北から東へ約52°振る。桁行は約460～470cm、梁行は約390～400cmを測り、桁行の柱間距離は230cmほどある。

出土遺物は、P1・P4・P6・P8から器種不明の土器細片がごく少量出土する程度で、当建物跡



第37図 1~6号掘立柱建物跡 平面図・断面図 (S = 1/120)

の時期は不明である。

6号掘立柱建物跡（第37図下段右・第43図115）

15D地区中央よりやや東寄りの、調査区域が細くなっている部分に位置。当建物跡の南西部分は調査区域外となっており、北西から南東方向の2間と、北東から南西方向の1間の部分を確認した。P2・P3・P4のラインを桁行とすると、主軸は北から西へ約32°振る。柱間距離は、P1・P2間で約240cm、P2・P3間およびP3・P4間で約230cmを測り、P2・P4間の長さは約460cmある。なお、P4の部分にはカクランがあり、P4は底の部分のみが残っていた状況であった。

出土遺物については、P1・P2・P3から土器片がごく少量出土するのみであったが、P3から第43図115の小型壺の肩部片が出土した。外面のごく一部に赤彩された痕跡が見られる。この小型壺以外の土器片は、器種不明の細片であり、当建物跡の時期については不明である。

7号掘立柱建物跡（第38図上段左）

15D地区内の東側に位置する。2間×1間の建物跡で、主軸は北から東へ約20°振る。桁行は約290cm、梁行は約210cm、桁行の柱間距離は約140cmあり、他の掘立柱建物跡に比べ小さい。

出土遺物は、図化できない土器細片がP1・P2・P4からごく少量出土するのみであるが、P1から有段口縁を持つ壺の頸部細片が2点、P2から有段口縁を持つ壺の口縁部細片が2点出土した。口縁部細片2点は、いずれも口縁帯に擬凹線が施されていないもので、口縁帯はほぼ直立し、口縁端部は丸く作られている。

P2から出土した有段口縁を持つ壺の口縁部細片2点から考えて、当建物跡の時期は法仏式期（弥生時代後期後半）に位置付けられると思われる。

8号掘立柱建物跡（第38図上段右・中段・第43図116・117）

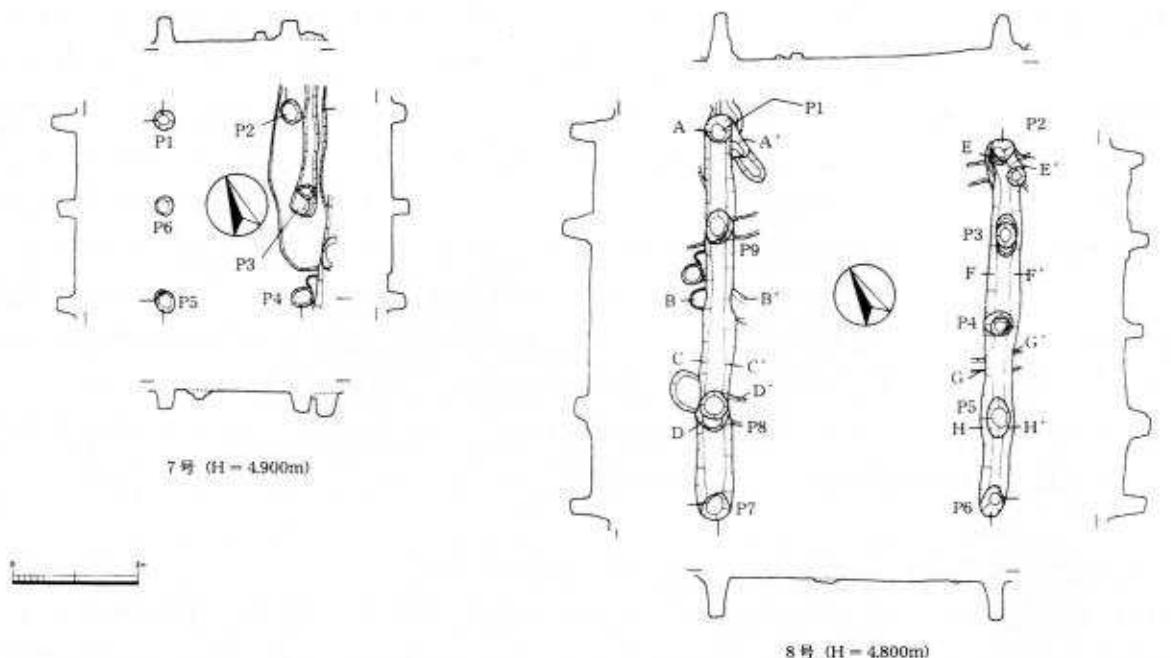
15D地区内の東側に位置。梁行1間の布掘式の掘立柱建物跡で、桁行については、西溝で4本の柱穴、東溝で5本の柱穴があり、P8とP9との間の柱穴が欠けているものであった。主軸は北から東へ約30°振る。桁行の長さは、西溝で約590cm、東溝で約550cmあり、東溝の桁行が短い。梁行は450cmほどある。桁行の柱間距離は、P8・P9間以外では120～150cmほどあり、P8・P9間では約290cmを測る。

出土遺物については、柱穴内からは1点も出土しなかったが、溝内から土器細片が少量出土した。第43図116・117は、いずれも東溝から出土した底部片である。116は壺の底部で、比較的小さい平底であるが、自立可能な大きさである。117は、やや重厚感があり、壺の底部ではないかと思われる。この他、図化できなかったものとして、有段口縁を持つ壺の口縁部細片が西溝より出土した。摩滅が著しく、口縁帯外面の擬凹線の有無などは不明であるが、口縁帯は比較的外傾しており、口縁端部は先細りぎみである。

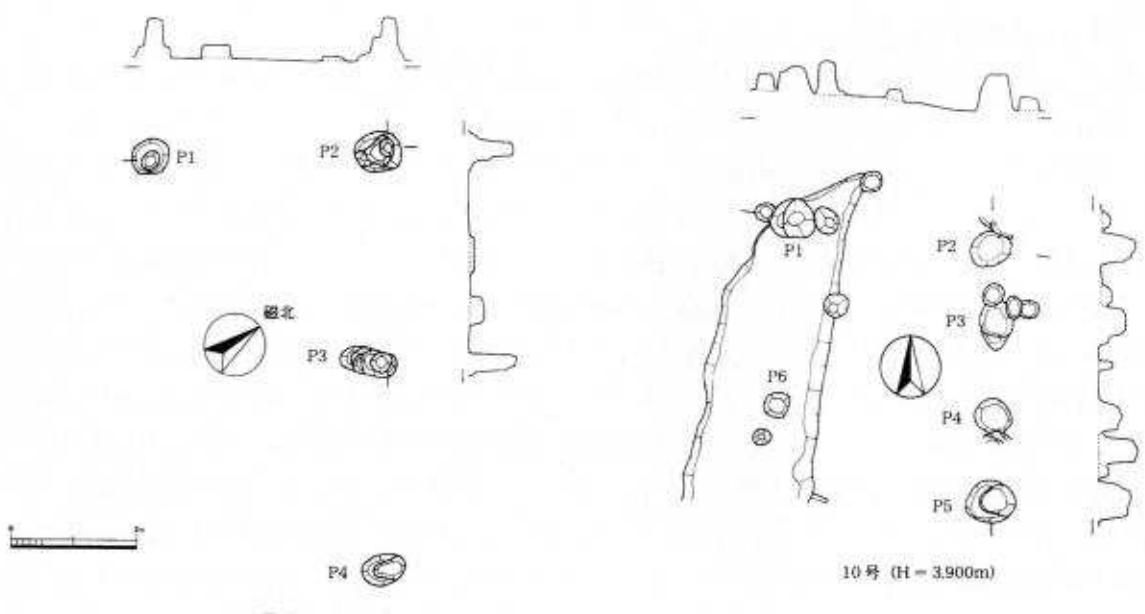
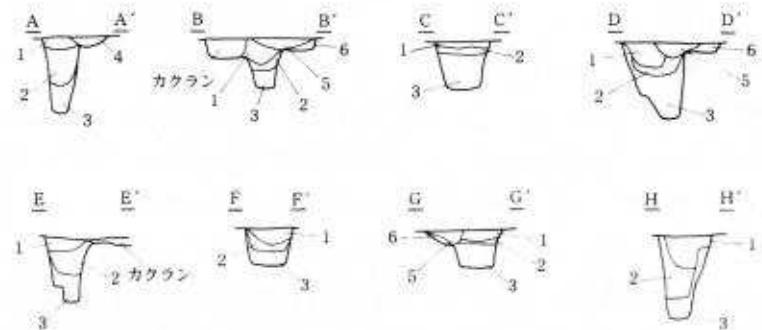
当建物跡の時期については、出土土器が少なく時期決定しがたいが、116の壺底部と西溝出土の有段口縁を持つ壺の口縁部細片から、月影I式期（弥生時代末）に位置付けられるものと考えられる。

9号掘立柱建物跡（第38図下段左・第43図118）

23地区内の東側および25C地区西隅中央に位置。23地区の調査時にP1～P3を確認し、この箇所に1棟の建物跡があると考えていたが、調査後の図面接合によって、25C地区西隅中央にあるP.



8号掘立柱建物跡 土層柱
 1層：黒褐(7.5YR3/2)土。
 2層：1層土に約1cm 大地山粒が少量混じる。
 カーボン少量混じる。しまり強。
 3層：地山土に1層土やや多混じる。カーボン
 少量混じる。しまり強。
 4層：黒褐(7.5YR3/2)土。1層土よりやや
 明度強。(3号住居壁溝)
 5層：黒褐(7.5YR3/2)土。1層土よりやや
 明度強。(別造構)
 6層：6層土に地山土少量混じる。(別造構)



第38図 7～10号 掘立柱建物跡 平面図・断面図 (S = 1/120)

4が当建物跡の柱穴の1つであることが分かった。また当建物跡の南東側は調査区域外となっており、P 2～P 4の2間とP 1・P 2の1間の部分のみを確認したこととなった。P 2・P 3・P 4のラインを主軸とすると、主軸は北（磁北。図の方位も磁北である。）から西へ約55°振る。P 2・P 4間の長さは約660cmあり、その部分の柱間距離は約330cmである。P 1・P 2間は約380cmある。

いずれの柱穴からも土器片が少量出土している。第43図118はP 4出土のもので、有段口縁を持つ甕の口縁部である。口縁帶外面には擬凹線ではなく、ヨコナデされている。この他、細片のため図化できなかったものとして、P 2から有段口縁を持つ甕の口縁部細片が2点、P 3から有段口縁を持つ甕の口縁部細片1点、平底の甕底部片1点が出土している。甕の口縁部はいずれも、口縁帶外面に擬凹線が施され、口縁帶は直立ぎみで、口縁端部は丸く作られている。

当建物跡の時期については、第43図118の甕の口縁部や図化できなかった甕の口縁部から判断して、法仏式期（弥生時代後期後半）に位置付けられるものと考えられる。

10号掘立柱建物跡（第38図下段右・第43図119～121）

2地区内西隅に位置。3間×1間の建物跡であるが、西側の柱列でP 1以外の柱穴はカクランによつて破壊されており、P 6は底面の部分のみが残存していたような状況であった。主軸はほぼ北を向く。桁行（P 2・P 5間）は約400cm、梁行（P 1・P 2間）は約300cm、桁行の柱間距離は120～150cmほどある。

出土遺物は、P 6以外の柱穴から少量の土器細片が出土している。第43図119はくの字口縁を持つ甕の頸部。第43図120は碗の口縁部で、赤く発色する胎土を用いた赤色土器である。いずれもP 2より出土した。第43図121は須恵器坏蓋の口縁部である。口縁部残存1／16の細片であるため、口径などの点で、図にやや不安がある。口縁端部の先端から5mmほど上がったところの内面に明瞭な段がある。P 3出土である。この他の出土遺物としては、P 2から土製支脚の破片が3点出土している。

当建物跡の時期については、出土土器が細片で、その量も少ないため、断定しがたいが、その少量の出土土器から判断して、漆町編年13・14群期あたり（古墳時代5世紀中葉から6世紀前葉）ではないかと思われる。

11号掘立柱建物跡（第39図上段左・第43図122～127）

2地区のほぼ中央に位置。2間×1間の建物跡で、主軸は北から西へ約67°振る。桁行は約430cm、梁行は約220cmで、桁行の柱間距離は約220cmある。

出土遺物は、すべての柱穴から比較的多くの土器片が出土している。そのうち、図化したものが第43図の122～127である。122はP 2より、123～127はP 5より出土している。122は高坏坏底部で、底部は碗形を呈し、底部と体部との境に突帯がつく。123は古墳時代前・中期に見られる畿内系高坏の坏底部。底部から体部に至る屈曲がほとんどなくなったようになり、碗形を呈す。内面はヘラミガキされ、体部外面はヨコナデ、底部外面にはハケ調整痕を残す。124は畿内系高坏の脚柱部。内面はタテ方向にヘラナデされている。125は須恵器甕体部片。表面が青色の強い青灰色、断面がセピア色に焼けており、胎土から見て他地域産（陶邑産）須恵器である。外面には木目の見られない平行線文の叩き目が見られ、内面はナデ消しされている。P 5からは、この須恵器甕体部片と同一個体と思われる破片が125のほかに2点出土している。126は有段口縁を持つ甕の口縁部、127は底部が碗形を呈す有段高坏の坏部で、いずれも月影II式期（弥生時代末）に位置付けられるものである。これらは、P 5から出土しているのであるが、P 5は後述する12号掘立柱建物跡（布掘式）の東

溝と重なっており、その12号掘立柱建物跡からの混入品と思われる。なお、127の高坏坏部の外面は、摩滅が著しく、かすかにしか見られないであるが、赤彩された痕跡が見られる。この他、細片のため図化できなかったもので、須恵器坏身の受部1点がP5から出土している。外面が暗度の強い青灰色、断面および内面がセピア色に焼けており、胎土から見て他地域産（陶邑産）と思われる。また、P4からは、第86図443の管玉が1点出土している。

当建物跡の時期については、上記の出土土器から考えて、漆町編年13群期（古墳時代5世紀中葉～後葉頃）に位置付けられると考えられる。

12号掘立柱建物跡（第39図上段右・第43図128・129・第44図130～137）

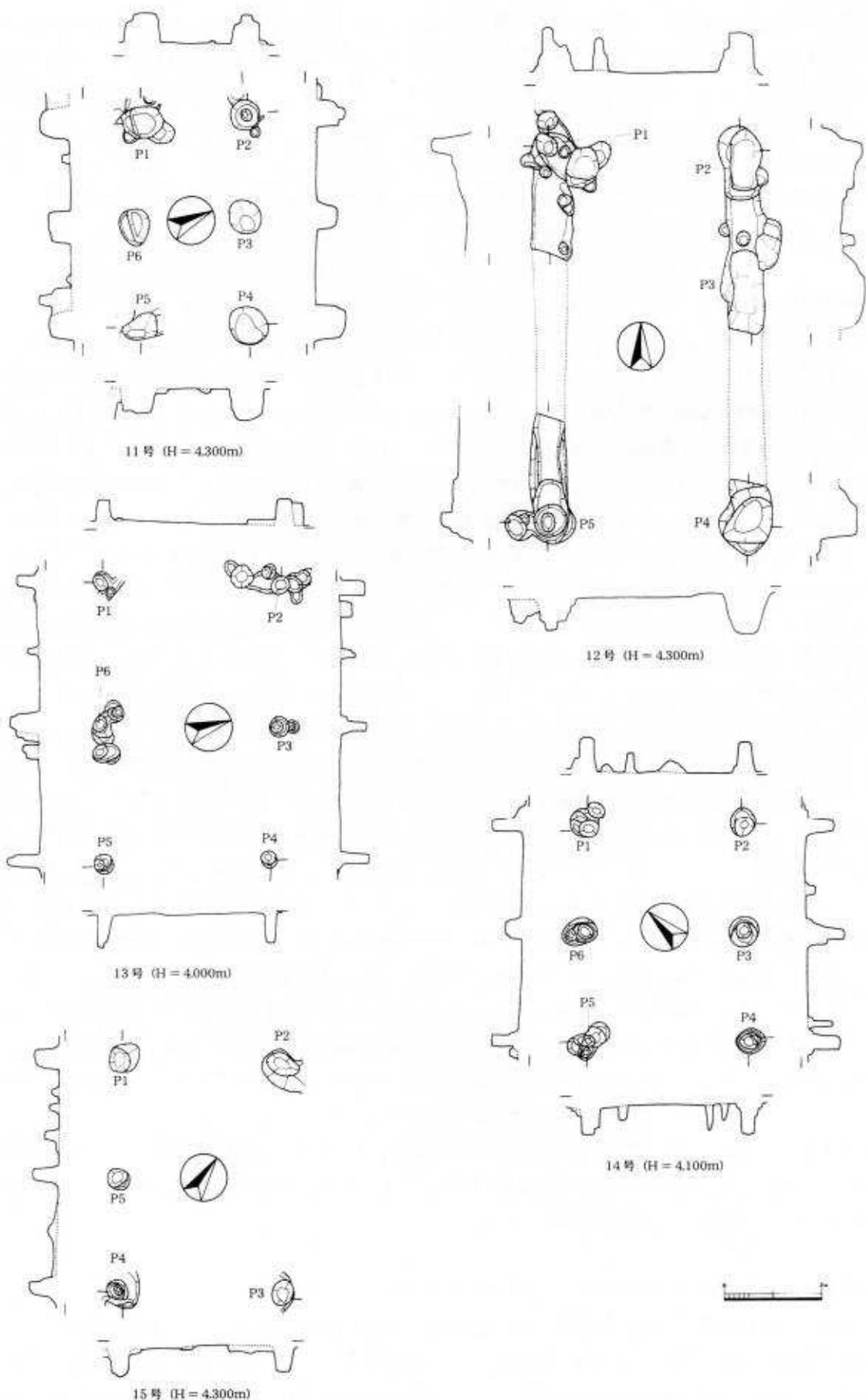
2地区のほぼ中央および20地区北隅中央に位置。梁行1間の布掘式掘立柱建物跡である。P1～P3の北側の部分が2地区（土地区画整理事業による道路築造部分）、P4・P5の南側の部分が20地区（土地区画整理事業による街区部分。2地区的道路築造後に調査。）となるため、北と南とに分けて調査を行い、調査後に図面接合を行ったのであるが、2地区的道路築造時の法面掘削によって、当建物跡の中央部分が空白となってしまった（いわば調査ミスである）。よって、桁行の柱本数は明確には分からなくなってしまったが、東溝の柱穴の配置から、桁行3間と考えられる。主軸はほぼ北を向く。桁行は約770cm、梁行は約400cmで、桁行の柱間距離（P2・P3間の距離）は約270cmある。

出土遺物は、P1とP2および東溝北側部分から比較的多くの土器片が出土し、その他の部分では少量の土器片が出土している。第43図128・129は有段口縁を持つ壺の口縁部。いずれも口縁帯に擬凹線が施されている。128の口縁端部は外反ぎみ、先細りぎみに作られ、129の口縁端部は大きく外反し、先細りしている。128はP1から、129はP2から出土した。第44図130と131は小さな平底を持つ壺の底部。非常に小さな平底で、自立不能なものといえる。130はP1、131はP2からの出土である。第44図132は有段口縁を持つ壺の口縁部。器壁が比較的厚く、重厚感がある。口縁端部は大きく外反し、先細りしている。P4出土である。第44図135はP1出土の高坏脚部である。割れ口から円盤充填法が用いられていることが分かる。脚柱部内面には接合痕が見られ、粗くナデ調整されている。また、破片が小さく数は不明であるが、円形の穿孔がある。第44図136は、台付の壺ないしは鉢の脚部。上から見た割れ口により円盤充填法が用いられたことが分かる。P2から出土した。第44図137は小型壺の体部。外面は摩滅で調整不明であるが、全体が赤彩されている。内面にも赤彩されている痕跡が一部でかすかに見られるが、摩滅が著しく全体が赤彩されているかは不明である。また、頸部下には円形の穿孔がある（数については破片が小さく不明）。P3出土である。このほか、古墳時代初頭に位置付けられる東海系高坏の細片や壺の口縁部細片など（図化不能）がP1の上層部から出土したが、そのP1の上層部では、より新しい時期のくの字口縁の壺口縁部や須恵器片なども出土しており、これらは当建物跡には伴わないと判断した。

当建物跡の時期については、当建物跡出土の有段口縁の壺口縁部や壺口縁部、さらに11号掘立柱建物跡のところで見た当建物跡からの混入品と思われる壺口縁部・高坏坏部から判断して、月影II式期（弥生時代末）に位置付けられると考えられる。

13号掘立柱建物跡（第39図中段左・第44図138～140）

20地区内北側中央に位置。2間×1間の建物跡。主軸は北から西へ約70°振る。桁行は、P1・P6間で約560cm、P2・P4間で約580cm、梁行は、P1・P2間で約370cm、P4・P5間で約340cmあり、柱穴を線で結んだ形は、やや不整な四角形を描く。桁行の柱間距離は、P1・P6



第39図 11～15号掘立柱建物跡 平面図・断面図 (S = 1/120)

間、P 2・P 3間、P 5・P 6間で約290cm、P 3・P 4間で約270cmある。

出土遺物は、P 1以外の各柱穴から少量の土器片が出土した。第44図138は、浅い碗形の底部から口縁部がやや外反しながら開く有段高壺の壺部である。P 4出土の破片とP 6出土の破片との接合関係を持つ。第44図139は、138と同様の有段高壺の底部で、浅い碗形を呈する。P 6からの出土である。第44図140は、高壺の脚部でラッパ状に開くものである。図化できなかったが、円形の穿孔がある。P 3から出土した。

当建物跡の時期については、138の有段高壺の口径が大きく、壺底部が浅い点、139の有段高壺の壺底部が浅い点から判断して、月影Ⅰ式期（弥生時代末）ではないかと考えられる。

14号掘立柱建物跡（第39図中段右・第44図141）

20地区内北側の中央に位置。先述の13号掘立柱建物跡に一部重なる。2間×1間の建物跡で、主軸は北から東へ約48°振る。桁行は約440cm、梁行は約330cmで、桁行の柱間距離は約210cm～220cmある。

出土遺物は、P 5以外の各柱穴から土器細片がごく少量出土した。第44図141は、頸部下端外面に突帯が付く大型壺の頸部下端部分で、P 6から出土した。頸部下端外面にある突帯の上部に連続して斜行する刻みが入れられており、頸部内面には薄くハケ調整された痕跡が見られる。

当建物跡の時期については、出土土器のほとんどが器種不明の細片で、図化した141の大型壺頸部下端部分のみで判断せざるを得ず、明確には断定しがたいが、頸部下端に突帯を持つ大型壺は、月影Ⅱ式期（弥生時代末）から白江式期（古墳時代初頭）に見られることから、概ねその時期に位置付けられるのではないかと思われる。

15号掘立柱建物跡（第39図下段左）

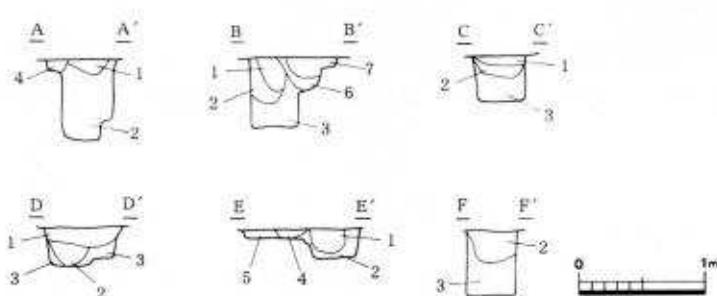
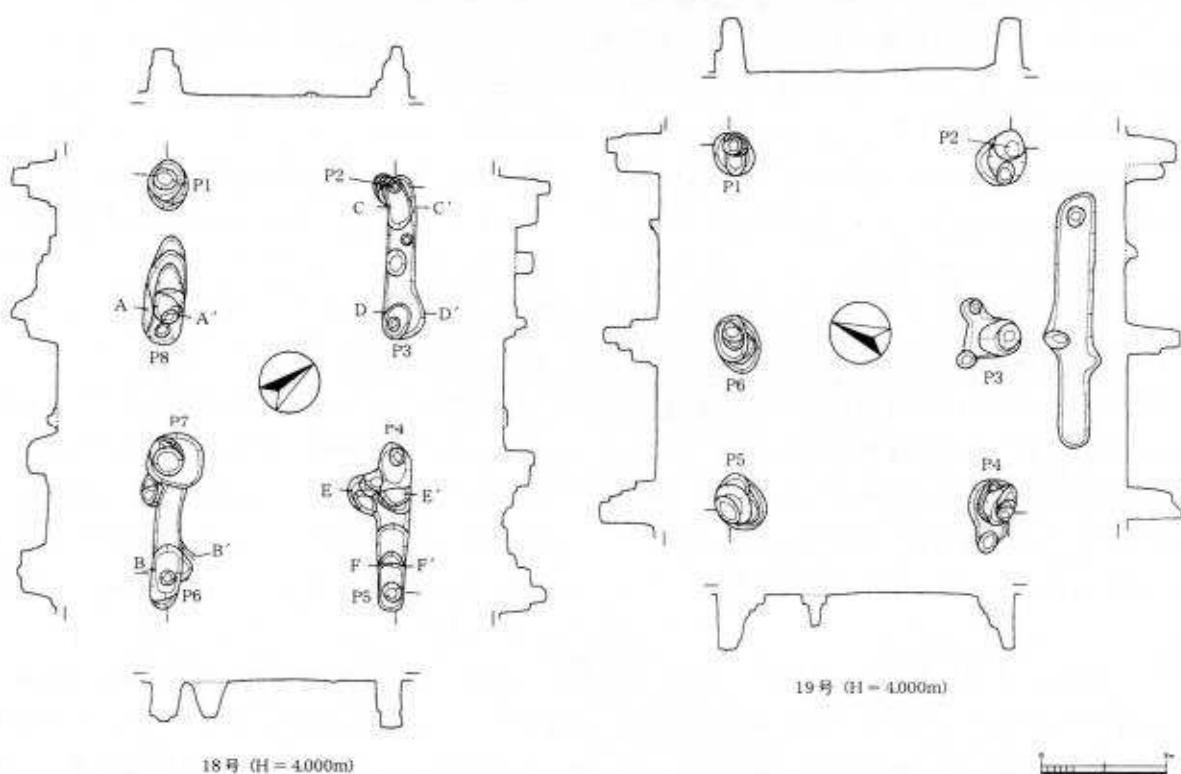
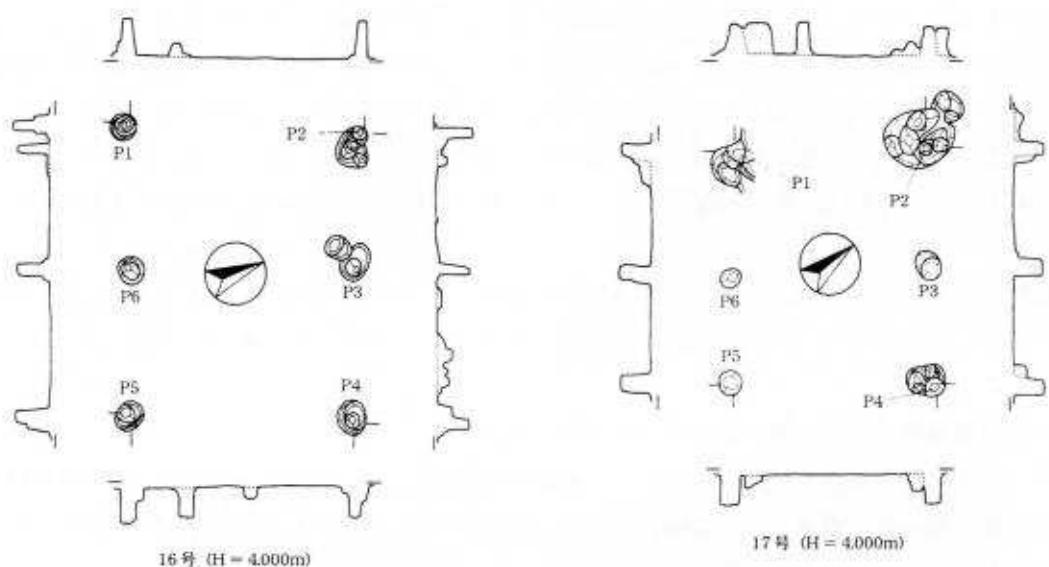
20地区内北隅の東側および2地区内東側に位置し、P 1とP 3～P 5が20地区内、P 2が2地区内にある。2間×1間の建物跡であるが、P 2とP 3との間の柱穴が欠けている点については、12号掘立柱建物跡のところで述べたとおり、20地区と2地区との間に調査空白区域があり、その空白区域に欠けている柱穴が存在していたものと考えられる。主軸は北から西へ約34°振る。桁行は約470cm、梁行は約330cm、桁行の柱間距離は、P 1・P 5間で約240cm、P 4・P 5間で約230cmある。

出土遺物は、P 3、P 5からはなく、P 1、P 4から土器細片がごく少量出土、P 2から比較的多くの土器片が出土した。しかし、図化できるものや、器種判別できる遺物はほとんどなく、P 4から有段口縁の甕口縁部細片1点が出土する程度であった。その口縁部は、口縁帶外面に擬凹線が施され、口縁帶の幅はやや狭く、口縁端部は丸く作られている。

当建物跡の時期については、P 4出土の有段口縁の甕口縁部細片のみでしか判断せざるを得ず、断定しがたいが、その甕口縁部細片から判断すれば、法仏式期（弥生時代後期後半）に位置付けられるのではないかと考えられる。

16号掘立柱建物跡（第40図上段左・第44図142）

20地区中央よりやや北東寄りに位置。2間×1間の建物跡で、主軸は北から西へ約67°振る。桁行は約450cm、梁行は約360cmで、桁行の柱間距離は、P 1・P 6間、P 2・P 3間で約220cm、P 3・P 4間、P 5・P 6間で約230cmある。



18号掘立柱建物 土層柱

1層：黒褐 (7.5YR3/2) 土。

2層：1層土に約 1cm 大の地山粒少量混じる。カーボン少量混じる。しまり強。

3層：地山土に約 1cm 大の 1 層土ブロックやや多混じる。カーボン少量混じる。しまり強。

4層：暗褐 (7.5YR3/3) 土。(別造構)

5層：地山土に 4 層土少量混じる。(別造構)

6層：黒褐 (7.5YR2/2) 土。(別造構)

7層：地山土に 4 層土が少量混じる。(別造構)

第40図 16～19号掘立柱建物跡 平面図・断面図 (S = 1/120)

出土遺物は、P 2以外の各柱穴から土器細片がごく少量出土するのみであった。第44図142は、P 6出土の有段口縁の甕口縁帯基部細片を図化したものである。口縁帯基部外面には、ススがやや多量に付着している。口縁端部の形については不明である。

当建物跡の時期については、142の甕口縁帯基部のみで判断せざるを得ず、断定しがたいが、有段口縁を持つ甕が存在した弥生時代後半から古墳時代初頭の間に位置付けられるであろう。

17号掘立柱建物跡（第40図上段右・第44図143）

20地区中央よりやや北東寄りに位置し、前述の16号掘立柱建物跡と重なる。主軸は北から西へ約50°振る。桁行は、P 1・P 5間で約380cm、P 2・P 4間で約360cm、梁行は、P 1・P 2間で300cm、P 4・P 5間で320cmあり、柱穴を線で結んだ形は、やや不整な四角形を描く。桁行の柱間距離は、P 5・P 6間で約170cmあり、それ以外は約190cmである。

出土遺物は、P 2以外の各柱穴から土器片がごく少量出土するのみである。第44図143は古墳時代前・中期に見られる畿内系高坏の坏底部から口縁部への立ち上がりの部分である。比較的大きく開く口縁部で、立ち上がり部分の外面には接合痕が見られる。また、立ち上がり部分の内面は屈曲せず、碗形を呈す。

当建物跡の時期については、143の高坏片のみで判断せざるを得ず、断定しがたいが、その高坏片から判断して、漆町編年12・13群期あたり（古墳時代5世紀代）ではないかと思われる。

18号掘立柱建物跡（第40図中段左および下段・第44図144・145）

20地区のほぼ中央に位置。3間×1間の建物跡で、溝が途切れているが、布掘式の掘立柱建物である。主軸は北から西へ約53°振る。桁行は約640cm、梁行は約360cmあり、桁行の柱間距離は約190cm～240cmである。

出土遺物は、P 2・P 3・P 4・P 5からはなかったが、それ以外の柱穴および溝から少量の土器片が出土した。第44図144は、P 8から出土した有段口縁の甕口縁部である。口縁帯外面には擬凹線ではなく、口縁端部はやや外反して先細りぎみとなっている。口縁帯内面には指頭痕が見られる。第44図145は有段口縁を持つ甕の肩部。P 7より出土した。

当建物跡の時期については、上記2点からの判断となるが、甕口縁部の口縁端部はさほど外反しておらず、甕の肩部については、さほど張ったようすはない。この点から、月影I式期（弥生時代末）に位置付けられるのではないかと思われる。

19号掘立柱建物跡（第40図中段右・第44図146・147）

20地区中央よりやや東側に位置。2間×1間の建物跡で、主軸は北から東へ約70°振る。桁行約580cm、梁行約440cmで、桁行の柱間距離は約290cmある。柱穴は直径約70cm～90cmと大きく、深さも確認面から約90cm～100cmと深い。

出土遺物は、各柱穴から少量の土器片が出土している。第44図146は有段口縁を持つ甕の口縁部から肩部である。P 4より出土した。口縁帯外面の擬凹線は口縁帯下半のみにあり、肩部外面にはクシ状具によるものと思われる連続斜行列点文がある。また、口縁部外面から頸部外面にかけてススが多く付着している。第44図147は平底の甕底部である。この他、図化できなかつたものとして、P 6から断面三角形状の有段口縁を持つ甕の口縁部片1点、P 3から有段口縁を持つ短頸壺の口縁部片1点が出土している。

当建物跡の時期については、上記の出土遺物より法仏式期（弥生時代後期後半）に位置付けられると思われる。

なお、当建物跡の南東側には、建物跡の主軸とほぼ同じ方向に伸びる非常に浅い溝（2号溝）が確認された。その溝からの出土遺物の時期と当建物跡の出土遺物の時期は同じく、この溝は、当建物跡に付随する溝であると考えられる。

20号掘立柱建物跡（第41図上段左・第45図148～150）

20地区の中央よりやや南寄りに位置。3間×2間の建物跡で、主軸は北から東へ約20°振る。桁行は約560cm、梁行は約500cmあり、桁行の柱間距離は約180cm～200cm、梁行の柱間距離は約250cmである。

出土遺物は、P9からはなかったが、P7からは土器細片がごく少量し、その他の柱穴からは土器片がやや多く出土した。第45図148・149はくの字口縁の甕口縁部である。第45図150は、古墳時代前・中期に見られる畿内系高坏の脚部。脚柱部はやや開きぎみで、短い。この他、図化できなかつたものとして、P4から畿内系高坏の口縁部片1点、P8から畿内系高坏の坏底部から口縁部に至る立ち上がりの破片1点が出土している。高坏の口縁部は大きく開くもので、比較的深い坏部のものである。また、いずれの破片にも器面にハケ調整痕を残している。

当建物跡の時期については、上記の出土土器から判断して漆町編年12群期（古墳時代5世紀前葉～中葉）に位置付けられるものと考えられる。

21号掘立柱建物跡（第41図上段右）

20地区の中央より南寄り、前述の20号掘立柱建物跡の西隣に位置。2間×1間の建物跡で、主軸は北から東へ約16°振る。桁行は約390cm、梁行は約340cmで、桁行の柱間距離は、P1・P6間、P2・P3間で約200cm、P3・P4間、P5・P6間で約190cmある。

出土遺物は、P6以外の各柱穴から土器片が少量出土しているが、いずれも図化できなく、時期決定できない破片であった。

よって、当建物跡の時期については不明である。

22号掘立柱建物跡（第41図中段左・第45図151）

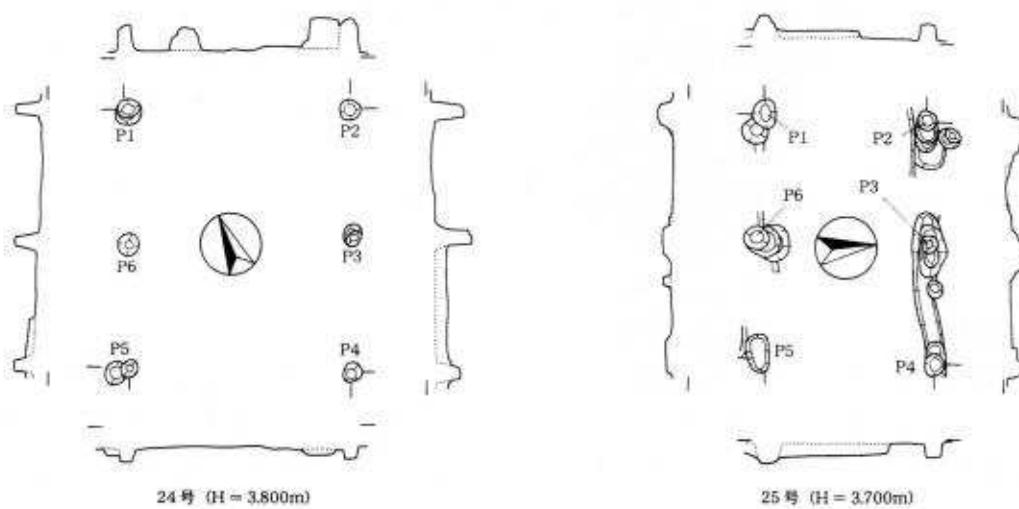
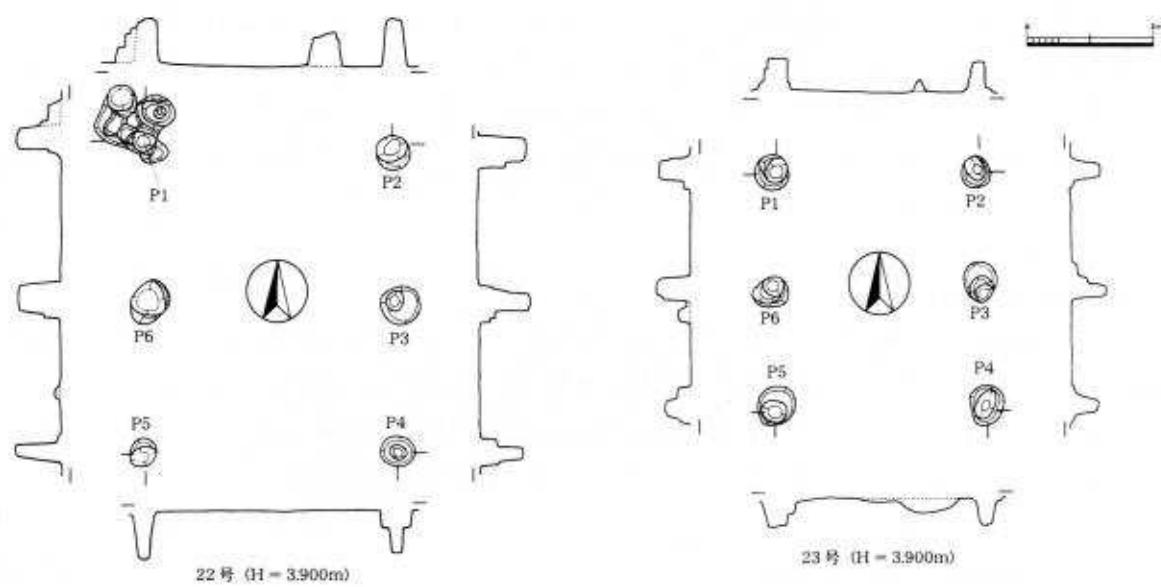
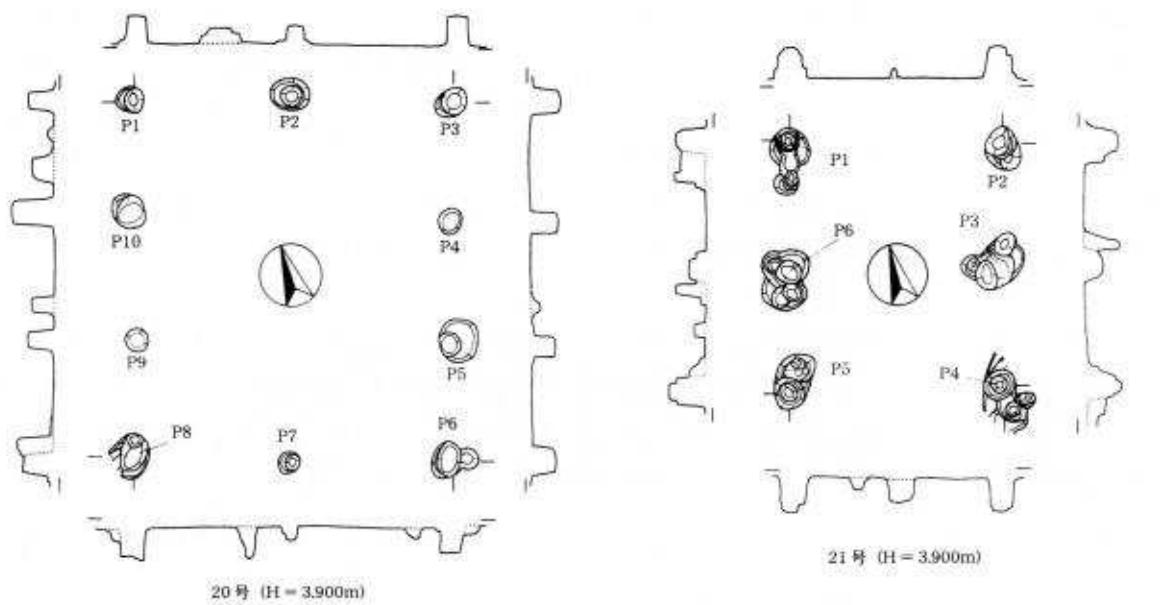
20地区の中央より南寄りに位置。前述の9号竪穴住居跡と重なる。2間×1間の建物跡で、主軸はほぼ北を向く。桁行は約480cm、梁行は約390cmで、桁行の柱間距離は約240cmある。

出土遺物は各柱穴からごく少量の土器片が出土している。第45図151は有段口縁の甕口縁部で、P2より出土した。口縁帯外面には擬凹線が施されているが、口縁帯の上半については、摩滅により擬凹線の有無は分からぬ。口縁部はほぼ直立し、口縁端部は丸く作られている。

当建物跡の時期については、上記の口縁部1点のみから判断せざるを得ないが、その口縁部から判断して法仏式期（弥生時代後期後半）であると思われる。

23号掘立柱建物跡（第41図中段右・第45図152～154）

20地区の中央より南寄りに位置。前述の9号竪穴住居跡、22号掘立柱建物跡と重なる。2間×1間の建物跡で、主軸はほぼ北を向く。桁行は約380cm、梁行は約320cmあり、桁行の柱間距離は約190cmである。



第41図 20~25号掘立柱建物跡 平面図・断面図 (S = 1/120)

出土遺物は各柱穴より土器片が少量出土している。第45図152・153は、有段口縁の壺口縁部で口縁帯外面に擬凹線が施されているものである。152の口縁帯内面には指頭痕が見られ、口縁帯外面の一部でも擬凹線の上から押さえられたような指頭痕が見られ、その指頭痕は、内面の指頭痕と対になるような位置にある。口縁端部は外反し、先細りしている。153は、口縁端部が欠けているが、やや外反ぎみに作られているようである。152はP5、153はP6より出土した。第45図154は壺ないしは壺の平底の底部である。外底面は粗くヘラケズリされており、やや不安定な平底となっている。

当建物跡の時期については、153の口縁端部の外反度が小さいのであるが、152の口縁端部が外反、先細りし、口縁帯内面、さらには外面にも指頭痕を残しているという点から、断定するにはやや苦しみが、月影Ⅱ式期（弥生時代末）に位置付けられるのではないかと思われる。当建物跡と重なる9号竪穴住居跡が月影Ⅰ式期に位置付けられる点から考えても、この時期に位置付けて妥当ではないかと考えられる。

24号掘立柱建物跡（第41図下段左）

20地区内南側の中央よりやや西寄りに位置。2間×1間の建物跡で、主軸は北から東へ約23°振る。桁行は約410cm、梁行は約350cm、桁行の柱間距離は約200cm～210cmである。なお、当建物跡の南側は、近年の畑耕作による著しい削平を受けている。

出土遺物はP5以外の各柱穴から土器細片がごく少量出土するのみで、時期決定できるような土器はない。よって、当建物跡の時期については不明である。

25号掘立柱建物跡（第41図下段右・第45図155）

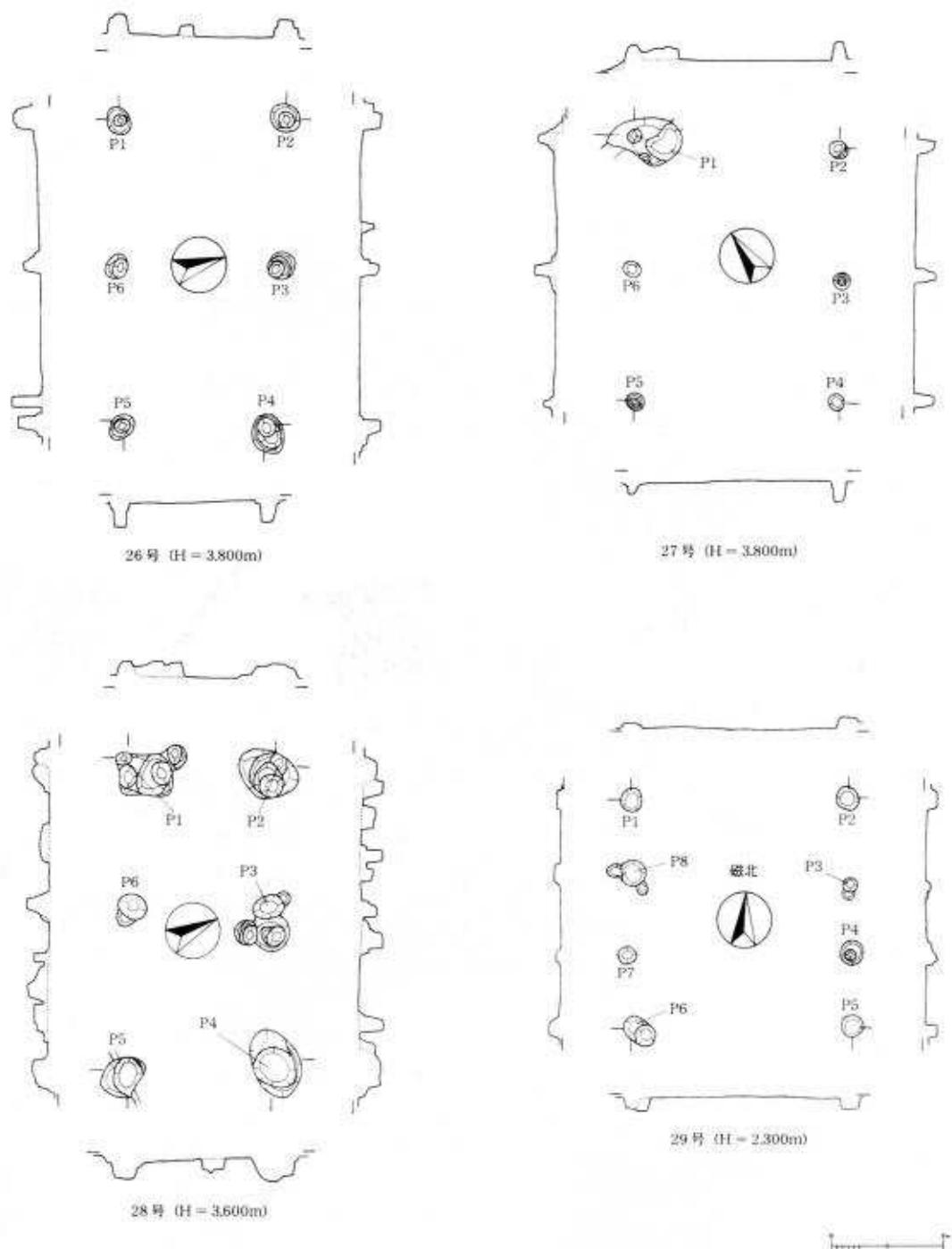
20地区内南側の中央よりやや西寄りに位置。前述の24号掘立柱建物跡と重なる。2間×1間の建物跡であるが、P3とP4との間が溝状につながっているのを確認しており、当建物跡は、布掘式の掘立柱建物ではないかと思われる。当建物跡が立地しているところは、近年の畑耕作による著しい削平を受けており、柱穴間の溝がほとんど削平され、柱穴のみが残存したものと考えられる。主軸は北から西へ約83°振る。桁行は約380cm、梁行は、P1・P2間で約260cm、P4・P5間で約280cmあり、桁行の柱間距離は約290cm～300cmである。当遺跡で確認された他の布掘式掘立柱建物跡に比べ規模が小さい。

出土遺物は、P3以外の各柱穴からごく少量の土器片が出土した。第45図155は、碗形の壺底部から外反しながら開く口縁部を持つ有段高壺の壺部である。P6から出土した。このほか、細片のため図化できない土器として、有段口縁の壺口縁部がP2から出土した。口縁帯は、外面に擬凹線が施され、やや外反しているが、口縁端部は丸く作られている。

当建物跡の時期については、上記2点の土器から判断せざるを得ないが、それらから判断して月影Ⅰ式期（弥生時代末）に位置付けられるのではないかと思われる。

26号掘立柱建物跡（第42図上段左・第45図156）

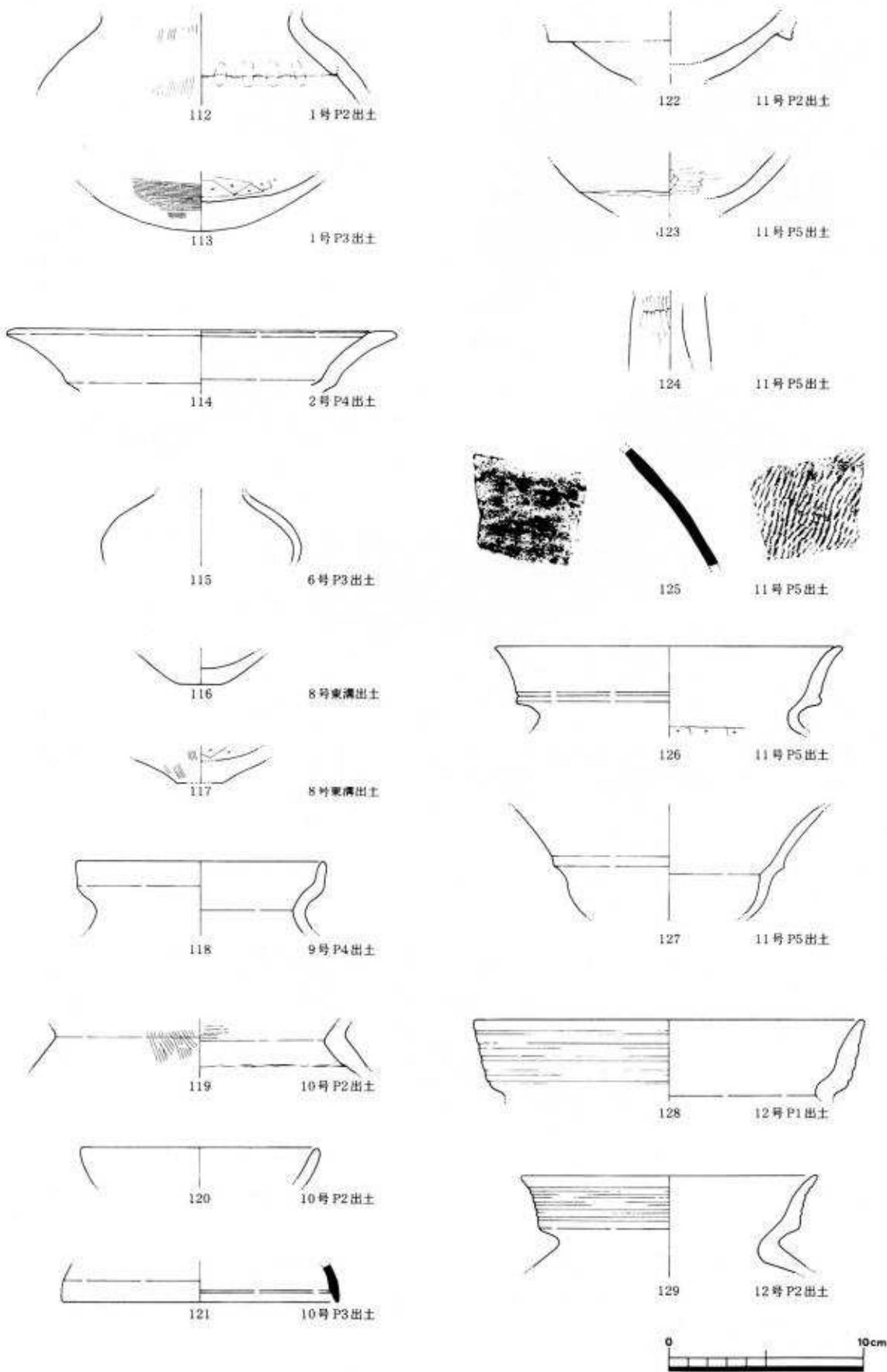
20地区内西側の中央に位置する。2間×1間の建物跡で、主軸は北から西へ約70°振る。桁行は約540cm、梁行は、P1・P2間で約290cm、P4・P5間で約260cmあり、柱穴を線で結んだ形はやや不整な四角形を描く。桁行の柱間距離は、P1・P6間、P2・P3間で約260cm、P3・P4間、P5・P6間で約280cmである。



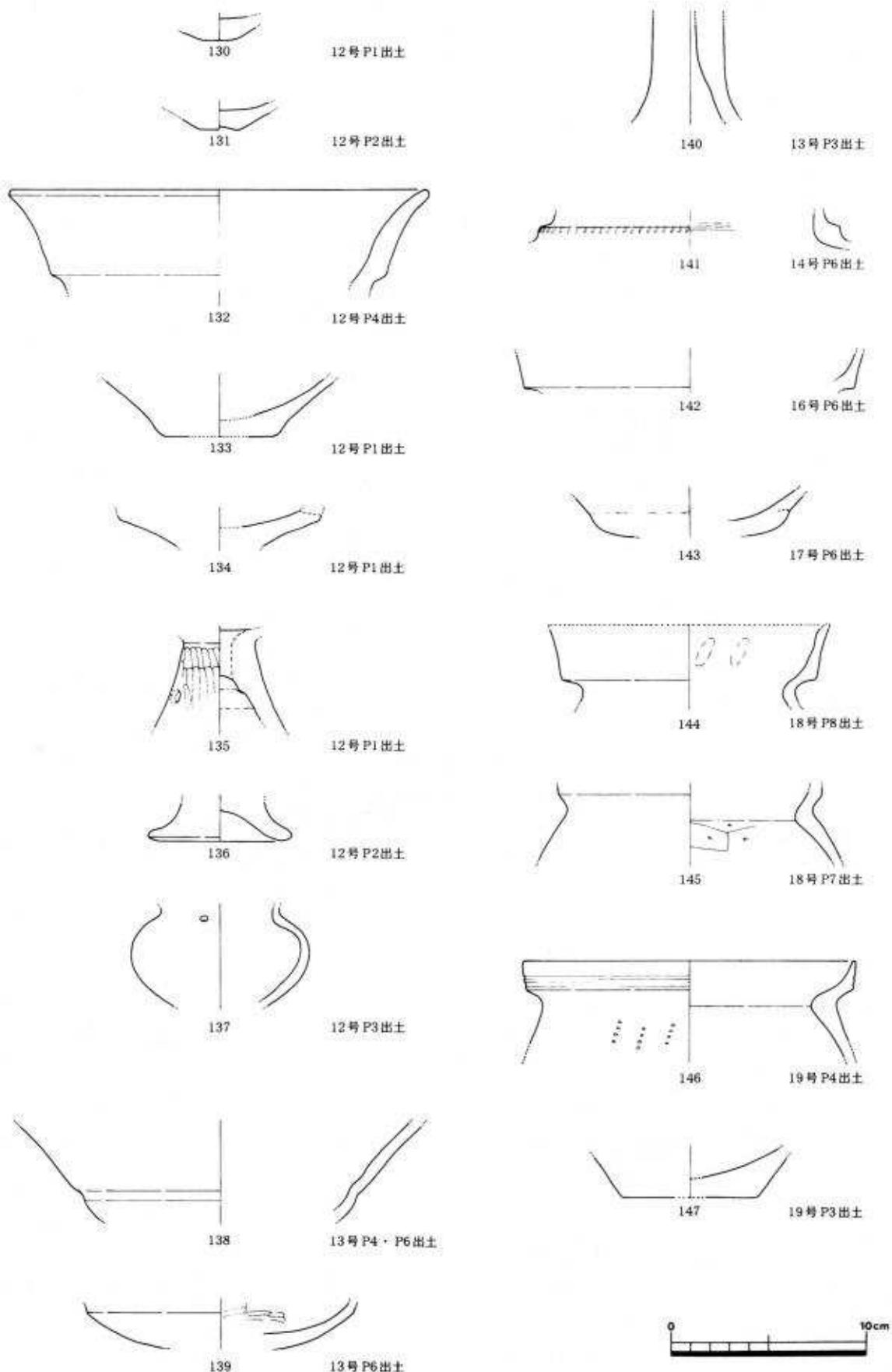
第42図 26～29号掘立柱建物跡 平面図・断面図 (S = 1/120)

出土遺物は、P1、P5以外の柱穴からごく少量の土器片が出土した。第45図156は平底の甕底部で、P4から出土した。

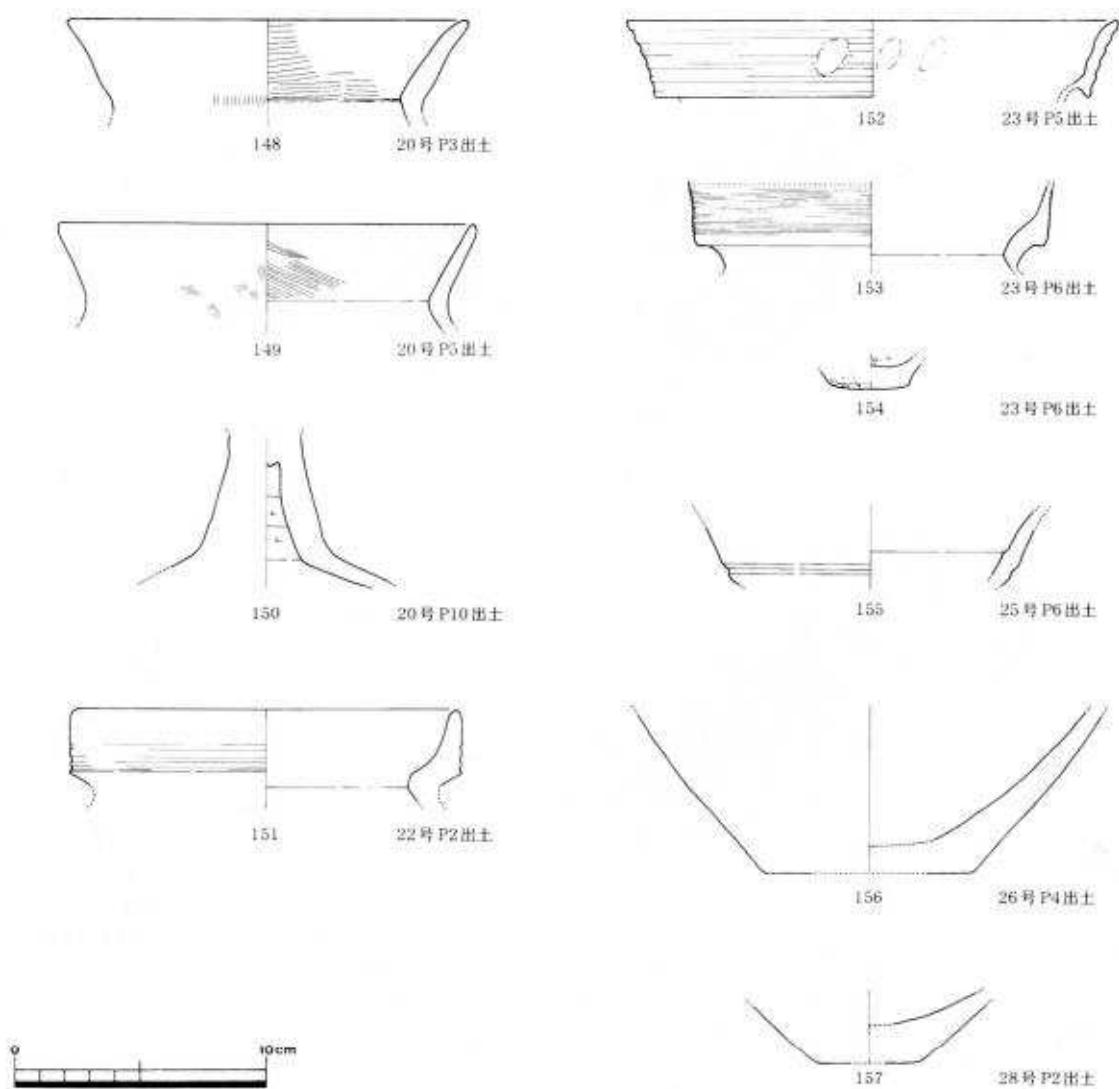
上記の甕底部以外は器種不明の細片ばかりであり、当建物跡の明確な時期については不明である。ただし、しっかりとした平底を持つ甕底部が出土したことにより、法仏式期（弥生時代後期後半）以前に位置付けてよいのではないかと思われる。



第43図 掘立柱建物跡 出土土器 (その1) ($S = 1/3$)



第44図 挖立柱建物跡 出土土器 (その2) ($S = 1/3$)



第45図 堀立柱建物跡 出土土器（その3）(S = 1/3)

27号堀立柱建物跡（第42図上段右）

20地区の中央より西寄りに位置。2間×1間の建物跡で、主軸は北から東へ約36°振る。桁行は、P1・P5間で約470cm、P2・P4間で約450cm、梁行は約360cmある。桁行の柱間距離は、P1・P6・P5間は約230cm～240cm、P2・P3・P4間は約220～230cmである。

出土遺物は、P1、P6以外の各柱穴から土器細片がごく少量出土しているが、甕体部細片ないしは器種不明の細片ばかりで、時期決定できる遺物はなかった。よって、当建物跡の時期については不明である。

28号堀立柱建物跡（第42図下段左・第45図157）

20地区の南西隅に位置。2間×1間の建物跡で、主軸は北から西へ約65°振る。桁行はP1・P6間で約560cm、P2・P4間で約540cm、梁行は、P1・P2間で約280cm、P4・P5間で約260cmであり、柱穴を線で結んだ形はやや不整な四角形を描く。桁行の柱間距離は、P1・P6間、P2・P3間で約250cm～260cm、P3・P4間、P5・P6間で約290～300cmを測る。

出土遺物は、P 3、P 5以外の各柱穴から少量の土器片が出土した。第45図157は平底の甕底部で、P 2から出土した。その他、細片のため図化できない遺物として、有段口縁を持つ甕の口縁帯基部がP 2から1点、P 4から2点、平底の甕底部片がP 4から1点出土した。

当建物跡の時期については、上記の少量の土器から判断せざるを得ないが、有段口縁を持つ甕の口縁帯基部と、しっかりとした平底の甕底部があることにより、法仏式期（弥生時代後期後半）に位置付けられるのではないかと思われる。

29号掘立柱建物跡（第42図下段右）

1号公園工事立会調査区域内に位置。調査当時、1号公園立会調査区域は水田として利用されていたところで、その区域内の台地上部分は著しく削平を受けており、柱穴の底部のみがかろうじて残存していた状況であった。3間×1間の建物跡で、主軸は北（磁北。図の方位も磁北である。）から東へ約5°振る。桁行は約400cm、梁行は約380cm、桁行の柱間距離は約130cm～140cmある。

出土遺物はいずれの柱穴からもなく、当建物跡の時期は不明である。

第4節 土坑

1号土坑（第46図上段）

15C地区内西側のほぼ中央に位置。平面形は、長径約100cm、短径約80cmの比較的小さな楕円形を呈し、深さは、深いところで確認面より15cm程度ある。覆土については、第46図上段の土層断面図にある1層黒褐色土をベースとした土が堆積していた。

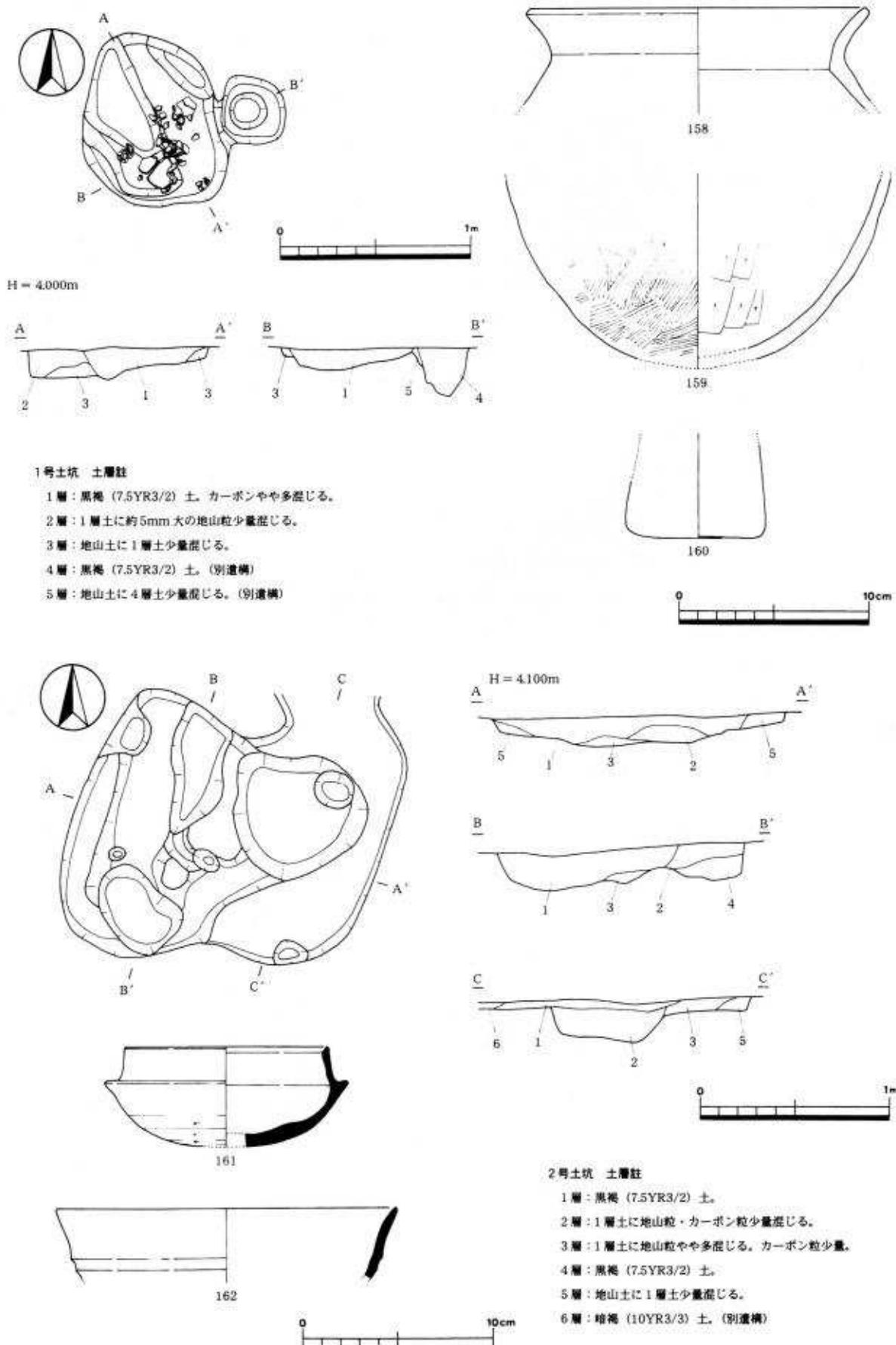
出土遺物は、甕体部片を中心として、土坑の規模のわりには比較的多くの土器片があり、主として1層黒褐色土から出土した。158は、くの字口縁の甕口縁部、159は丸底の甕底部である。当土坑からは、比較的多量の甕体部片が出土しているが、そのほとんどは、外面のハケ調整痕から見て、159の甕底部と同一個体のものといえ、一個体の甕が当土坑に捨てられていたと考えられる。また、土器以外には、160の土製支脚の底部片が1点出土している。

当土坑の時期については、時期決定できる土器が上記の2点と少量なのであるが、その2点の土器と、土製支脚の出土から考えて、漆町編年14群期（古墳時代5世紀末～6世紀前葉頃）あたりではないかと考えられる。

2号土坑（第46図下段）

15C地区の中央より南西寄りに位置。平面形は、長辺約150～160cm、短辺約120～130cmの隅丸のやや不整な長方形で、長辺の部分が凹んだような形をしている。当土坑を平面で確認したときは、2基の土坑が重なっているのではないかと思われたが、土層断面で2基の土坑が重なっているというようなことは確認されず、1基の土坑として扱った。深さは15cm～20cmほどあり、概ね第46図下段の土層断面図にある1層黒褐色土をベースとした土が堆積していた。

出土遺物は、上層部では、定量の土師器片が出土したが、それらについては、甕体部片ないしは器種不明の細片で、復元・図化不能のものばかりであった。なお、上層部では、土師器片のほかに須恵器片3点（甕体部片1点、壺の蓋ないしは身の破片2点）も出土した。下層部では土師器・須恵器片が少量出土した。161の須恵器壺身・162の須恵器無蓋高壺の口縁部は、その下層部出土のものである。161の壺身は、口縁端部に内傾する段が見られ、外底面は約1/2の範囲が回転ヘラケズリされている。また、内底面は回転ナデ調整のみである。162の無蓋高壺の口縁部については、破片が小さく図



第46図 1号土坑(上段)・2号土坑(下段) 平面図・断面図 ($S = 1/30$)・出土土器 ($S = 1/3$)

化できなかったが、外面に見られる二段の稜線の下に波状文が施されている。なお、この無蓋高坏の図は、口縁部残存1／12程度の細片を図化したものであり、口径などの点でやや不安がある。下層部では、これら2点の須恵器のほかに、細片のため図化できなかったものとして、くの字口縁の土師器甕口縁部片1点、畿内系の土師器高坏脚部片1点も出土した。土師器高坏脚部片の外面には、ハケ調整痕が一部で見られる。

当土坑の時期については、上記の161の須恵器坏身が、陶邑田辺編年のTK23型式～TK47型式、中村編年のI型式4段階～5段階（古墳時代5世紀末から6世紀前葉）に位置付けられ、その時期に位置付けられると思われる。

3号土坑（第47図～第54図）

15C地区内の南東側に位置する。平面形は、長径約650cm、短径約380cmの不整な橢円形状を呈し、大型の土坑である。土坑の底には、北側で3箇所、中央で2箇所、南側で1箇所の、合計5箇所の落ち込みが見られ、確認面からの深さは、深いところで約30～40cmある。また、この土坑の西側には、後述する4号土坑とつながるように、5cm程度の浅い落ち込みが見られる（この浅い落ち込みの部分では、遺物はほとんど出土しなかった）。平面で確認したときは、複数の土坑が重なっているものと思われたが、土層断面でそのようなことは確認されず、1基の土坑として扱った。

土層断面について見ると、第47図の土層断面図にあるとおり、基本的には、黒褐色の1層と、1層よりやや暗度が強い黒褐色の4層に分けられ、概ね、落ち込みの部分に4層土が、それ以外の部分に1層土が堆積している状況であった。

調査時における遺物の取り上げは、上述の1層出土のものを上層出土遺物として、4層出土のものを下層出土遺物として取り上げようとしたが、1層土と4層土との違いが、暗度がやや強いか弱いかというだけであったため、1層出土のものと4層出土のものとに分けて遺物を取り上げるのは、極めて困難で、ほとんど不可能であった。そこで、確認面より概ね10cmまでの深さから出土したもの（ほぼ1層から出土したもの）を上層部出土遺物、それより下から出土したもの（基本的には4層出土遺物であるが、1層出土遺物が若干混じる）を下層部出土遺物として取り上げた。

出土した遺物の量は非常に多く、パンケースにして約10箱分あった。そのほとんどは土器で、土器以外には土製支脚が3点出土した。

遺物の出土状況については、第48図に上層部、第49図に下層部の遺物出土ドットマップを掲載してある。上層部では、ほぼ全体的に遺物が分布している。下層部では、当然のことながら、上述の4層土が堆積している土坑内の落ち込み部分に遺物が分布する傾向にあるが、南側落ち込み内の南東部分と中央西側落ち込み内の東側部分に遺物が特に集中していることが見られる。また、中央西側落ち込み内の遺物集中部では、高坏の脚部片が11点と多く出土した。

出土遺物については、以下、上層部出土遺物と下層部出土遺物とに分けて見ていくこととする。

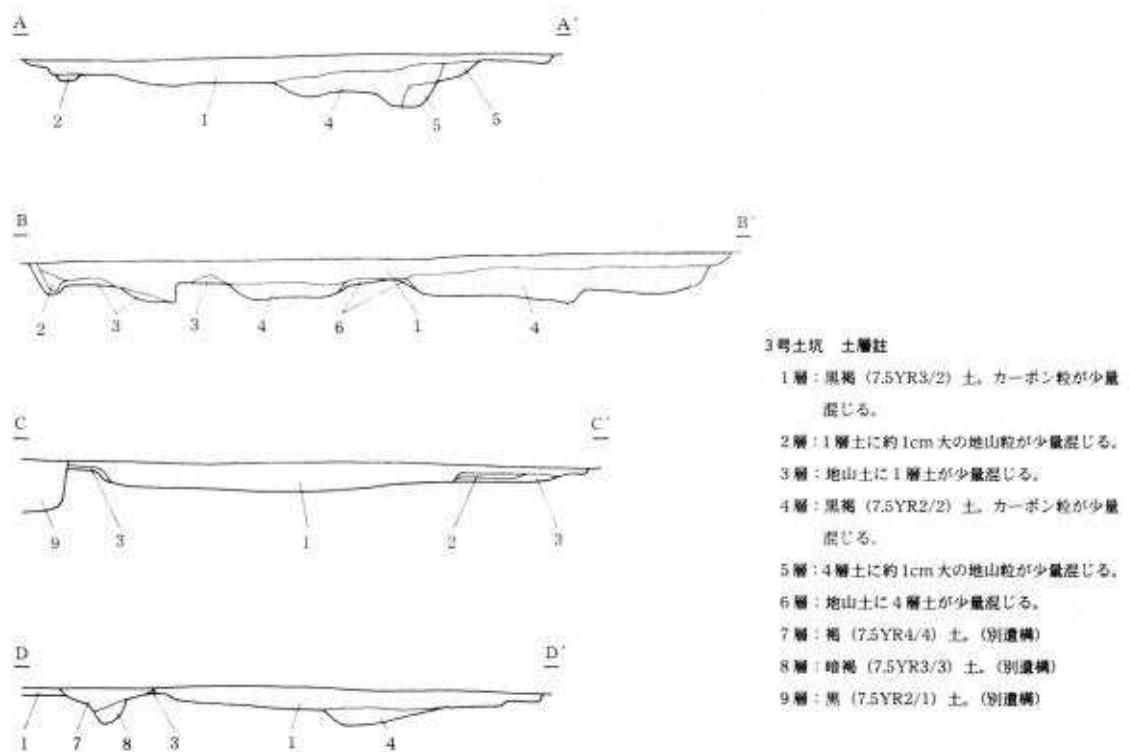
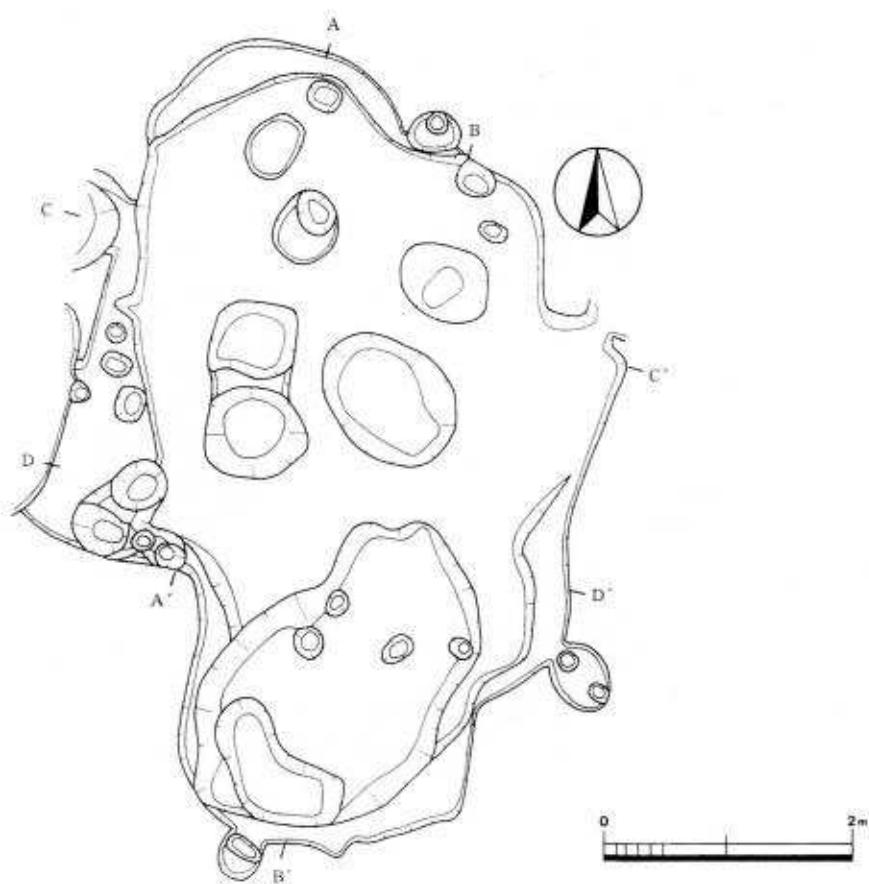
上層部出土遺物（第50図・第51図）

（甕：163～165）163はくの字口縁の甕口縁部。頸部下の内面には粗い接合痕が残されている。164は布留甕の口縁部、165は山陰系甕の口縁部である。

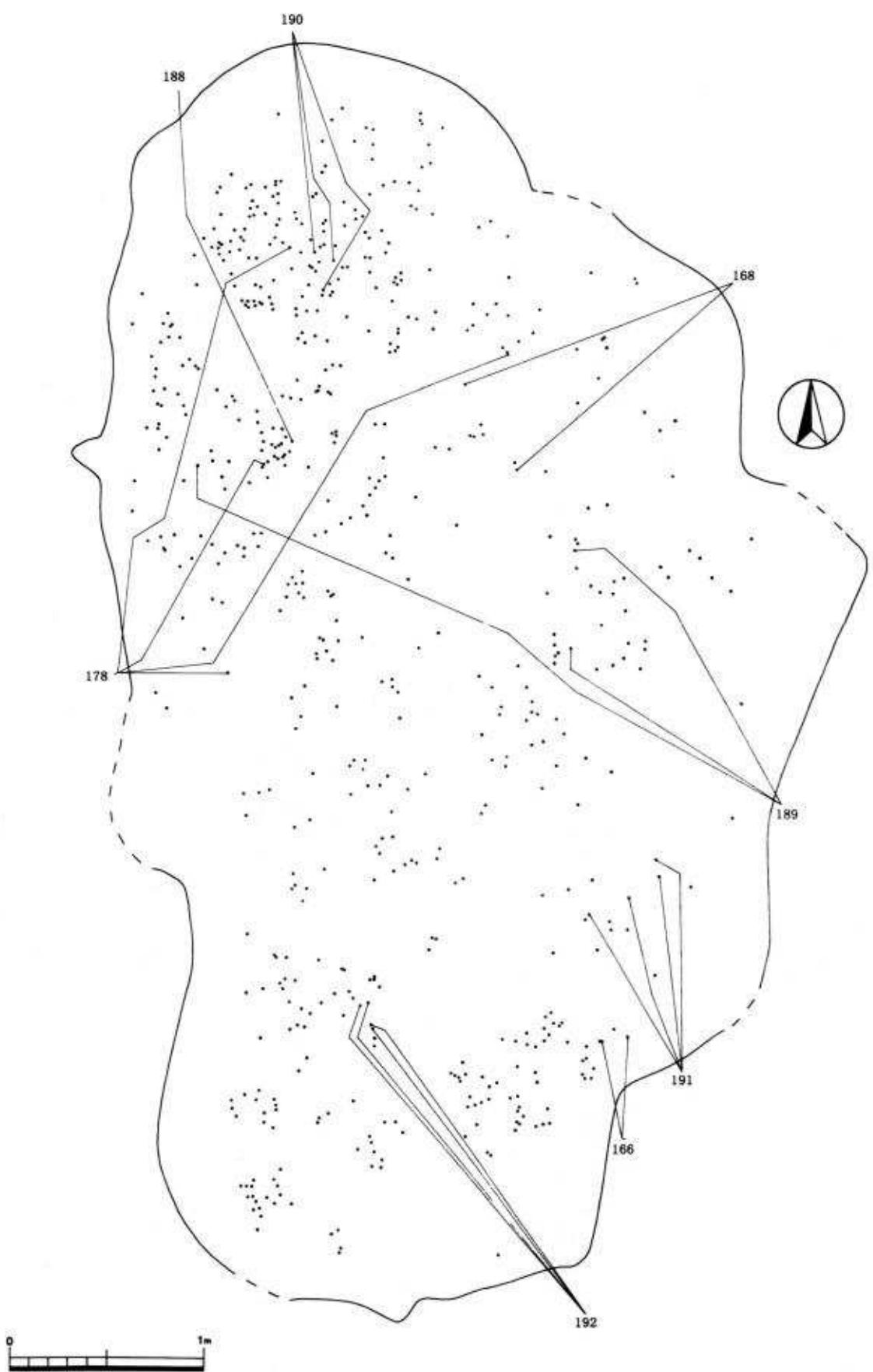
（小甕：166）166の小甕は、概ね全体の1／4に復元される。体部下半外面は二次被熱を受け、赤褐色を呈し、体部中位外面にはススが少量付着している。

（壺：167）167は山陰系壺の口縁部である。

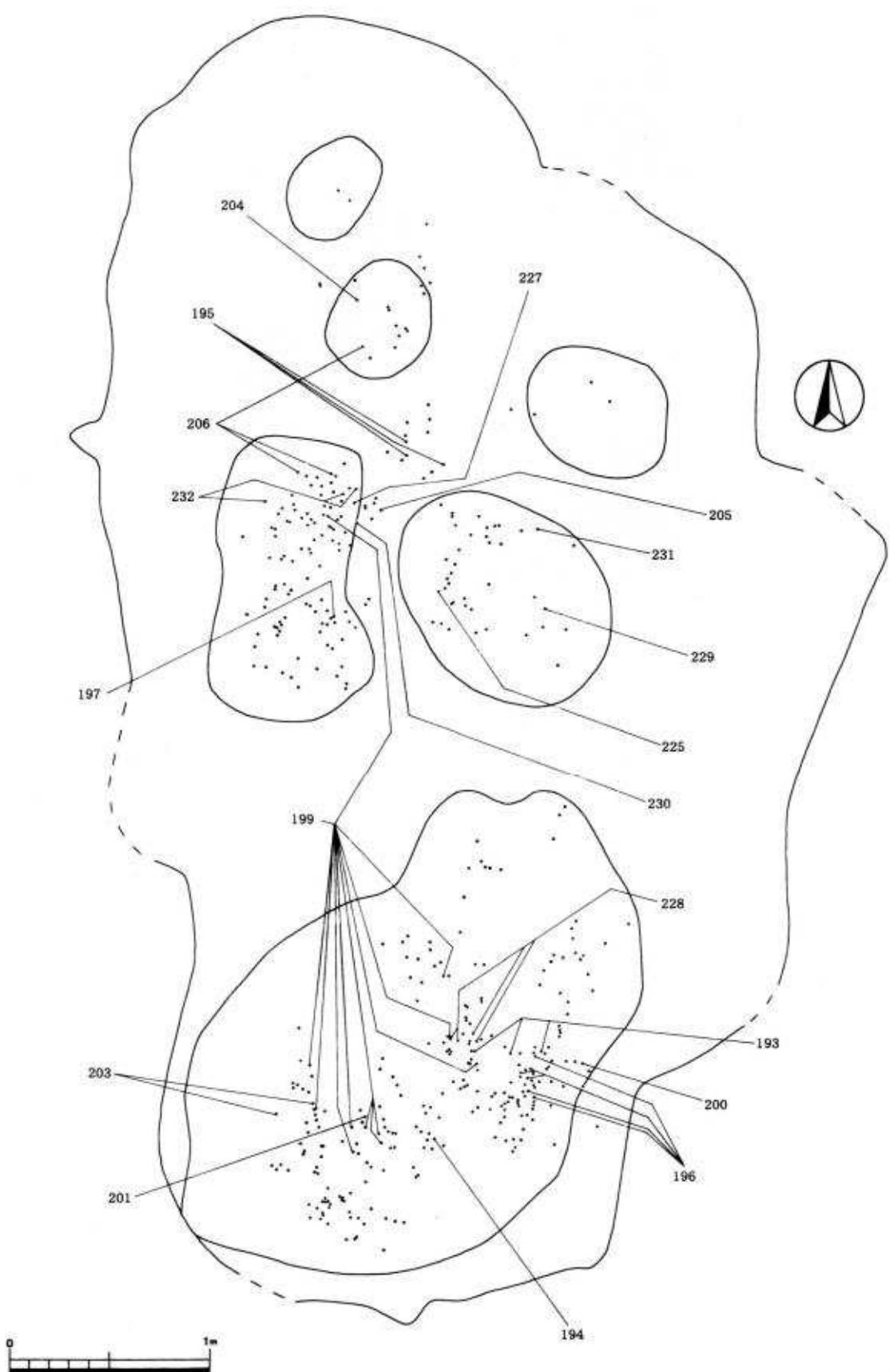
（高坏：168～177）168は、底部から屈曲して立ち上がって口縁部に至り、底部と体部との境



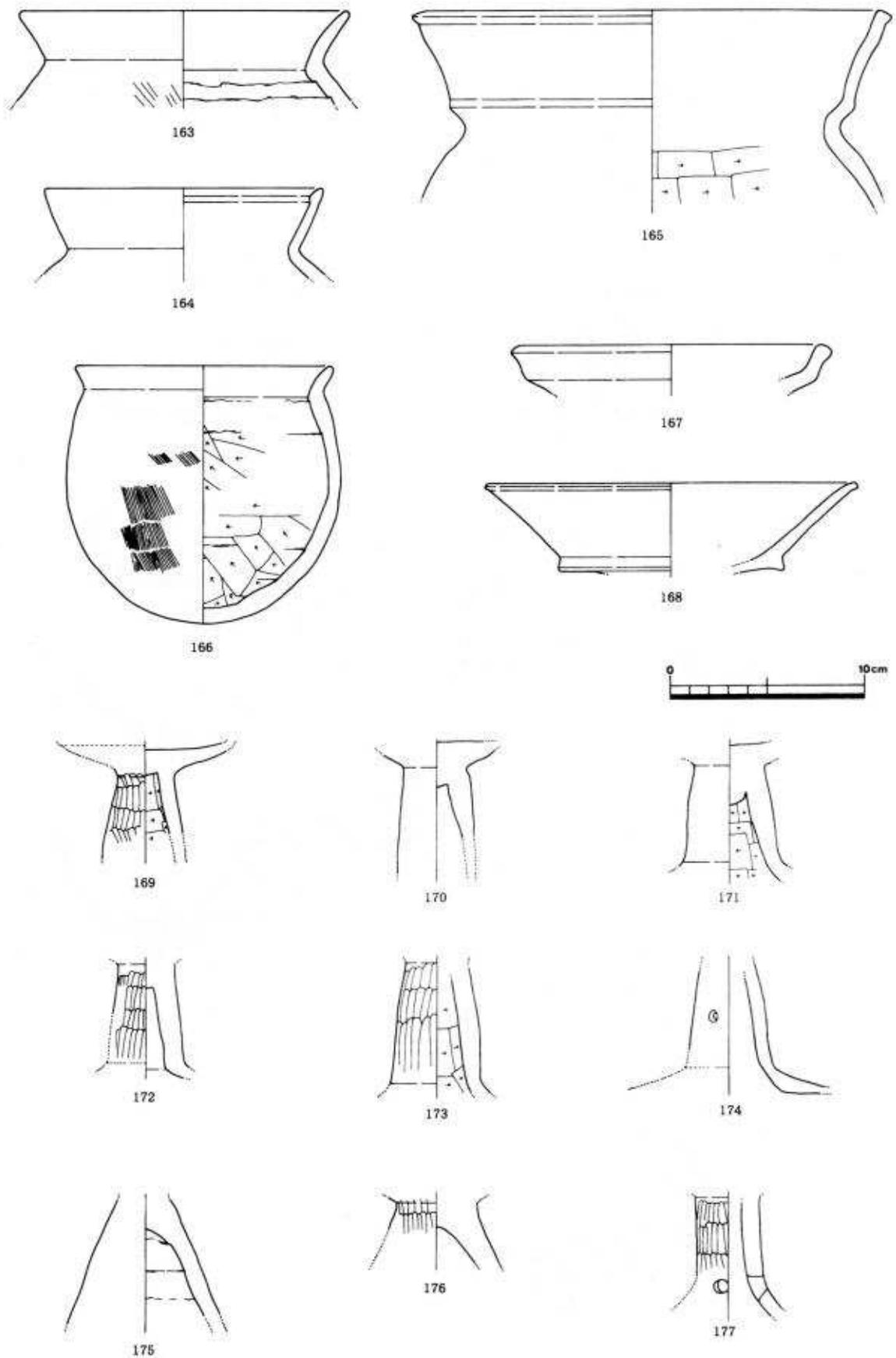
第47図 3号土坑 平面図・断面図 (S = 1/60)



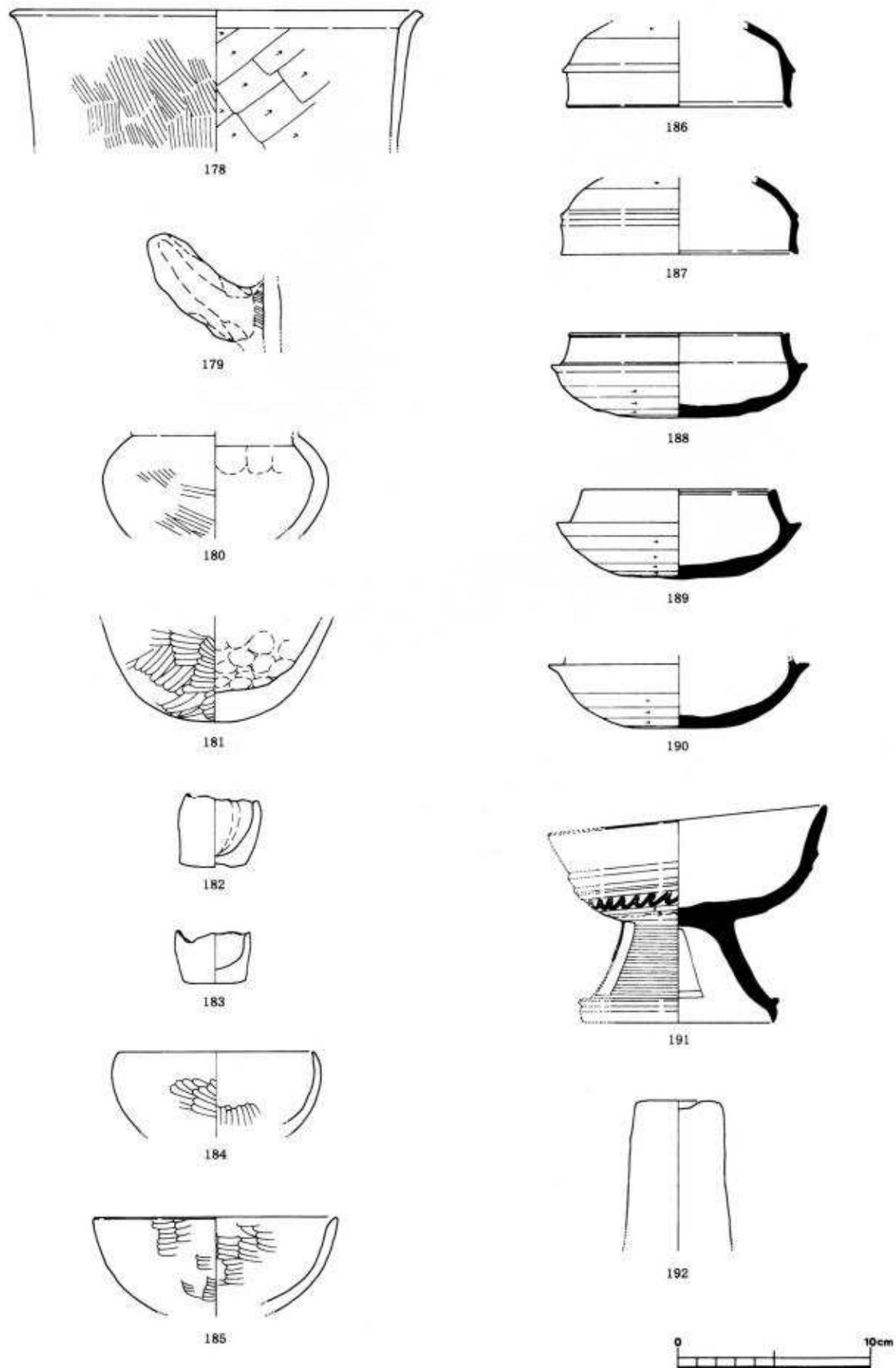
第48図 3号土坑 上層部遺物出土ドットマップ ($S = 1/30$)



第49図 3号土坑 下層部遺物出土ドットマップ ($S = 1/30$)



第50図 3号土坑 上層部出土土器（その1）(S=1/3)



第51図 3号土坑 上層部出土土器（その2）(S = 1/3)

に突帯が付く高壺の脚部。赤く発色する胎土を用いた赤色土器である。169から175は、下に向かって開きぎみの脚柱部から外へ屈曲して脚裾部に至る、畿内系高壺の脚部である。169・170は脚柱部があまり開かないもの、171～174は脚柱部がやや開きぎみのもの、175は脚柱部が大きく開くものである。169・174は赤く発色する胎土を用いた赤色土器で、174の脚柱部の外面には、棒状具で刺突したような円形の凹み（穿孔ではない）が1箇所ある。177は、筒状の脚柱部からラッパ状に開いて脚裾部に至る高壺脚部。脚柱部から脚裾部至る部分に円形の穿孔が3箇所見られる。（甌：178・179）178の甌は、口縁部内外面がヨコナデされているが、口縁部外面のヨコナデされている部分には薄くハケ調整された痕跡が見られる。ハケ調整後、口縁部外面のヨコナデが行われたようである。

（小型土器：180・181）180は壺形小型土器の体部、181は壺形小型土器（小型とするにはやや大きく、単に壺とすべきかもしれないが）の底部である。181の底部は、器壁が厚く、重厚感がある。

（手づくね土器：182・183）平底の手づくね土器であるが、182の底部外面は、1条の凹みができるように、ヘラ状具で2回削ってある。

（碗：184・185）いずれも碗の口縁部であるが、184の口縁端部は内湾しながら先細りしており、185の口縁端部は先細りしながら外へのびている。いずれも赤く発色する胎土を用いた赤色土器である。

（須恵器壺蓋：186・187）いずれも須恵器壺蓋の口縁部。186の口縁端部は、外方へ屈曲してやや大きく張り出しており、内面には内傾する面を持って、その面には段が見られない。これに対し、187の口縁端部には、内傾する明瞭な段が見られる。また、187の口縁部と天井部との境にある稜の下には凹線状の凹みが見られ、その凹みによって、稜が浮かび上がったような感じとなっている。なお、187の外面には、ゴマ塩状にやや多く自然釉がかかっている。

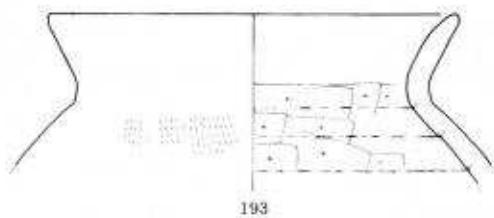
（須恵器壺身：188～190）188は半完形品として出土した。口縁端部には、やや不明瞭ではあるが、内傾する段が見られる。底部外面は底部全体の2／3以上が回転ヘラケズリされ、底部内面中央には一方向のナデ調整痕が見られる。比較的平坦な形をした底部である。189は半完形品に復元できたもので、一部下層部出土の破片と接合される。口縁端部には、やや不明瞭ではあるが、内傾する段が見られる。底部外面は底部全体の2／3以上が回転ヘラケズリされ、底部内面は回転ナデ調整のみとなっている。188に比べ、丸みを持った底部である。190は底部のみ半完形品に復元できたものである。底部外面は底部全体の約1／2がヘラケズリされ、底部内面は回転ナデ調整のみである。他の須恵器に比べ、白っぽくやや生焼けに近い状態に焼けているものである。

（須恵器無蓋高壺：191）半完形品に復元できたもので、後述する5号土坑から出土した脚部片1点と接合する。口縁部は若干外反して外上方へ伸び、口縁端部は先細りぎみに丸く作られている。壺体部外面には2条の凸線があり、その下には波状文が施されている。壺底部外面は、回転ヘラケズリされており、それは波状文の直下にまで及んでいる。また脚部との接合によってできた接合痕も見られる。脚部には長方形のスカシ窓が3箇所あり、脚部外面には力キ目が見られる。なお、壺部内面全体には、薄くゴマ塩状に自然釉がかかっている。

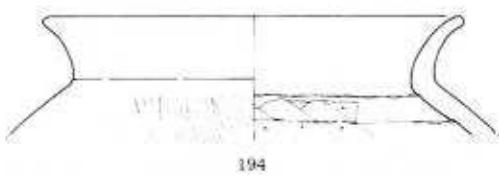
上層部では、以上の土器の他、上面が凹んだ土製支脚の上部（192）が出土している。

下層部出土土器（第52図～第54図）

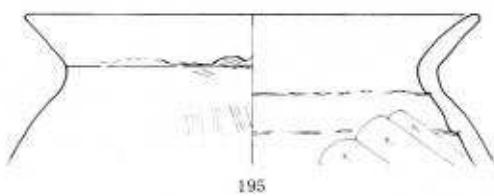
（甌：193～200）193～198はくの字口縁の甌口縁部。基本的に、口縁部から頸部外面、口縁部内面がヨコナデ、体部外面がハケ調整、体部内面がヘラケズリされているが、193と196の頸



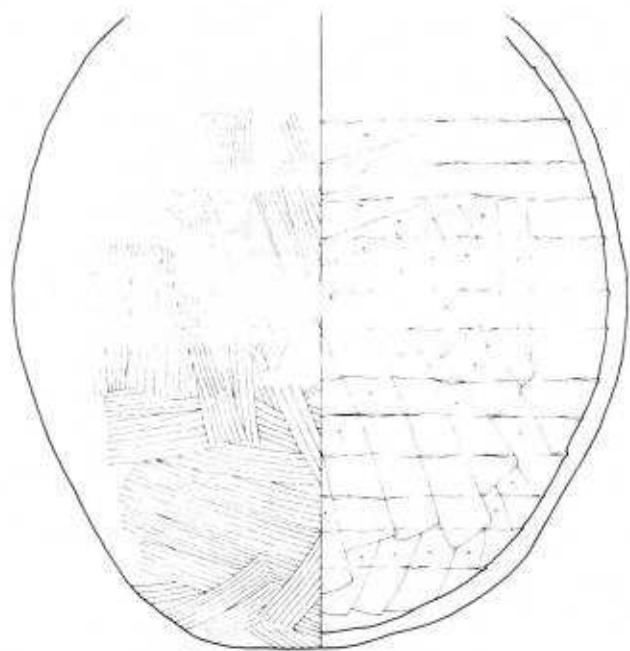
193



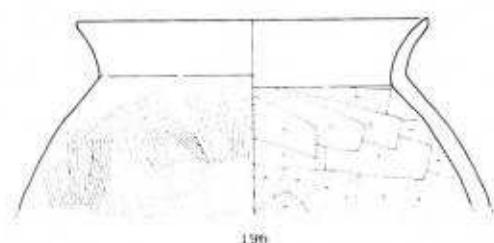
194



195



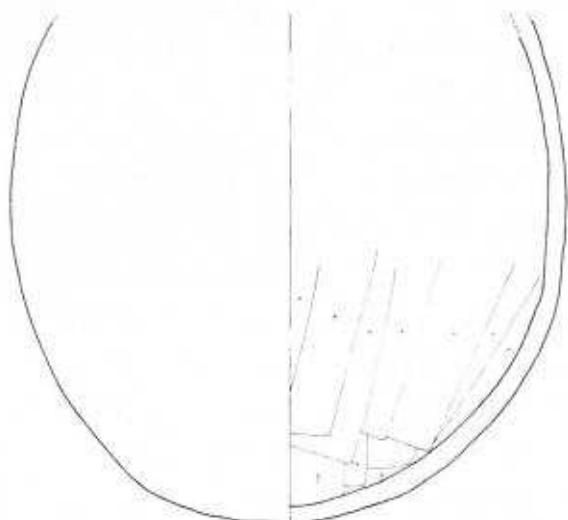
199



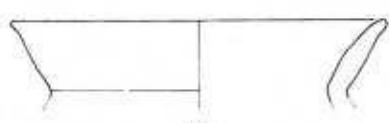
196



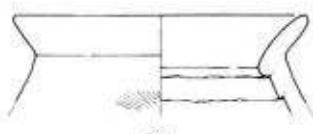
197



200



198

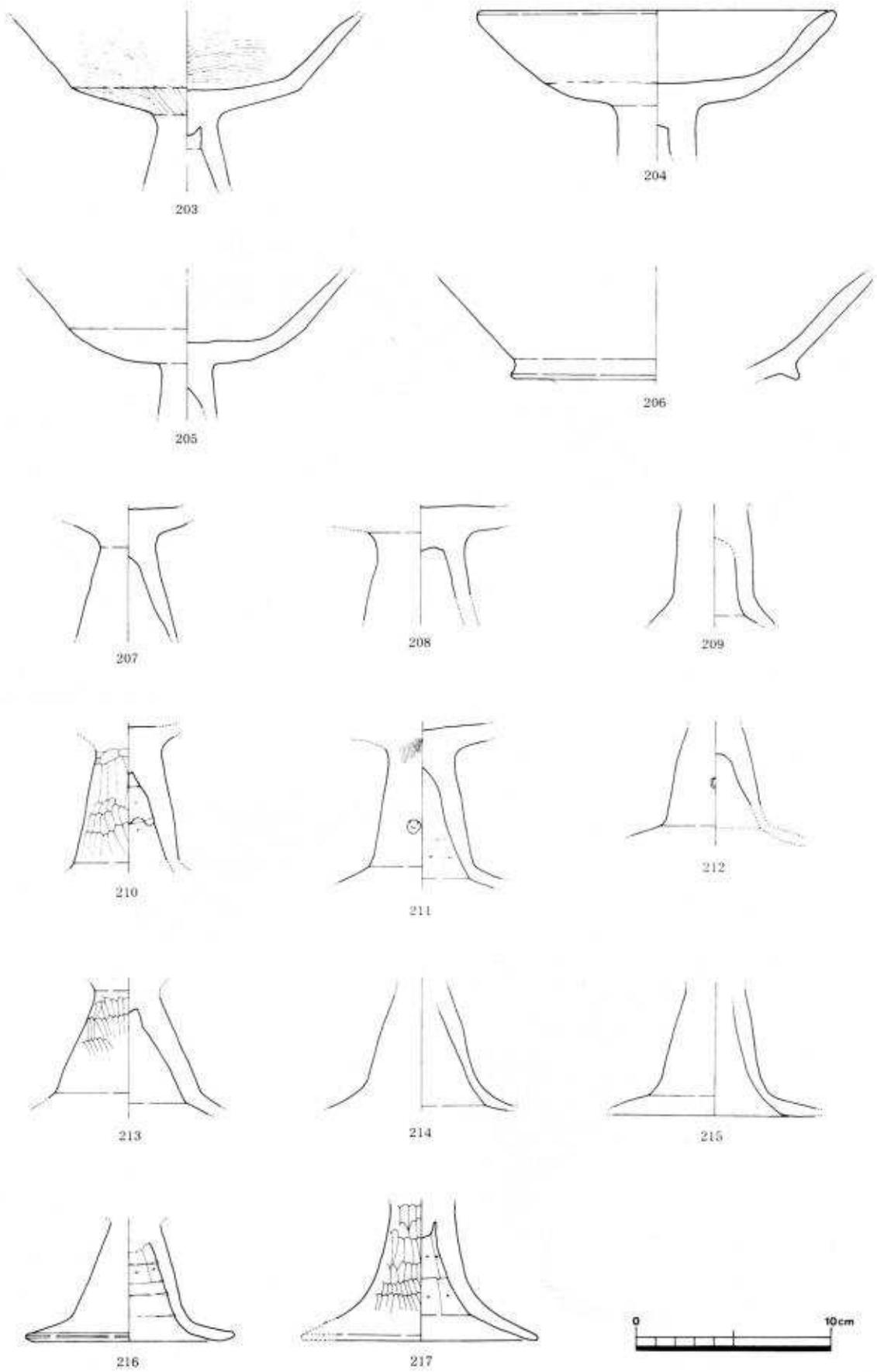


201

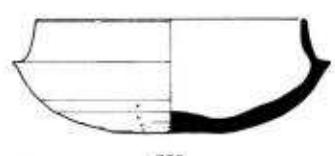
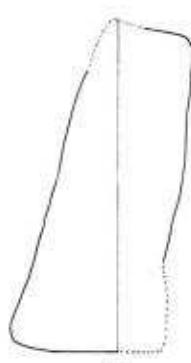
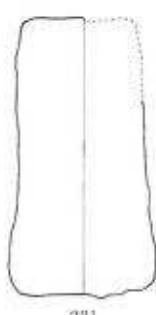
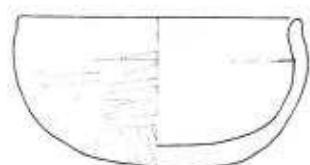
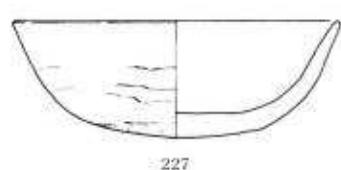
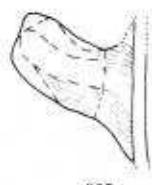
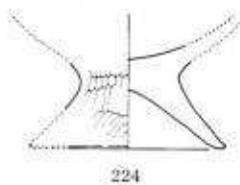
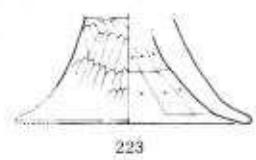
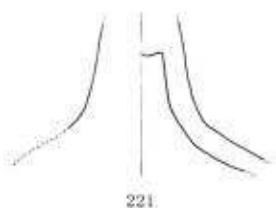
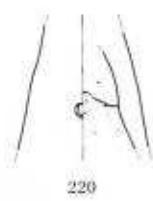
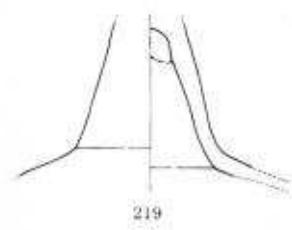
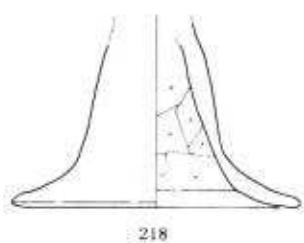


202

第52図 3号土坑 下層部出土土器（その1）(S=1/3)



第53図 3号土坑 下層部出土土器 (その2) (S = 1/3)



第54図 3号土坑 下層部出土土器（その3）(S=1/3)

部外面では、ハケ調整後にヨコナデを行っており、ヨコナデによって消されたハケ調整痕がかすかに見られる。199・200は、丸底の底部を持つ甕の体部から底部。199は、外面のハケ調整痕や色調などから見て、193の甕口縁部と同一個体のものと思われる。

(小甕：201) 201はくの字口縁の小甕の口縁部。頸部下内面にはヘラケズリなどの痕跡は見られず、粗く接合痕を残している。

(壺：202) 202は山陰系の壺の口縁部である。後述する当土坑の時期よりも古い時期に位置付けられると思われるもので、混入品である。

(高坏：203～221) 203～205は、坏底部から外上方に屈曲して口縁部に至る、畿内系高坏の坏部である。いずれも浅い坏部である。203の坏部内外面には、ハケ調整痕が残されている。また、205は、赤く発色する胎土を用いた赤色土器である。206は、坏底部から外上方に屈曲して口縁部に至り、底部と体部との境に突帯が付く高坏の坏部である。

207～217は、土坑内中央西側の落ち込みで多く出土した高坏の脚部である。207・208は坏部と脚柱部との接合部で、いずれの脚柱部とも下方へやや開きぎみである。209～217は、脚柱部から脚裾部に至る部分で、209は脚柱部があまり下方へ開かず直立ぎみのもの、210・211は脚柱部が下方へやや開きぎみのもの、212～217は脚柱部が下方へ比較的大きく開くものである。いずれの脚柱部とも概ね短い脚柱部である。なお、211の脚柱部外面には、棒状具で刺突したような円形の凹み（穿孔ではない）が1箇所見られ、212の脚柱部には円形の穿孔が1箇所見られる。また、212・214・215は、赤く発色する胎土を用いた赤色土器である。

218～221は、土坑内中央西側以外から出土した高坏脚柱部である。218・219は土坑内中央東側の落ち込みより、220は土坑内南側の落ち込みより、221は土坑内中央西側落ち込みの北隣にある落ち込みより出土した。いずれも脚柱部が下方へ比較的大きく開き、短い脚柱部である。220は脚柱部に円形の穿孔が1箇所ある。219は赤色土器である。

(器台：222) 碗形状の受部にハの字状に聞く脚部が付く畿内系（布留系）の小型器台である。破片が小さく数は不明であるが、脚部に円形の穿孔がある。赤く発色する胎土を用いた赤色土器である。なお、後述する当土坑の時期より古い時期に位置付けられると思われるものであり、混入品である。

(脚部：223・224) 223・224は、脚付の壺のものと思われる脚部である。

(甕：225) 225は、甕の把手の部分である。把手部の付根部はハケ調整され、先端部はナデ調整されている。

(手づくね土器：226) 226は丸底の手づくね土器である。

(碗：227～229) 227は完形品として出土、228は半完形品に復元され、229は口縁部以外が完形として出土した。227の口縁部は若干外反しているが、外上方に伸びている。口縁部内面、口縁部から体部外面はヨコナデされ、体部から底部内面は、上から見ると反時計回りに、ヘラ状具で細かくナデ調整している。底部外面には若干盛り上がっているところがあり、その部分は不整方向のヘラケズリ調整が行われている。228は体部から口縁部に至るところで内湾し、口縁端部で外反する。外面はハケ調整、内面はナデ調整されている。229は赤色土器である。

(須恵器坏身：230) 230の坏身は、概ね全体の1/4の破片として出土した。口縁端部は丸く作られ、底部外面は、約1/2の範囲が回転ヘラケズリされている。底部内面には、不整方向のナデ調整痕が見られる。

下層部では、上記の土器のほか、231（略完形品）・232（略完形品）の土製支脚が出土した。

当土坑の時期については、下層部出土土器から判断して、漆町編年の13群期（古墳時代5世紀中葉

～後葉頃)に位置付けられると考えられるが、下層部出土の須恵器坏身230が、陶邑田辺編年のTK23型式、中村編年のI型式4段階に位置付けられるものと思われ、その点から考えて、漆町編年13群期でも新しい段階(5世紀後葉頃)に位置付けられると考えられる。

また、上層部出土土器についても、164の布留甕口縁部、165の山陰系甕の口縁部、167の山陰系壺の口縁部(以上、古墳時代前期)、176のハの字状に開く高坏脚部(弥生時代末～古墳時代初頭か)、177の高坏脚部(月影式期)が下層部出土土器よりも古い時期のもので、これらを混入品と判断すれば、下層部出土土器と時期的に概ね合致する。ただし、須恵器坏蓋187については、陶邑田辺編年のMT15型式ないしはTK10型式古段階、中村編年II型式1段階ないしは2段階に位置付けられるものと思われ、やや新しい時期のものである。

4号土坑(第55図・第56図)

15C地区内の南東側、前述の3号土坑の西隣に位置する。当土坑の西側は調査区域外(その調査区域外の部分は既に削平されていた)となっており、土坑の東側部分のみを確認した。確認した部分は、南北方向で約400cm、東西方向で約250cmあり、大型の土坑である。平面形は不整な形を描き、平面で確認したときは、複数の土坑が重なっているものと思われたが、土層断面でそのようなことは確認されず、1基の土坑として扱った。深さは、全体としては確認面より10cmほどであるが、土坑内の中央と南側に落ち込みがあり、その部分で確認面より25cmほどある。土層断面については、第55図の土層断面図にあるとおり、概ね1層の黒褐色土が堆積している状況であった。土坑内にある落ち込み部分の土層断面図は作成できなかったが、その部分についても、基本的に1層の黒褐色土が堆積している状況であった。なお、当土坑の東側に、前述の3号土坑の西側から続く落ち込みがある。土層断面図で、当土坑とその落ち込み部分との間の切り合い(当土坑の時期については後述するが、当土坑が古く、落ち込み部分が新しいという切り合い)が、理屈の上では見られるはずであったが、肉眼による土層観察では、その切り合いが見られなかった。

遺物は、パンケースにして約1箱と比較的多く、すべて土器であった。遺物の出土状況については、第55図の遺物出土ドットマップにあるとおり、主に土坑内中央と南側にある落ち込みに分布する状況であった。

出土土器については、第56図に掲載してある。

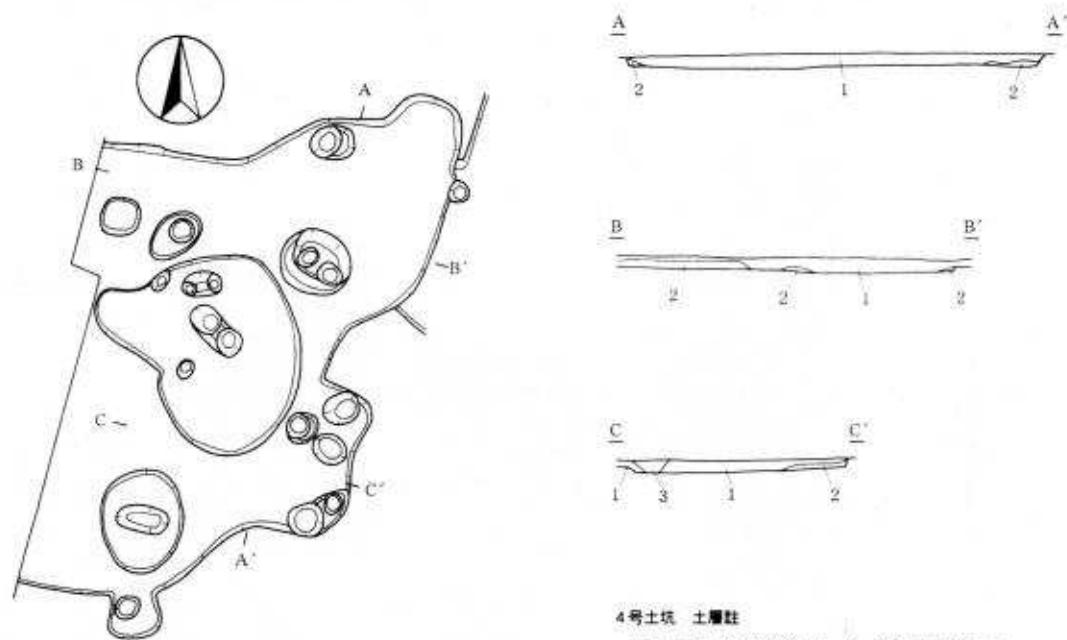
233は布留甕の口縁部から肩部。器壁が薄いタイプで、肩部外面には横方向のハケ調整痕が見られる。口縁部外面には少量の、胴部最大径のあたりの外面には多量のススが付着している。234は布留甕の口縁部。非常に短い口縁部で、口縁部の断面が三角形状を呈す。235は、有段口縁の大型甕の口縁部。当土坑の主要な土器に比べ、時期が古いもの(弥生時代後期後半の法仏式期のものと思われる)で、混入品である。

236は山陰系の壺の口縁部である。

237・238は坏底部から外上方に屈曲して口縁部に至る畿内系高坏で、237は坏部、238は坏部と脚部との接合部である。237の坏部は、やや深く、外面はヨコナデされ、内面はヘラミガキされている。238も外面がヨコナデされ、内面はヘラミガキされている。237は赤色土器である。

239～242は、下方へ開きぎみの脚柱部から外方へ屈曲して脚裾部に至る畿内系高坏の脚部で、239～241は脚柱部、242は脚裾部である。239・240は比較的長く、241は比較的短い脚柱部である。これら脚柱部はいずれも赤色土器である。

243はハの字状に開く高坏脚部で、赤色土器である。

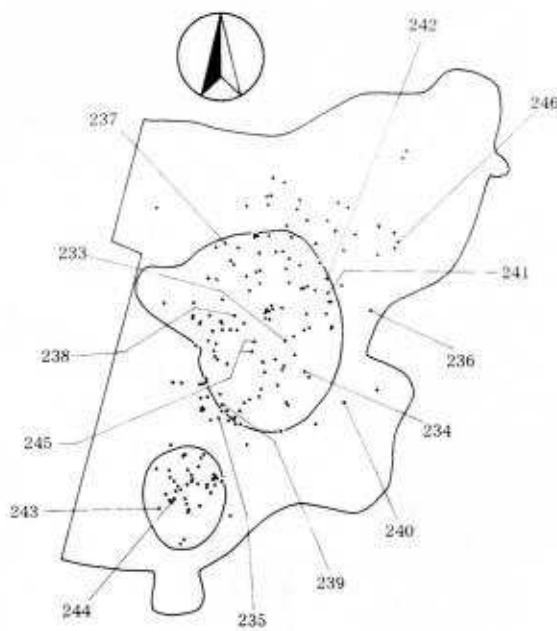


4号土坑 土層性

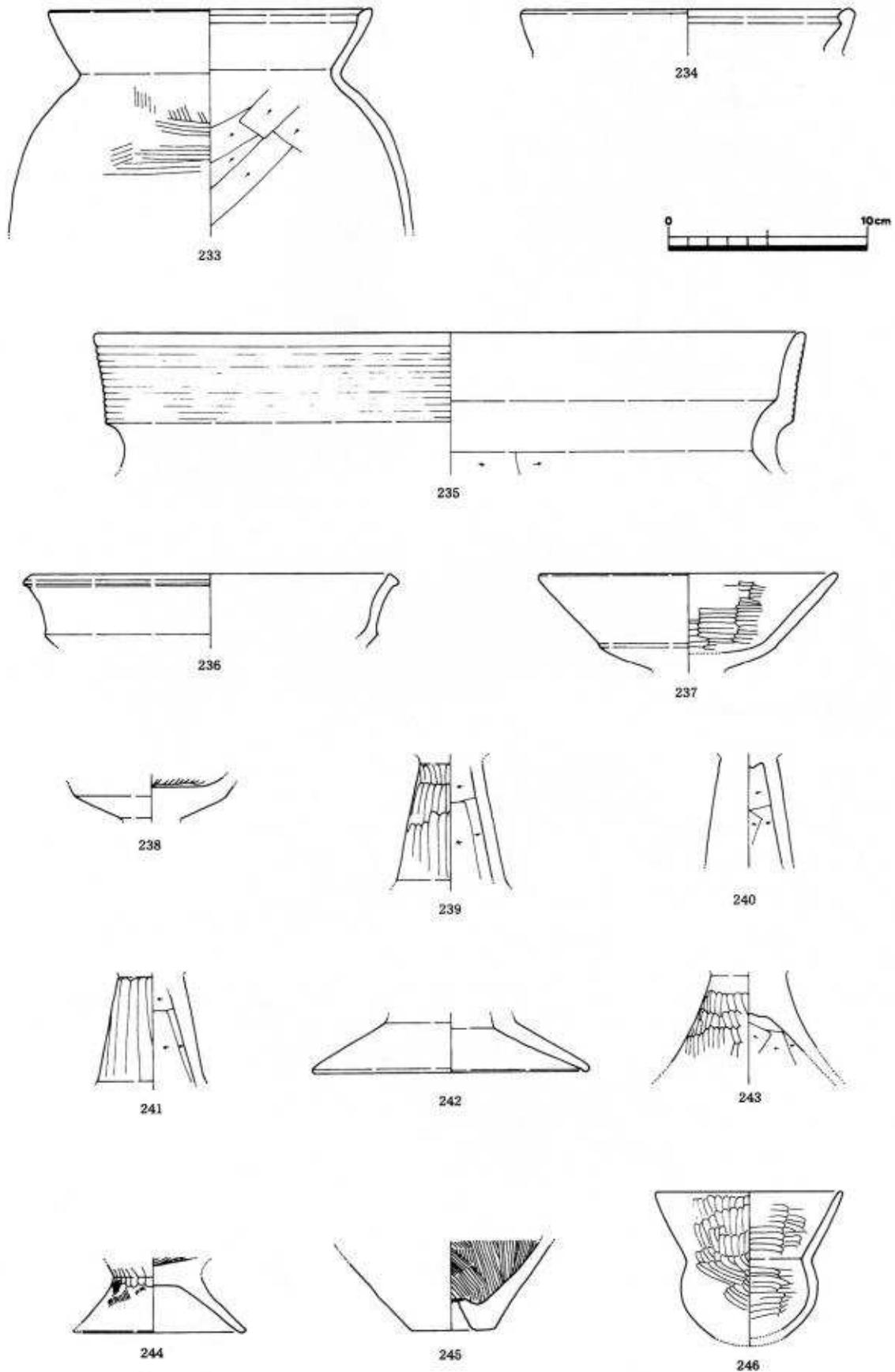
1層：黒褐色 (7.5YR3/2) 土。カーボン粒少量混じる。

2層：地山土に1層土少量混じる。

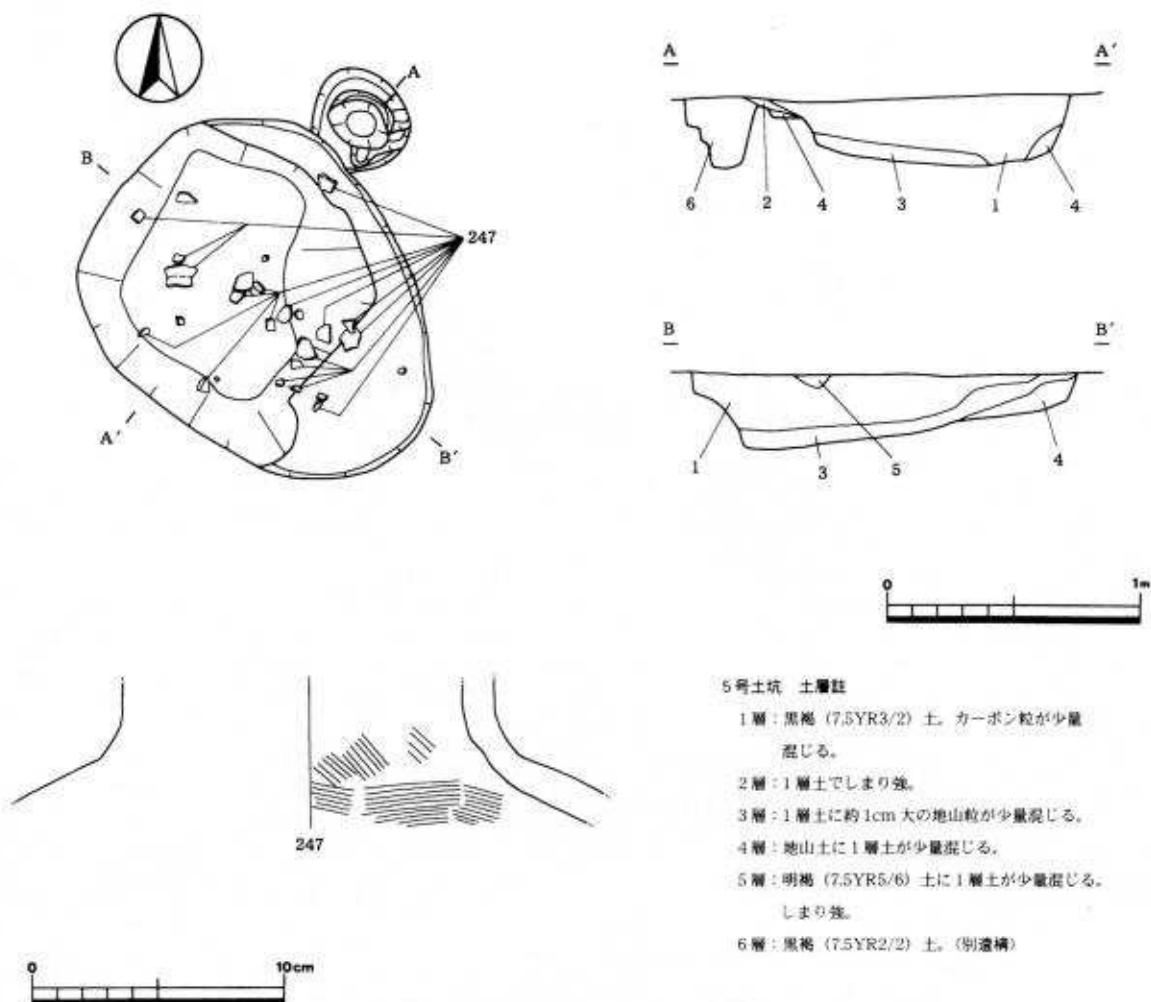
3層：黒褐色 (7.5YR3/1) 土。カーボン粒多量混じる。



第55図 4号土坑 平面図・断面図 遺物出土ドットマップ ($S = 1/60$) ($H = 4.300m$)



第56図 4号土坑 出土土器 ($S = 1/3$)



第57図 5号土坑 平面図・断面図 ($S = 1/30$) ($H = 4.300m$) および出土土器 ($S = 1/3$)

244は脚付の壺の脚部と思われるものである。

245は、底部に円形の穿孔が1つある甑形土器の底部である。外面はヨコナデされ、内面はハケ調整、外底面はナデ調整されている。

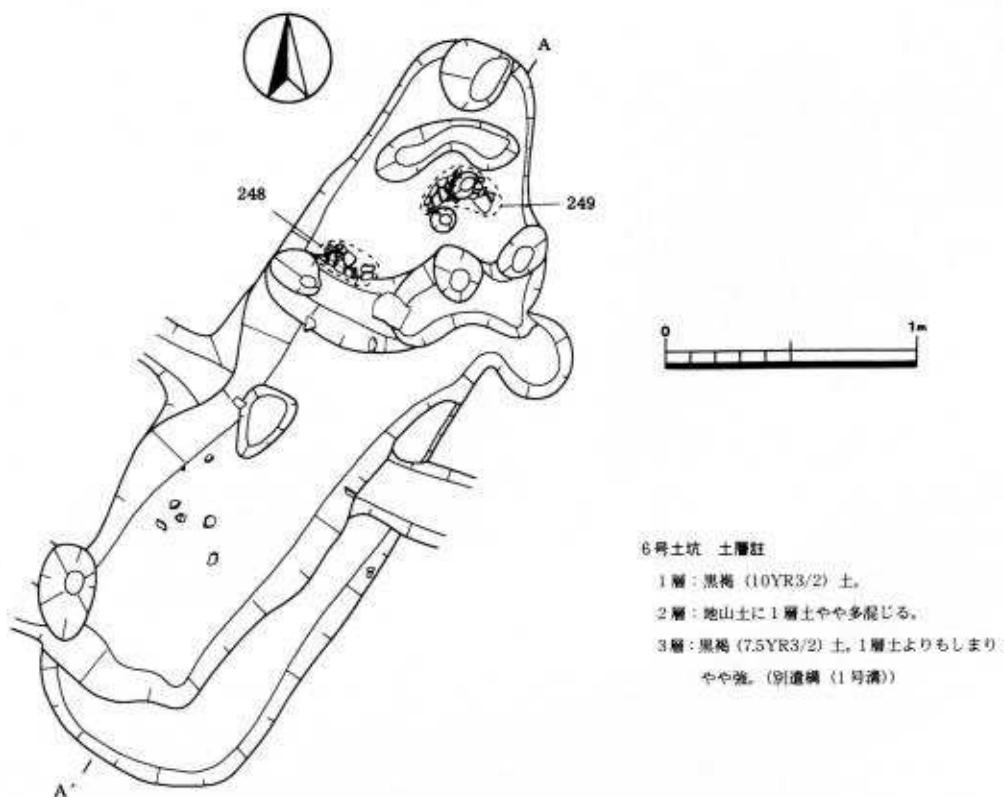
246は小型丸底土器で、全体の約1/4の破片となって出土した。

当土坑の時期については、上記の出土土器から判断して、漆町編年10群期（古墳時代4世紀後半）頃に位置付けられるものと考えられる。

5号土坑（第57図）

15C地区内の南東側、前述の3号土坑の南隣に位置。平面形は、長径約150cm、短径約120cmの橢円形状を呈す。土坑内の西側で落ち込んでおり、その落ち込んだところで、約30cmの深さがある。土層断面については、第57図の土層断面図にあるとおり、概ね、上層部に黒褐色土の1層、下層部には1層の黒褐色土に約1cm大の地山粒が混じる3層が堆積している。

出土遺物については、定量の土器片が出土した。247は、器壁が約1.5cmと厚い、大型壺の頸部であるが、この大型壺と同一個体といえる体部片が当土坑から多く出土した（多く出土したが、接合は

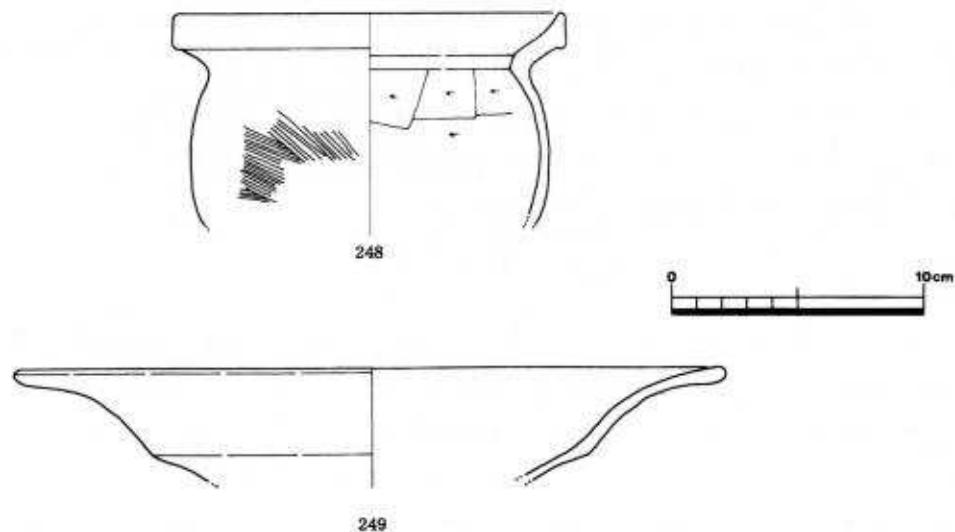
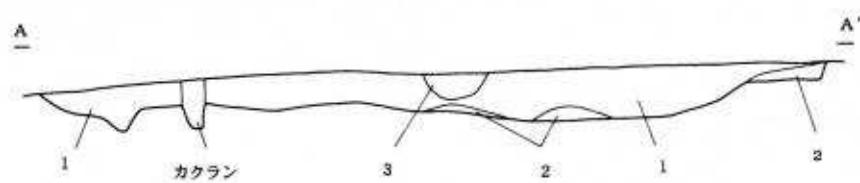


6号土坑 土層図

1層：黒粘（10YR3/2）土。

2層：地山土に1層土や多混じる。

3層：黒粘（7.5YR3/2）土。1層土よりもしまり
やや強。（別遺構（1号構））



第58図 6号土坑 平面図・断面図 ($S = 1/30$) ($H = 4.900\text{m}$) および出土土器 ($S = 1/3$)

できず、一個体に復元できるほどの量はない。また、頸部片は7~10cm大の破片1点のみである)。頸部片と体部片の多くは、1層土から出土したが、一部の体部片は3層土より出土していた。この大型壺の頸部外面はヨコナデ、頸部内面はハケ調整されているが、体部については内外面ともハケ調整されている。このほか、3号土坑の上層部から出土した須恵器無蓋高杯(第51図191)と接合する須恵器高杯脚部片(脚部の約1/3の破片)が出土している。

当土坑の時期については、定量の土器片が出土しているが、器種が分かるものが上記の2点のみであり、時期決定しがたい。しかし、3号土坑の上層部から出土した須恵器無蓋高杯が、陶邑田辺編年TK23型式、中村編年I型式4段階(古墳時代5世紀末頃)に位置付けられるものと考えられ、その無蓋高杯と接合する脚部片が出土していることから、概ねその無蓋高杯の時期に位置付けられるのではないかと思われる。

6号土坑(第58図)

15D地区内の北西側に位置。長径約330cm、短径約110cmの楕円形状の平面形を呈す。深さは約10cm~20cmある。土層断面は、第58図の土層断面図にある黒褐色土の1層が主として堆積している状況であった。また当土坑は、1号溝(第58図土層断面図の3層)に切られていることが確認された。

出土遺物は、定量の土器片が出土している。248は、有段口縁を持つ壺の口縁部から体部。口縁部の断面は三角形状を呈す。口縁帶外面はヨコナデされ、擬凹線は施されていない。口縁帶外面と胴部最大径あたりの外面にススが多量に付着している。249は、壺底部から外上方へ屈曲し、大きく外反しながら伸びて口縁部に至る有段高杯壺部の口縁部から壺体部である。接合はできなかったが、同一個体といえる脚柱部と壺底部との接合部の破片も出土した。

当土坑の時期については、上記の出土土器から法仏式期(弥生時代後期後半)に位置付けられると考えられる。249の高杯壺部の口縁部が大きく外反し、比較的伸びている点は、やや新しい様相ではないかと思われるが、248の口縁帶がほとんど伸びず、断面が三角形状を呈している点、当土坑が、法仏式期に位置付けられると考えられる1号溝(1号溝の時期については後述する)に切られている点から、当土坑は法仏式期でもやや古い時期に位置付けられるのではないかと思われる。

7号土坑(第59図・第60図250~257)

15D地区内西側調査区域の南東隅に位置する。平面形は、長径約120cm、短径約70cmの不整な楕円形状を呈し、東側に8号土坑が、西側に9号土坑がつながる。深さは確認面より約30cmあり、第59図A-A'土層断面図にある1層黒褐色土が主として堆積している状況であった。

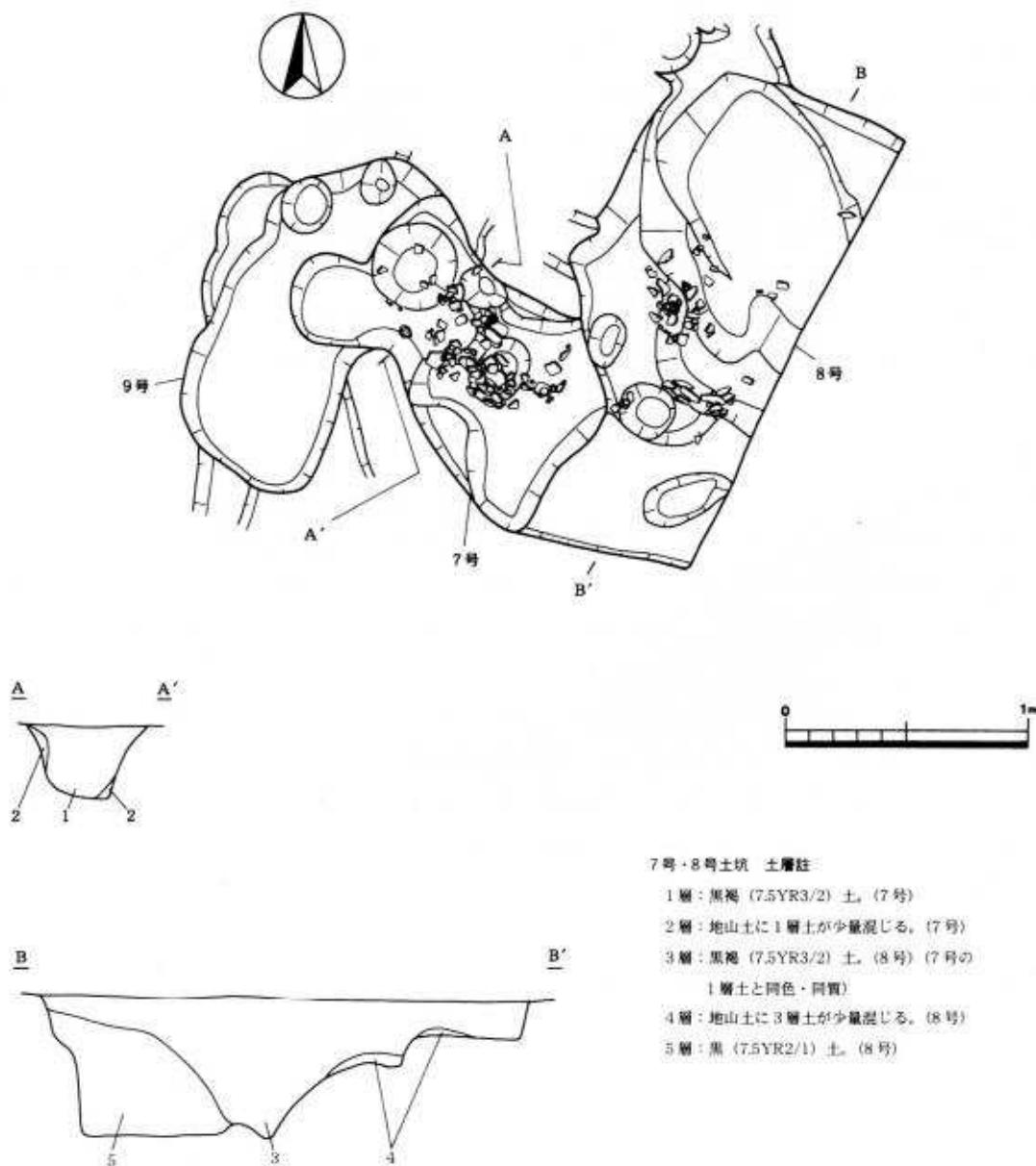
出土遺物は定量の土器片が出土しており、主に土坑の中央部に分布していた。

250は、山陰系壺の口縁部で、複合口縁が退化して、口縁部に見られる段が緩やかになってしまったものである。

251は、畿内系高杯の壺部である。壺底部から体部に至る屈曲はほとんどなく、碗形に近い形を呈し、浅い壺部であると思われる。内外面ともナデ調整されているが、壺底部外面にはハケ調整痕が残っている。

252~257は、平底を持ち、いわば壺ないしは鉢形を呈する小型土器である。いずれも内面には指ナデによる指頭痕が見られる。なお、256は8号土坑出土の破片と接合する。

当土坑の時期については、上記の出土土器から、漆町編年13群期(古墳時代5世紀中葉~後葉頃)

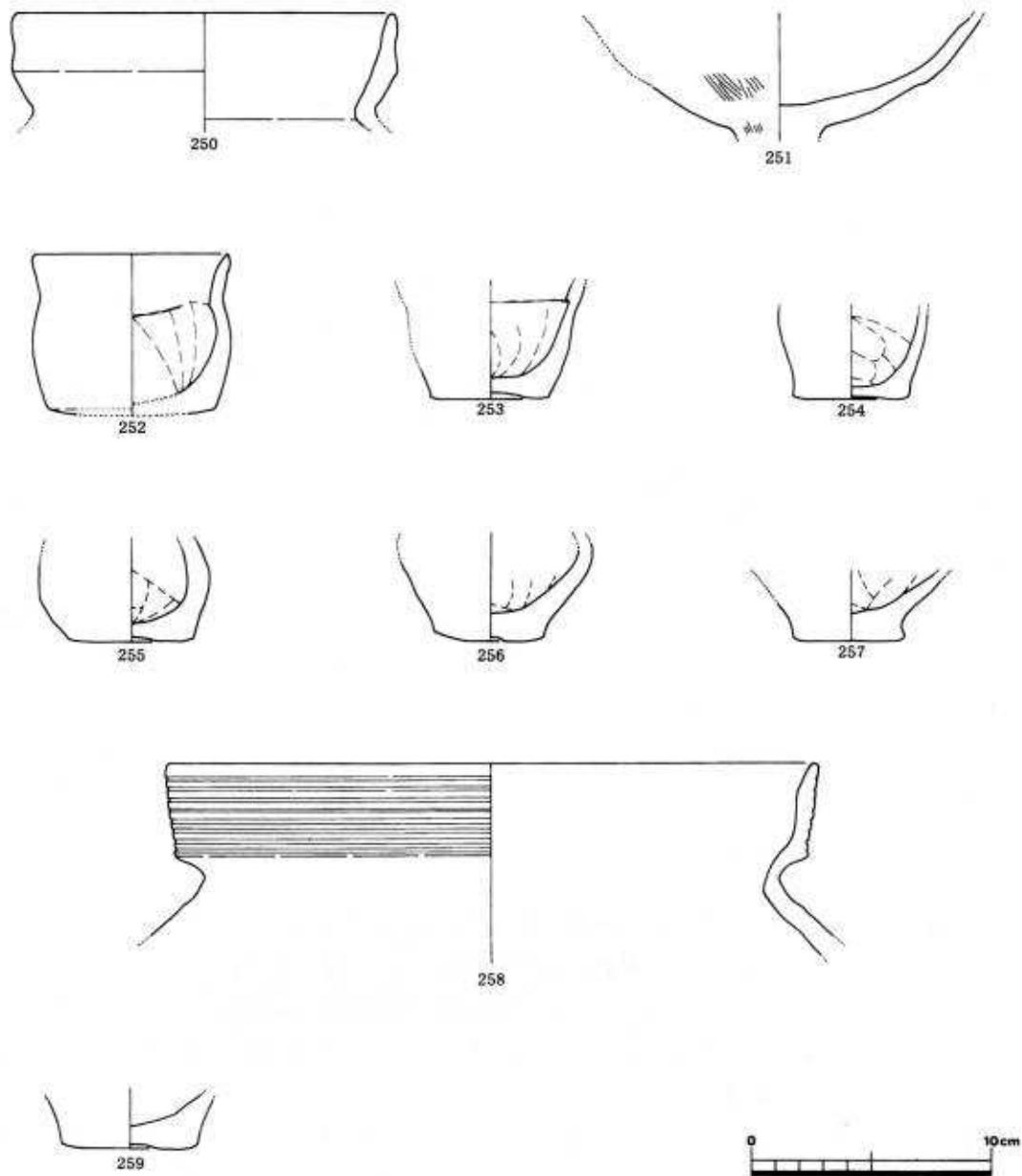


第59図 7号・8号・9号土坑 平面図・断面図 ($S = 1/30$) ($H = 4.800\text{m}$)

に位置付けられると考えられる。当土坑から6点と多く出土した小型土器(252~257)は漆町編年13群期を象徴する器種といわれており、その点から考えても妥当である。

8号土坑(第59図・第60図258・259)

15D地区内西側調査区域の南東隅、前述の7号土坑から東側へつながるように位置する。当土坑の東側は調査区域外であり、土坑の西側部分のみを確認した。確認した部分の北東側で落ち込んでおり、その落ち込んだ部分で確認面より約60cmの深さがある。土層断面については、第59図B-B'土層断面図のとおり、主に3層の黒褐色土が堆積し、土坑内北東側に5層の黑色土が3層土に切られるようにして存在していた。なお、3層の黒褐色土は、前述の7号土坑で堆積していた黒褐色土と同色・同質



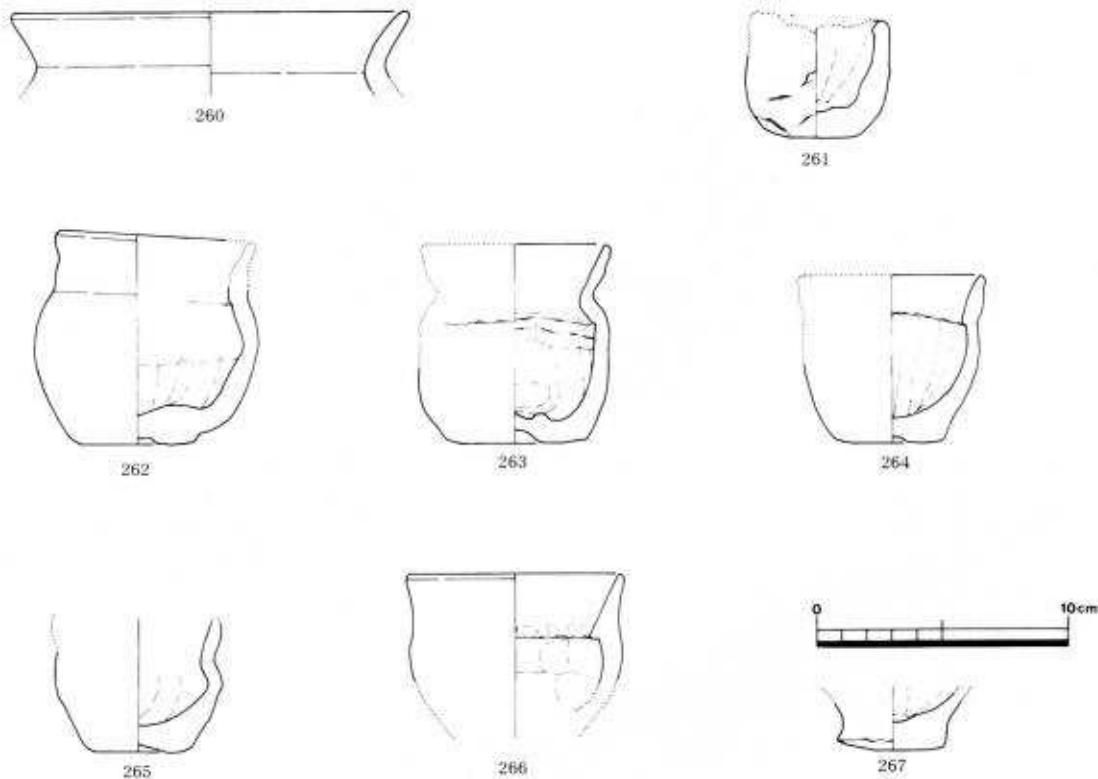
第60図 7号・8号土坑 出土土器 (S = 1/3)

のものであった。

遺物は定量の土器片が出土したが、そのすべては3層土からの出土であり、5層土からは1点も遺物が出土しなかった。また、3層土でも上面に近い部分から主に出土した。

258は有段口縁を持つ大型の甕の口縁部。口縁部で約1/3に復元される。大半の破片は当土坑の中央よりやや南寄りのところから出土しているが（1片のみ土坑の北東側より出土している）、一部の破片は7号土坑の中央部から出土した。なお、この甕口縁部は、後述する当土坑の時期より古いもの（法仏式ないしは月影式期）で、比較的大きく復元されたが、混入品である。

259は、平底の底部で、壺ないしは鉢形を呈する小型土器の底部と思われる。内面は摩滅して詳細は不明であるが、指ナデによってできた指頭痕らしき凹凸が若干見られる。



第61図 9号土坑 出土土器 ($S = 1/3$)

上記の土器のほか、くの字口縁の甕口縁部片が1点（細片のため図化できなかった）、外面がハケ調整され、内面がヘラケズリされている甕体部片が定量出土している。甕体部片の中には、肩部ではないかと思われるものがあり、その内面には、接合痕が粗く残されている。また、外面のハケ調整痕や色調などから見て、7号土坑出土の甕体部片と同一個体といえるものが比較的多く出土している（7号土坑からもその体部片は比較的多く出土している）。

当土坑の時期については、図化した土器からは明確には判断できない。しかし、7号土坑出土の甕体部片と同一個体といえる体部片が出土している点、7号土坑出土の小型土器（256）が当土坑の破片と接合する点などから（混入品とした有段口縁の甕口縁部（258）の破片も両土坑から出土している）、当土坑は、7号土坑と同時期の漆町編年13群期（古墳時代5世紀中葉～後葉頃）に位置付けられると考えられる。

9号土坑（第59図・第61図）

15D地区内西側調査区域の南東隅、7号土坑の西側につながるように位置。長径約150cm、短径約60cmの楕円形状の平面を呈する。深さは確認面より25cmほどある。また、当土坑の南側には、遺物が全く出土しない黒色土が堆積している風倒木痕と思われる落ち込みが、当土坑とつながるように存在していた。

当土坑の上面には、地山土と同色・同質の土（明褐（7.5YR 5/6）粘質土）が確認面より10cmほどの厚さで堆積しており、遺構の平面プラン確認のときには当土坑を確認できなかった。その後、7号土坑の西側壁面を検出しようとした際、その壁面がなかなか検出されず、そのまま7号土坑の西側

を広げていき、結局、7号土坑とは別の当土坑の大半を掘り下げるというミスを犯してしまった。よって、当土坑の土層断面図は作成できなかったが、当土坑の上面にある、地山土と同色・同質の土の下には、7号土坑に堆積している黒褐色土と同色・同質の土のみが堆積していた。なお、当土坑の遺物出土状況図についても作成しなかったが、主に黒褐色土から遺物が出土し、概ね土坑の全体に分布していた状況であった。

出土遺物は定量の土器が出土している。

260はくの字口縁の甕口縁部である。甕については、この口縁部のほか、図化できなかったが、丸底を持つ甕の体部下半から底部が出土している。外面はハケ調整、内面はヘラケズリされ、体部内面の底部に近い部分では、所々で接合痕が見られる。この甕と同一個体といえる体部片が比較的多く出土しており、1個体の甕が当土坑に捨てられていたのではないかと思われる。

261～267は、壺ないしは鉢形を呈する小型土器で、261は体部からほぼ直立して口縁部に至るもの、262～266はくの字の口縁部を持つものである。また、265は赤色土器である。

当土坑の時期については、漆町編年13群期（古墳時代5世紀中葉～後葉）を象徴する器種といわれる小型土器（261～267）が6点と多く出土している点から考えて、その時期に位置付けられると考えられる。当土坑が位置している箇所には、時期を同じくする3基の土坑（7号～9号土坑）が連なるようにして存在していたのである。

10号土坑（第62図～第64図）

15D地区の東隅に位置。当土坑の西側には比較的大きな木が立っていて、その根とカクランなどによって、土坑西側が破壊されてしまっていたが、長径約260cm、短径約150cmの楕円形状の平面を呈していたものと思われる。深さは確認面から40cmほどあり、第62図の土層断面図に示してある1層黒褐色土のみが堆積していた。

遺物はほとんどが土器であり、土坑西側が破壊されてしまっていたため、土坑の中央から東側の部分に集中して出土した。その量は非常に多く、パンケースにして約3箱分あり、土坑の確認面から下底面に至るまで出土した。

268・269は、くの字口縁の甕口縁部で、269の口縁部はやや外反しながら伸びているのに対し、268は、口縁部の断面がいわば逆コの字状を呈したような形となっている。

270は、口縁端部が欠けているが、くの字口縁を持つ甕である。口縁端部を除けば約1／2に復元される。

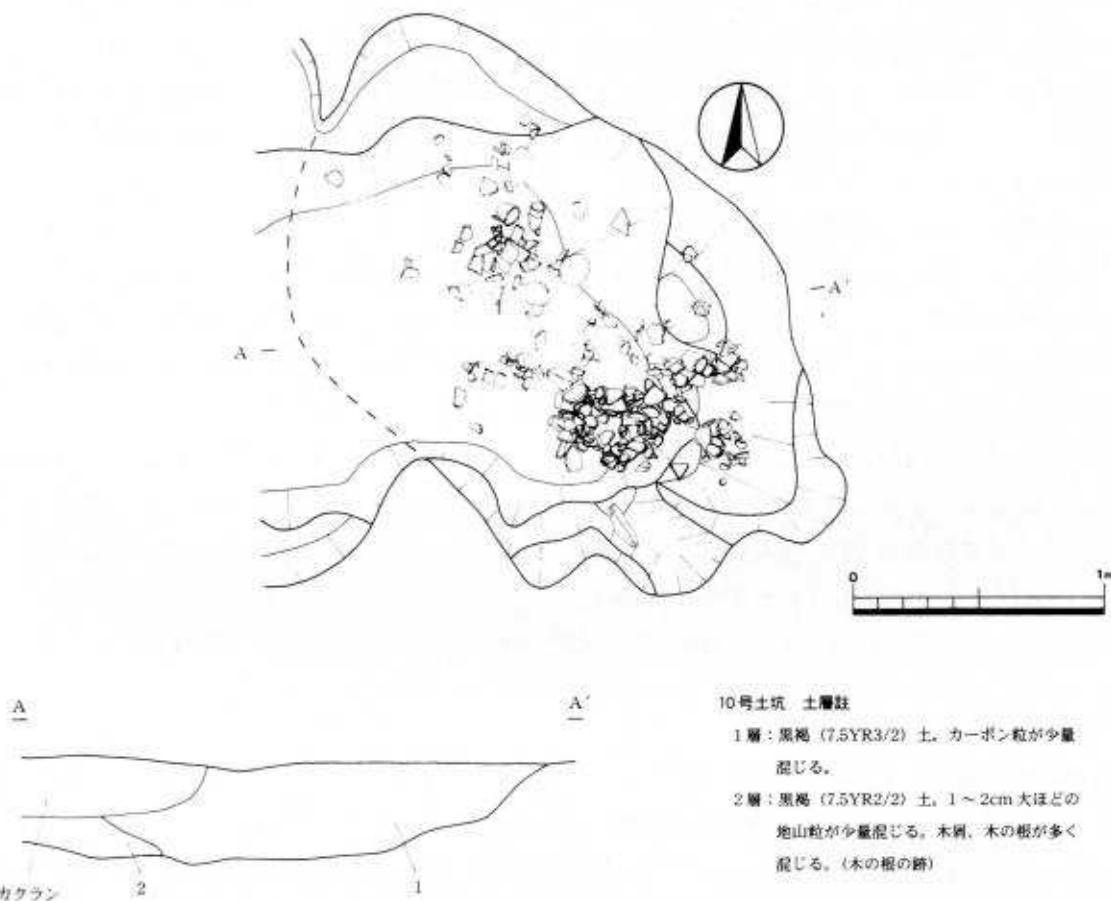
271・272は、複合口縁が退化した山陰系甕の口縁部である

273・274は小甕である。273は略完形に復元される。

275は、上下につぶれた球形を呈する壺の体部である。体部外面上半は入念にヘラミガキされ、下半は不整方向のヘラナデが施されている。また、赤く発色する胎土を用いた赤色土器でもある。口頭部が欠け、体部のみが完形となって出土した。

276は畿内系高坏の坏部である。内外面ともナデ調整され、口縁端部が外反し、やや浅めの坏部である。なお、高坏については、中実タイプの脚柱部が1点出土している（破片が小さく図化できなかった）。

277～292は、壺ないしは鉢形を呈する小型土器で、277～283は、くの字口縁を持ち、壺形を呈するもの、284～287は、体部から口縁部がほぼまっすぐ伸び、鉢形を呈するものである。292以外は底部内面に指ナデによる指頭痕がみられるが（底部のない283は除く）、292の底部内



第62図 10号土坑 平面図・断面図 ($S = 1/30$) ($H = 4.700\text{m}$)

面は不整方向のヘラナデが施されている。なお、第64図には15点の小型土器を掲載したが、このほか、底部細片で小型土器と断定するには難しいが、小型土器である可能性のあるものが6点ある。

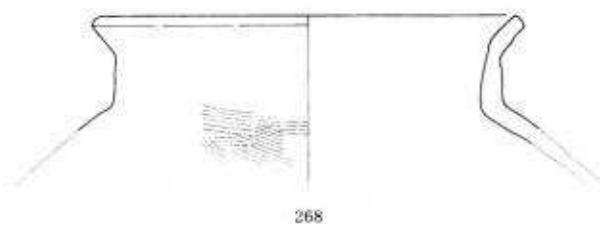
293は須恵器高坏の脚部。底部で約1/4の残存であるため、スカシ窓については不明である。

294は須恵器甕の体部片。外面の叩き目は、木目が彫り込みに対し直交するものである。内面はナデ消しされているが、当て具によってできたと思われる緩やかな凹凸が見られる。須恵器甕体部片については、この294以外に3点出土しているが、いずれの外外面も294と同様である。

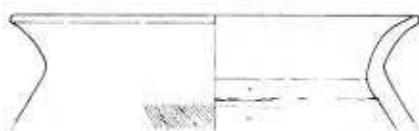
当土坑の時期については、上記の出土土器から判断して、漆町編年13群期（古墳時代5世紀中葉～後葉頃）に位置付けられると考えられる。漆町編年13群期を象徴するといわれる小型土器が15点（可能性のあるものも含めると21点）も出土していることから考えても妥当である。ただし、中実タイプの高坏脚柱部片が1点出土していることから、漆町編年13群期でも、やや新しい時期に位置付けられる可能性も考えられる。

11号土坑（第65図）

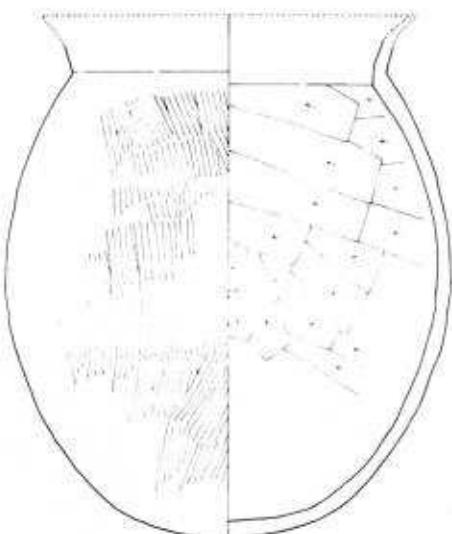
16地区の中央よりやや北西寄りに位置。平面形は約140cm四方の方形状を呈する。そのほぼ中央には直径約70cmの円形状の平面を呈した落ち込みがあり、二段掘り状の土坑となる。深さは、落ち込みの部分で確認面から約50cmある。この土坑の南西側では、北からやや東に振った向きで、土坑から



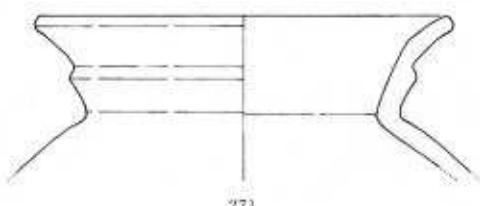
268



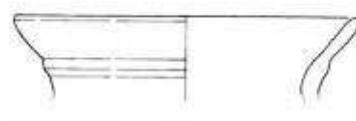
269



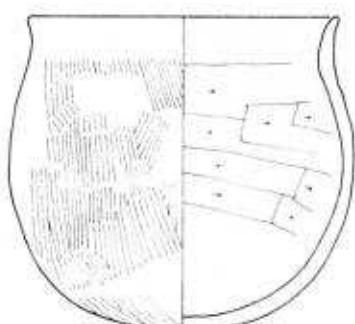
270



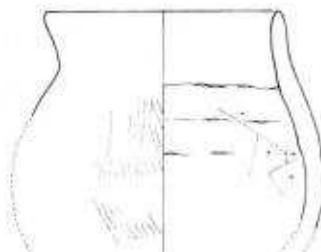
271



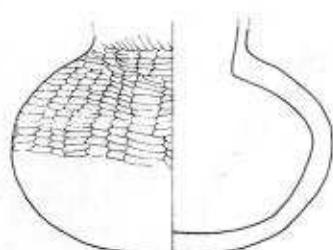
272



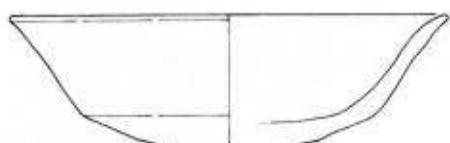
273



274



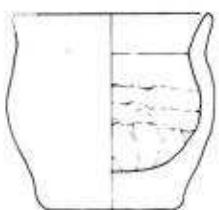
275



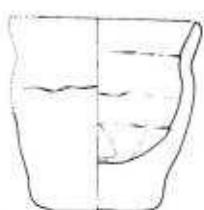
276



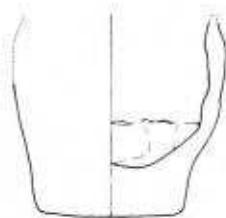
第63図 10号土坑 出土土器（その1）(S=1/3)



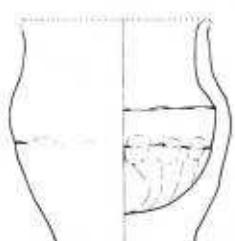
277



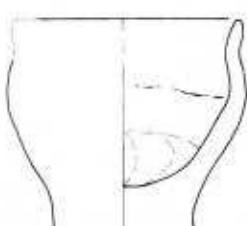
278



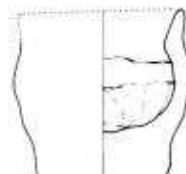
279



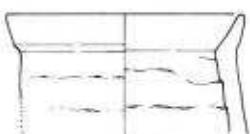
280



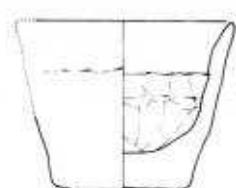
281



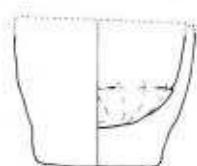
282



283



284



285



286



287



288



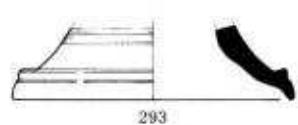
290



291



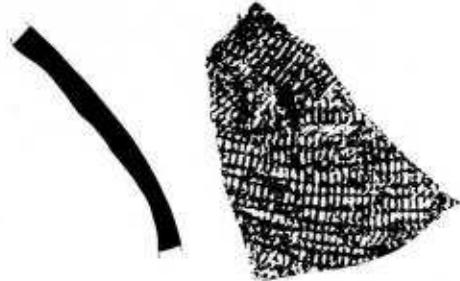
292



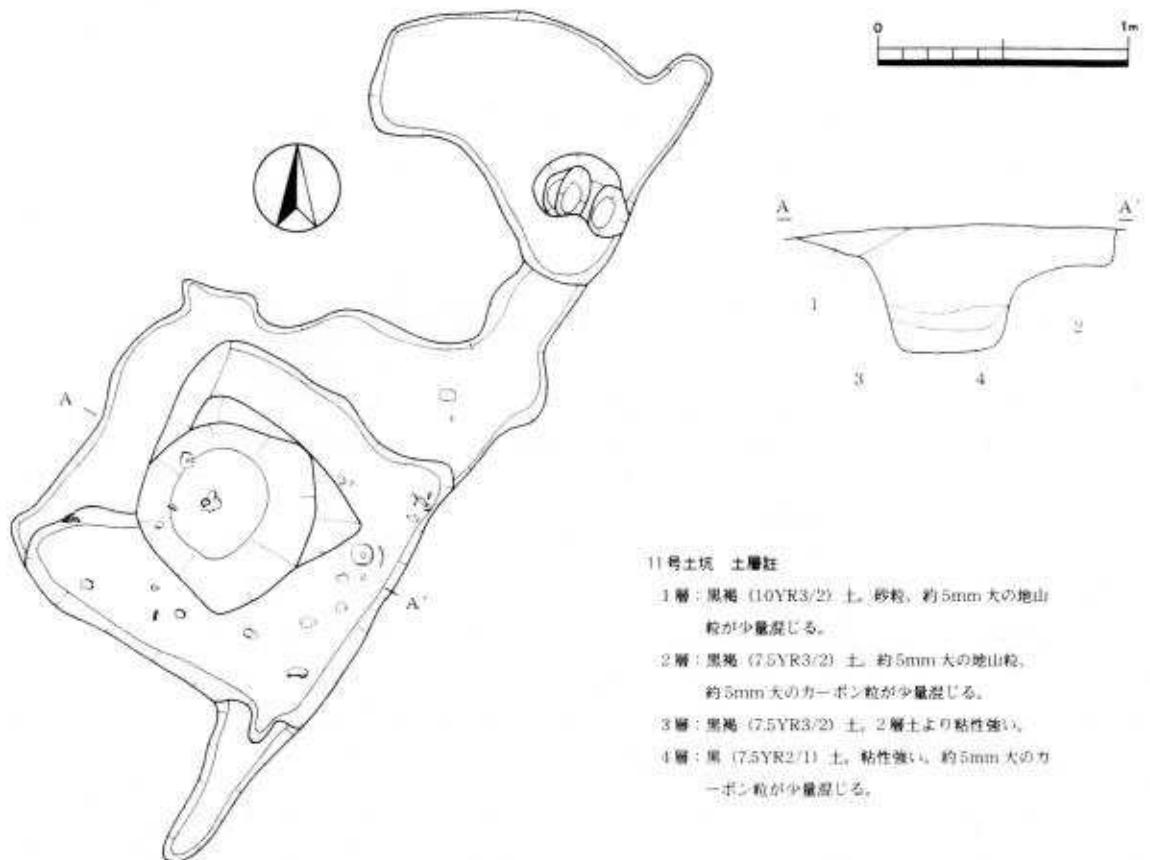
293



294

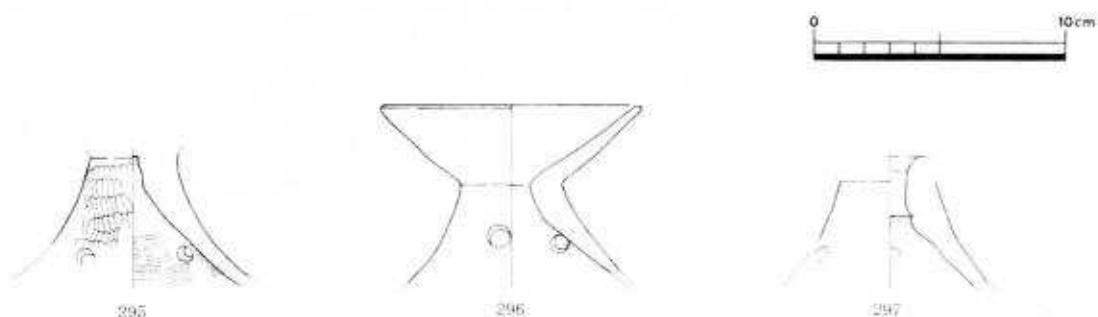


第64図 10号土坑 出土土器（その2）(S = 1/3)



11号土坑 土層図

1層：黒褐色 (10YR3/2) 土。砂粒、約5mm大の地山粒、
粒が少量混じる。
2層：黒褐色 (7.5YR3/2) 土。約5mm大の地山粒、
約5mm大のカーボン粒が少量混じる。
3層：黒褐色 (7.5YR3/2) 土。2層土より粘性強い。
4層：黒 (7.5YR2/1) 土。粘性強い。約5mm大のカ
ーボン粒が少量混じる。



第65図 11号土坑 平面図・断面図 ($S = 1/30$) ($H = 4.200\text{m}$) および出土土器 ($S = 1/3$)

溝（幅が20～30cm、深さが確認面より5～10cm程度の溝）が伸びており、この溝を竪穴住居跡の壁溝と仮定すれば、当土坑は竪穴住居跡の住居内土坑（特殊ピット）とも考えられる。つまり、当土坑が位置する場所に削平された竪穴住居跡（本書4号竪穴住居跡のような、住居の壁面に特殊ピットを持つ竪穴住居跡）が立地していた可能性も考えられる。仮に、当土坑が竪穴住居跡の住居内土坑であり、その竪穴住居跡の主軸が、当土坑から伸びる溝と同一方向であったとする、その主軸は北から東へ約33°振ることになる。しかし、当土坑が住居内土坑であるというのは、あくまでも想像であるため、ここでは当土坑を単なる土坑として扱う。なお、当土坑から伸びる溝からの出土遺物はほとんどなかつた。また、当土坑の北東側に溝とつながる浅い落ち込み（確認面から10cm程度の深さのもの）が見ら

れたが、これは溝と関連性をもたない落ち込みで、この落ち込みからの出土遺物はほとんどなかった。

さて、当土坑からの出土遺物については、主として第6・5図にある土層断面図の2層黒褐色土から定量の土器片が出土した。

295は、外反しながらハの字状に下方に開く高坏脚部で、円形の穿孔が4箇所ある。

296・297は、いわゆる「布留式」の小型器台で、296は受部と脚部の一部、297は脚部の一部である。いずれも脚部に円形の穿孔が3箇所ある。

これら3点の土器のほか、破片が小さく図化しえなかつたものとして、小型丸底壺と思われるものの口縁部が土坑内落ち込みの下底面より出土した。その口縁部は、やや内湾しながら開き、通常見られる小型丸底壺の口縁部と比較してやや短い。

当土坑の時期については、上記4点以外の土器片は、ほとんどが器種不明のものであり、明確に時期決定するには遺物が少ないのであるが、漆町編年8群期あたり（古墳時代4世紀前半頃）に位置付けられるものと思われる。

12号土坑（第6・6図）

16地区西隅中央よりやや南寄り、10地区との境に位置する。平面形は不整な形を呈する。深さは確認面より概ね20cmほどあり、黒褐色土ないしは暗褐色土をベースとした土が堆積している。

出土遺物は、比較的多く、パンケース（約6.5cm×約4.0cm×約1.5cmの箱）にして約1箱分あり、すべて土器片である。

298はくの字口縁の甕口縁部。口縁端部は、丸く作られず、上端に平坦な面を持つ。なお、ハケ調整痕や胎土から見て、この口縁部と同一個体と考えられる甕体部片が当土坑から多く出土していた（接合・復元はできなかった）。一個体の甕が当土坑に捨てられていたものと思われる。

299は畿内系高坏の坏底部から体部。坏底部の立ち上がりは比較的大きく開き、浅い坏部であると思われる。

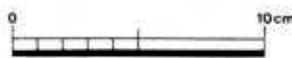
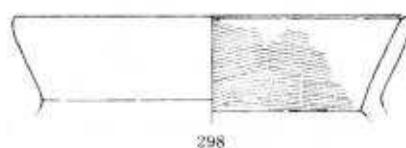
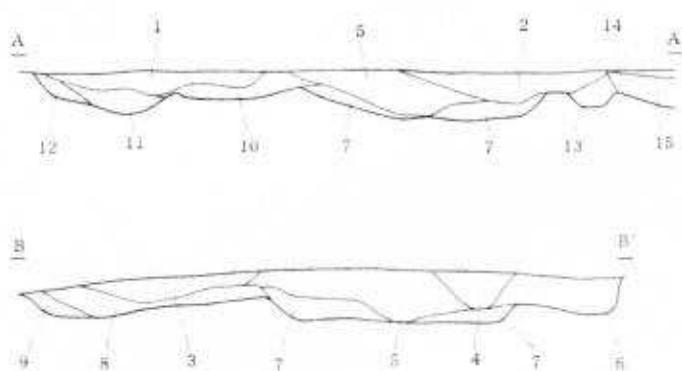
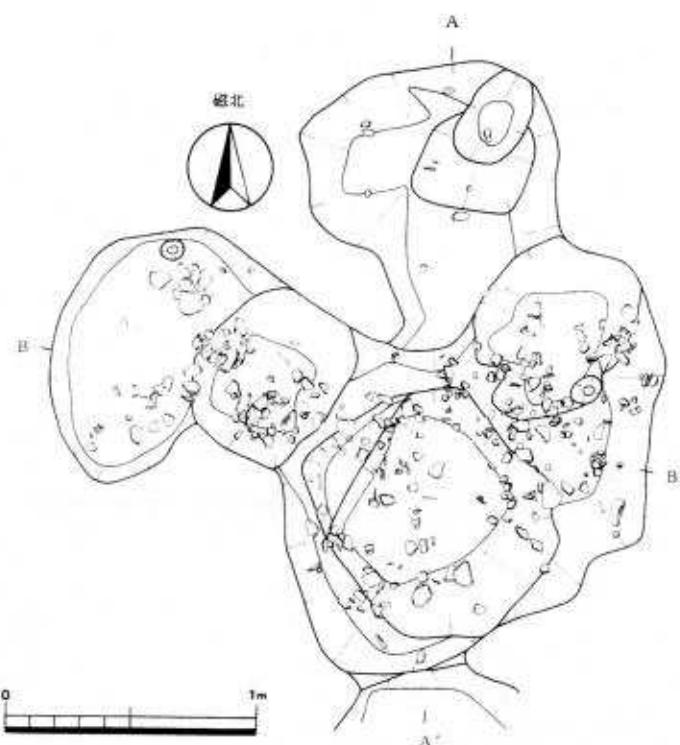
298は畿内系高坏の脚柱部。下方にやや開き、短い脚柱部である。

当土坑の時期については、遺物が多いわりには、時期決定の決め手となる土器が上記の3点のみと少なく、明確な時期決定はしがたいが、その3点の土器から判断して、漆町編年1・2ないしは1・3群期（古墳時代5世紀代）に位置付けられるものと考えられる。

13号土坑（第6・7図・第6・8図）

20B地区の北西隅、10地区との境に位置。第6・7図の平面図のほぼ中央、方位マークの右となりにある、約15.0cm四方の方形状の平面を呈する土坑を指す。深さは確認面より10～20cmほどあり、第6・7図の土層断面図にある1～5層の黒褐色土をベースとした土が堆積していた。また、当土坑のほぼ中央に直径約3.0cmの略円形の平面をしたピット（深さは13号土坑の底面から20cmほどある）が2つある。この2つのうち、西側のピットについては、土層断面で当土坑に伴うものか否かは確認できなかつたが、東側のピットについては、当土坑に伴うものと思われる。

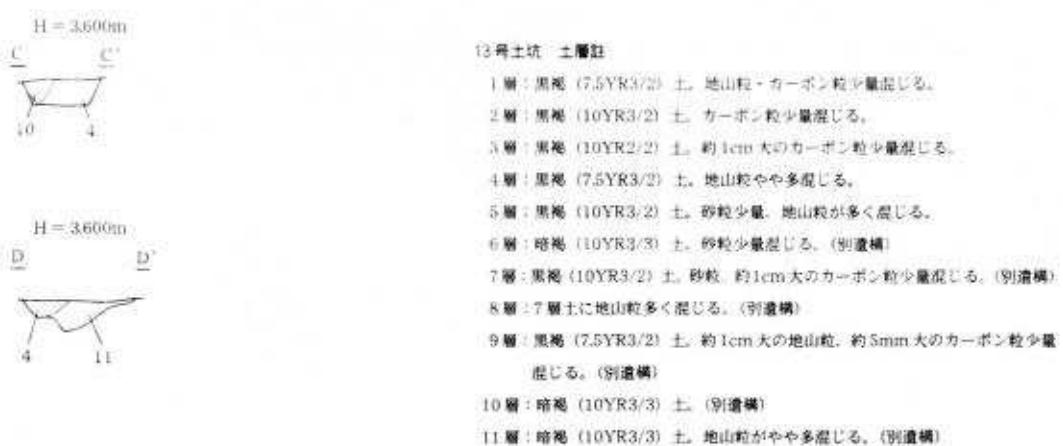
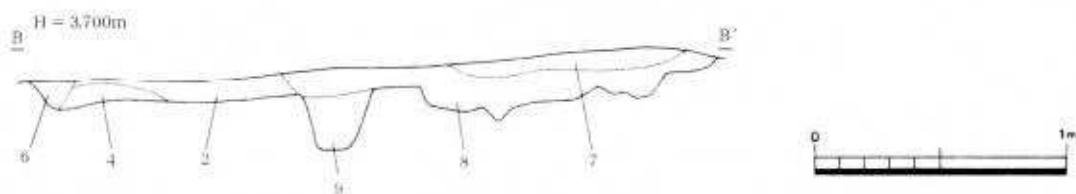
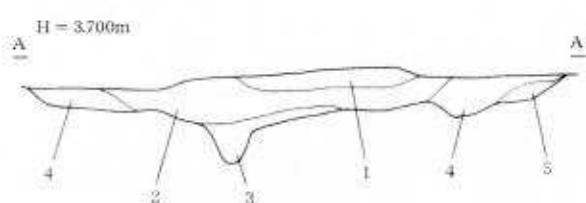
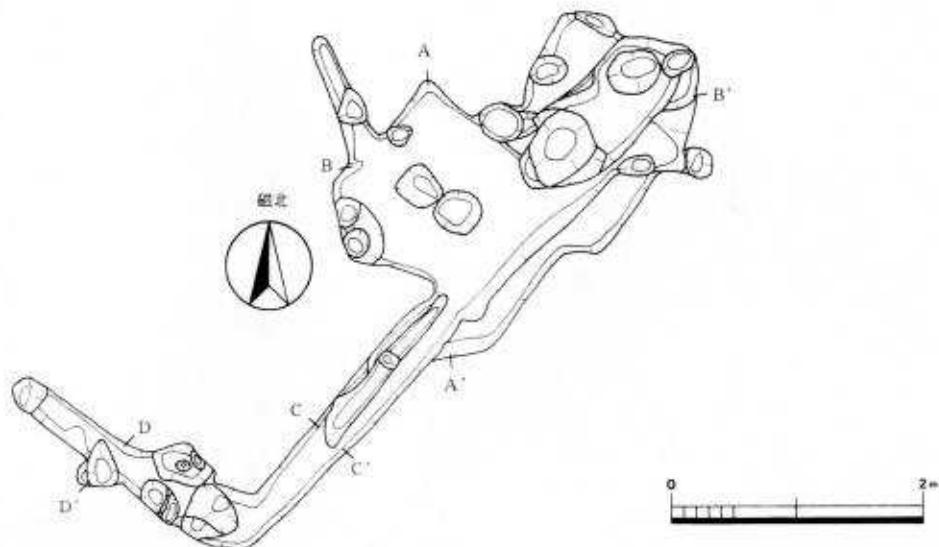
この13号土坑の北東側には、長径約15.0cm、短径約10.0cmの楕円形状の平面をした土坑がある。この土坑は、調査時に13号土坑と同一遺構として扱つてしまつたのであるが、これは、13号土坑を切つてある別の遺構である。この土坑からは、確認面に近い深さで定量の土器片が出土していたが、そのほとんどは器種不明の細片で、明確な時期については不明である。ただし、くの字口縁の甕口縁部細片2点と須恵器坏蓋の細片1点（いずれも図化不能）が出土しており、それらから判断すると、漆町編



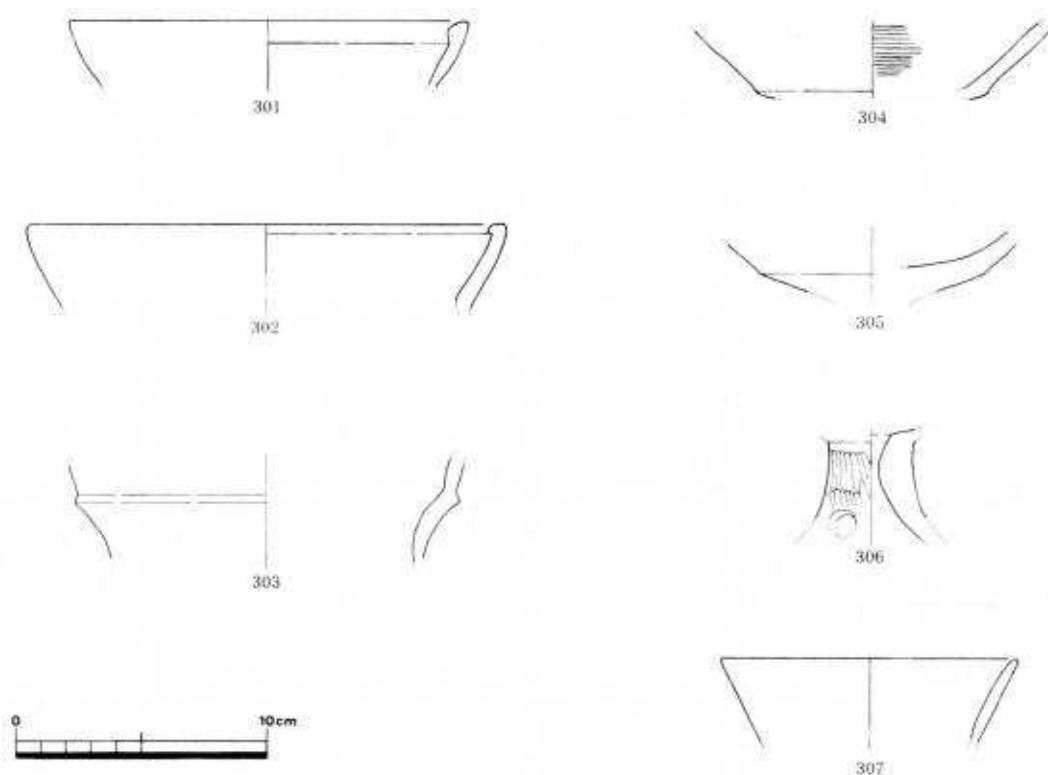
12号土坑 土層註

- 1層：黒褐 (10YR3/2) 土。砂粒、カーボン粒が少量混じる。
- 2層：黒褐 (7.5YR3/2) 土。カーボン粒が少量混じる。
- 3層：暗褐 (10YR3/3) 土。地山粒、2cm 大ほど のカーボン粒が少量混じる。
- 4層：黒褐 (10YR3/1) 土。砂粒、カーボン粒が少量混じる。
- 5層：暗褐 (10YR3/3) 土。砂粒、カーボン粒が少量混じる。
- 6層：黒褐 (7.5YR3/2) 土。砂粒が少量、地山粒がやや多量、カーボン粒が多量混じる。
- 7層：暗褐 (10YR3/3) 土。砂粒がやや多量、地山粒、カーボン粒が少量混じる。
- 8層：黒褐 (10YR3/2) 土。
- 9層：暗褐 (10YR3/3) 土。地山粒が少量混じる。
- 10層：黒褐 (7.5YR3/2) 土。地山粒、約 1cm 大のカーボン粒がやや多量混じる。
- 11層：暗褐 (10YR3/3) 土。カーボン粒が少量混じる。地山粒が多量混じる。
- 12層：黒褐 (7.5YR3/2) 土。砂粒が少量混じる。
- 13層：黒褐 (10YR3/2) 土。砂粒が多量、カーボン粒が少量混じる。
- 14層：黒褐 (10YR3/2) 土。砂粒、カーボン粒が少量混じる。(引違模)
- 15層：黒褐 (10YR3/2) 土。地山粒、カーボン粒が少量混じる。(引違模)

第 66 図 12 号土坑 平面図・断面図 ($S = 1/30$) ($H = 3.500m$) および出土土器 ($S = 1/3$)



第67図 13号土坑 平面図 ($S = 1/60$)・断面図 ($S = 1/30$) (方位は磁北を示す)



第68図 13号土坑 出土土器 (S = 1/3)

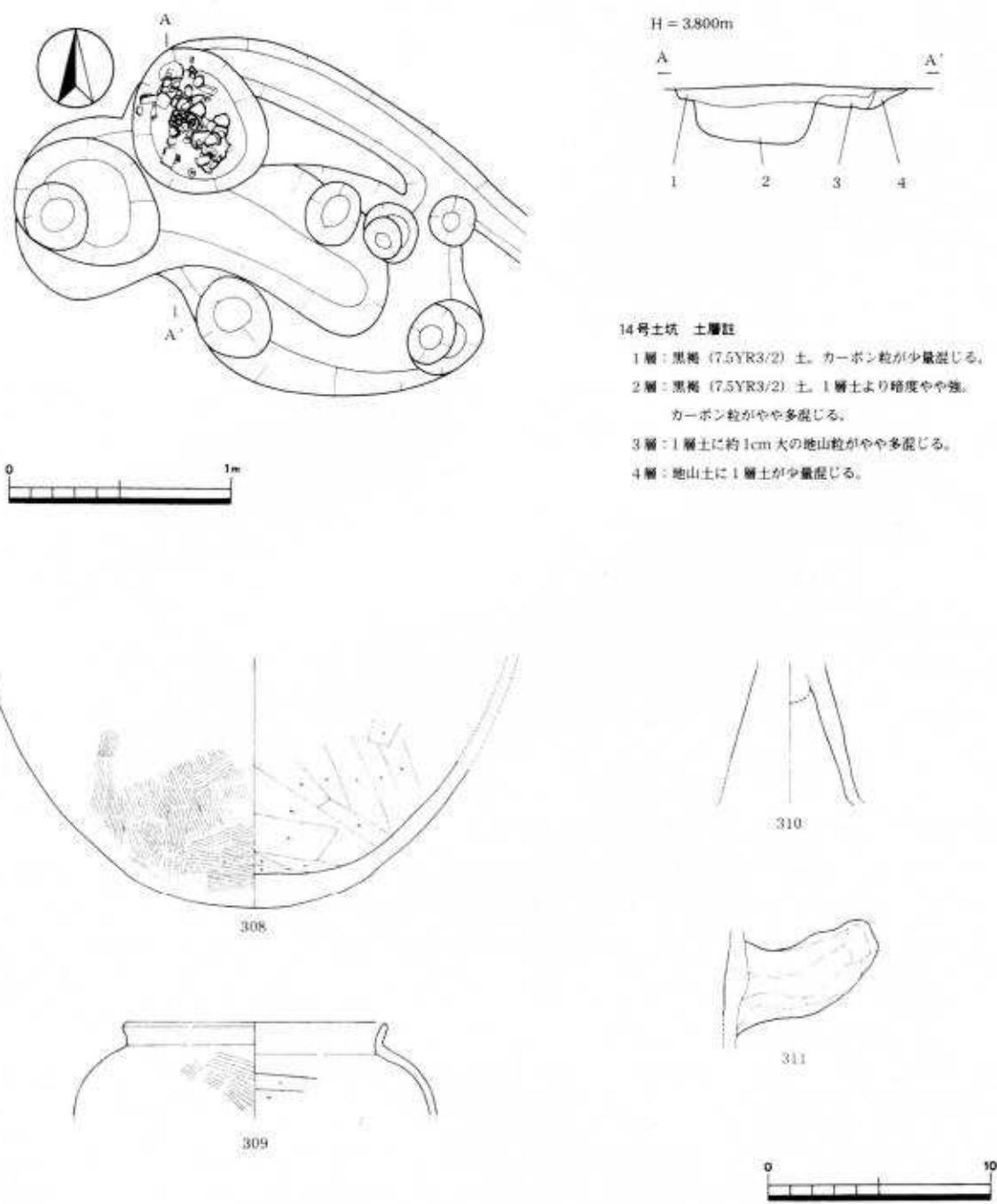
年13群期頃（古墳時代5世紀中葉～後葉頃）に位置付けられる可能性もある。

さて、13号土坑の南東側からL字形に伸びる溝（幅が約3.0cm、深さが確認面より約1.0cmの溝）が見られる。この溝に堆積していた土は、13号土坑内に堆積していた4層黒褐色土と同一のもので、L字形に伸びるこの溝は、13号土坑と関連性を持つものといえる。この溝を竪穴住居跡の壁溝と考えれば、13号土坑は住居内土坑であるといえ、この箇所に削平された竪穴住居跡（本書4号竪穴住居跡のような、平面形が方形で、住居跡壁面の中央に住居内土坑がある竪穴住居跡）が立地していた可能性が考えられる。仮に、13号土坑が住居跡壁面の中央に位置する住居内土坑であったとする、その竪穴住居跡の壁面の長さは約640cmある。また、その竪穴住居跡の主軸が住居跡壁面と同じ方向に向いていたとする、北（磁北。なお、第67図の平面図にある方位も磁北である。）から東へ約40°振ることとなる。しかし、柱穴と想定されるものは確認されなかった。ここでは、13号土坑を土坑として扱ったが、本書5号竪穴住居跡のように、削平された竪穴住居跡として扱ったほうが正しいのかもしれない。

なお、当土坑の北西側からも溝（幅が1.5～2.0cm、深さが1.0cm程度の溝）が伸びている。これについて、土層断面等で当土坑との関連性を確認することができず、何であるかは不明であるが、当土坑に付随しないものではないかと思われる。

出土遺物は、土坑の上半部の深さで、全体に散らばるように、定量の土器が出土したが、そのほとんどすべてが細片で、接合・復元できるようなものはなかった。その細片のなかでも図化できたものが、第68図の301～307である。

301・302は布留甕の口縁部である。301の頸部付近は器壁が薄くなっているが、その他の点



第69図 14号土坑 平面図・断面図 ($S = 1/30$) および出土土器 ($S = 1/3$)

では、いずれも器壁が厚い印象を受ける。301の口縁部外面には、スヌが多量に付着している。

303は、山陰系壺の口縁部下端から頸部である。

304・305は畿内系高壺の壺底部から体部への立ち上がりの部分である。体部への立ち上がりは比較的外方に開いており、やや浅い壺部のものと思われる。いずれも外面の調整は摩滅して不明であるが、304の内面がハケ調整、305の内面がナデ調整されている。

306は、碗形の受部に、ハの字状に開く脚部が付く、小型器台の脚部である。破片が小さく個数は

不明であるが、円形の穿孔がある。

307は、小型壺の口縁部と思われるものである。

当土坑の時期については、ほとんどの出土土器が細片で、まとまったような出土状況が見られず、明確な判断はしがたいが、上記の図化した出土土器から判断して、漆町編年11群期あたり（古墳時代4世紀末～5世紀初め頃）ではないかと思われる。

14号土坑（第69図）

20B地区の中央よりやや北寄りに位置する。第69図平面図の方針マークの右となりにある、直径約60cmの略円形の平面を呈する土坑を指す。規模が小さく、ビットとして扱ってもよいと思われたが、規模のわりに出土遺物が多かったので、土坑として扱った。深さは確認面より30cmほどある。土坑の周辺も確認面から落ち込んでいるが、この土坑の部分のみに、第69図に示してある2層黒褐色土が堆積しており、その上に、周辺の落ち込みに堆積していた1層黒褐色土が堆積している状況であった。周辺の落ち込みからは、遺物はほとんど出土せず、当土坑の部分のみで、遺物がまとまった状況で出土しており、それらの遺物は2層黒褐色土から出土した。

遺物は、土坑の規模のわりには多くの土器が出土しており、パンケースにして約1／2箱分ある。

308は丸底の甕底部である。接合はできなかったが、外面のハケ調整痕などから、この底部と同一個体のものと思われる甕体部片が比較的多く出土しており、一個体の甕が当土坑に捨てられていたのではないかと思われる。

309は小甕と思われるものの口縁部から肩部である。赤色土器で使われるような、緻密で、やや赤く発色する胎土で作られており、小甕ではなく、壺としての可能性も考えられる。

310は畿内系高坏の脚柱部。比較的下方に開き、短い脚柱部である。

311は甕の把手である。

当土坑の時期については、上記の出土土器から判断して、漆町編年13群期あたり（古墳時代5世紀中葉～後葉頃）に位置付けられるものと思われる。

15号土坑（第70図）

20B地区の中央よりやや西寄りに位置する。長径約130cm、短径約80cmの楕円形状の平面を呈する。当土坑の南側上半部分は、近年の畑耕作による著しい削平を受けている。土層断面について見ると、第70図の土層断面図にあるとおり、下底面に2層黒褐色土が堆積し、その上に1層黒褐色土が堆積している状況であった。

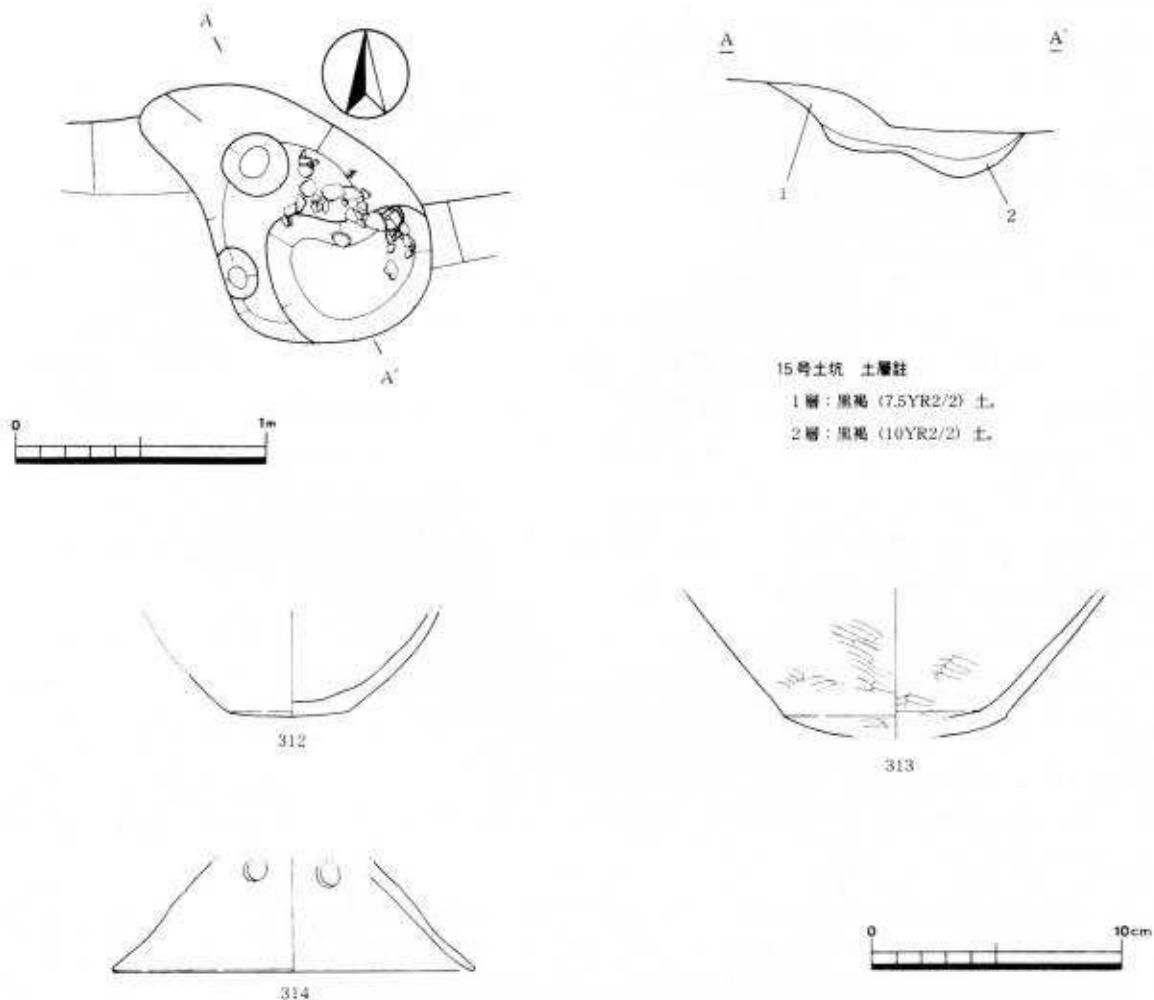
遺物は、土坑内西側に集中するようにして、定量の土器片が出土しており、それらの大半は1層黒褐色土から出土した。

312は、平底を呈する、甕ないしは壺の底部である。

313は畿内系高坏の坏底部から体部。坏底部から体部への立ち上がりはあまり開かず、深い坏部であると想定される。内外面ともヘラミガキされている。

314は、ハの字状に下方に開く、高坏ないしは器台の脚部。図化した部分の約1／8の破片であるため数は不明であるが、円形の穿孔がある。

当土坑の時期については、313の高坏坏部1点から判断することになるが、それから判断すると、漆町編年10群期頃（古墳時代4世紀後半頃）と思われる。この判断からすると、314の脚部は、碗形の受部に、ハの字状に下方へ開く脚部が付いた、小型器台の脚部ではないかと考えられる。



第70図 15号土坑 平面図・断面図 ($S = 1/30$) ($H = 3.900m$) および出土土器 ($S = 1/3$)

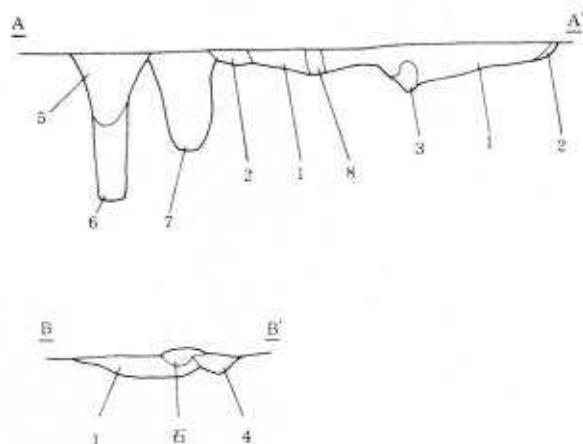
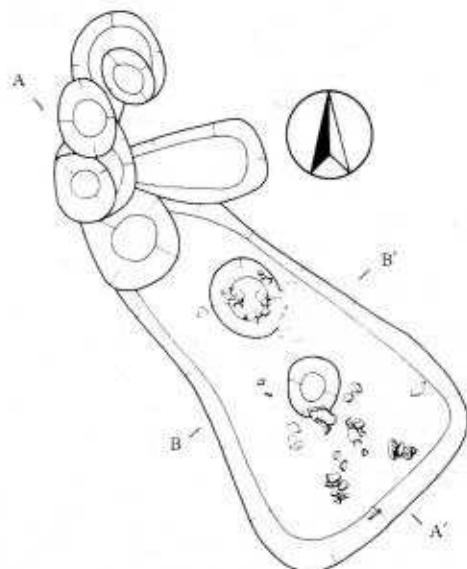
16号土坑（第71図）

20B地区の中央よりやや南東寄りに位置。北西から南東方向の長さ約170cm、土坑南東側の壁面の長さ約90cmを測る、いわば細長い隅丸三角形状の平面を呈する。深さは、確認面より約10~15cm程度であったが、当土坑が位置する箇所は、近年の畑耕作による著しい削平を受けていたところであり、本来は、より深い土坑であったと考えられる。土層断面については、第71図の土層断面図にあるとおり、概ね1層黒褐色土のみが堆積している状況であった。

遺物については、概ね土坑内南東側に集中するようにして、定量の土器片が出土し、土坑の中央部付近の確認面では、長さ約22cm、幅約10cmの自然石（一部割れているが、使用痕等は見られない）が1点出土していた。なお、第71図の平面図に示してある遺物出土状況では、土坑の中央よりやや北西寄りにあるピットの上でも遺物が出土することになるが、これらの遺物は当土坑を切っているピット（第71図の土層断面図の8層黒褐色土が堆積しているピット）に伴う遺物である。

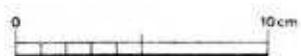
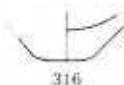
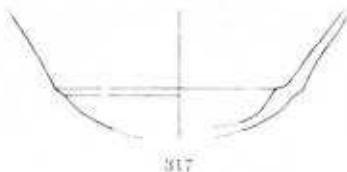
第71図の315~317の土器は、土坑内南東側から出土したものである。

315は有段口縁の甕口縁部。口縁帯に擬凹線が施され、口縁部外面から頸部外面にかけてススがやや多量付着している。



16号土坑 土層註

- 1層：黒褐色 (10YR2/2) 土。カーボン粒が少量混じる。
- 2層：黒褐色 (7.5YR3/1) 土。
- 3層：黄褐色 (10YR5/6) 粘質土。
- 4層：黒褐色 (10YR2/3) 土。地山粒が少量混じる。
- 5層：黒褐色 (10YR2/2) 土。地山粒が少量混じる。(別遺構)
- 6層：黒褐色 (10YR3/2) 土。地山粒が多量混じる。(別遺構)
- 7層：黒褐色 (7.5YR3/2) 土。地山粒が多量混じる。(別遺構)
- 8層：黒褐色 (7.5YR3/1) 土。地山粒が多量混じる。(別遺構)

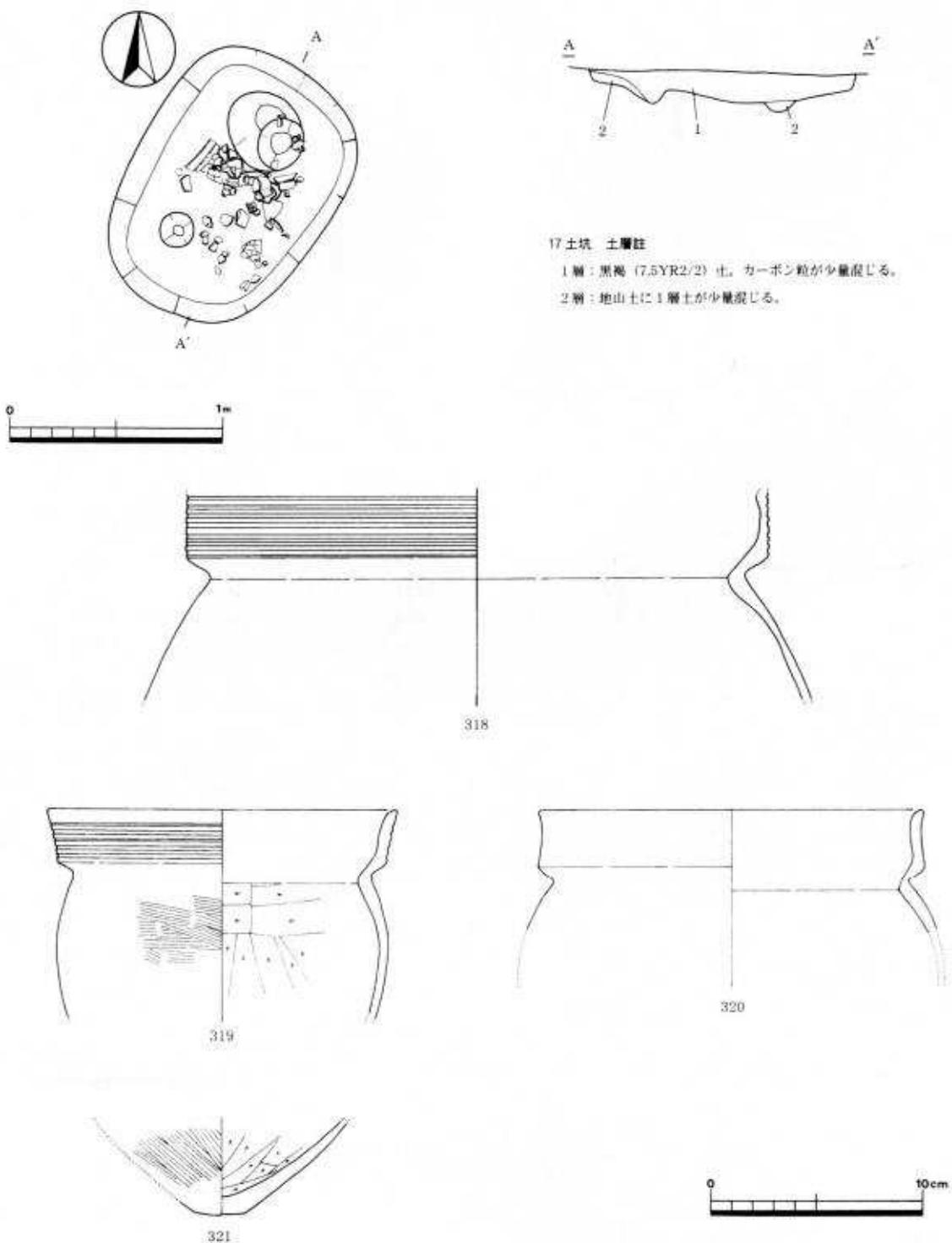


第71図 16号土坑 平面図・断面図 ($S = 1/30$) ($H = 3.700m$) および出土土器 ($S = 1/3$)

316は、小さな平底を有する甕底部である。

317は、底部が碗形を呈する有段高壺の壺部。口縁部が欠けているが、口径が比較的小さく、深い壺部であると想定される。摩滅が著しく図化できなかったが、内外面ともヘラミガキされている。赤く発色する胎土を用いた赤色土器である。

当土坑の時期については、317の有段高壺の壺部が、口径の比較的小さい、深い壺部であると想定され、その点から判断して、月影Ⅱ式期（弥生時代末）あたりに位置付けられるのではないかと考えられる。



第72図 17号土坑 平面図・断面図 ($S = 1/30$) ($H = 4.100\text{m}$) および出土土器 ($S = 1/3$)

17号土坑(第72図)

20地区内北側中央に位置。長径約130cm、短径約90cmの橢円形状の平面を呈する。深さは確認面より10~15cmほどで、第72図の土層断面図にあるとおり、概ね1層黒褐色土のみが堆積している状況であった。

遺物は、土坑のほぼ中央部でまとまるようにして、定量の土器が出土した。

318～320は有段口縁を持つ甕の口縁部から肩部で、318・319は口縁帶外面に擬凹線が施されているもの、320は、口縁帶外面がヨコナデされ、擬凹線が施されていないものである。318の口縁端部は欠けており、詳細は不明であるが、口縁端部下の形状から、口縁端部は外反・先細りしているものと想定される。なお、接合はできなかったが、胎土や色調、出土状態などから、この318と同一個体であるといえる甕体部片が比較的多く出土している。319・320の口縁端部は、いずれも外反・先細りぎみとなっており、319の口縁帶はやや外傾しているのに対し、320の口縁帶はやや内傾している。

321は、小さな平底を持つ甕の底部である。接合はできなかったが、外面のハケ調整痕や胎土、出土状態（319の口縁部片の直下に321の底部片が出土）などから、319と同一個体であると思われる。外面にはススがやや多量に付着している。

当土坑の時期については、上記の出土土器から判断することになるが、319・320の口縁端部が外反・先細りしているが、その度合いがあまり大きくない点、また、それら甕の肩部の張りがさほど大きくない点、さらに、321の底部が、小さな平底ではあるが、自立不能なほど小さくない点などから、月影I式期（弥生時代末）に位置付けられるのではないかと思われる。

18号土坑（第73図～第79図）

20A地区南東隅に位置。不整な平面形を呈し、堆積している土に草ないしは木の根が非常に多く入り込んでいる点から、木（草）の根の痕跡ないしは風倒木痕として扱うべきかもしれないと考えられ、遺構として扱うにはやや疑問があったが、パンケースにして約6箱分と、非常に多くの土器が出土したことから、ここでは土坑として扱った（遺物の出土状況については写真図版参照）。

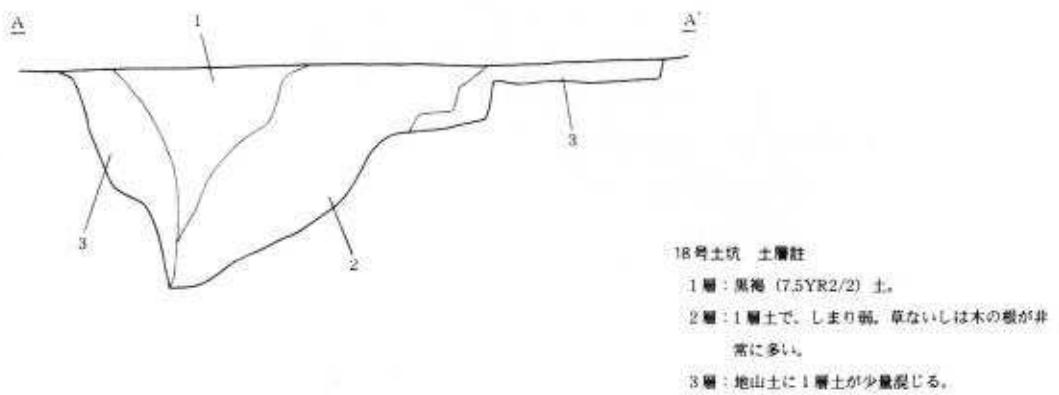
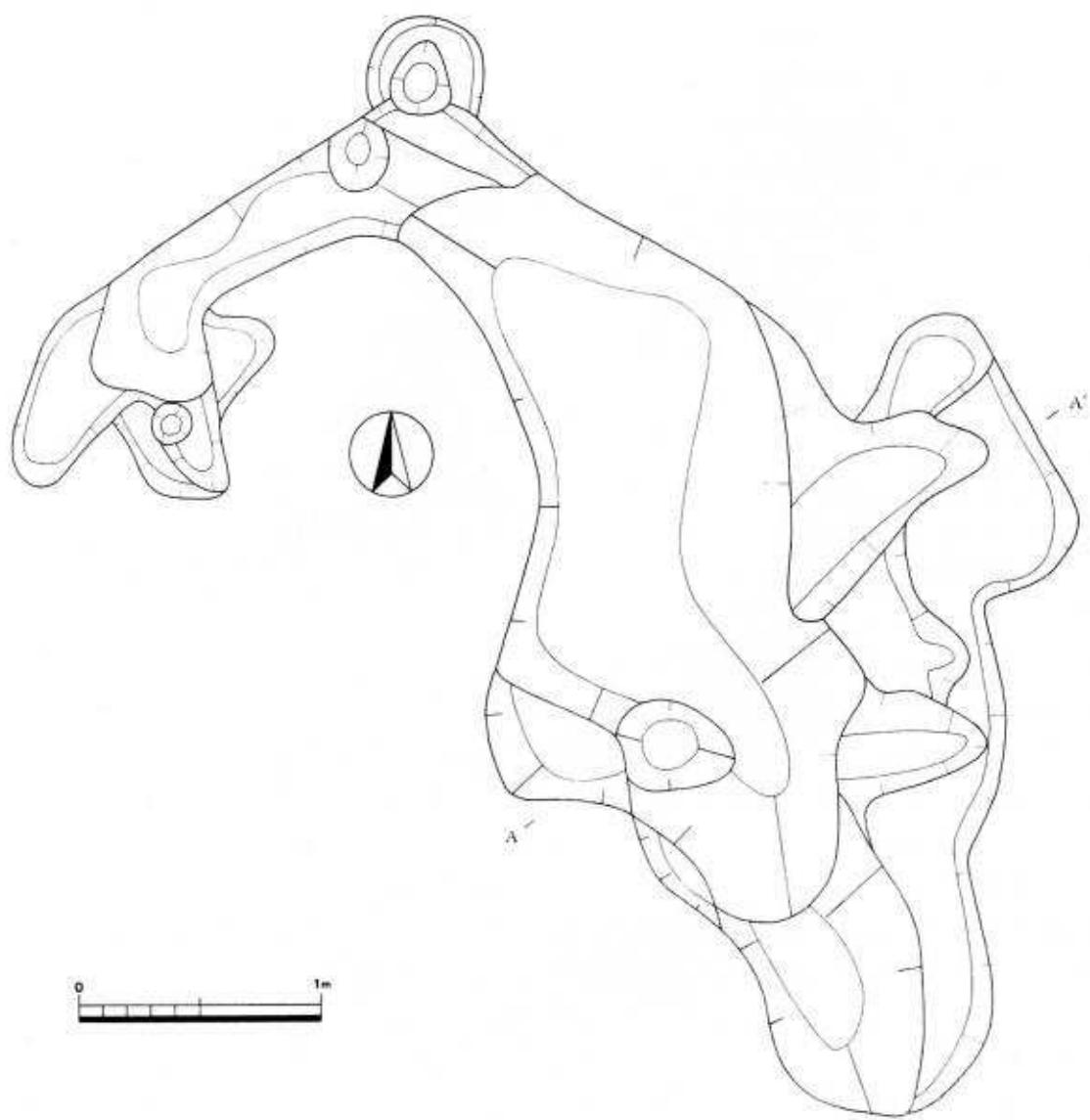
当土坑の東側の部分、長径約400cm、短径約250cmの橢円形状の平面を呈する部分で、深いところで確認面より深さ約90cmを測り、第73図の土層断面図に示してある1層黒褐色土を基本とした土が堆積していた。そして、この橢円形状の平面を呈するところの北側の部分（平面図でいえば、もっとも深いと示された、長さ約330cm、幅約110cmの不整な橢円形状の平面を呈したところ）に、草ないしは木の根が非常に多く入り込んでいる土（2層土）が堆積しており、この2層土内で根にからむようにして、確認面から下底面に至るまで、土器が大量に出土した。なお、当土坑の北西側の部分、橢円形状の平面を呈する部分から溝状に伸びている部分（深さは確認面より30cmほど）や、橢円形状の平面を呈するところの南側の部分では、草ないしは木の根が入り込んでいる状況は見られず、1層土ないしは3層土のみが堆積し、遺物の出土はほとんどなかった。

橢円形状の平面を呈するところの北側の部分から出土した大量の遺物はすべて土器である。その大半（概ね7／8）が須恵器で、一部で土師器が見られるという状況であったが、土師器については、手づくね土器が55点と、1基の土坑から出土する量としては、異常なほど多く出土した。以下、第74図～第79図に掲載した当土坑の出土土器について、器種ごとに述べていくこととする。

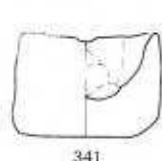
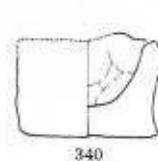
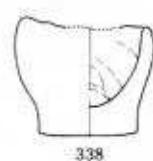
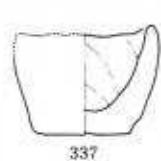
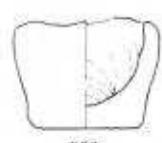
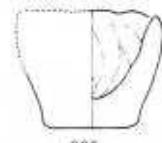
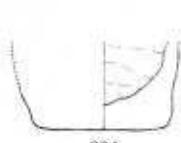
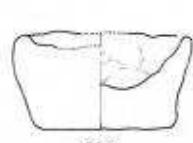
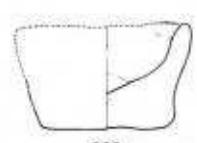
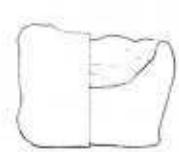
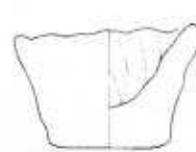
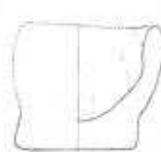
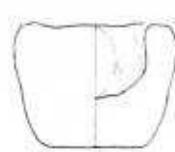
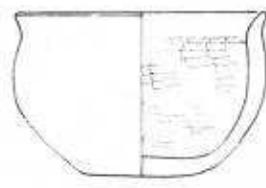
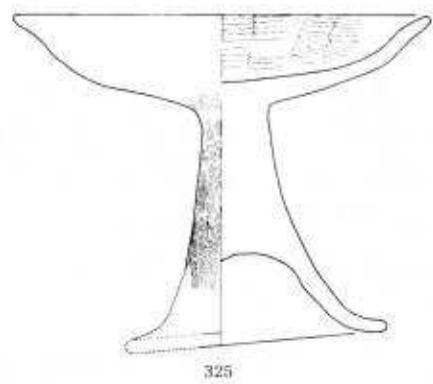
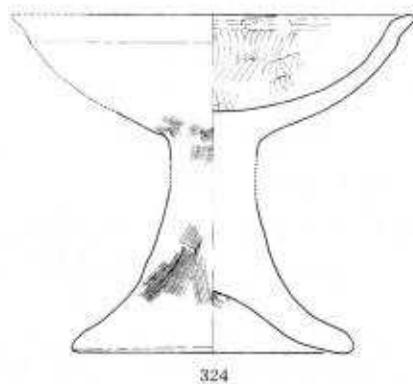
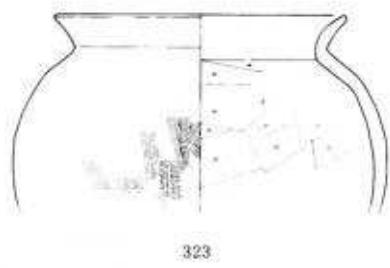
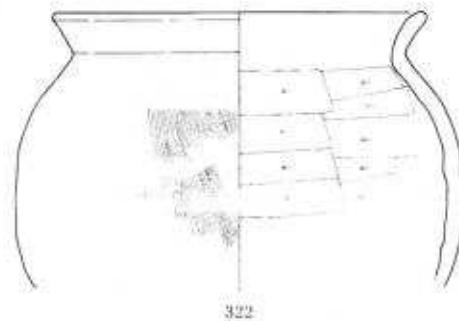
（甕：322・323）くの字口縁を持つ甕の口縁部から肩部。323は比較的法量が小さく、小甕として扱えるものと思われる。

（高壺：324・325）口縁端部が外反する碗形の壺部に、中実タイプの脚部が付く高壺。いずれも壺部内面が黒色処理されている。324は、壺部が約1／4、脚部が略完形に、325は略完形に復元される。

（碗（ないしは鉢）：326）口縁端部が外反し、底部は、しっかりとした平底ではなく、やや丸みを持って、平底に近い形を呈する。内面は黒色処理されている。口径に対し器高が比較的高く、鉢として分



第73図 18号土坑 平面図・断面図 ($S = 1/30$) ($H = 4.000\text{m}$)



第74図 18号土坑 出土土器 (その1) (S = 1/3)

類される可能性もある。略完形に復元される。

(手づくね土器：327～381) 当土坑から55点と大量に出土した手づくね土器である。

327～334は、当土坑から出土した手づくね土器のなかでも大型のもので、327～331は相対的に器高が高いもの、332～334は相対的に器高が低いものである。

335～341は、前述の327～334に比べて小型であるが、当土坑から出土した手づくね土器全体で見れば、比較的大型のものである。335～339は相対的に器高が高いもの、340・341は相対的に器高が低いものである。

342～352は、当土坑から出土した手づくね土器の中で、中クラスの大きさのものである。

353～360は、当土坑から出土した手づくね土器の中で、小型のものである。

361～372は、底部が厚く、その厚みが器高の約1/2以上を占めるもので、361～366は体部がくびれないもの、367～372は体部がくびれているものである。

373～381は、全体的な器形等は不明であるが、手づくね土器の底部と判断されるものである。

(須恵器坏蓋：382～388) 382～388はいずれも略完形に復元される。

382は、天井部から口縁部に至る部分の外面に小さな稜が見られるものである。その稜は、稜の下を凹ませることによってできたようなもので、非常に小さい。口縁端部は外反し、端部内面には明瞭な段が見られる。

383～385は、天井部から口縁部にいたる部分の外面に横方向の凹線が1条入っているものである。383・384の口縁端部内面には、やや不明瞭ながら段が見られ、385の口縁端部は丸く作られている。

386～388は、天井部から口縁部に至る部分の外面に稜や凹線が見られないもので、386は天井部が平坦なもの、387・388は天井部が丸みを持っているものである。386・387の口縁端部は外反し、端部内面にやや不明瞭ながら段が見られ、388の口縁端部は丸く作られている。なお、図では見えにくくなっているが、388の天井部外面の上面は回転ヘラケズリが施されている。

(須恵器坏身：389～397) 396が約1/2に復元される以外は、いずれも略完形に復元され、394については略完形の状態で出土した。また、いずれの口縁端部も丸く作られており、端部内面には段が見られない。

389～394は、底部外面に回転ヘラケズリが入れられるもので、389は相対的に器高が高いもの、390～394は相対的に器高が低いものである。器高が低いものについては、口径が大きいもの(390・391)と、口径が小さいもの(392～394)に分けられるようである。

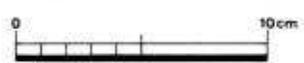
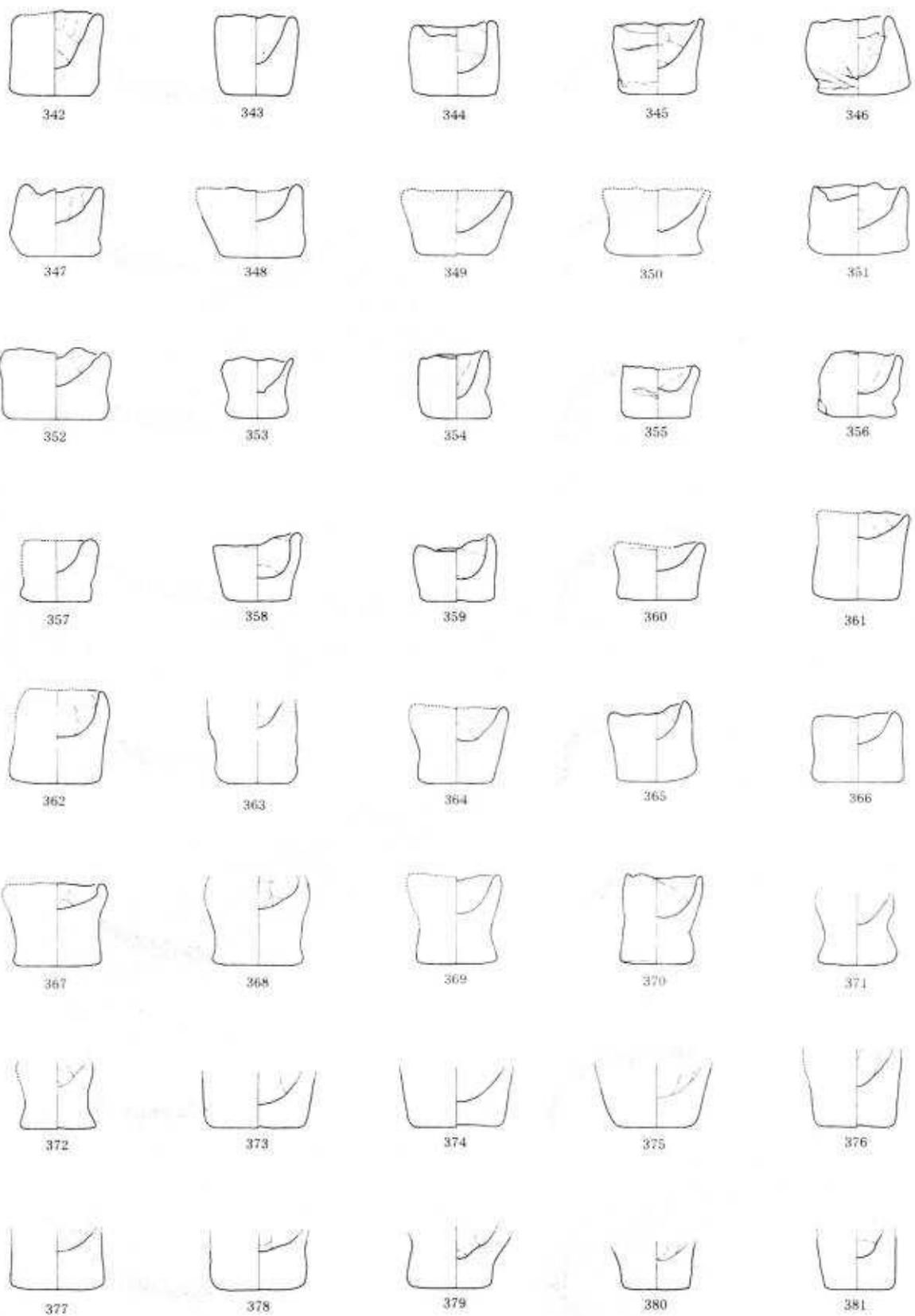
395～397は、底部外面に回転ヘラケズリが入れられていないもので、395・396の底部外面は、回転ヘラ切り後に不整方向のナデ調整が施されており、397の底部外面は、回転ヘラ切り後の調整は施されていない。

(須恵器有蓋高坏蓋：398・399) 398は約1/2に、399は略完形に復元される。

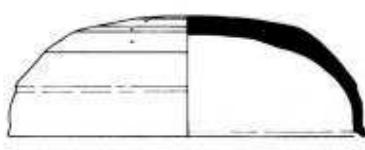
398は、天井部外面が回転ヘラケズリされ、天井部から口縁部に至る部分の外面には横方向の凹線が1条入れられている。口縁端部は外反し、端部内面には不明瞭ながら段が見られる。

399は、天井部外面にカキ目が入れられ、天井部から口縁部に至る部分の外面には、稜や凹線は見られない。口縁端部については、端部内面に不明瞭ながら段が見られるが、外反することではなく、まっすぐ下に下りている。

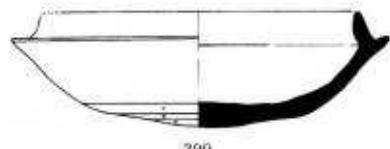
(須恵器有蓋高坏：400・401) 400は略完形、401は坏部のみ約1/2に復元される。いずれの口縁端部も丸く作られている。400の脚部には、円形のスカシ窓が3方向から入れられている。



第75図 18号土坑 出土土器 (その2) (S = 1/3)



382



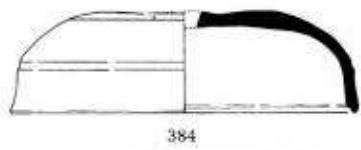
390



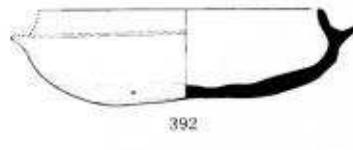
383



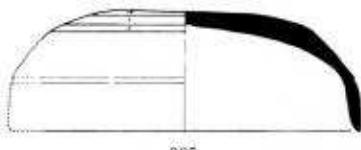
391



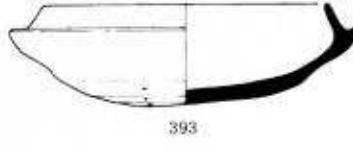
384



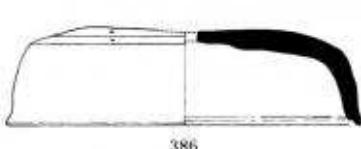
392



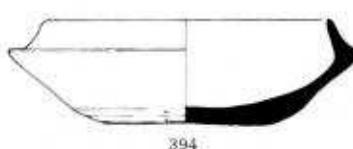
385



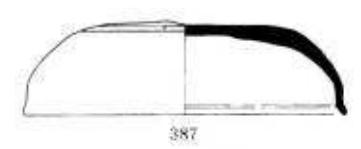
393



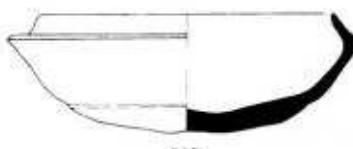
386



394



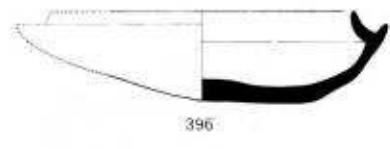
387



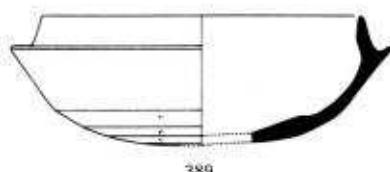
395



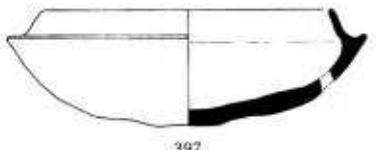
388



396



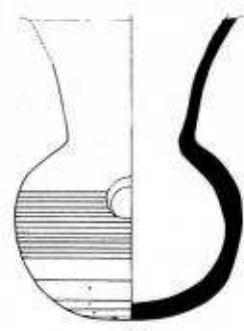
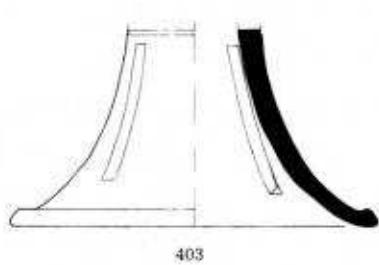
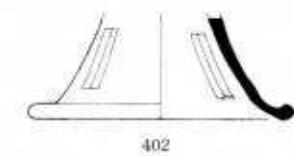
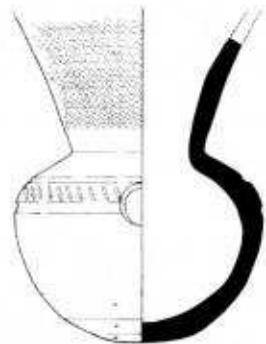
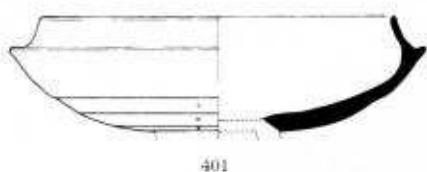
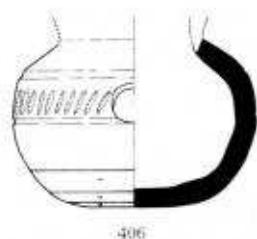
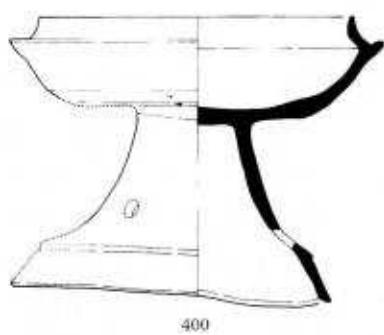
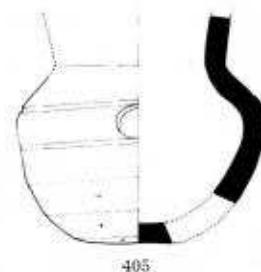
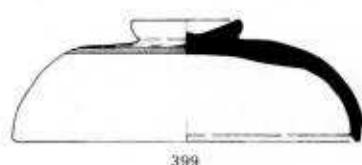
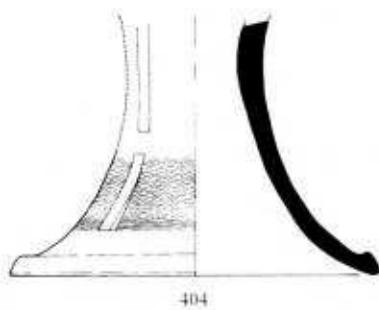
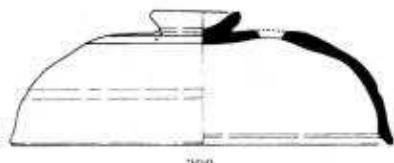
389



397



第76図 18号土坑 出土土器 (その3) (S = 1/3)



第77図 18号土坑 出土土器 (その4) (S = 1/3)

(須恵器高坏脚部：402～404) 402・403は、図化した部分の約1／2に復元されるもので、長方形のスカシ窓が入れられてあるが、復元できた部分が小さいため、その数については不明である。

404は脚部のみ略完形に復元できたものである。長方形のスカシ窓が2段、3方向から入れられている。また、脚部下半部外面には波状文が施されている。

(須恵器ハソウ：405～408) 405は体部のみ略完形に復元、406は体部のみが完形の状態で出土、407・408は、口縁端部のみが欠けた略完形の状態で出土した。

405～407は、体部中位の外面に横方向の凹線が2条入れられており、406・407については、その2条の凹線の間に、土師器甕体部外面のハケ調整で用いるハケ状具のようなもので入れられたと思われる連続斜行刻みが入れられている。なお、407の口縁部外面には波状文が見られる。

408は、体部中位に2条の凹線がなく、横方向のカキ目が入れられている。

(須恵器壺：409・410) 409は丸底の壺と思われるものの体部。体部中位外面には横方向のカキ目が入れられている。また、内底面にはシッタ痕が見られる。

410は有台の壺の体部。肩部外面に横方向の凹線が2条あり、その間には、土師器甕体部外面のハケ調整で用いるハケ状具のようなもので入れられたと思われる連続斜行刻みが入れられている。

(須恵器提瓶：411) 底部(図化した部分の下半部)がなく、全体の約1／2に復元される。左側の図は閉塞側(右側の図の断面側)から見たもので、閉塞側の体部外面には同心円状にカキ目が入れられている。閉塞側とは反対側の体部外面にも同心円状にカキ目が入れられているが、その中央部付近にはカキ目が見られず、同心円と同じ方向でナデ調整が施されている。外面と口縁部内面には、自然軸が比較的厚くかかっており、外面の一部では、軸着物が見られる。

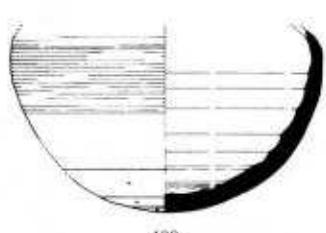
(須恵器甕：412～417) 412は小型の甕で、略完形に復元される。体部外面全体に平行線文の叩きが施され、その叩き目は、彫り込みに対し木目が直交するタイプである。また、体部上位から中位の外面では、叩き目の上からカキ目が入れられている。内面は、底部のみに当て具痕が見られ、体部内面はナデ調整されている。底部に見られる当て具痕は、彫り込みの部分に木目が見られないタイプである。なお、底部外面は著しく摩滅しており、叩き目がほとんど見られない状態となっている。

413～417は中型の甕である。413は口縁部残存約1／4の口縁部片、414は口縁部残存約3／4に復元できた口縁部、415は図化部分全体を復元できた口縁部から肩部、416は図化部分全体を復元できた底部で、417は略完形に復元できた。なお、416は、接合はできなかったが、その色調などから415と同一個体であると思われる。

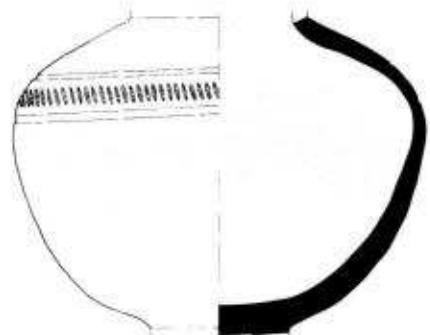
これら中型の甕の口縁端部下端には、いずれも稜が見られるが、413の稜は比較的小さく、やや不明瞭なものとなっている。これに対し414・417の稜は、比較的大きく明瞭なものとなっている。415については、413と414・417との中間的なものといえる。また、417の口縁端部については、上端にも稜といえるものが認められる。

414の頸部下の内外面、415(416)・417の体部内外面には、平行線文の叩き目、同心円文の当て具痕が見られる。外面に見られる平行線文の叩き目は、いずれも彫り込みに対して木目が直交するタイプであるが、415(416)・417の木目の痕跡は不明瞭で、一部ではその木目の痕跡が見られないところもある。内面に見られる同心円文の当て具痕については、いずれも彫り込みの部分に木目が見られないタイプである。なお、415(416)・417の肩部から体部中位の外面では、叩き目の上から横方向のカキ目が入れられている。なお、416・417の底部外面は著しく摩滅しており、叩き目がほとんど見られない状態となっている。

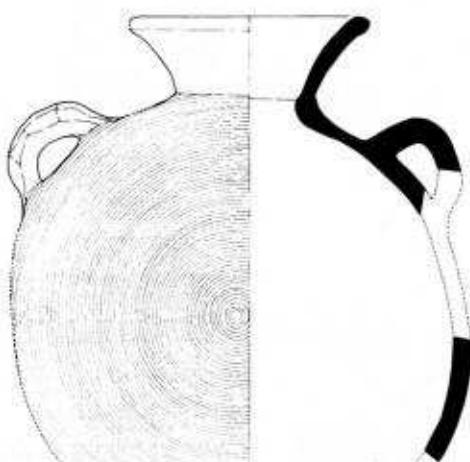
(須恵器横瓶：418) 略完形に復元される。図の右側(断面側)が閉塞側である。体部外面に平行線



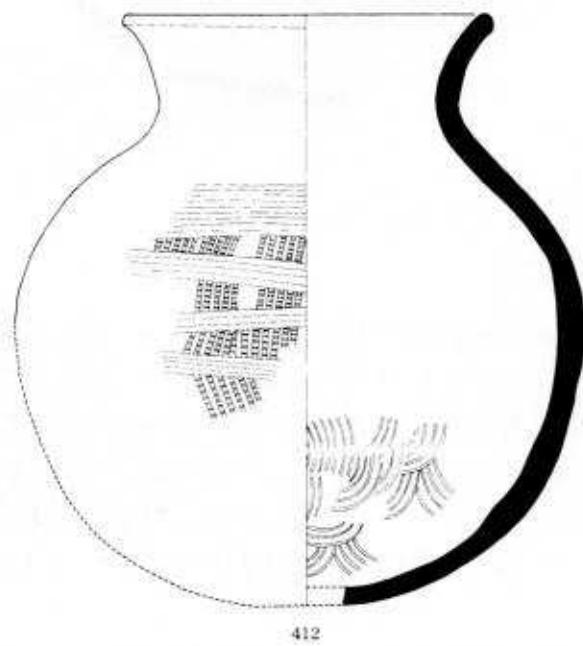
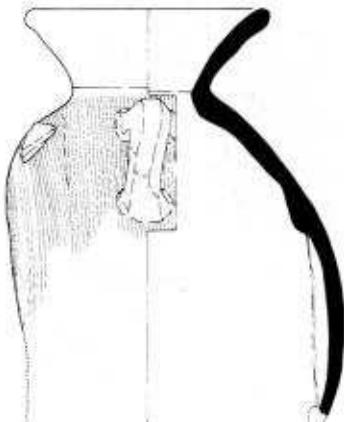
409



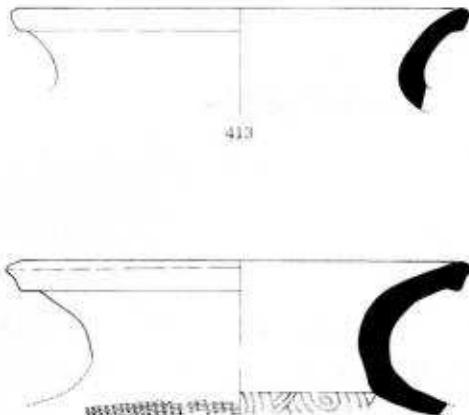
410



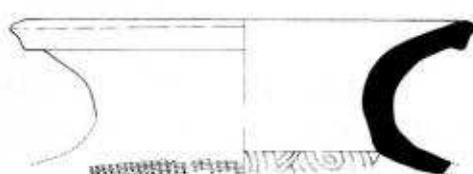
411



412



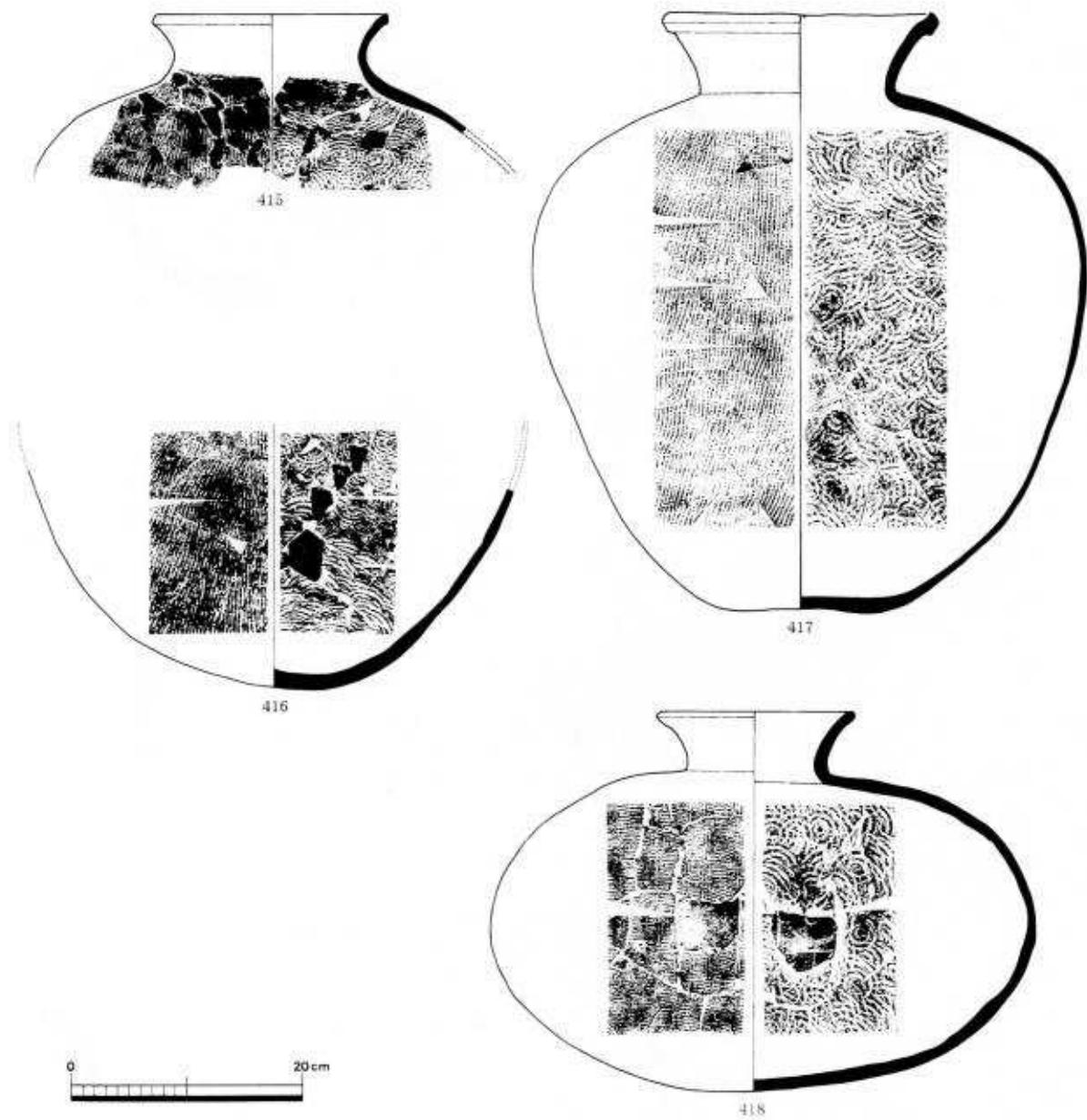
413



414



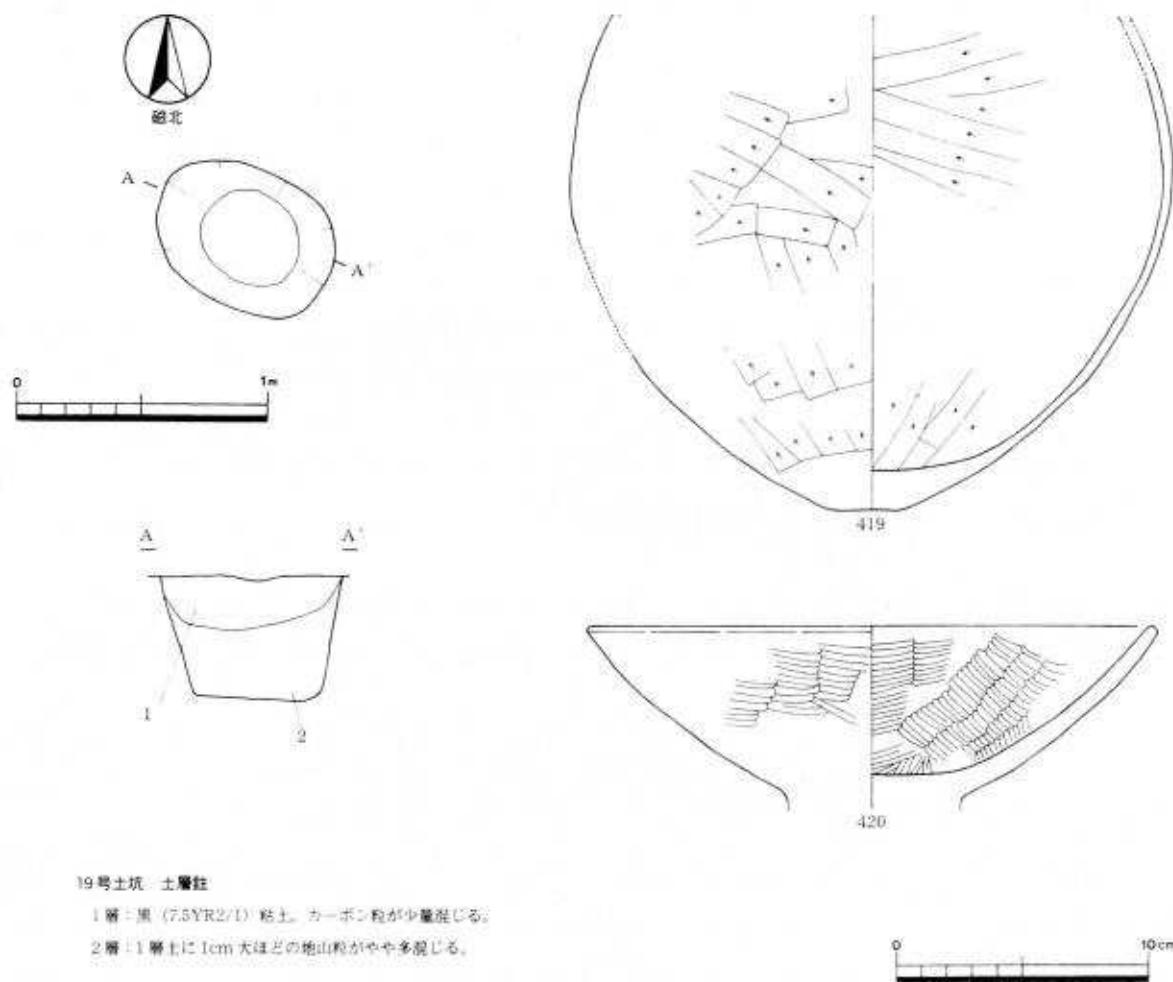
第78図 18号土坑 出土土器 (その5) (S = 1/3)



第79図 18号土坑 出土土器（その6）(S=1/6)

文の叩き目、体部内面に同心円文の当て具痕が見られる。外面の平行線文の叩き目は、彫り込みに対し木目が直交するタイプであるが、その木目の痕跡は不明瞭である。その平行線文は、図でいう左右両端の部分では縦方向、中央の部分では横方向というようになっている。また、閉塞側の反対側部分から体部の約5／6に至る部分の外面では、図でいう縦方向のカキ目が叩き目の上から入れられている。閉塞側部分の外面では、叩き目のみでカキ目はない。なお、閉塞側の反対側部分の外面は、著しく摩滅しており、叩き目とカキ目がほとんど見られない状態となっている。内面に見られる同心円文の当て具痕は、彫り込みの部分に木目が見られないタイプである。

以上、出土土器について見てきたが、これらの出土土器の時期については、須恵器蓋坏などから判断して、概ね、陶邑田辺編年のTK10～TK43型式あたり、陶邑中村編年のII型式2段階～II型式4



19号土坑・土層註

- 1層：黒 (7.5YR2/1) 粘土。カーボン粒が少量混じる。
2層：1層上に1cm大ほどの地山粒がやや多混じる。

第80図 19号土坑 平面図・断面図 ($S = 1/30$) ($H = 2.300m$) および出土土器 ($S = 1/3$)

段階あたり（古墳時代6世紀後半頃）に位置付けられるのではないかと思われる。土師器の甕や高壺についても概ねその時期に位置付けて妥当であると考えられる。

以上のように6世紀後半頃の土器が多量に出土したが、木（草）の根が非常に多く入り込んでいる土のところのみで、根にからむようにして出土している点や、土層断面の様子などから、当土坑を即座に遺構として扱うにはやや疑問が残る。遺構としての土坑があったところに多くの根が入り込んだのか、それとも、何らかの別の要因でこのような状況になったのか、そうした当土坑を遺構として扱うべきか否かについては、筆者の力量不足もあるが、ここでは保留したい。なお、当土坑の東側については調査区域外のため遺構の分布状況は不明であるが、調査区域内の当土坑周辺区域の遺構分布状況については、遺物のほとんど出土しない風倒木痕が数基と、比較的浅くて柱穴とは判断しがたいピットが比較的まばらに分布する程度で、明確な遺構は確認されていない。突如として、この区域で、これだけの多量の遺物が出土する当土坑が確認されたのであった。

19号土坑（第80図）

1号公園工事立会い調査区域内に位置。長径約80cm、短径約50cmの橢円形状の平面を呈する。深

さは確認面より約50cmあり、第80図の土層断面図に示してある1層土と2層土が堆積していた。(なお、第80図平面図の方位は磁北を示している。)

出土遺物は、第80図に示してある2点の土器のみであるが、意図的な意味合いを持って廃棄されているのではないかと思われるような出土状況であった。まず、1層土と2層土との層離面にはほぼ沿うようなかたちで、脚部がなく壊部のみ完形となった420の高壊壊部が、ほぼ正置の状態で、土坑のほぼ中央から出土した。そして、土坑の下底面において、419の甕の体部から底部の部分が、ほぼ正置の状態で、土坑の中央から出土した(それらの出土状況の様子については写真図版参照)。

419の甕は、出土時においては、図化した部分の上部が割れた状態となって出土したが、接合により、図化部分のみをほぼ完形の状態(口縁部と肩部が欠けた状態)にまで復元できた。その復元した部分の上端の割れ口は、一部ないのであるが、ほぼ水平にまっすぐとなっており、肩部のところを意図的に割ったのではないかという印象を受ける。なお、底部は平底であるが、痕跡程度の非常に小さな平底で、自立はできない。また、外面は、ハケ目は見られず、ヘラケズリされており、スヌが顕著に付着している。

420の碗形を呈する高壊壊部については、胎土の色調が比較的赤く、赤色土器と考えられる。

当土坑の時期については、上記2点の出土土器から、漆町編年6・7群期あたり(古墳時代初頭)に位置付けられるものと考えられる。

第5節 溝

1号溝(第81図)

15地区内において、前述の2号竪穴住居跡のまわりをめぐるように位置する。幅は約15cm~30cmほどで、深さは約10~15cmほどある。当溝の南西側は、近年の畑耕作によって破壊されてしまっていた。覆土については、第81図の土層断面図にある1層土が主として堆積していた。なお、当溝の北側には、前述の6号土坑が位置し、その6号土坑の土層断面図から、当溝が6号土坑を切っていることが確認された。

遺物については、少量の土器片がまばらに出土する程度であった。

421~423は、有段口縁の甕の口縁部で、口縁部残存で約1/4~1/8の破片である。いずれも口縁端部は丸く作られている。

421・422は、口縁帶に擬凹線が施されているもので、421は、口縁帶が内傾して短く、くの字口縁の口縁端部上端が伸びて、口縁帶を作っているような感じである。422の口縁帶はほぼ直立している。

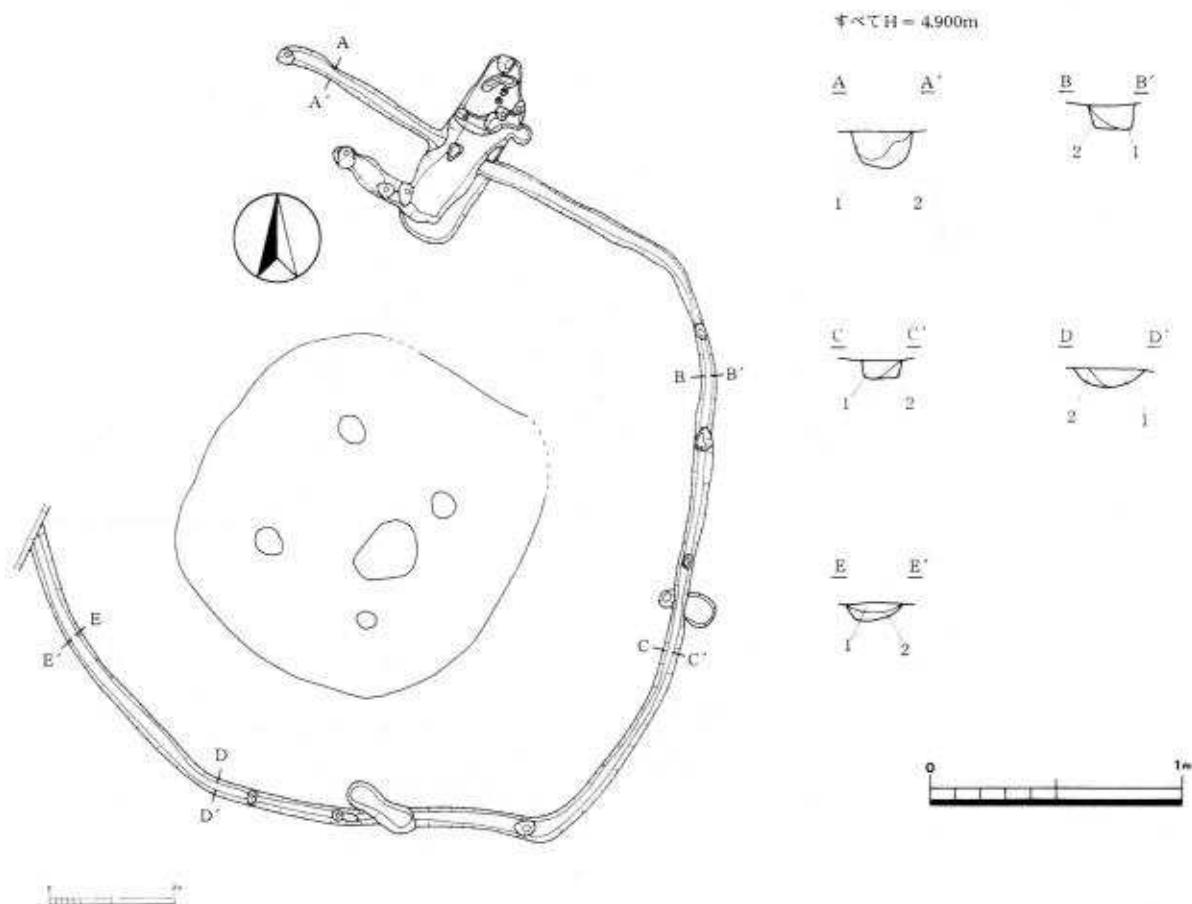
423は、口縁部内面には段が見られず、いわば、有段部の外面を膨らませて、有段を作っているような感じである。なお、外面にはスヌが顕著に付着している。

当溝の時期については、上記3点の出土土器から判断して、法仏式期(弥生時代後期後半)に位置付けられるものと考えられる。

なお、2号竪穴住居跡のところでも述べたのであるが、当溝は、2号竪穴住居跡と何らかの関連性をもつたものではないか(排水施設的な意味合いをもつたものであろうか)と考えられる。

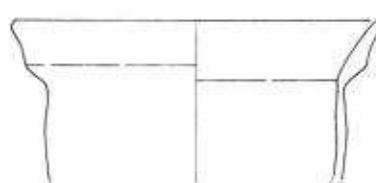
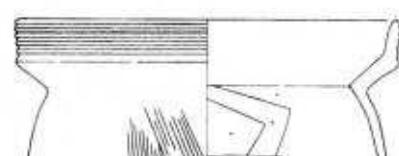
2号溝(第82図)

20地区の中央よりやや東側、前述の19号掘立柱建物跡の南東側隣りに位置し、19号掘立柱建物跡の主軸とほぼ同じ方向に走る。長さが約400cm、幅が約50cm~60cmあり、深さは確認面から約



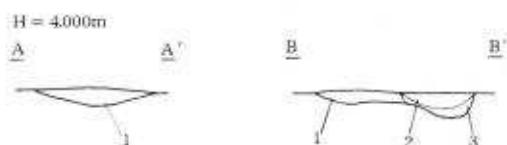
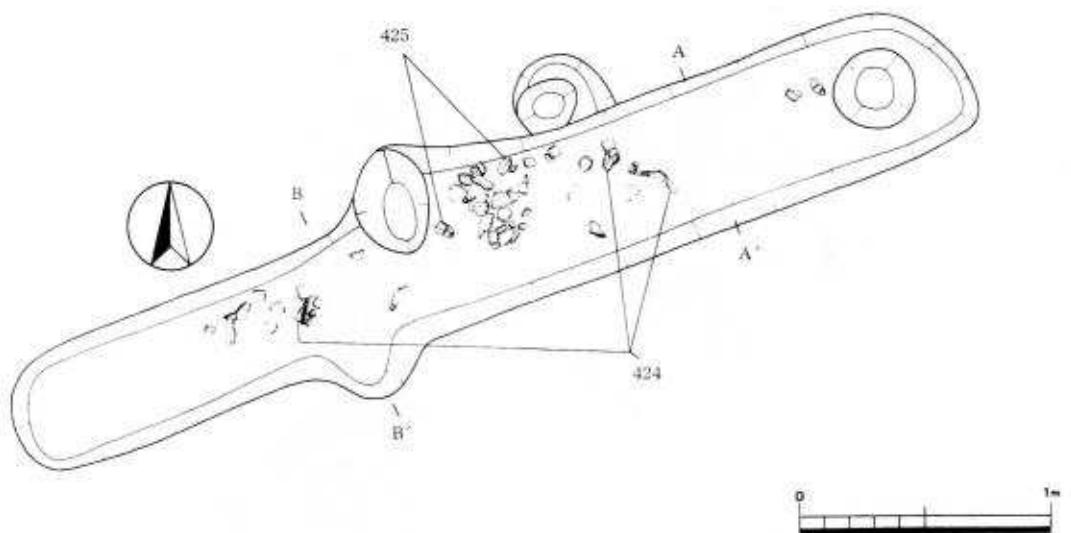
1号溝 土層註

1層：黒褐(7.5YR3/2)土。
2層：地山土に1層土が少量混じる。

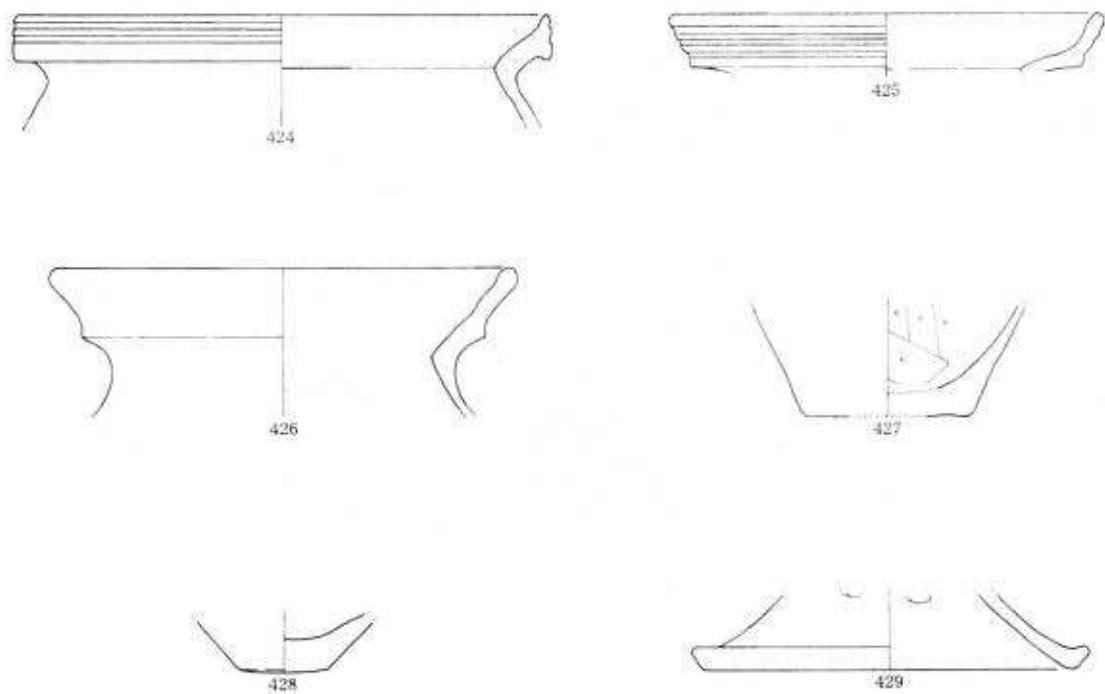


0 10cm

第81図 1号溝 平面図 (S = 1/120)・断面図 (S = 1/30) および出土土器 (S = 1/3)



2号溝 土層註
 1層：黒褐(7.5YR3/2)土。カーボン粒が少量混じる。
 2層：暗褐(7.5YR3/3)土。(別遺構)
 3層：2層土に地山粒が少量混じる(別遺構)



第82図 2号溝 平面図・断面図 ($S = 1/30$) および出土土器 ($S = 1/3$)

5cmほどと浅い。覆土は、第8・2図の土層断面図にある1層土のみが堆積していた。

遺物は、土器のみで、溝の規模・深さのわりには比較的多く出土しており、パンケースにして1/3箱分ほどある。

4・2・4・4・2・5は、有段口縁の甕口縁部で、口縁帯に擬凹線が施されているものである。いずれも口縁端部は丸く作られている。4・2・4の口縁帯は短く、口縁部の断面形が三角形状を呈す。

4・2・6は、有段口縁の甕口縁部で、口縁帯外面がヨコナデされ、擬凹線が施されていないものである。口縁端部は丸く作られている。口縁部内面には段が見られず、有段部外面が稜のように張り出して有段口縁を作っているような感じとなっている。

4・2・7・4・2・8は平底の甕底部である。いずれもしっかりとした平底であるが、4・2・8の外底面は若干張り出しており、やや不安定な底部となっている。

4・2・9は、脚端部が跳ね上がるような形を呈した高壺の脚底部である。脚裾部には円形の穿孔があるが、破片が底部残存で約1/8の小さな破片であるため、その穿孔の数は不明である。

当溝の時期については、上記の出土土器から法仏式期（弥生時代後期後半）に位置付けられるものと考えられる。

なお、当溝は、前述の1・9号掘立柱建物跡と何らかの関連性（雨落ち溝であろうか）をもつものと思われる。

3号溝（第8・3図～第8・5図）

10地区南隅から、20地区南西隅を通り、22地区内を北西から南東方向に走る。溝の北西端部分はカクランによって破壊されていた。また、22地区内（溝の南側部分）では、溝が途中で切れているようになっているが、これは、22地区内が著しく削平を受けており、溝の下底部分のみが残存していたためであると考えられる。当溝の確認された部分の長さは70mほどあり、最大幅は約4m、深さは、確認面より最大で70cmほどである。

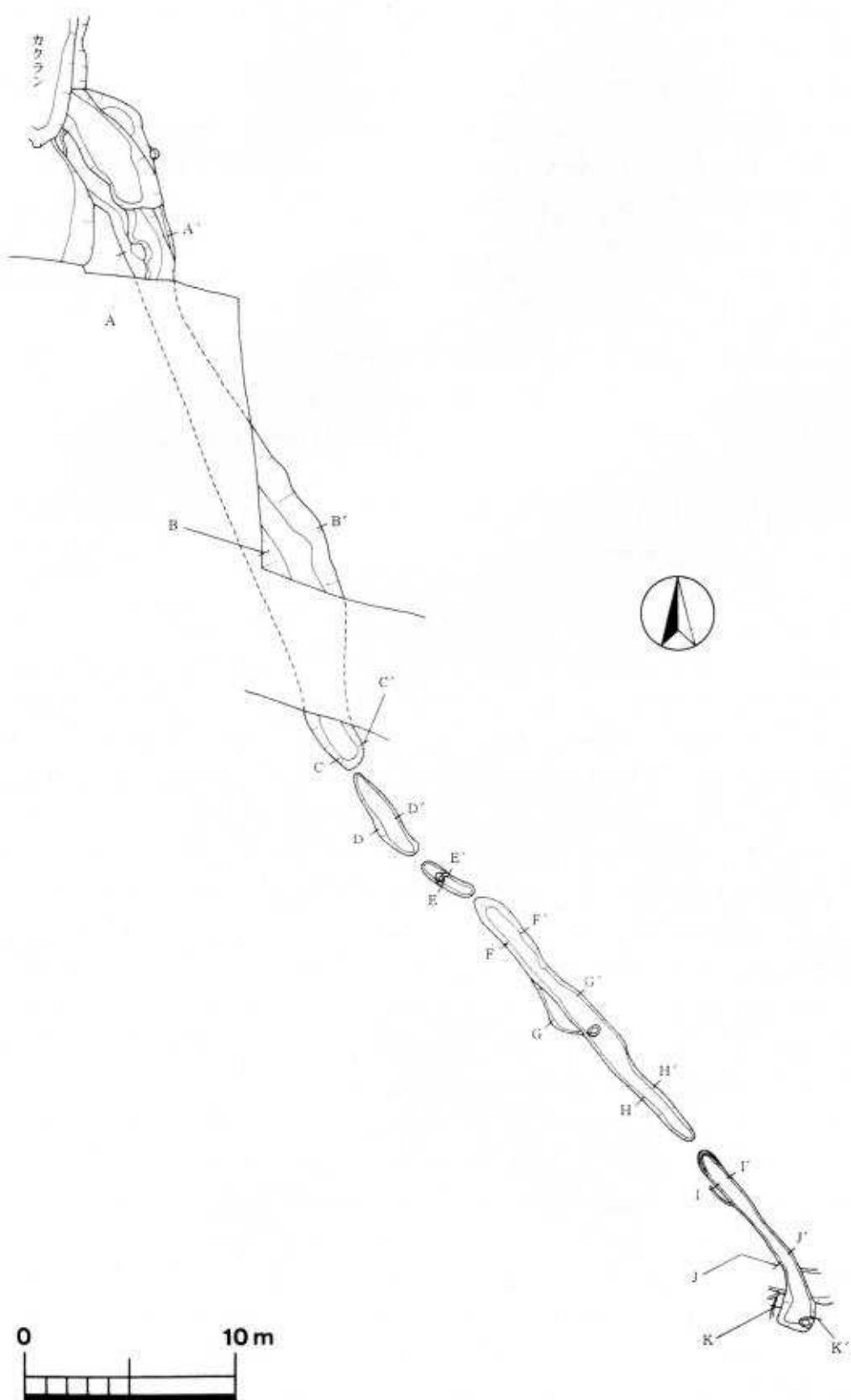
土層断面については、第8・4図に示したとおりであるが、基本的に、にぶい黄褐色土、にぶい黄橙色土、ないしは黒褐色土を基本とした1～4層、暗褐色土を基本とした5・6層、黒褐色土を基本とした7～9層、一部の下底部分に存在していた灰褐色土の10層と、4つの層に分けられるものと考えられる。なお、調査時においては、1～6層を上層部、7～10層を下層部とし、上層部と下層部とに分けて遺物の取り上げを行なった。（ただし、下層部の10層からは、遺物はほとんど出土しなかった。）

遺物の出土状況については、上層部、下層部いずれにおいても、ある箇所にまとまって出土するような状況は見られず、概ね全体に散らばるようにして出土した。

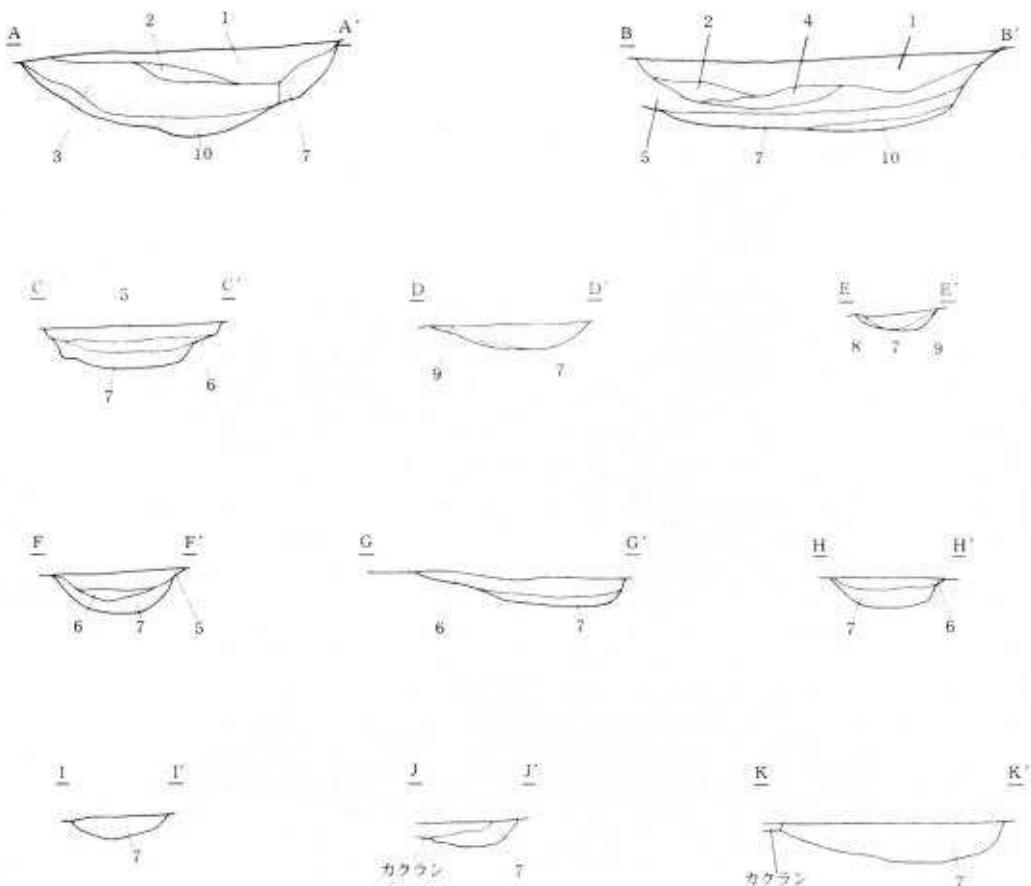
遺物は、すべて土器片であり、上層部でパンケース約3.5箱分、下層部でパンケース約1.5箱分である。しかし、そのほとんどが細片で、図化できるものは、ごくわずかであった。

4・3・0～4・3・4は上層部出土土器である。4・3・0は丸底の底部で、器壁が非常に厚く、大型壺の底部と思われる。4・3・1は、壺ないしは鉢形を呈する小型土器の体部から底部である。4・3・2・4・3・3は、須恵器壺蓋である。4・3・2は、天井部から口縁部に至る部分に稜があり、口縁端部内面には明瞭な段が見られる。4・3・3は、天井部から口縁部に至る部分には稜がなく、1条の凹線が見られる。また、口縁端部内面の段は不明瞭なものとなっている。4・3・4は須恵器壺の口縁部である。

上層部出土土器については、上記の図化した土器のほか、時期が特定できる細片がいくつか見られたが、それらの土器は、弥生時代後期後半の法仏式期から古墳時代後期（陶邑田辺編年のTK10型式期あたり）と、非常に長い時期幅があり、時期的なまとめは見られなかった。



第83図 3号溝 平面図 ($S = 1/300$)



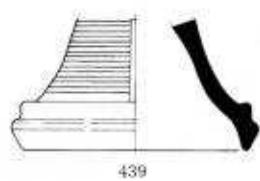
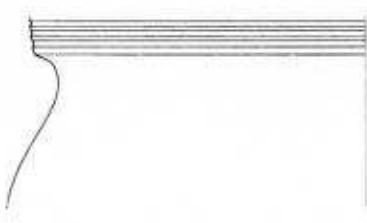
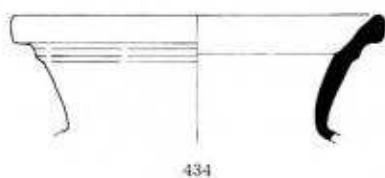
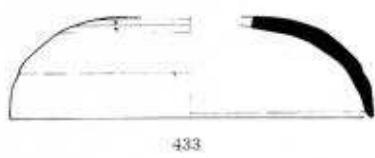
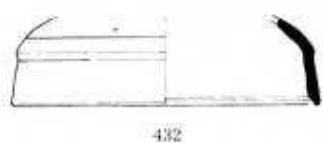
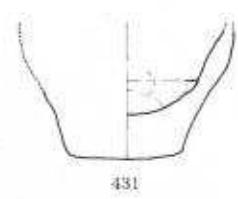
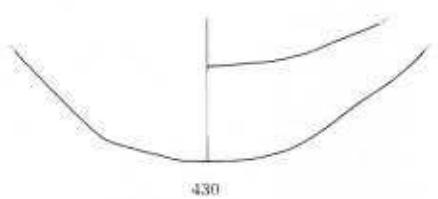
3号溝 土層註

- 1層：にぶい黄褐（10YR4/3）土。地山粒が多く混じる。
- 2層：にぶい黄褐（10YR4/3）土。地山粒が少量混じる。
- 3層：にぶい黄褐（10YR6/4）土。
- 4層：黒褐（7.5YR2/2）土。
- 5層：暗褐（7.5YR3/3）土。地山粒・カーボン粉が少量混じる。
- 6層：暗褐（7.5YR3/3）土。地山粒やや多・カーボン粉少量混じる。
- 7層：黒褐（7.5YR3/2）土。カーボン粉が少く混じる。粘性やや強。
- 8層：7層土に地山粒が少量混じる。
- 9層：地山土に7層土が少量混じる。
- 10層：灰褐（7.5YR4/2）土。粘性やや強。



第84図 3号溝 断面図 ($S = 1/60$) ($H = 3.300\text{m}$)

435～440は下層部出土土器である。435は有段口縁を持つ甕の口縁帯下端から肩部、436はくの字口縁の甕口縁部である。437は有段口縁の壺口縁部。甕の可能性もあるが、口径が小さい点から壺と判断した。438は、古墳時代前・中期における畿内系高坏の脚部。脚柱部は比較的短く、下方へ比較的大きく開く。439は須恵器高坏の脚部。破片が小さく、数は不明であるが、長方形のスカリ窓が見られる。440は須恵器甕の体部片。外面の平行線文の叩き目は、彫り込みに対し木目が直交するタイプで、内面はナデ消しされている。なお、439・440の須恵器は、内外面が暗青灰色、断



440

第85図 3号溝 出土土器 ($S = 1/3$) (430~434: 上層部 435~440: 下層部)

面セピア色をしており、その胎土から他地域産（陶邑産）と考えられる。

下層部出土土器については、上記の土器のほか、時期特定できる細片がいくつかあったが、それらの土器は、法仏式期（弥生時代後期後半）から漆町編年13群期あたり（古墳時代中期）までと、長い時期幅があり、上層部出土土器と同様、時期的なまとまりは見られなかった。

当溝の時期については、遺物の時期的なまとまりが見られず、明確な判断はしがたいが、下層部出土土器で見られた最も新しい時期を、当溝の時期とすれば（それより古い時期の遺物を混入品と判断すれば）、漆町編年13群期あたり（古墳時代5世紀中葉～後葉頃）に位置付けられるものと考えられる。

第6節 台地上部分出土の特殊遺物

ここでは、台地上部分から出土した特殊土製品と玉類（第86図掲載）について見ていく。上述の各遺構のところで掲載してよいものもあったが、図版の縮尺や紙幅の都合上、節を改めて、ここで見ていくこととした。

【土製品】（441）7号竪穴住居跡の床面より出土。上の部分と下の部分のほぼ中央には、棒状具で刺突したような穴があるが、貫通はしていない。また、クシ状具で施されたと思われる刺突文がほぼ全体に見られる。ほぼ完形で出土したが、下の表面のほぼ半分は著しく摩滅していた。

【土製勾玉】（442）16地区の中央よりやや南側に位置し、7号竪穴住居跡の北西側に隣接する、直径約20cm、深さ約40cmのビットから出土した。（このビットからの出土遺物は442の土製勾玉1点のみである。）極めて緻密な胎土で作られ、胎土中に砂礫等は見られない。ほぼ完形で出土したが、穿孔されている部分の反対側（図の下の部分）の一部が欠けていた。

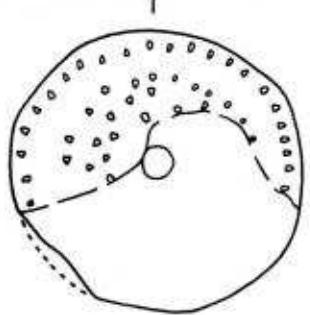
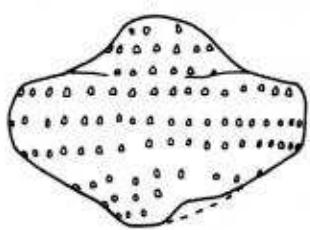
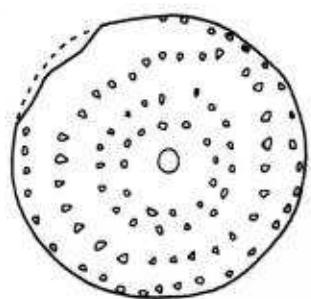
【管玉】（443・444）443は11号掘立柱建物跡のP4から出土、444は3号溝の北西隅より出土した。いずれも緑色凝灰岩で作られており、完形の状態で出土した。

註

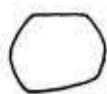
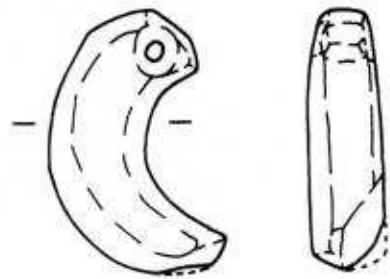
各遺構の時期を示す際、漆町編年・陶邑編年のあとにカッコ書きで大まかな絶対年代を付したが、これは、一般的な読者にも、各遺構の大まかな時期を知っていただこうという意図で付したものである。なお、その大まかな絶対年代については、植田1994にある「古墳時代土器編年併行関係表（案）」と田辺1981にある「須恵器年表」を参考としている。以下、第5章～第7章でもこれを用いる。

引用参考文献

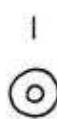
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店
- 中村 浩 1981 『和泉陶邑窯の研究』 柏書房
- 田嶋明人 1986 「IV考察—漆町遺跡出土土器の編年的考察—」『漆町遺跡I』 石川県立埋蔵文化財センター
- 橋本英道 1987 「月影式」土器をめぐる編年的な問題について『吉竹遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- 植田文雄 1994 「古墳時代土器論—近江の土師器、その変遷と画期—」『滋賀考古』第12号 滋賀考古学研究会



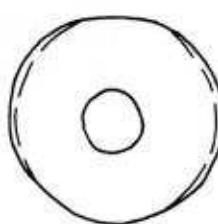
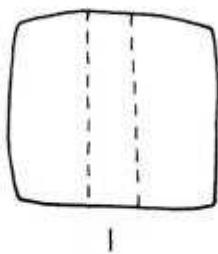
441



442



443



444

第86図 台地上部分出土 特殊遺物 (S = 1/1)

第5章 低湿地部分の出土遺物

第1節 低湿地部分の概要

台地上部分から南側に広がる低湿地部分では、遺構は確認されず、遺物が出土するのみであった。

11地区と1号公園工事立会い調査区域（調査地区については、第2章第2節にある第4図・第5図を参照。）内にある台地縁辺部以外の低湿地部分においては、第3章の第9図～第12図に示してある低湿地部分の土層断面図にあるとおり、現況面から約80cm～1mの深さで遺物包含層（第9図～第12図に示した7層）が確認された。なお、この遺物包含層の下にある黒褐色腐植土層（第9図～第12図に示した11層）は無遺物層で、この層から下には、埋蔵文化財は存在しないものと判断した。台地縁辺部以外の低湿地部分における遺物の出土状況について見ると、遺物のほとんどは小さな破片となって出土しており、まとまった出土状況は見られず、散漫に出土する程度であった。出土量も約3600m³の調査で、パンケースにして13箱分と少量である。遺物の時期については、弥生時代後期後半～末（法仏式期・月影式期）、古墳時代、さらには古代・中世のものも見られた。

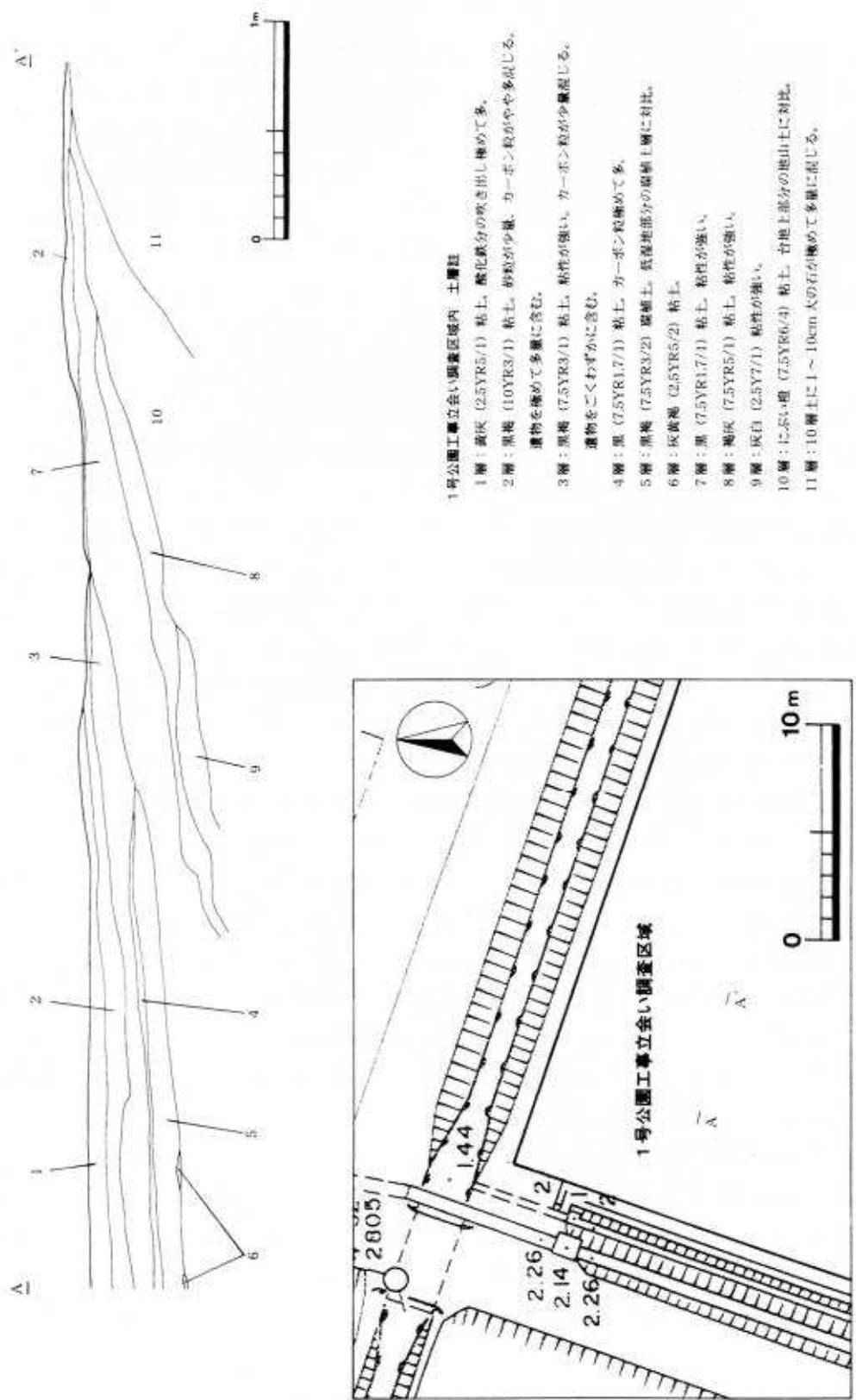
一方、11地区と1号公園工事立会い調査区域内にある台地縁辺の低湿地部分では多量の遺物が出土した。11地区内の台地縁辺部では、約100m³の面積で、パンケースで約25箱分の遺物が出土した。1号公園工事立会い調査区域内の台地縁辺部でも、11地区的台地縁辺部と同様な出土状況で、現況面から約30cm～60cmの深さで多量の遺物が出土した（約70m³でパンケースにして約36箱分の遺物を回収した）。これらの台地縁辺部から出土した遺物については、大きな破片となって出土する土器片も見られ、略完形に復元できる土器もいくつかあった。

この多量に遺物が出土する台地縁辺部における土層断面図については、11地区においては、調査区域の幅が6m程度と狭く、また、調査区壁面のところが砂によって厚く盛土されており、土層断面を観察する壁面を土止めする必要があったため、土層断面図の作成はできなかった。しかし、1号公園工事立会い調査区域内の北西側の箇所において、台地縁辺部における土層断面図の作成を行なえた。その土層断面図を示したものが第87図で、断面図にある2層黒褐色土から多量の遺物が出土した。11地区においても、この2層黒褐色土とほぼ同色・同質の土から多量に遺物が出土していた。なお、土層断面図にある4～9層は無遺物層、10・11層は台地上部分における地山である。

台地縁辺の低湿地部分から多量に出土した遺物の時期について見ると、漆町編年12群期～14群期（古墳時代5世紀前葉～6世紀前葉）のものが最も目立ち、次いで漆町編年9群期～11群期（古墳時代4世紀中葉～5世紀初頭）のものが目立つ。そして、弥生時代後期後半～古墳時代初頭のものが少量、古代・中世のものがごく少量出土しているという状況であった。まとまったようにして多量に遺物が出土したが、一括資料としての性格は弱いといえよう。

以上、台地縁辺の低湿地部分における状況を述べたが、昭和59年に石川県立埋蔵文化財センターが台地上部分西側の台地縁辺部を調査した際にも、ほぼ同様な状況であったと報告されている。その報告では、「集落の外縁に帯状に連なる地形変換線上の鞍部に、遺物（土器等）が継起的な投（廃）棄など人々の働きかけ（部分的な掘りかえし、改修の可能性を含めて）が加わったもの」と考えられている（柄木1987）。今回の調査で確認された台地縁辺部の遺物出土状況もそのような人々の働きかけが加わったものであろう。

なお、4地区内にも台地縁辺部があるが、この箇所では、遺物が多量に出土することはなかった。



第87図 1号公園工事立会い調査区域内（北西側箇所） 土壌断面図 (S = 1/30) (H = 2.400m)

第2節 出土遺物

低湿地部分からは、弥生時代後期後半～末、古墳時代、さらには古代・中世の遺物が出土した。

11地区と1号公園工事立会い調査区域内にある台地縁辺部以外の低湿地部分では、約3600m²を調査し、パンケースにして約13箱分、11地区内の台地縁辺部では、約100m²でパンケース約25箱分、1号公園工事立会い調査区域内の台地縁辺部においては、約70m²でパンケース約36箱分を回収し、低湿地部分から出土した遺物をすべて合わせるとパンケース約74箱分となる。

遺物のほとんどすべては土器であるが、8地区から銭が2点出土した（第88図掲載）。445は宝元2年（1039）発行年の北宋銭である「皇宋通宝」で、完形となって出土した。もう1点の446は「永樂通宝」で、ほぼ半分の破片となって出土した。

低湿地部分から出土した上記の銭以外の出土遺物である土器については、紙幅等の都合から、ここでは図を掲載するに留めることとした（第89図～第91図）。なお、掲載した土器は、ある程度まで復元できたもの、比較的大きな破片となって出土したもののみで、その他の土器については、紙幅等の都合から省略した。

引用参考文献

橋木英道 1987 「第4章 第2次発掘調査 第2節 遺構」『吉竹遺跡』石川県立埋蔵文化財センター



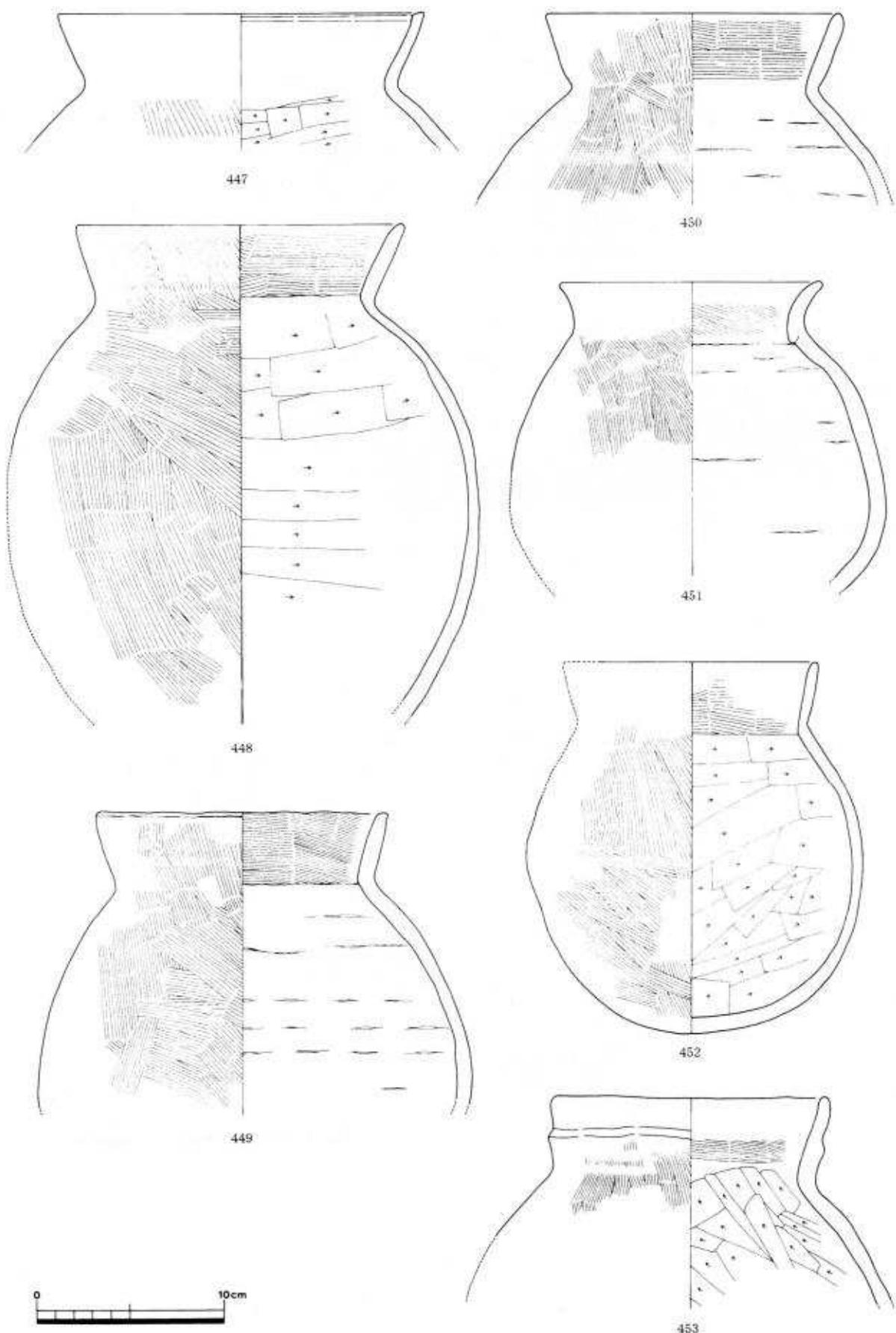
445



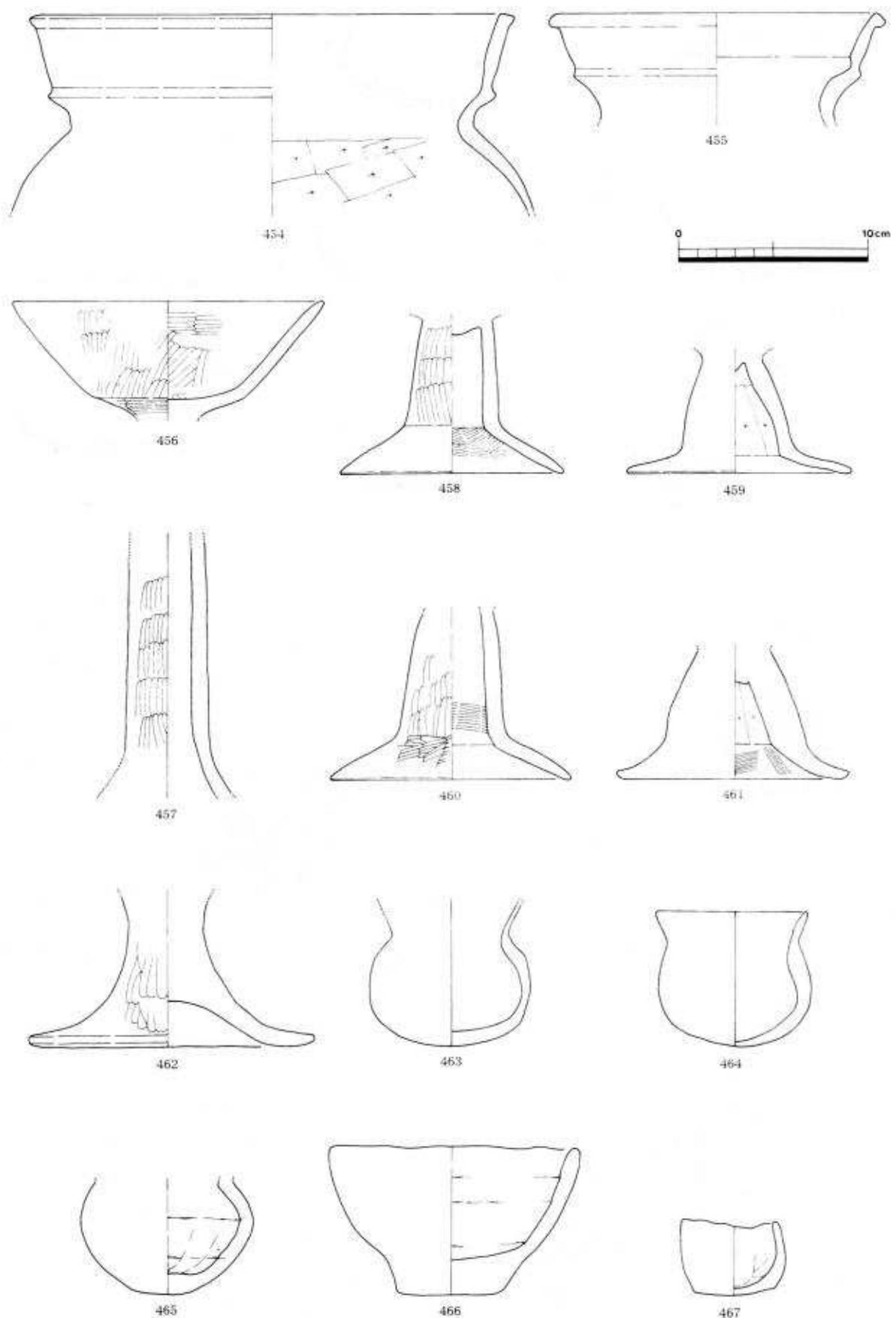
446



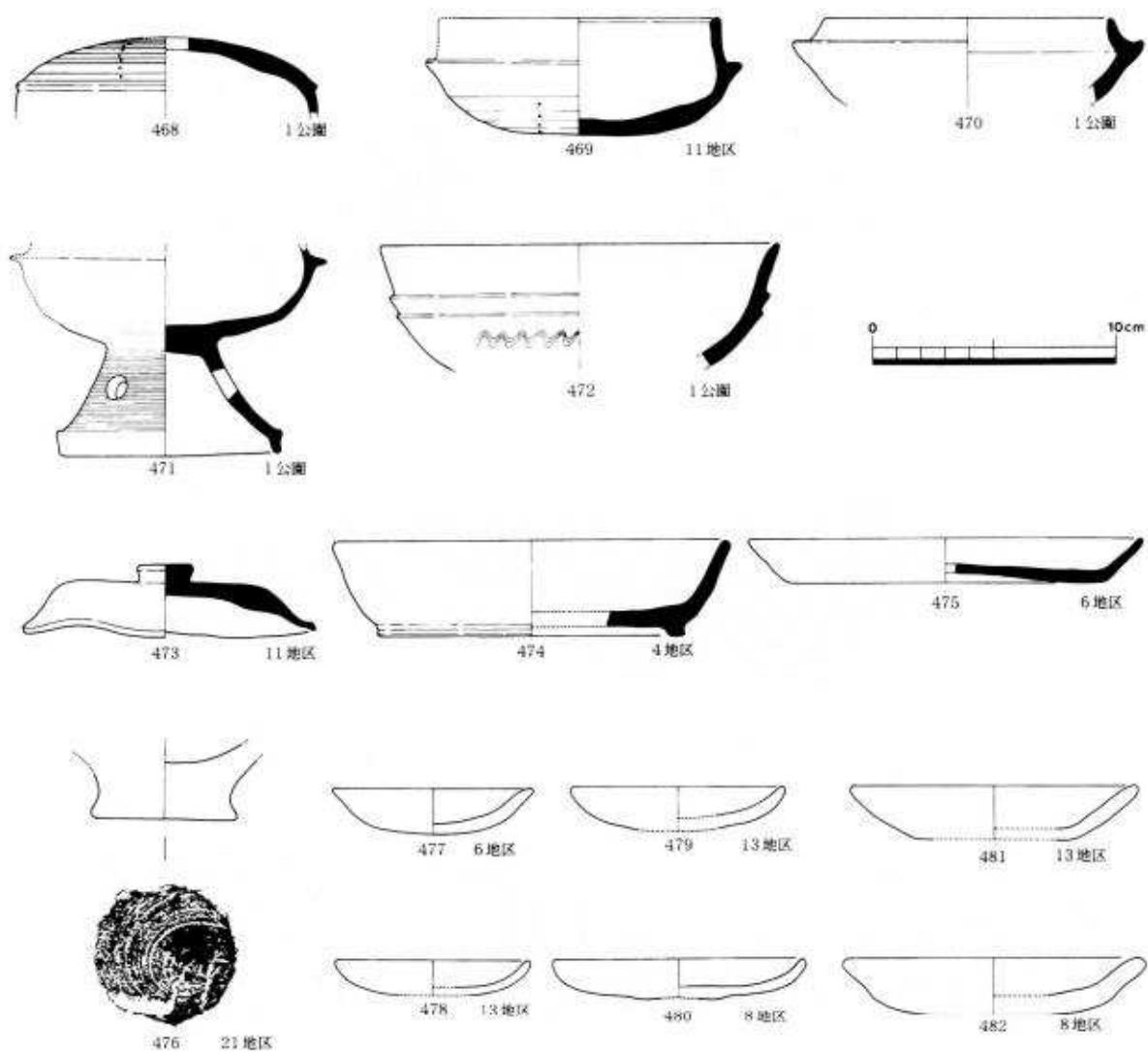
第88図 低湿地部分出土 銭 (S = 1/1)



第89図 低湿地部分 出土土器（その1）（古墳時代の土器）
(S = 1/3) (すべて11地区出土)



第90図 低湿地部分 出土土器 (その2) (弥生・古墳時代の土器)
(S = 1/3) (すべて11地区出土)



第91図 低湿地部分 出土土器（その3）（古墳時代・古代・中世の土器）
(S = 1/3) (右下の地区名は出土地区を示す)

第6章 19地区の調査

第1節 19地区の概要

今回の調査では、台地上部分から北へ約300m離れたところでも調査を行ない、この箇所を19地区と称して調査を行なった（19地区の位置については第3図を参照。調査面積は約240m²）。

19地区は、当初、周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが、平成6年度に実施した詳細分布調査（試掘調査）で、棒状の木材を中心として遺物が出土し、この箇所に埋蔵文化財が存在していることが確認された。本書では19地区を吉竹遺跡に含めてしまっているが、すでに周知されていた吉竹遺跡から位置的に離れており、この19地区は別の新発見の遺跡と扱うべきではなかったかと思われる。

さて、19地区の位置している箇所は、調査当時の現況は水田で、低湿地である。平成6年度の詳細分布調査では、現況面から深さ約80cmのところで、棒状の木材等の遺物を含む遺物包含層が確認された。そして、現況面から深さ約1m以上になると、明るめの灰黄色シルト層が極めて薄く、黒色シルト層がやや厚く堆積し、それぞれの層が交互に重なるように存在していた。この明るめの黄灰色シルト層と黒色シルト層では遺物は確認されず、この2つの層が確認されたところから下は無遺物層であると判断した。

発掘調査では、上記の詳細分布調査の結果を基に行ない、明るめの黄灰色シルト層ないしは黒色シルト層が確認される深さまで掘削した。その結果、東端部において、北東から南西方向に流れる溝と考えられる落ち込みが確認され、そこから棒状の木材を中心とした遺物が極めて多量に出土した。そして、溝にはほぼ直交するようにして、長さ5m以上の丸太状の木2本が上下に並べられ、その2本の木の北側に20数本の杭が、溝にはほぼ直交するように並んで打たれているのを確認した。すなわち、堰が確認されたのであった。この堰の時期については、後述するが、漆町編年9・10群期（古墳時代4世紀中葉～後半頃）と考えられる。なお、この溝と堰が確認された箇所の東側は調査区域外となっており（道路となっている）、今回の調査では、溝および堰の西側部分のみの調査となった。

以上のとおり19地区東端部では溝と堰が確認されたが、19地区の中央部や西側部分については、遺構は確認されなかった。遺物についても同様で、中央部・西側部分ではほとんど出土しない状況であった。つまり、19地区では、東端部で溝と堰が確認され、その部分（とくに堰のところ）にのみ遺物が集中しているという状況であったのである。

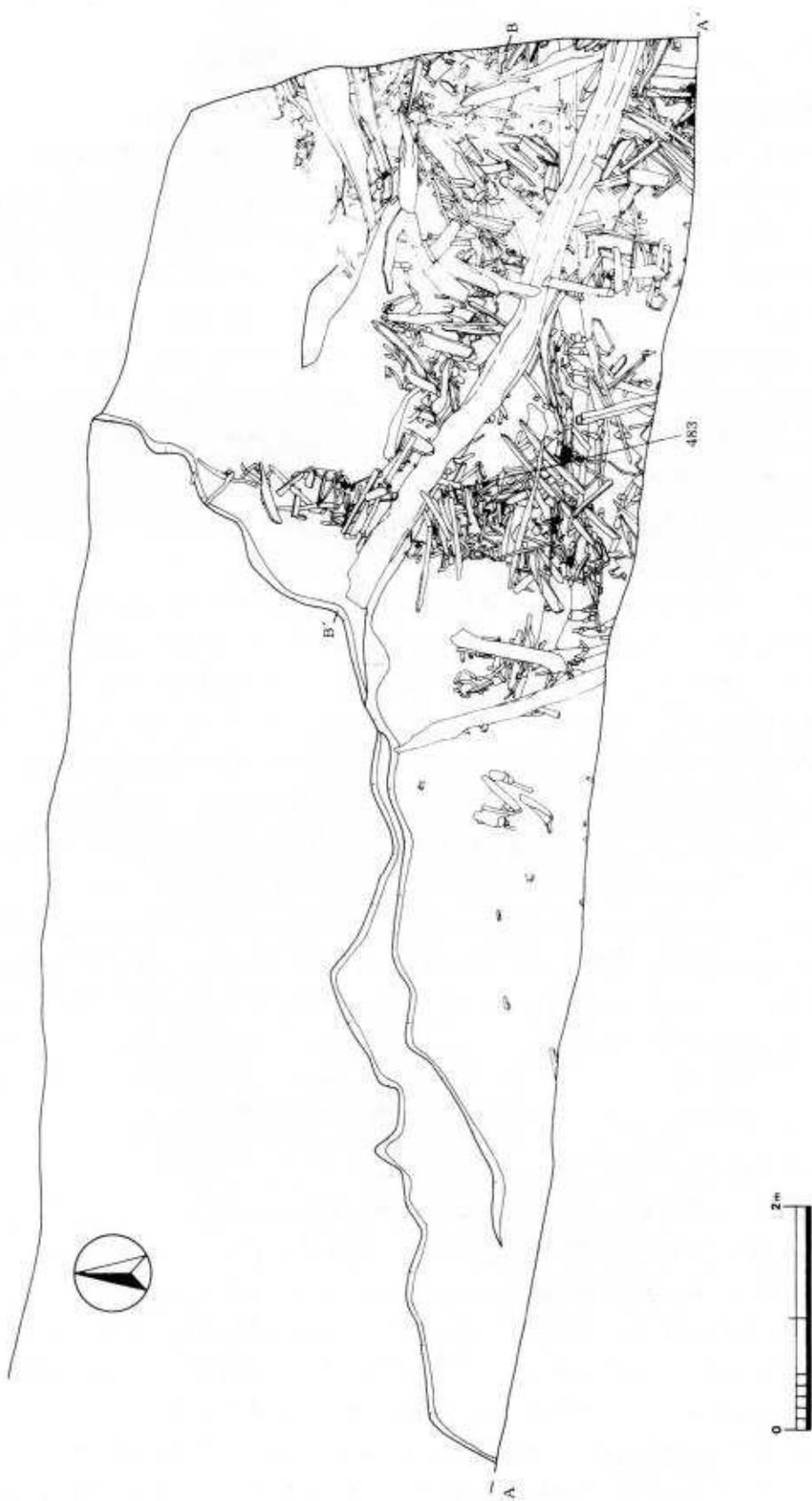
第2節 遺構と遺物

【遺構】（第92図～第94図）

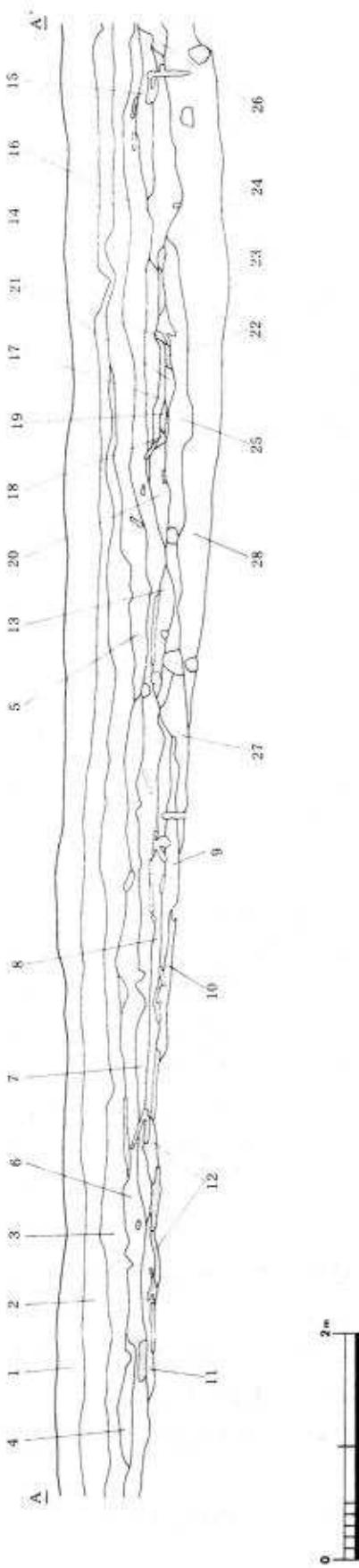
19地区では、上述のとおり、東端部において溝と堰が確認された。

まず、溝についてであるが、地形等から考えて、この溝は北東から南西方向に流れていたものと考えられる。溝の幅は、溝の東側部分が調査区域外となっているため不明であるが、6m以上はある。深さは、調査できた部分の最も深いところで、確認面より約60cmある。溝の肩部については、極めて緩やかな傾斜となっており、明確な落ち込みは見られない。溝の土層断面については、調査区南側壁面において土層断面図を作成できた。その溝の部分を掲載したものが第93図である。1～4層は客土ないしは旧耕作土等で、5・6層は遺物包含層と扱った。そして、7～28層が溝の覆土である。

次に、堰についてであるが、その横木と杭の出土状況を示したものが第94図である。横木は上下に2本重なって出土し、平面で見ると、交差するようにして出土した。上の木は直径約35～40cmの丸

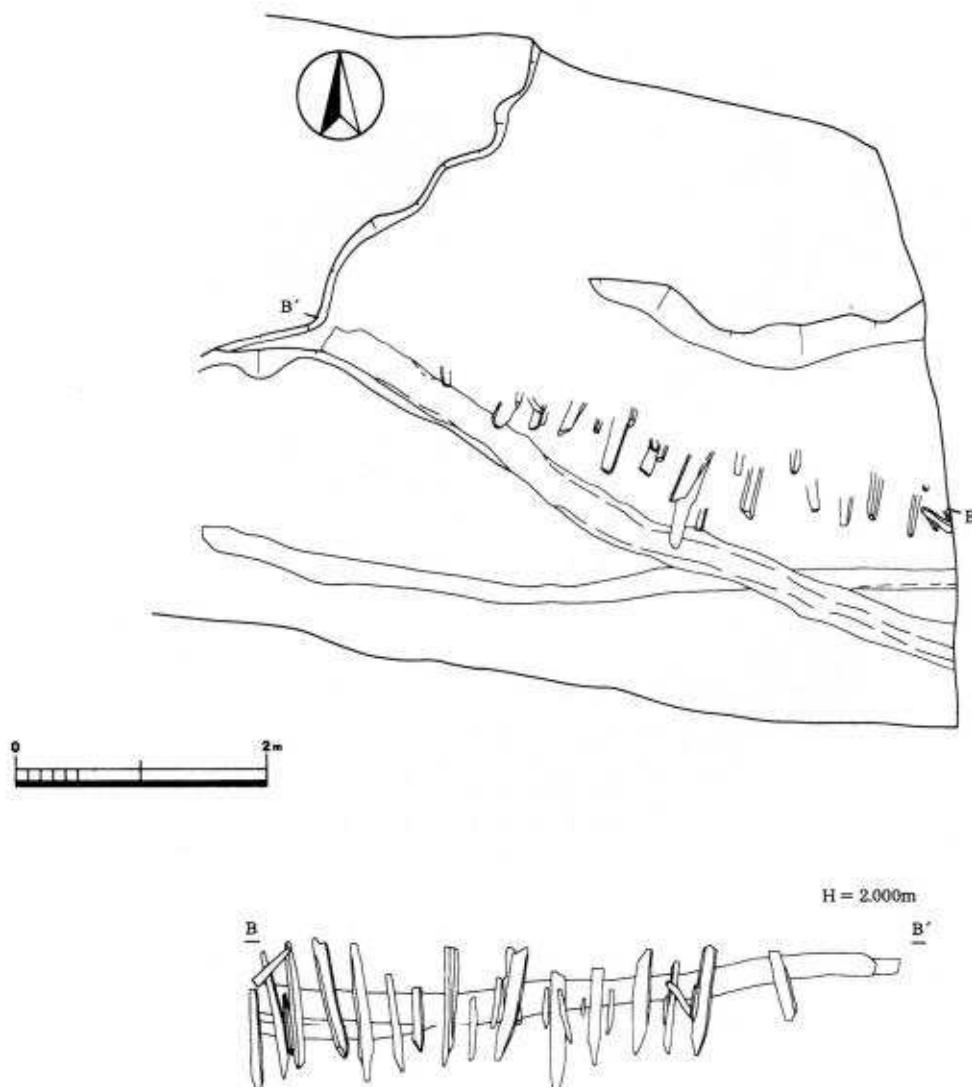


第92図 19地区東端部検出 溝および壁 平面図 ($S = 1/60$) (方位は磁北を示す)



- 1層：カドミ防除客土。
 2層：灰黒縞 (10YR6/3) 粘土。砂妙やや混じる。
 3層：褐灰 (10YR4/1) 粘土。
 4層：灰黄縞 (10YR4/2) シルト。カーボン粒少量混じる。
 5層：黒縞 (2.5YR3/2) 粘質土。
 6層：黒縞 (10YR3/2) シルト。カーボン粒少量混じる。
 7層：黒縞 (2.5Y3/1) シルト。砂粒、カーボン粒少量混じる。
 8層：黄灰 (2.5Y4/1) シルト。砂粒、カーボン粒少量混じる。
 9層：灰黒縞 (10YR3/2) 黏植土。
 10層：黒縞 (2.5Y3/1) シルト。木質多く混じる。
 11層：灰黒縞 (10YR4/2) シルト。砂粒、カーボン粒少量混じる。
 12層：黄灰 (2.5Y4/1) 黏質土。カーボン粒少量混じる。
 13層：黄灰 (2.5Y4/1) 黏植土。砂粒、カーボン粒少量混じる。
 木枝等の木質が多く混じる。
 14層：黄灰 (2.5Y4/1) シルト。砂粒少量混じる。
 15層：黄灰 (2.5Y4/1) 粘質土。木質少量混じる。
 16層：黒縞 (2.5Y3/1) 粘質土。砂粒少量、木質多く混じる。
 17層：暗灰縞 (2.5Y4/2) 粘質土。砂粒、木質多く混じる。
 18層：黄灰 (2.5Y5/1) 砂。
 19層：黒縞 (2.5Y3/2) 粘質土。砂粒多く混じる。
 20層：黒縞 (2.5Y3/2) 粘質土。砂粒、カーボン粒少量、木質多量混じる。
 21層：灰縞 (2.5Y6/2) 砂。
 22層：黒縞 (2.5Y3/1) 粘質土。砂粒多く、木質少量混じる。
 23層：黄灰 (2.5Y4/1) 粘質土。砂粒多く、カーボン粒少量混じる。
 24層：暗灰縞 (2.5Y5/2) 砂。
 25層：黒縞 (2.5Y3/1) 粘質土。砂粒、カーボン粒少量混じる。
 木枝等の木質が多く混じる。
 26層：暗灰縞 (2.5Y5/2) 粘質土。木質多く混じる。
 27層：黒縞 (10YR3/2) 黏植土。砂粒、カーボン粒少量混じる。
 木枝等の木質が多く混じる。
 28層：暗灰縞 (2.5Y4/2) 黏植土。

第93図 19地区南側壁面(東端部検出溝部分) 土層断面図 (S = 1/60) (H = 2.600m) (スクリントンは木)



第94図 塹の横木と坑 平面図（上）・立面図（下）（S = 1/60）（方位は磁北）

太状のもの、下の木は、上の木よりやや細く直径約20cmの丸太状のものである。長さについては、調査区域外へ入り込んでおり、不明であるが、上の木は550cm以上、下の木は600cm以上ある。杭は横木の北側で確認され、今回の調査区域では26本の杭が確認された。いずれの杭も、上端が南側（横木のほう）に倒れるように、斜めに打ち込まれていた。

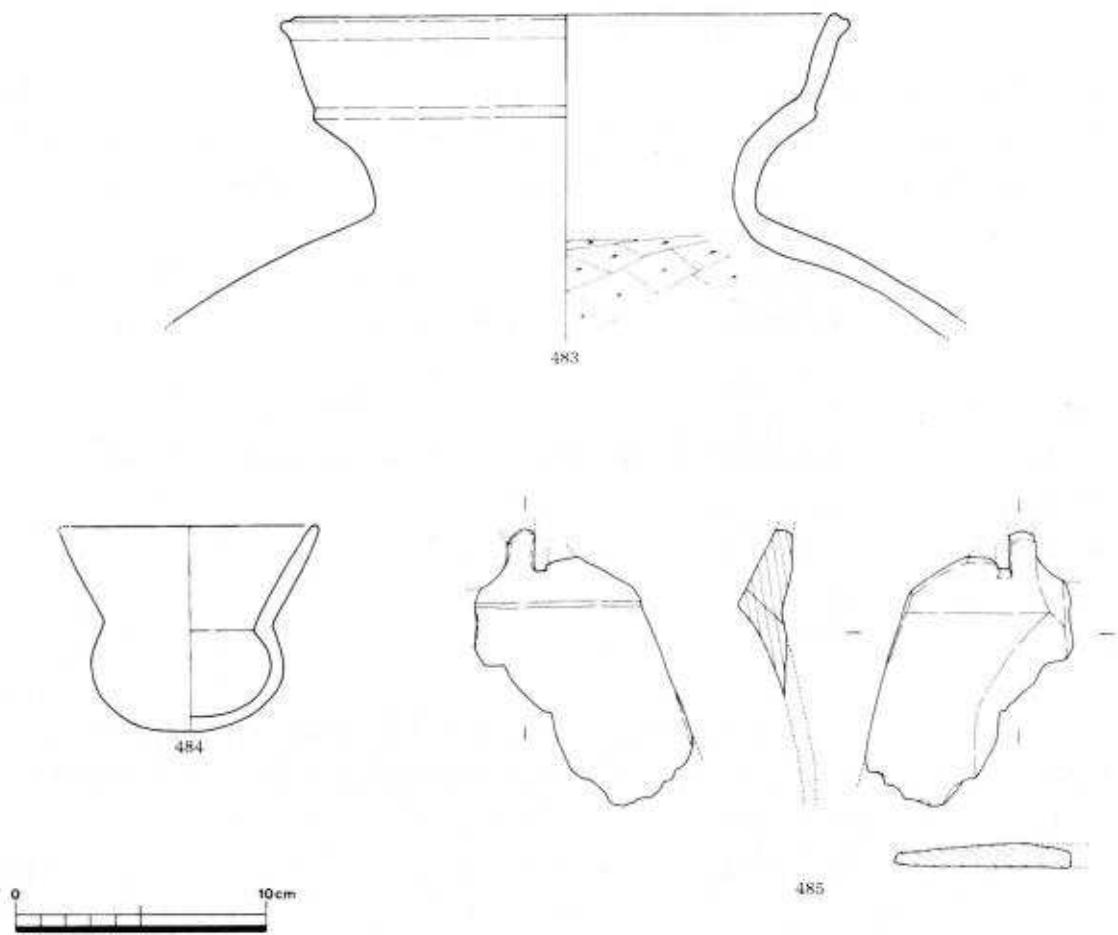
【遺物】（第95図）

19地区から出土した遺物は、東端部の溝および塹からの出土遺物のみで、とくに、溝の南側部分の塹がある箇所から出土した。

塹から出土した遺物は、その大半が棒状の木材であり、約140cm×約80cm×約20cmの水漬けケースで4箱分の木材が出土した。木材については、紙幅の都合等から省略する。

木材以外の出土遺物については、土器片がパンケースにして約1箱分、木製品が1点出土した。そのうち図化できたものが第95図に掲載した3点である。

483は、山陰系の壺の口縁部で、出土地点は第92図に示してある。口縁部残存で約1/3に復元できた。比較的厚い器壁で、重厚感がある。



第95図 19地区内堀 出土遺物 ($S = 1/3$)

484は、小型丸底壺で、略完形に復元できた。内外面とも摩滅していたが、口縁部内面にヘラミガキされているのではないかと思われる痕跡がある。堀が確認されたところの調査区南側壁面付近で出土した。

485は、木製農耕具で、泥除け具の柄装着部分付近の破片である。明確な出土地点については把握できなかったが、堀のところから出土した多量の木材とともに出土した。

以上が堀から出土した遺物であるが、堀の時期については、483の山陰系壺の口縁部、484の小型丸底壺から判断して、漆町編年9・10群期（古墳時代4世紀中葉～後半頃）と考えられる。

第7章 まとめ

今回の吉竹遺跡の調査では、台地上部分において弥生時代後期後半から古墳時代後期に至る集落跡を約11,000m²調査し、台地上部分の南側にある低湿地部分では、遺構は検出されず、遺物包含層から出土した遺物の回収を行なった。そして、台地上部分から北へ約300m離れたところ（19地区）において、古墳時代前期の堰を1基検出した。

台地上部分南側にある低湿地部分と北側の19地区については、第5章・第6章の報告に留めることとし、ここでは、台地上部分の集落跡から検出された遺構を、時期ごとに整理し、まとめとしたい。

法仏式期（弥生時代後期後半）

今回の調査で検出された遺構の時期のなかで、最も古い時期である法仏式期に属する遺構としては、

竪穴住居跡 3軒（2号、7号、8号）

掘立柱建物跡 7棟（2号、7号、9号、15号、19号、22号、28号）

土坑 1基（6号）

溝 2本（1号、2号）

がある。

7号・8号竪穴住居跡、19号掘立柱建物跡、6号土坑、2号溝は、確実にこの時期に属するが、7号・8号竪穴住居跡については、出土土器のなかにやや古い様相のものも見られ、法仏式期でもやや古い時期に位置付けられる可能性もある。

なお、2号竪穴住居跡とそれに付随すると思われる1号溝については、出土土器が少なく、時期的な位置付けにはやや不安がある。また、19号以外の掘立柱建物跡についても、ごく少量の出土土器からの判断のため、不安がある。

さて、この時期で特筆される遺構を挙げると、7号竪穴住居跡と19号掘立柱建物跡が挙げられる。

7号竪穴住居跡は、今回の調査で検出された竪穴住居跡のなかでは6号竪穴住居跡に次ぐ床面積をもち、大型のものである。7本の主柱穴をもち、住居内に間仕切り的意味合いを持つのではないかと考えられる溝状施設が検出された。

19号掘立柱建物跡は、直径約70～90cm、深さが確認面より約90～100cmと大きく深い柱穴をもち、今回検出された掘立柱建物跡のなかではやや規模の大きいものであった。また、この建物跡の南側では、付随すると思われる2号溝が検出された。

あくまで推測であるが、7号竪穴住居跡が集落の中心的な住居として、19号掘立柱建物跡が倉として機能していたのではないかと思われる。

月影I式期（弥生時代末）

月影I式期に位置付けられる遺構には、

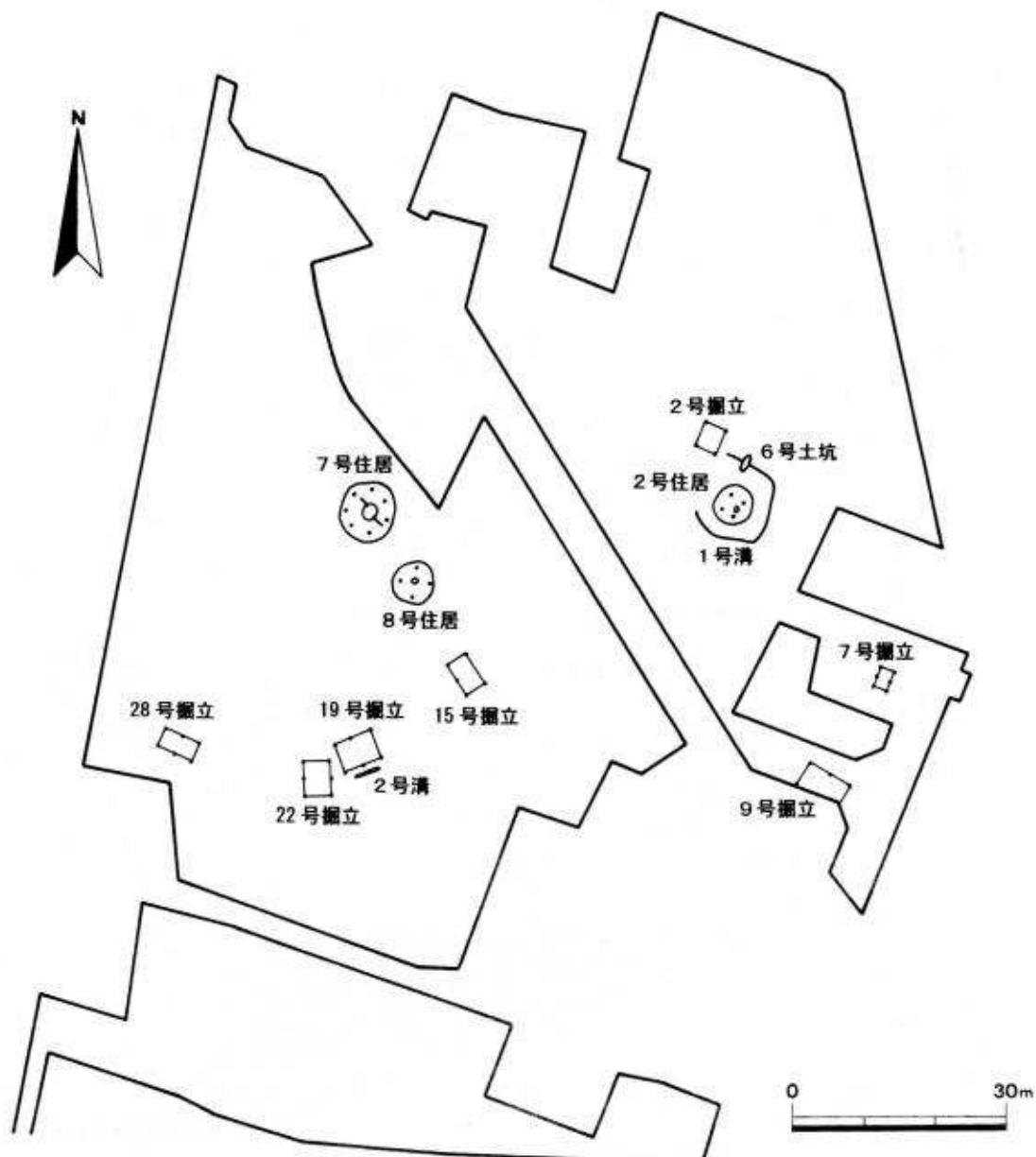
竪穴住居跡 3軒（1号、6号、9号）

掘立柱建物跡 4棟（8号、13号、18号、25号）

土坑 1基（17号）

が挙げられる。

掘立柱建物跡の時期的な位置付けについては、少量の出土土器からの判断のため、やや不安があるが、この時期に属する布掘式の掘立柱建物跡が3棟（8号、18号、25号）検出された。



第96図 法仏式期の遺構分布 ($S = 1/1000$)

また、前段階において集落の中心的な住居ではないかと推測した7号竪穴住居跡とほぼ同じような位置に、今回の調査で検出された竪穴住居跡のなかで最大の床面積を持つ大型の6号竪穴住居跡が立地していた。前段階と同じ位置に、集落の中心的な住居が立地していたのではないかと推測される。

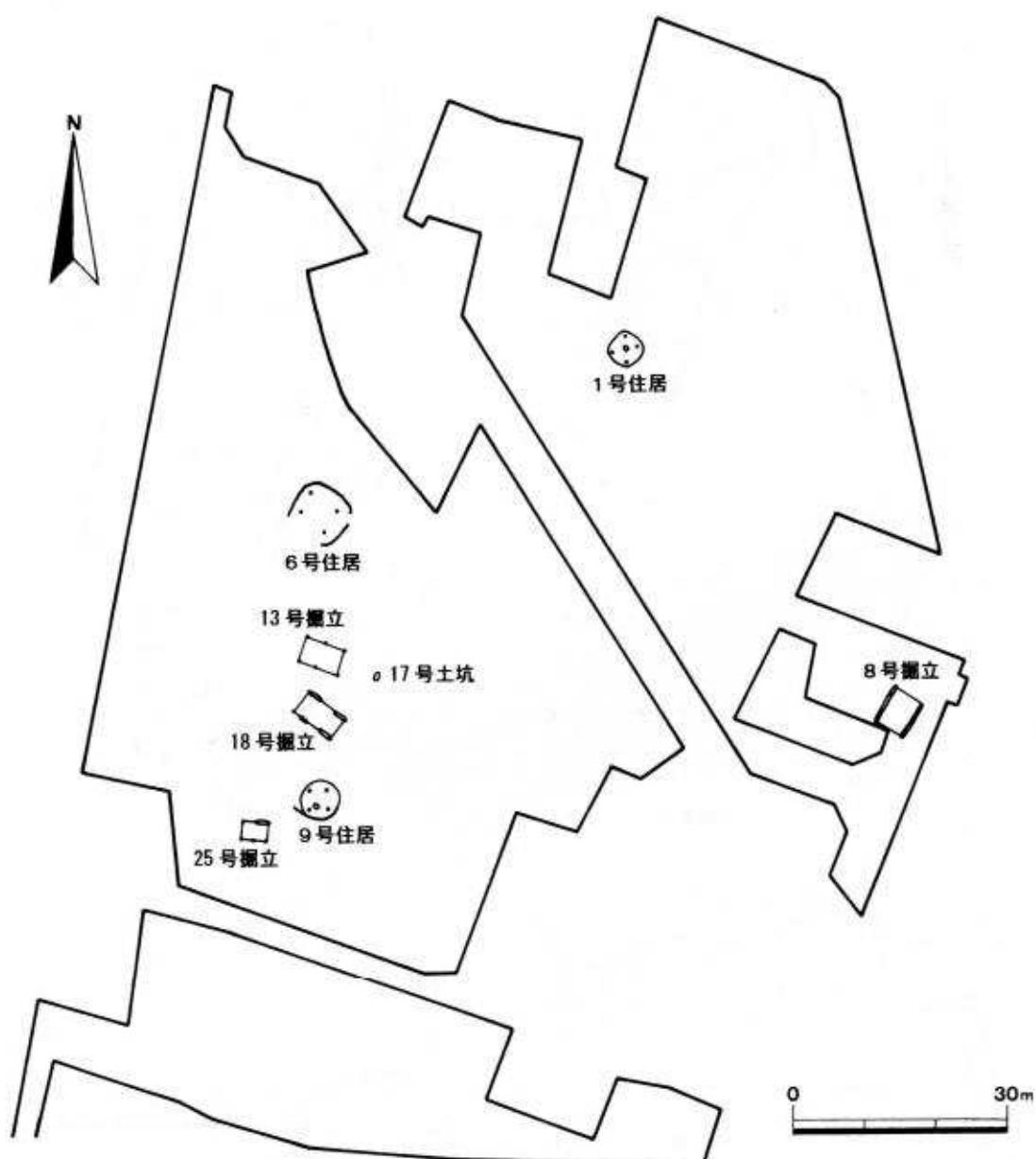
月影Ⅱ式期（弥生時代末）

この時期に属する遺構としては、

掘立柱建物跡 2棟 (12号、23号)

土坑 1基 (16号)

が挙げられる。



第97図 月影I式期の遺構分布 ($S = 1/1000$)

なお、これらその他に14号掘立柱建物跡もこの時期に属する可能性がある（次の段階の漆町編年5・6群期に属する可能性もある）。また、12号掘立柱建物跡と16号土坑は、確実にこの時期に属すると考えられるが、23号掘立柱建物跡については、時期的な位置付けにやや不安がある。

さて、12号掘立柱建物跡は、布掘式の掘立柱建物跡で、柱穴は深く、しっかりとしたものであった。この建物跡が当該期における倉として機能していたのではないかと考えられる。

当該期においては、前段階に比べ、検出された遺構数が少ない。集落が衰退傾向を見せたのではないかとも思われる。しかし、今回調査を行なった台地上部分は、かなり削平を受けているようであり（検出した竪穴住居跡の多くは削平を受け、竪穴部が確認されたものでも、その深さは5～10cm程度であるものがほとんどであった。）、確認できなかった当該期の住居跡等の遺構がいくつか存在していたとも

考えられる。また、今回の調査では、極めて多くのピットを検出しており、当該期の掘立柱建物跡として把握できなかったピットもあるように思われる。さらに、出土遺物が少なく、時期特定できなかった遺構もある。よって、ここでは、衰退傾向の可能性があるのかもしれないということで留めておきたい。

漆町編年5群期～9群期（古墳時代初頭～4世紀中葉）

漆町編年5群期から9群期の間に位置付けられる遺構には、11号土坑と19号土坑の2基の土坑が挙げられる。この他、14号掘立柱建物跡が5・6群期頃に位置付けられる可能性がある（月影Ⅱ式期の可能性もある）。

11号土坑は漆町編年8群期頃（4世紀前半頃）に位置付けられ、削平された竪穴住居跡の住居内土坑の可能性も考えられた土坑であった。

19号土坑は漆町編年6・7群期頃（古墳時代初頭）に位置付けられ、甕の下半部1点、高坏の坏部1点が出土し、意図的な廃棄が行なわれたのではないかと思わせるような出土状況であった。

この漆町編年5群期～9群期の間に位置付けられる遺構の数はとくに少ない。前段階の月影Ⅱ式期に集落の衰退傾向が見られ、その後、この漆町編年5群期から9群期の間、集落が衰退し続けたのではないかとも思われる。しかし、前段階のところでも述べたように、削平により確認できなかった当該期の遺構の存在や、当該期の掘立柱建物跡として把握できなかったピットの存在（当該期に位置付けられる土器片が出土したピットはいくつかあった）なども考えられる。よって、月影Ⅱ式期に集落の衰退傾向が見られ、漆町編年5群期から9群期の間、集落が衰退し続けた可能性も考えられるということで留めることとした。

漆町編年10・11群期（古墳時代4世紀後半～5世紀初頭）

この時期に属する遺構としては、土坑3基（4号、13号、15号）が挙げられる。

4号・15号土坑は漆町編年10群期頃（4世紀後半頃）、13号土坑は漆町編年11群期頃（4世紀末～5世紀初頭頃）に位置付けられ、13号土坑については、削平された竪穴住居跡の壁溝と思われるものが土坑から伸びており、住居内土坑ではないかと考えられる。

この時期については、前段階よりやや遺構数が増えてきている。集落が再び活発化してきたという可能性も考えられる。台地縁辺部で極めて多量の土器が出土したが、その台地縁辺部の今回調査した箇所（11地区と1号公園立会い調査区域）においては、次の段階（漆町編年12・13群期）の土器に次いで、当該期の土器が目立つ存在となっていた。これは、再び活発化してきたことを示しているのであろうか。

なお、台地上部分から北側約300m離れたところで確認された堰は、この段階の初め頃（漆町編年9・10群期頃）に位置付けられる。

漆町編年12・13群期（古墳時代5世紀前葉～後葉）

当該期に位置付けられる遺構としては、

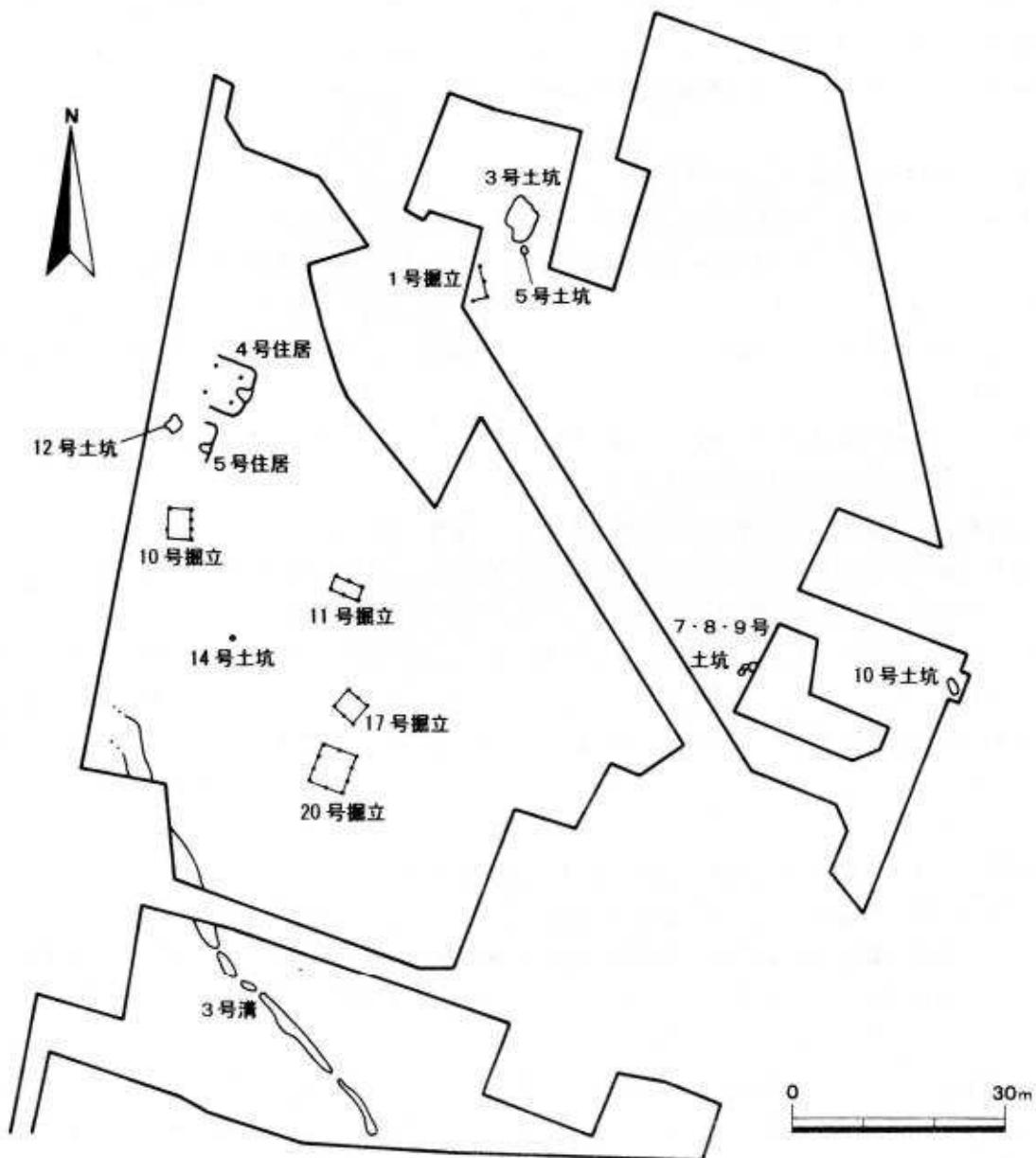
竪穴住居跡 2軒（4号、5号）

掘立柱建物跡 5棟（1号、10号、11号、17号、20号）

土坑 8基（3号、5号、7号、8号、9号、10号、12号、14号）

溝 1本（3号）

が挙げられる。



第98図 漆町編年12・13群期の遺構分布 (S = 1/1000)

4号・5号竪穴住居跡、1号・20号掘立柱建物跡は漆町編年12群期、17号掘立柱建物跡、12号土坑は漆町編年12ないしは13群期、11号掘立柱建物跡、7～9号・14号土坑、3号溝は漆町編年13群期、10号掘立柱建物跡、3号・5号・10号土坑は漆町編年13群期でもやや新しい段階に位置付けられるが、17号・20号掘立柱建物跡、3号溝については、時期的な位置付けにやや不安が残る。

当該期の遺構として目立つものとしては、まず3号土坑が挙げられる。大型の土坑で、多量の土器が出土し、パンケースにして約10箱分の土器があった。土器のほかには土製支脚3点も出土している。多くの土器が出土した土坑としては、3号土坑のほか、10号土坑も挙げられる。土坑の規模のわりには多くの土器が出土し、パンケースにして約3箱分あった。

このほか、11号掘立柱建物跡は、直径約70～80cm、深さが確認面より約60～70cmと、比較的大きくしっかりととした柱穴をもつものであり、この建物跡が倉として機能していたものと推測される。なお、この建物跡の柱穴（P4）からは緑色凝灰岩製の管玉が1点出土している。

当該期は遺構数が他の時期に比べて多い。また、当該期の土器は、今回の調査区域全体から出土した土器のなかでは最も目立つ印象を受けた。とくに、今回の調査で台地縁辺部から極めて多量に出土した土器のなかでは最も目立つ時期である。この漆町編年12群期～13群期は、当集落の最盛期であったといえるであろう。

漆町編年14群期以降（古墳時代5世紀末以降）

この段階に位置付けられる遺構には、土坑3基（1号・2号・18号土坑）が挙げられる。

1号・2号土坑は漆町編年14群期頃（5世紀末～6世紀初頭頃）に位置付けられ、18号土坑は、陶邑田辺編年のTK10～TK43型式あたり、中村編年のII型式2段階～4段階あたり（6世紀後半頃）に位置付けられる。

この段階になると、遺構数は少なくなり、調査区域全体から出土する当該期の土器も少ない印象を受けた。前段階の最盛期を過ぎると、急速に衰退し、集落の終焉を迎えたのではないかと思われる。

ところが、18号土坑では、須恵器を中心とし、バンケースで約6箱分と多量の土器が出土した。この土坑については、木（草）の根が多く入り込んで、その根に絡み付くようにして遺物が出土し、土層断面の様子もやや不自然なところもあって、遺構として扱うにはやや疑問が残る。しかし、何故、この土坑のところのみで、最盛期から時期を隔てた遺物がこれほど多量に出土したのか。この点については、筆者の力量不足もあり、保留したい。

以上、今回の調査で検出された遺構を時期ごとに整理したが、その結果、法仏式期・月影I式期に営まれていた当集落が、月影II式期に衰退傾向を見せ、その後、漆町編年5群期～9群期に衰退、漆町編年10・11群期に再び活発化し、漆町編年12・13群期に当集落の最盛期を迎えたという可能性が考えられた。しかし、これについては、削平により確認できなかった遺構の存在や、掘立柱建物跡として把握し得なかったピットの存在などという筆者の力量不足もあり、ここでは、このような当集落の推移の可能性も考えられるということで留めておきたい。だが、当集落の最盛期は漆町編年12・13群期に位置付けられることは確実といえよう。

以上で、今回行なった吉竹遺跡発掘調査の報告を終わることとする。

各遺構や出土遺物の時期の特定、まとめ等における結論などについては、浅学の筆者が最大限に力を出してはみたものの、まだ検討不足の感が否めない。この点について、厳しいご指摘、ご教示を賜れば幸いに存じる。

また、筆者の要領の悪さなどから時間的余裕がなくなったりして、本書作成にあたり、かなり省略した点があったと思える。また、当遺跡について、本報告では行なわなかった様々な検討課題もあったといえようが、筆者の力量不足もあり、行なえなかった。この点、お詫び申し上げたい。

最後に、今回の吉竹遺跡の発掘調査、出土品整理、報告書作成に際し、ご協力いただいた多くの方々に感謝申し上げ、終わることとする。

報告書抄録

ふりがな	よしたけいせき					
書名	吉竹遺跡					
副書名	吉竹北部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
巻次						
シリーズ名						
シリーズ番号						
編著者名	津田隆志					
編集機関	小松市教育委員会					
所在地	〒923-8650 石川県小松市小馬出町91番地					
発行年月日	平成13(2001)年5月31日					
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東緯	調査面積
		市町村	遺跡番号			
吉竹遺跡	石川県小松市 吉竹町ソ・れ・ いの部の各一 部		03183	36度 23分 34秒	136度 28分 30秒	15, 182m ² ほか3, 002m ² を 対象に工事立会調 査を実施。
調査期間			調査原因			
平成7(1995)年7月6日~			吉竹北部土地区画整理組合による吉竹北部土地区 画整理事業			
平成11年(1999)年4月27日						
所収遺跡名	種別	時代		主な遺構	主な遺物	
吉竹遺跡	集落跡 (台地上部分)	弥生時代後期後半~ 古墳時代後期		竪穴住居跡9軒 掘立柱建物跡29棟 土坑19基 溝3本	弥生土器 土師器 須恵器 土製支脚 管玉 土製勾玉	
	遺物散布地 (台地上部分南側 低湿地) (19地区)	弥生時代後期後半~ 中世			弥生土器 土師器 須恵器	
		古墳時代前期		溝1本 堰1基	土師器 木製泥除具 木製遺物(材)	



吉竹遺跡 遠景（西から）



吉竹遺跡 遠景（北から）



吉竹遺跡 空中写真（15・16地区調査時 西から）



吉竹遺跡 空中写真（20地区調査時 北西から）



1号竪穴住居跡



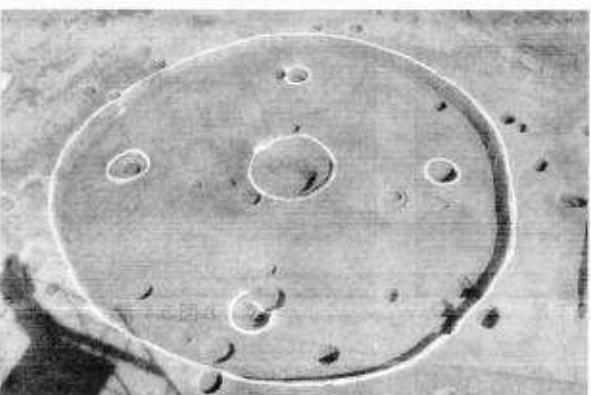
2号竪穴住居跡



6号竪穴住居跡



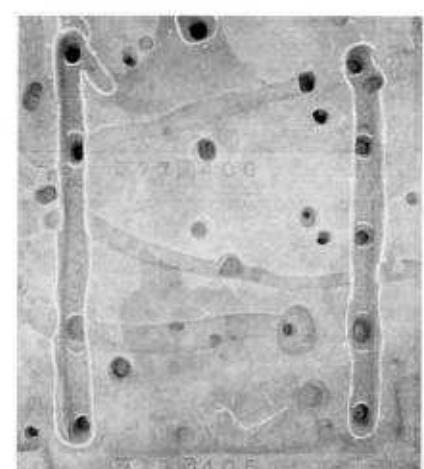
7号竪穴住居跡



8号竪穴住居跡



9号竪穴住居跡



9号
掘立柱建物跡



1.1号掘立柱建物跡



1.8号掘立柱建物跡



1.9号掘立柱建物跡



3号土坑 全景



3号土坑 アップ（その1）



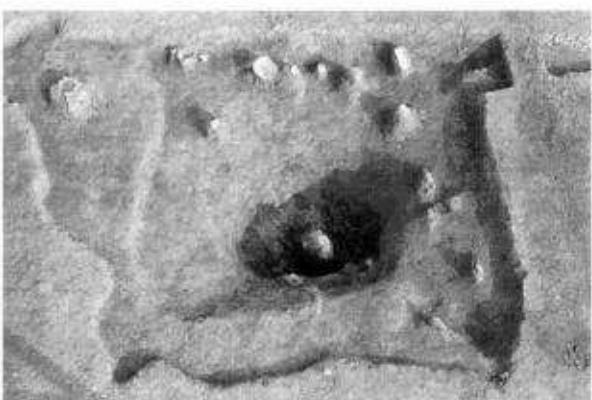
3号土坑 アップ（その2）



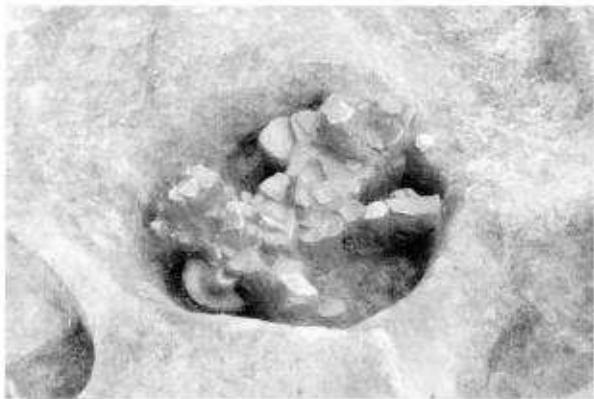
3号土坑 アップ（その3）



1.0号土坑



1.1号土坑



14号土坑



17号土坑



18号土坑 全景



18号土坑 アップ（その1）



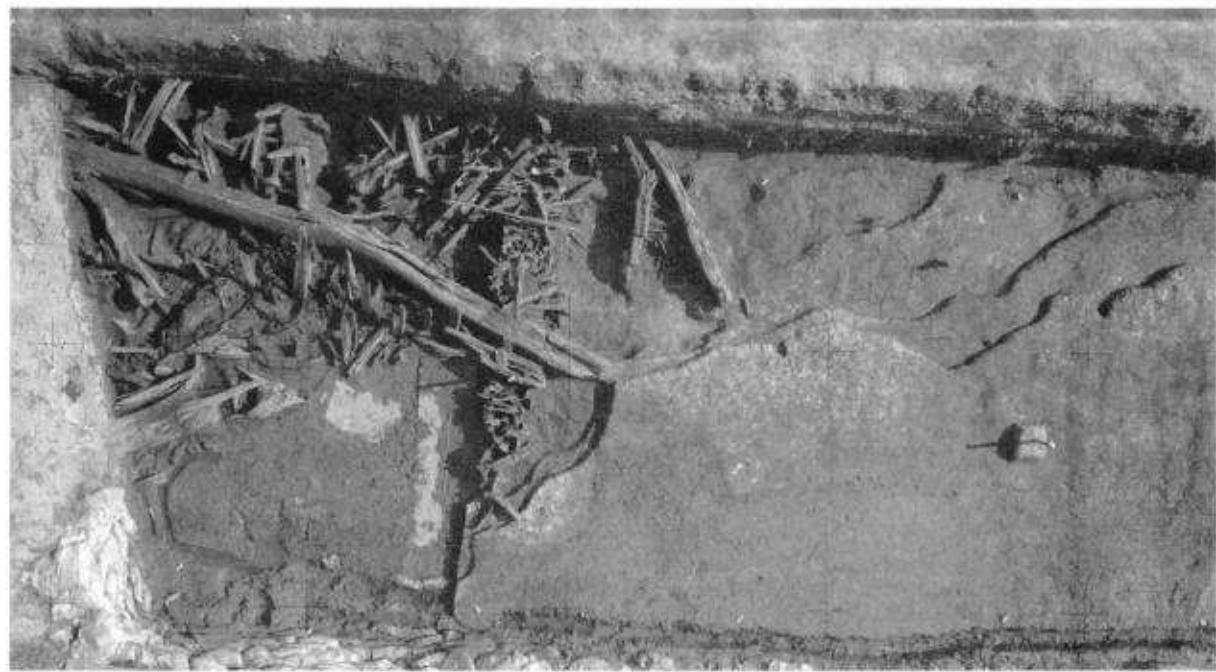
18号土坑 アップ（その2）



19号土坑 高环出土状況



19号土坑 鎏出土状況



19地区東端部 空中写真（下方が北）



19地区 残
骸出状況
(北から)



19地区 残
骸出状況
(西から)



第14図10



第14図15



第15図13



第15図16



第15図19



第15図20



第20図21



第23図45



第29図55



第29図57



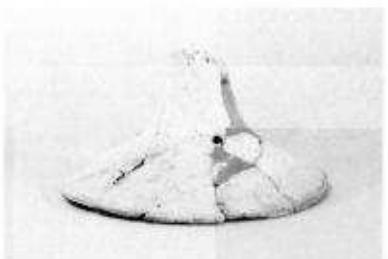
第29図64



第29図67



第29図73



第29図76



第33図97



第50図166



第51図188



第51図189



第5.1図 19.1



第5.2図 19.9



第5.4図 22.7



第5.4図 23.1・23.2



第5.6図 24.5 (左: 横から 右: 上から)



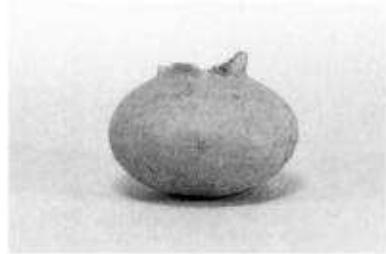
第5.8図 24.8



第6.3図 27.0



第6.3図 27.3



第6.3図 27.5



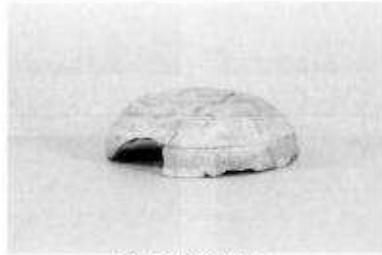
第7.4図 32.4



第7.4図 32.5



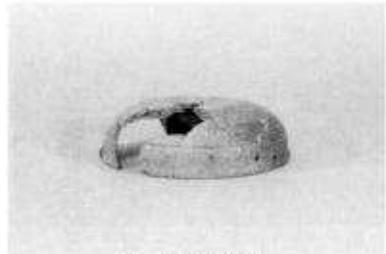
第7.4図 32.6



第7.6図 38.2



第7.6図 38.3



第7.6図 38.4



第7.6図 38.5



第7.6図 38.6



第76図387



第76図388



第76図389



第76図390



第76図391



第76図392



第76図393



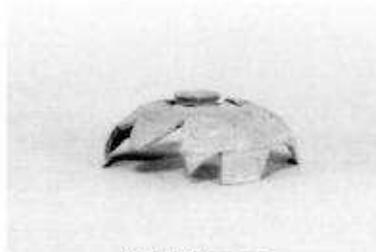
第76図394



第76図395



第76図397



第76図398



第76図399



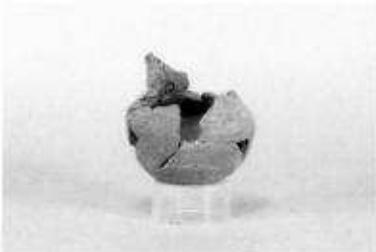
第77図400



第77図401



第77図404



第77図405



第77図406



第77図407



第77図408



第78図409



第78図410



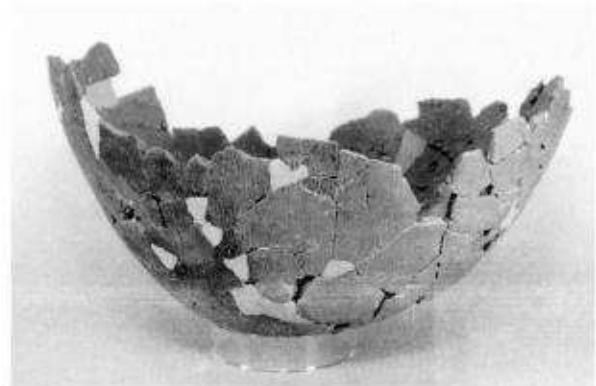
第78図411



第78図412



第79図415



第79図416



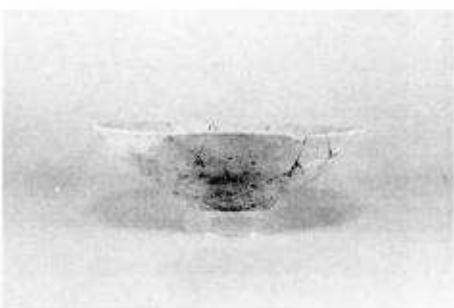
第79図417



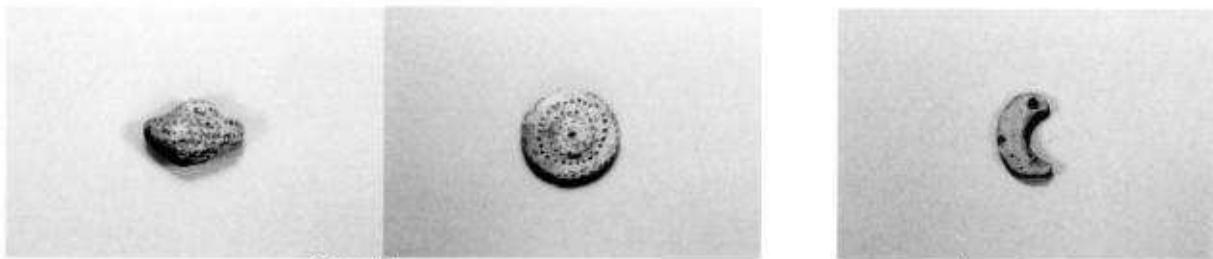
第79図418



第80図
419



第80図
420



第86図44-1



第86図44-2



第88図44-5



第89図44-8



第89図44-9



第89図45-0



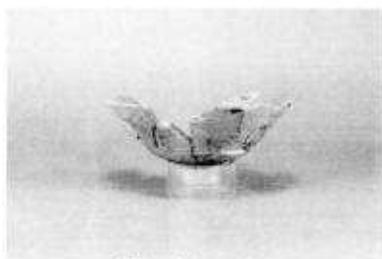
第89図45-1



第89図45-2



第89図45-3



第90図45-6



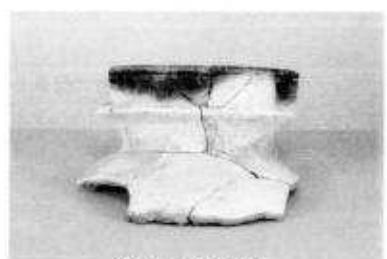
第90図46-6



第91図47-1



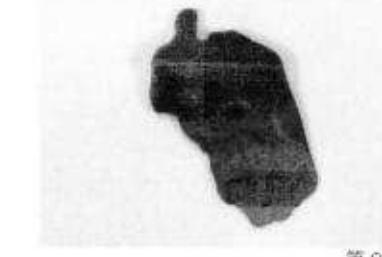
第91図47-3



第95図48-3



第95図48-4



第95図48-5

吉竹遺跡

—吉竹北部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成13年5月21日 印刷

平成13年5月31日 発行

編集・発行 石川県小松市教育委員会
石川県小松市小馬出町91番地 電話(0761)24-4111

印 刷 有限会社アート印刷
石川県小松市平面町イ14-8 電話(0761)23-1482